

---

# モダンワールド

森野青果

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

モダンワールド

### 【ZPDF】

Z0930M

### 【作者名】

森野青果

### 【あらすじ】

おれの仕事はなんでも屋だが、回ってくるのはアブナイ害虫の駆除ばかり。しかも十一歳の渋垂れ社長（超絶美少年）にこき使われるという、ヒサンな日々である。あるとき、ぶつ壊れた家用用チャペック（大昔はロボットと呼ばれたらしい）の代わりを求めて、知り合いのジャンク屋へ立ち寄ったところ、戦時中に開発されたとう、とんでもない殺戮兵器をつかまされてしまう。しかもそいつの外見は、虫も殺さないような美少女で……

二十日以上も仕事がなければ、いいかげん、体もなまる。

「作業服にキノコが生えちまいそうだ」

ワットの野郎を怒鳴りつけてやつたが、やつは電話の向こうで、ふふんと鼻を鳴らしあがつた。

「それでしばらく、食事にはこまらないでしょ」「う

「おれに毒キノコを食えと?」

「毒とは限りませんよ。もうちょっとポジティブに考えてほしいですね。なんでしたら、刷新会議の端末から、『食べられるキノコリスト』を取り寄せて差し上げましょうか

うつかり第四種の害虫を素手でつかんだように、おれは顔をしかめた。昨今流行りのポジティブ思考というやつが、多脚ワームの次に嫌いなのだ。おれが黙っているのをいいことに、ワットの野郎は、ツアラトラストラ教の聖歌隊みたいなボーカリストラノで、こわいことまくしたてた。

「ぼくなら、家事用のチャペックを新調することをお勧めしますね、エイジさん。作業服がピカピカになつた上、美味しいキノコ料理にもありつける。明日も自宅待機になりますから、ちょっとよかつた。払い下げのマーケットでも覗いてみては?」

おれは無言で受話器を叩きつけた。ちん、と間抜けな音をたてて、そいつは黒ずんだダイヤルの上で沈黙した。本当は線を引きちぎつて、十一階の窓から放り投げてやりたいのだが、これを繋げるまでの苦労を考えれば、気勢をそがれる。処理班にいた頃は、自分用の端末さえ所有していたというのに。

「くそつ、何が刷新会議だ」

かわりに壁を蹴りつけると、ぐわんと虚ろな音をたて、足の指が

ぴりぴり痛んだ。

半年前に、人類刷新会議がこの地区を制圧してからといふもの、たしかに治安はよくなつたが、おれの仕事はめっきり減つた。やつらは世のため人のためと称して、その日暮らしの貧乏人から、せつせと仕事を取り上げるばかり。

おれが所属する竹本商事は、いわゆる「なんでも屋」だ。社長はさつきの電話のくそガキで、竹本ワット十一歳。本来なら、ランドセルを背負つてお手々つないで学校へ行くべきところ。去年、親父を亡くして以来、事務所の奥にふんぞり返つて、おれたちしがない労働者を鼻であしらう日々である。

なんでも屋である以上、依頼を受ければ何でもするが、かかつてくる電話の九十パーセントは、害虫駆除の依頼だ。おれに回されるのは、駆除の中でも最も危険な仕事ばかり。第四種はあたりまえ。基本的には、第三種以上の害虫を扱うことになる。

第三種以上のレベルになると、多くの確率でイミテーション・ボディの遺伝子が混入している。まつたくもつて、危険きわまりない。「くそつ、ワットの野郎。日ごろ一番アブナイ仕事を押しつけておいて、依頼が減ればおれをまつ先に干しやがるとは、理不尽な」おれはずかずかとキッチンへ踏み込み、乱暴に冷蔵庫を開けた。一本だけ残っていた合成ビールの缶を開け、半分ほどひと息に飲みほした。停電続きでろくに冷えておらず、接着ゴムの臭いが鼻を刺激した。が、少しばかり、頭を冷やすには役だつた。

（大のおとなが、十一歳の渋垂れを相手に本気になつて……）

床に転がっているチャペックが目に入つた。一見、隣の冷蔵庫と似たり寄つたりだが、万能という名の不便なマニピュレーターがついており、一応二足歩行もできていた。第二次百年戦争前までは、この種の機械はロボットと称されていたらしく、変態博士の相崎氏は、いまだにその古風な呼び名を用いていたつけ。

たしかに、一週間前にこいつが沈黙してからというもの、おれの部屋は確實に臭うようになった。外から帰ってきたときなど、一瞬、

本気で鼻が曲がるくらい。この芸を極めれば、路上で小銭を稼げそうだが、キノコが生える以前に、多脚ワームの巣にされてはかなわない。

「八幡商店に、掘り出し物があるかもしないな」

「どうせ明日も休みである。曲芸的な技で、空き缶を満杯の「ゴミ箱の上に載せると、おれは居間に戻り、外套を引っ掛けた。机の上からM36を取り上げ、シリンドラーを抜いて、五発の弾が装填することを確かめた。ジーンズのポケットに突っ込んだままコサックダンスを踊つても、ミニリボルバーは暴発しないのが取り柄だ。

防腐靴を履いて部屋を出ると、吹き抜けの天井から、まだうすらと明かりがさしていった。常夜灯はとっくに全滅しているので、まではありがたい。近ごろでは、こんな雇用促進住宅の回廊にまで、蠕動ワームO.5型、俗名ゴクツブシがうろつくなつていていた。ゴクツブシは基本的に無害だが、うつかり踏んづけると、バケツ一杯ぶんの体液を吐き出すから厄介だ。まともに浴びれば、確実に三週間は腐ったトマトの臭いが消えず、さらに一月の間、イタリア料理が食えなくなるだろつ。

エレベーターは動いてはいるものの、完全に制御不能。こんな地獄の遊具になんか乗りたくないでの、階段をとぼとぼ降りるしかない。七階から下は封鎖されており、回廊への入り口は、ぶ厚い鉄板で塞がれていた。鉄板の向こうにどんなものが棲みついているのか、あまり考えたくなかつた。

## 1(2)

(やはり、電話を入れておくべきだったか)

階段の途中で、おれは立ち止まつた。三階と四階の間である。戻るつもりはまったくなかつた。これまで、いつ立ち寄つても八幡商店は開いていたし、無駄足になつたらなつたで、べつにかまわない。仰々しく予約を入れるまでもない。何よりも、電話を見るとまたあのワットのくそガキを思い出しそうで、それがいやだつた。

足を止めたのは、靴音が聞こえたからだ。

カツ、カツ、カツと速いリズムで床を打ち鳴らしている。一階のロビーを走りぬけ、階段にさしかかり、さらに駆け上がりてくる様子。おれは下方の踊り場を凝視した。しだいに高まる靴音に、荒い息づかいが混じる。女であるらしい。

何ものかに、彼女が追われていると確信したとき、人影が踊り場に飛び出してきた。ほっそりとしたシルエット。長いストレートヘアが、肩に背に乱れている。上を向いたせつな、彼女はぎょっと立ち止まり、大きく目を見開くのがわかつた。おれはわざと道化じみた動作で、見えない帽子をとる仕ぐさ。

「「きげんよう、セニョリータ」

ぼくと踊つていただけませんか？ とでも言つようにて、深々とお

じぎした。二メートル下の踊り場で、ふと緊張が緩む気配を感じた。

「ハイジさん？」

「シ（はい）」

相手が落ち着くのを確認して、おれはゆっくりと階段を降りた。

薄闇の中、上品な香水の香りが、彼女をふんわりと包んでいた。地味な濃紺のロングコート。ブラウスの襟元にのぞくりボンタイも、彼女をまるで高校生のように、初々しく見せていた。キノコ男は、内心たじろいだ。

この女性がだれなのか、もちろんとつぐにわかつてた。一月ほ

ど前に一一〇七号室に越してきたのだが、わざわざ隣のおれの部屋まで挨拶に訪れたときは、さすがに面食らつたものだ。

(レイチエルと申します)

(外国のかた?)

(いいえ。もちろん本名ではありますんわ)

まあ、おれだって「エイジ」というコードネームで通しているのだから、他人をとやかく言えた義理ではないのだが。それでも驚いたのは、レイチエルがカタギにしか見えなかつたからだ。おれみた後に後ろ暗い商売をしている人間とは、根本的に人種が違う。後ろ暗い商売をしているからこそ、そのへんの嗅覚には自信があつた。

推定年齢一九歳。他人の素性を根掘り葉掘り訊かない主義だが、大学生と考えるのが妥当だろう。

「よかつた。わたし怖くて!」

いきなり、花束が胸に飛びこんできた。とても抱えきれないくらいの花束。芳香に溺れそうになりながら、どうにかこうにか踊り場から落下しないよう、踏みとどまつた。思わず覆つた腕の中で、驚くほど華奢な体が鳩のように震えていた。

「いつたい?」

「犬に追いかけられたんですね。それも体があり得ない角度にねじ曲がつて、白目を剥いて、黒い斑紋の浮いた舌を、ぬめぬめと地面に引きずっていました」

「寄生虫……おそらく、サミダレムシでしょう」

レイチエルの簡潔、かつ的確な描写のおかげで、おれはすぐに特定できた。寄生型ワームCB4-24、サミダレムシは小型から中型の犬にしか寄生しない。哀れな話だが、寄生された犬は、末期には完全に体を乗っ取られ、彼女が話したような、おぞましい姿でさまよい歩く。

「時々、人を追いかけますが、襲いかかることはまずありません。体を乗っ取られてもまだ、わずかに意識が残っているんでしょう。飼い主の面影を慕うのだといわれています」

胸にしがみついている彼女の両手に、ぎゅっと力がこもった。おいおい、いくら顔見知りとはいっても、ろくに素性も知らない者どうし、これはまずいんじゃないか。もしおれに下心があれば、この場で簡単に押し倒せるんだぜセーラーリータ。などと考えつつ、ともすれば反応しそうになる股間を懸命にセーブしつつも、例の嗅覚がみょうな違和感を嗅ぎとつていた。

必死に逃げてきたわりに、さっきの説明は上出来すぎやしないか？「ごめんなさい、取り乱しかやつて。でも、エイジさんが害虫駆除の専門家でよかつた」

ようやく身を離し、レイチエルは笑顔を見せた。害虫駆除の専門家は、引きつった笑みを返し、さりげなくズボンのポケットに手を入れた。こいつはM36よりずっと扱いにくい。

「暗くなつてからの一人歩きは、あまり感心できませんね」「気をつけます。じつは近頃、部屋に虫がいそうな気がして不安なんです。それで帰宅するのがいやで……お暇な時でかまいませんから、今度調べてもらいますか。あつ、もちろん報酬はお支払いしますから」

「お暇な時で構いませんから……だとさ」

ジャンク屋のガレージで、八幡ブラザースの弟に、おれはレイチエルとのいきさつを話し終えたところだ。

「ひょっとするとその子、エイジさんには気があるんじゃないですかね」

「あり得ん。隣に住んでるだけだぞ。顔を合わせれば挨拶くらいはするが、それまでの話だ」

そう言つて煙草をくわえたとたん、ガラクタの中からマジックハンドがにゅっと飛び出し、おれの鼻先にミニチュアのマグナムを突きつけた。カチリという音がして、銃口に小さな火がともり、ちょっと顎を突き出すだけで、煙草に点火できた。

ジャンク屋の双子の片割れは、いたずらに成功した小学生のように、満面の笑みを浮かべた。

「どびつきりのセンサーが使われているんです。じつは、旧首長連合軍の掃討車から失敬したシロモノとして」

「変態博士の作品か」

「ええ、まあ」

「掃討車といえば、悪名高い虐殺機械じゃないか。そんなものから部品をパクつた上に、しかもなんという無駄な用途に……」

はん、平和利用と呼びたまえ。などと、皮肉たっぷり反論する相崎博士の顔が、日に浮かぶようである。

八幡ブラザーズの弟は赤いキャップを後ろ向きにかぶり、銀縁眼鏡をかけて、もとは白かったと思われる灰色のツナギを着ていた。名を一彦といい、兄のほうは一朗といつ。一卵性の双子ゆえ、顔も体つきも立体コペーにかけたようだが、性格は瓜二つとは言いがた

く、キュウリとナスくらいには違う。

弟のほうが、よくいえば物腰がやわらかく、要するに抜け目がなかつた。

「そのレイチャエルさんという人、美人なんですか」  
得体の知れないバツテリーが積み上げられた辺りから、場違いなコーヒーの香りとともに、二葉が顔を出した。まったく、八幡商店のガレージの中は、ガラクタの迷路である。体を横にしなければ通り抜けられず、どこに何があるのか、おれはいまだに把握できないない。

二葉は、おれが腰かけている売り物の事務机に、湯気のたつカップをのせた。ブラザースの妹で、かれらよりハツ年下の十七歳。やはり眼鏡をかけているが、愛くるしい顔立ちに、お下げ髪が似合っていた。学校から帰つたばかりなのかセーラー服姿で、いかにも興味しんしんな目を向けた。

「聞いていたのか？」

「はい。監視カメラで」

にっこりと小首をかしげる。ある意味、一彦に輪をかけて油断も隙もない。

「ここじゃ、うかつなことは言えないなあ。ああ、たしかに美人だよ。とびつきりをつけてもいい。しかもあんなボロマンションに、独りで住むような人種とは、とても思えない。におうんだな。育ちのよさを感じるんだ」

「つまり、どこぞの首長の血族ではないか、と？」

一彦に真顔でうなずき、おれはため息とともに煙を吐き出した。  
近年では煙草の質も低下する一方で、純粹なものはとても手に入らない。貧乏人ご用達の安煙草に至つては、六、七割がた代用品が混ざっているが、へたに純なモノを吸うよりも、くらくらと効く。どんな草が混ぜてあるのか、あまり想像したくないが。

「今どき、どこぞの『令嬢』といえば、ほかに考えられまい。レイチャエルという偽名を使うのも、そうすると納得がゆく

第一次百年戦争終結後も、国内はながば内戦状態が続き、政権はめまぐるしく入れ替わった。首長連合は群雄割拠を妥協的に認めたかたちで、ほぼ七年の間、政権を掌握した。いにしえの神聖ローマ帝国にも似た、有力者たちによる連合政権である。

首長と呼ばれる有力者たちは、いにしえの貴族をおもわせた。強大な私兵こそが、かれらの権力の拠り所である。莊厳な屋敷をかまえ、宝石や美術品を収集し、美食と遊戯に耽溺した。政治的には権謀術策にあけくれて、隙あらばライバルを失脚させ、おのれの領土を増やし、血族を富ませることに腐心した。

墮落と退廃を極めたあげく、人類刷新会議によつてうち破られるまでは……

「そつか。レイチエルさんがもし首長の血族だとしたら、しつかり隠れてないと、刷新さんに身柄を拘束されちゃうわけだ」

「あくまで、例えばの話だよ。おれの考えすぎかもしないし」

「エイジさん、レイチエルさんのことばかり考えてたのかなあ。ねえねえ、彼女や。おっぱい大きかつた？」

フラッシュバックが起きた。いきなり飛びこんできたレイチエルが、鳩のようにおののく感触がよみがえる。かたく抱きしめれば壊れてしまいそうなほど、華奢な体だつたけれど……

「ああ。とびっきりをつけてもいい」

「変態」

「なんでだ？　きみが訊くから、正直に答えたまでじゃないか」

「問答無用。そんなにおっぱいが好きなら、刷新会議に対抗して、大日本おっぱい党でも結成すれば？」

ふくれ面をして腕を組んだまま、一葉は、ふいとそっぽを向いた。この年頃の女の子の気持ちは、新型ワームの生態より理解しがたい。くっくつと肩を揺らしながら、一彦が尋ねた。

「そういうえば彼女、寄生された犬に追いかけられたそうですが。エイジさんもそいつを見たんですか」

大日本おっぱい党員は首を振り、煙草を揉み消した。商売がら、さすがに気になつたから、街路に下りてだいぶ探してみたのだが、それらしい影も形もなかつた。

「実際、気になつたんだよなあ。まるで図鑑を読み上げるような説明が。だからサミダレムシだと、すぐにわかつたんだが……ふつう、血相を変えて逃げてくるほど、怖い思いをさせられた相手を、ああも簡潔に描写できるだらうか」

「嘘だと考えたほうが、辻褄が合つわけですね」

「ああ。レイチエルを追いかけたのは、決してサミダレムシに寄生された犬なんかじゃない」

「ばすん、ばすん、と痙攣的なエンジン音が近づいてきた。あんな音をたてる車は、八幡ブラザーズのトラック以外あり得ない。燃えるものなら何でも燃料にできる、あれもまたドクター相崎の愉快な発明品のひとつだ。

ガラクタに埋もれて、ここからは見えないが、ガラガラと表のシャツジャーが押し上げられ、トランクが入ると、また下ろされた様子。それでも人が屈んで通れるくらいは、開いている筈である。おれもそこを潜つて入つて来たのだから。間もなく、一彦とウリふたつの若い男があらわれた。

「やあエイジさん、いらっしゃい。頼まれていた弾薬は、取り置きしてありますよ」

いにしえの野球少年みたいに、一朗は赤いキャップのつばに手をかけた。同じ背格好。同じ服装。同じ眼鏡に同じ顔。ツナギの染まり具合までまったく同じだが、唯一、キャップを前向きに被つているところで、弟と区別できた。

「ありがとうございます。だが今日は、タマを受け取りに来たわけじゃないんだ。このところ仕事にあぶれてね。まだまだ余っているくらいさ」

一朗は大きなバッグを、どさりと肩からおろし、おれの隣に腰かけた。手つかずのまま冷めたコーヒーを皿にすると、ひょいとカップを取り上げ、ひと息に飲みほした。

「へえ。てことは、アブナイ虫の数が減つてるんですかね」

「まさか。実際、どんどん増える一方だよ。ワットが仕入れてきた情報によれば、ごく最近、BD-29地区が居住不能地区に指定されて、完全封鎖の憂き目にあつてゐる。いきなり、フェイズ5が発動しちまつたんだ」

「IBに？」

「いや、虫ぞ。閉鎖された団地ごと、多脚ワームの巣にされてね。地区担当者のすさんな管理のせいで、発見が遅れたのが命取りになつた。もちろん第三種以上ともなれば、イミテーションボディと無関係とはいえないが」

目の前のカップをひねりまわしながら、一朗は最低の代用コーヒーを飲まされたような顔をした。かわりに一彦が口を開いた。

「フェイズ5ということは、生き残った人ごと、ですよね」

「そうなるな。首長連合の時代なら、金を積むなり何なりして、抜

け道もあつたんだが、刷新のやつらは徹底的にやりやがる。クリーンな政治・クリーンな街づくりの名のもとに」

そのうえ民間のハンターを締め出しては、とても駆除に手が回るまい。現に、第四種以下のワームなら、あたりまえに田にするようになつた。部屋に戻りたくないと言つたレイチヨルの怯えも、ゆえにあながち嘘とは言いきれない。

「わっ！」

無意識に煙草をくわえたところで、また例のマグナムが伸びてきた。しかめ面で火のお相伴にあづかるおれを見て、一朗は肩を揺らした。

「ハハハ。お気に召したらお持ち帰りになりませんか。安くしどきますよ」

「遠慮しておく。掃討車の火で煙草を吸うなんて、ネタにしてもブラックすぎるよ。それより、家事用チャペックを見せてもらえないかな。以前もらつたやつは重宝してたんだが、二週間ほど前から、ウンともスンとも言わなくなつてね」

「明らかに寿命でしょう。ナナコ七式でしたつけ。あいつは、連合が政権をとる以前の払い下げですからね。最近では、ずっと高性能のチャペックが、ぐつと安く買えますぜ。どうぞ、こちらへ

おそらく方向的には、ガレージの奥へ向かっているのだろう。一朗の背にしたがって、ガラクタの迷路を行くうちに、方向感覚など、とつくな吹き飛んでしまつていてだ。

かつて妻がいた頃、ルナパークの迷路に入ったことがある。外から見ればごく小さなパビリオンなのに、足を踏み入れたとたん、広大な迷宮に迷いこんだ気がした。複雑に組み合わせられた鏡によつて感覚が狂わされ、同じところをぐるぐる回つていることに気づかなかつた。

一彦は店番に残り、海綿体ワームのように頬をふくらませたまま、二葉が後ろからついてきた。おれが少しでももたつけば、容赦なく蹴りを入れてくる。

「痛いって。靴の先が尻の割れ目に入つたぞ」

「ごめんなさい。わたし、足が速くて」

「健脚なんだな」

「美脚なのよ。おっぱい党員には見えないでしょうけど」と、まだ根にもつてている。

一朗が身を屈め、ガラクタのトンネルに潜りこんだ。身の危険を感じつつ、おれも後に続いたが、予想された背後からの集中砲火は鳴りをひそめたまま。

無事に通り抜けたときは思わずため息を洩らした。狭苦しさに馴染んだ体には、ずいぶん広く感じられた。裸ダイオードに照らされた空間の両側に、三十体ほどのチャペックが所狭しと並ぶさまは、壯觀といえた。

「ほお、これは……」

「すごいでしょう。BB-33地区にジャンク屋は星の数ほどあり

ますが、これほど粒を揃えている店はうちだけです」

自慢しつつ、鼻の下を指でこするのだ。そこが油で黒く汚れたところまで、漫画を切り抜いたようだ。おれは一台のチャペックの前に歩を進めた。先日お亡くなりになつたナナコ七式同様、ありふれた箱型だが、黒光りするボディは新品と見紛うばかり。操作パネルや計器類を見れば、桁違いの性能が予想された。

「最近はコードレスが常識なんだな。電池切れしないのかい」

「ええ。電池パックのほかに、自己供給型のバッテリーを内臓していますから。二十四時間でも四十八時間でも、止まつしまつことはまずありません」

「そのうちチャペックの労働組合ができるんじやないか」

「うちの七式は二十四時間中、最低でも四時間、通常六時間は「眠らせる」必要があった。ケーブル式なので電源は問題ないが、冷却が間に合わない。

例えば例の掃討車なんかは、じつにイヤらしく立ち回り、わずかな物陰に隠れた人間をも確実に蜂の巣にするが、演算処理装置や関節にかかる負担は、家事用チャペックよりはるかに小さい。つまり人間をぱりぱり撃ち殺すよりも、ジャガイモの皮を剥くほうが、はるかに高度な神経と筋肉との連係プレイを要求される。より崇高な労働といえる。

「値札がついてないね」

「時価と相手によりけりで」

「最近は厳しくなってるんだろう。値札に限らず、食い物がいつまで食えるとか、そんなことまで書いて貼つておくらしい」

「クロツク鳥の卵に貼つてあるのを見ましたよ。三年後の日付だつたんで、親爺を問いつめたところ、雛がかえれば少なくともあと二年は食えるつて。たしかにねえ、何でも刷新さんの言いなりになつてたら、商売上がつたりですから」

「値切る楽しみもなくなるよなあ」

苦笑しつつ、おれは居並ぶチャペックに次々と目を転じた。色や

「デザイン」に違え、新しい型になるほど個性といつか、面白みがなくなるようだ。

「うーん、どうもね。あらためて七式に愛着がわいてくるようだよ。これより古い型はもうないのかな」

「ええ。七式クラスになると部品も入手困難ですから、修理はまず無理でしょうね……あ、一つだけ手がありました」

期待をこめた眼差しをあげて、一朗はかえってすまなそうな顔をした。キャップの上からぼりぼり頭を搔きながら、首を縮めて言う。「相崎博士なら、なんとか動かせると思うんですが……あ、やっぱりダメですか」

おれは無言で両手を広げてみせた。博士に腕をふるわせるよりは、あのままスクラップにしたほうが七式のためだ。さもないと、田も当てられないような変態チャペック……博士流に合わせれば変態ロボットが誕生してしまう。おぞましい悲劇を想像して、蒼ざめているおれの袖を、一葉がしきりに引っ張ついていた。

「ほり、あれなんかお気に召すんじゃない？ ハイジさん、変なものが好きでしょう」

異論はあったものの、彼女が指さした方へ目を向けると、最も奥まった辺りに、何やら異質なものが立っている様子。他のチャペックと明らかに異なる、有機的なフォルム。金属的な光沢もなく、柔らかな布地に包まれているようだ。お伽話に出てくる、磁石の女神像に引き寄せられる船のようだ。おれは奥へ足を進めた。

人形だ、とまず考えた。大きさは箱型のチャペックと変わらないから、十歳くらいの子供程度。現にその人形は、ちょうどそれくらいの少女の姿をかたどっていた。

髪は短い、いわゆる「おかっぱ」。頭のうしろに大きなリボン。ガラスのように、うつろな瞳がぱっちりと見開かれ、苺色の唇がかすかに笑みを浮かべている。人間の顔だちをリアルに再現したのではなく、わざと人形らしいデフォルメが加えられているようだ。童話から抜け出したような青いエプロンドレス。ウェイトをとるためか、体のわりに大きな茶色いブーツを履いていた。

「これも家事用チャペックかい」

おれの驚きを前に、一葉は腕を組んだまま、満足そうにうなずいた。

「とある首長の屋敷で使われていたハンドメイドの逸品よ。型は古いけど、金に飽かせて贅沢な機能が盛りこまれているわ」「動くのか？」

「ばつちり整備してあります。ちょっと見てみますか」

妹の言葉をうけて胸を張ったわりに、一朗が少々顔を赤らめた。その理由は、三十秒後に判明した。かれはポケットからじやらじやらと鍵を取り出し、赤いブレートのついた一つを選び分けると、おもむろに少女人形のスカートをまくり上げ、顔を突っこんだ。なるほど、そこに操作パネルがあるのはわかるが、よそ目には変質者にしか見えない。

「ハンドメイドだから型番はないの。名前は、テレーズ。呼んであげると喜ぶわ」

ブーン、と、かすかな震動があり、少女の瞳が光沢を帯びるのがわかった。次に右を向き、左を向く仕ぐさは、目覚めたあと両親を探しているといった風情。五本の指をぴんと伸ばし、相変わらずき

よろきよろしながら、一歩、また一歩。よちよち歩きで近づいてきた。

「あなたがわたしの『主人さまですか？』

「えつ……」

「もしあなたがわたしの『主人さまなら、識別コードを音声で入力してください』

合成音には違いないが、女の子らしい自然な声。ひとつひとつの言葉にあわせて唇が動くと、小さな白い歯がのぞいた。両手を可愛らしく胸の前に組み、小首をかしげて、少女はおれの返事を待つ様子……たしかにこれはよくできている。暇な金持ちの考えることは、おれたち凡人の想像を絶する。

一葉に目顔で促されるまま、おれは少女の名を口にした。少女が数回、大きく目をしばたたく間、古風な電気ゲームをおもわせるアーケード音が聞こえた。

「認識しました。何なりとお申しつけください。『主人さま』  
テレーズは両手でスカートをちょっとつまみ、舞踏会ふうのおじぎをした。そのままもとの人形に戻ったように、ぴたりと動かなくなつた。タイマーが切れたのだ。さつき一朗がパネルを操作して設定だったのであって、そういった基本的な動作は他の家事用チャペックと変わらない。と、理屈ではわかっていても、おれは少なからず動搖していた。

一朗が満足げに微笑むさまは、妹とそっくりだった。

「お気に召しましたか？」

「いや驚いたね。お伽話を田の当たりにしているようだつた」

けれども数十分後、おれはこれの百倍驚かせることになるのだが。もちろん、このときは知るよしもなかつた。

「ただ、あまり実用的とは言えないなあ。手入れも大変そうだし。

前の七式みたいに、蹴飛ばしながら使うくらいがちょうどいいんだ。チャペックだとわかつても、まさかこの子は蹴飛ばせないしな

あ

「わたしはぴつたりだと思つけど。Hイジさんみたいな、キノコが生えそうなやもめ暮らしには特に。こんな可愛い女の子が温かい料理を作つて待つているのよ。生活に潤いが生じると思わない？」

依然、おじぎをしたまま固まつてゐる人形に田をやり、おれはうなつた。

たしかに可愛い。それは認めるが、必要以上に可愛いのか？  
おれは大日本おっぱい党員だから、ロリータに興味はないが、それでもこんなチャペックと同じ部屋で寝起きしていたら、いつしか目くるめくアブノーマルな世界に踏みこんでしまひそで、空恐ろしいものがある。

だいいち、もうすぐ三十にもなる「つ」という、むやぐるしげ男に、お伽話の世界は似合わない……何だかんだと渋つてゐるところへ、一彦がトンネルから顔を出した。かれもまた監視カメラで、我々のやり取りを聞いていたとおぼしい。

「兄さん、あれをエイジさんに見せてあげたら？」

裸ダイオードの灯りしかないので、辺りはけつこう薄暗い。にもかかわらず、一彦の一言に反応して、一朗の顔がさつと蒼ざめるのがわかつた。弟に比べて、じつはちょっと小心な兄の性格は知つていたが、それでもかれをここまで狼狽させる「あれ」とは何なのか。当然おれは気になつた。

十五分後、おれたちは変態博士の部屋にいた。

博士は八幡商店の一階に居候している。普通に訪ねれば五分とかからないところ、三倍も時間を要したのは、おれがゴネたからだ。ガレージの一階なので、それなりに広い。博士はそこを書斎と研究室と寝室と物置に分けて使っていた。研究室はさらにつくつかに分けられ、玩具みたいな発明品から、とても口に出せないような、デンジャラスな実験まで行われているという噂だ。

もし二二二、BB-33地区が一夜にして壊滅したとすれば、それは多脚ワームのせいでも首長連合の残党のせいでもイミテーションボディのせいでもなく、博士が実験に失敗したせいだとおれは信じる。それがどんな実験なのか、夢にも考えたくないけれど。

「はん、器より中身だと、そんな陳腐な議論に耳を貸すほど、吾輩はヒマじやない。ただ同時に、器にこだわっている暇もないというだけでね」

キイキイとかん高い声で博士はまくしたてる。大昔の漫画から、マッドサイエンティストの絵を切り抜いてくれば、そのまま相崎博士の出来上がりである。白髪まじりのオールバック。瘦せこけた頬。異様に尖った鼻に、ちょこんと載つている真円形の眼鏡。よれよれのネクタイをしめた上から、焦げ跡だらけの白衣を引きずつている。そして鼻の下には、原始的民主主義時代の変態画家のよつな、ピンと斜め上を向いた時計髪をたくわえているのだった。

おれはえらく古めかしい意匠のソファの上で縮こまつっていた。手には黒い液体の入ったビーカーを握つて。どうやらこの生温かい液体はコーヒーハーであるらしく、八幡ブラザーズと妹は何のためらいもなく飲んだばかりか、呆れたことに、非常に眞いという感想までも

らした。

「こいつを飲むくらいなら、一週間断食したほうがましだ」  
ワームのホルマリン漬けを見たような顔でおれがつぶやくと、すかさず博士がキイキイわめいたところで今に至る。

おれたちが座っているのは、博士の書斎であり、応接室や居間を兼ねた部屋である。悪趣味を絵に描いて額縁に入れれば、この部屋が出来上がると考えていい。

壁には鹿の首の剥製や、解剖の様子を描いた油絵がかかり、どうし見てもレプリカとは思えない、等身大の人骨がぶら下がっている。机、椅子、壁紙、絨毯などは、限定的君主制の時代からタイムトリップしてきたように、どれも極めて古めかしい。

この書斎は異様に細長く、奥まったところは闇にかすんでいる。書棚にぎっしりと詰まった本が、どこまで続くのか見当もつかない。「で、何の用だつたかな？」この頃は物忘れがひどくてこまる。神経細胞を陽子イオン化する理論さえ確立できれば、こんな悩み吹き飛ぶんだがな」

その前に地球が吹き飛ぶんじゃないか。と言いたかつたが黙つていた。

博士はソファに深々と沈み、白衣の内ポケットからみょうに太い葉巻を取り出して、口にくわえた。すかさず横から助手の黒木がマッチをすり、煙草の前に炎をかざした。あのマグナム着火装置を自分で使わないのだから、呆れた発明家だ。

黒木が喋るところを、まだ一度も見たことがない。ファーストネームすら知らない。年は八幡兄弟と同じくらいか。ほつそりと背が高く、冷たく整った顔は、常に少し蒼ざめて見えた。看護婦、というノースタルジックな呼称が似合いそうな白衣を身にまとい、博士の隣でいつも微動だにせずに控えていた。謎の女である。

「ですから、エイジさんが家用用チャペック……いえ、ロボットを探しているそうなので。あれが役にたつんじやないかと」

一朗が身振りつきでそう言つた。博士は大量の煙を吐きながら、

うつとりと田を閉じた。

「ああ、あれか。完璧には程遠いが、どうにか使えるくらいまでは調整できる。接合部への不可侵率も常時八十七、ハパーセントまで上昇したからな。臨界に達することはまずあるまい。そろそろ下界を歩かせてやつてもいい、とは吾輩も考えていたところだ。せつかく一本の足を持つて生れてきたんだからなあ……」

ちなみにおれはまだ「あれ」が何なのか、全く聞かされていない。百聞は何とやらと言われては好奇心に勝てず、ふだんなら、汚染地帯の次に避けたい博士の根城へ、しぶしぶ足を運ばざるを得なかつた。

最初は変り種のチャペックくらいに考えていたが、博士の口ぶりでは、まるで一本足の原子爆弾の話でもしているように聞こえる。おれは不可解な身震いにみまわれた。現に、原子爆弾よりもっと恐るべきものが、田と鼻の先に横たわっていたのだが……博士は田を細めに開いて、銀縁の眼鏡の光沢よりも鋭く、ギロリとおれを睨んだ。

「きみの手に負えるかな？」

陳腐な言い回しだが、力チンときた。おれだつてその気になれば、軍事用チャペックくらい自在に操れる。一般人が夢想だにできないような、ロストテクノロジーの知識もある。ただ面倒くさいから知識をひけらかさないだけで。だてに処理班に在籍していたわけではない。

だから、墓穴を掘つた。今ならまだ逃げ出せたのに、最後のチャンスを逃してしまつた。

「手に負えるか負えないか、見せてもらわなければわかりませんよ。案内してください」

憤懣やるかたない、といった調子でおれは席を立つた。一朗が当惑した目線を弟に送り、一彦は片目を閉じて応えた。この、兄弟の瞬間的なやりとりを見てしまったおれの胸に、雷雲の「」とき不安が広がつた。が、もはや後には引けない状態。

「黒木くん、案内したまえ。吾輩もあとから行く」

それまで直立不動を維持していた黒木の体が、ゆらりと揺れて、おれのほうを向いた。相変わらず一言も発しないまま、ついて来るよう田顔でうながす。

白い背中に従いながら、彼女こそチャペック、いやロボットではないかと考えた。感情というものが全く感じられない。その点に関しては、ロボット以上かもしれない。例の七式に至つては、機嫌がよくない時の料理は確実にまずかつた。意志とまでは言わないが、感情が流れているような気がしていた。

ぎつしりと本が詰まつた書棚の間を、ずっと奥へ進んだ。床には大邸宅の廊下に用いられるような、細長い緋色の絨毯が敷かれていた。一箇所だけ、剥き出しの壁に銅版画がかかっていた。白い髪を床まで垂らした男が、古めかしい実験器具に埋もれかけ、周りを妖怪どもが飛び回る。中世といわれる時代の科学者……

当時、かれらは鍊金術師と呼ばれていた。

突き当たりに、鉄の扉がひかえていた。思いきり眉をひそめたのは、汚染地帯を封鎖する扉とそっくりだつたからだ。

黒木は扉についたカバーを開けて、数字キーに暗証番号を入力した。次に、巨大な金庫をおもわせるハンドルを握ると、細い体に不似合いな力を込めて、きりきりと回した。扉が内側へスライドするとき、そのぶ厚さに、あらためて驚かされた。蒼い光とともに、白い冷気がわーっとあふれ出た。

事実、その中は冷蔵庫なみに冷えており、おれは思わず首を縮め

た。蒼い照明は薄暗く、ぶーんという音が腹の底まで響くよつだ。たいして広くもない空間に、様々な機械がごちゃごちゃと積み上げられ、床はコードやチューブの類いで足の踏み場もないほど。無数の計器が明滅し、得体の知れない溶液が、ガラスの中で「ぼーぼー」と泡を吹いていた。

実験室の中央に横たわるのは、橢円形のカプセル。金色の、古めかしいバスタブを二つ上下に合わせたように、ぴったりと閉ざされている。ゆえに中は確認できないが、明らかに人一人横たえるのに、ちょうどいい大きさ……黒木に尋ねてもむだだと思い、おれは八幡ブラザースをかえりみた。

「この中に？」

兄弟は同時にうなずいた。一彦は不敵に微笑み、一朗の顔は引きつっていた。

カプセルはどことなく、貝殻をおもわせた。金色の貝殻が二つに割れて、いつたい何があらわれるというのか……

「きみは処理班にいたそうじゃないか」

ぎょっとして振り向いた。いつのまにか相崎博士が立つており、銀縁眼鏡の上から、凍りつくような眼差しをじつと注いでいた。おれは強いて笑おうとしたが、右の頬が痙攣したばかり。

「昔の話です」

「気取りなさんな。少なくとも、三頭委員会の時代より前でなければ、昔とは言わんよ」

今度は左の頬が痙攣したが、笑おうとしたのではなく、怒りの爆発を抑えたためだ。処理班時代のことは話したくないし、思い出しあくもない。まして茶々を入れられるなど、断じて我慢ならぬ。けれど、そんなおれの感情にはお構いなしに、博士は語をついだ。

「まあ、曲がりなりにも処理班にいたのであれば、きみは工Bの専門家であつたわけだ」

工B。あるいは、イミテーションボディ。何度耳にしても戦慄を誘う言葉だが、博士の口から出るとなおせり、まがまがしく響いた。

あり得ない話だが、まるで博士自身が、かれらの誕生に一役買つていたかのよう。

イミテーションボディという存在、もしくは概念を、一口に説明するのは難しい。むしろ、極彩色のパルプマガジンにおいて、三文画家が腕をふるうような、通俗的な怪物を想像したほうが手っ取り早いかもしない。現に、おれは処理班時代、まさにそういった怪物を何度も目の当たりにしてきた。

例えば、カマキリという昆虫は絶滅して久しいが、まさにあれとそっくりなIBと出くわしたことがある。ただし、牛一頭ぶんくらいの大きさがあり、複眼は四つ。全身は金属でコーティングされ、胸部には六対の巨大な鎌をたずさえていたけれど。その姿はまさしく、最も進化した死神といえた。

「今さら、おれが説明するまでもありませんよ。第一次百年戦争初期に投入された、言語道断な生物型殺戮兵器……」

人間がかれらを制御できなくなるまで、さほど時間はかからなかつた。ひとたび暴走が始まると、もはや誰にも止められず、百年にわたつて、殺戮と破壊を繰り返した。改造された遺伝子の命ずるままに。人間への憎悪に、ひたすら駆りたてられて。

極めて皮肉な話だが、イミテーションボディに対抗するためには、生き残った人間たちが、国境を越えて結束する以外なかつた。勝敗もうやむやなまま戦争は終結し、人間対IBの戦闘が繰り広げられた。それは史上類を見ないほど酸鼻を極めた、血みどろの死闘だった。

戦後五十年を経て、人間たちはからうじて自身の領域から、IBを締め出すことに成功した。けれど、もちろんかれらが滅びたわけではない。汚染地帯と呼ばれる荒地にかれらは棲息し、隙をうかがつては、常に人間の領域への侵入をこころみた。

改造された遺伝子の命ずるままに。人間への憎悪に、ひたすら駆りたてられて。

「よもや専門家のきみまでが、IBをパルプマガジンの挿絵と同列には考えておるまいね」

「専門家といつたって、ぶち壊すほうの専門ですからね。肉屋が動物学者ではないように。兵士が哲学者とは限らないようじ。おれがイミテーションボディの本質について知る必要は、全くないわけです」

「はん、つまりこと言つたつもりだらうが、詭弁もいこところだ。IBとは剥き出しの真理だよ。謎そのものでありながら、答えでもある。相対する者を取り込まずにはおかない。だからきみに話を振つたのだ」

おれは答えず、左の頬が痙攣するにまかせた。ともすれば鮮明によみがえりそうになる、死んだ妻の面影を、脳裏から遠ざけるだけで精一杯だった。

相崎博士は両手をポケットに突っ込んだまま、追いつめるよじ、じわじわと距離を縮めた。黒木が動いて、再び背後のドアを閉ざした。地区ごと封鎖するのに使えそうな扉を、よくあの細い体で閉めできるものだ。と、少し気がまぎれたところで、よつやくおれは口を開いた。

「あなたにいくら茶化されようと、昔のこととは昔のこと。今は考えたくないんですよ。あの存在については」

「ほう。それは気の毒な」

「気の毒だと?」

部屋じゅうのコードで、博士の首をしめてやりたい衝動を、からうじて抑えた。おれが処理班を辞めた理由を、この男が知るはずがない。八幡兄弟にさえ話していないのだから、知りようがない。にもかかわらず、最も触れてほしくない傷口に、ぐさぐさと言葉の刃物を突きたてる技術は、天才的といえた。

十数秒の睨みあいの末、博士は声をたてて笑つた。耳ざわりな、金属質の笑い声が、異様な室内にこだまを返した。まるで鍊金術師の使い魔どもが、銅版画の中から抜け出して、キイキイとの部屋を飛び回るようだ。

「我々はどうしようもなく傲慢な存在だ。自由意志で物事を決めているように錯覚しているが、じつは違うのかもしれないな。きみ、素手でビッグバンを止められるかね？ まあそう怖い顔をしなさんな。きみがここへ来たのも、偶然という名の必然であつたと、吾輩は言いたいのだ。家政婦ロボットを探しているのだったな。黒木くん、彼女を紹介してあげたまえ」

黒木は無言でおれの横をすり抜けると、カプセルの前に立つた。扉の暗証番号を入力した時と同じ無表情、無感動な動作で、かたわらのキー・ボードを叩いた。がくん、と重い反応があり、脇に取り付けられた太いアームによつて、金色のカプセルの蓋が徐々にせり上がりつていった。隙間から白い冷氣があふれ、床にたなびいた。

培養液のにおい。

おれは思わず身を乗り出した。

培養液はカプセルの縁までなみなみと張られ、みずから螢光を発していた。中に横たわる、真っ白い、ほつそりとしたシリエットがみとめられた。

まだ十三、四歳くらいの、少女の裸身だ。成熟しきっていない。春が来て苔はほころんだけれど、まだ開ききつていらない花弁のよう、甘美なもどかしさ。短く切り揃えた髪が培養液の中で、微風になぶられるように、さらさらと揺れていた。

愛くるしい顔だち。唇にはうつすらと笑みを浮かべ、カゲロウのように夢の中をただよつのか、薄い瞼を静かに閉じていた……おれはつぶやいた。

「ちょっと待て」

「パルスは全てCNC溶液を介して行き来しておる。噂には聞いておつたが、いやはや驚愕の化合物だよ。もし発掘された時点で液漏

れを起こしていたら、吾輩といえど、手も足も出なかつたことを告白しておかねばなるまい」

「だからちょっと待て」

「それでも難題は山積みされていた。何といっても危険だった。いわば戦時中の不発弾を掘り起こし、実験室に持ち込んだようなものだからな。それも特A級の大量殺戮兵器さ。起動させたが最後、どこまでもどこまでも暴走しないという保障はない。いや、むしろそういうなる確率のほうがはるかに高かつた」

憑かれたように、古いオペラでも口ずさむように博士はまくしてた。おれはかたわらの、頑丈そうな機械の側面を思っきり叩くことで、終わりのない戯言を中断させた。

「待てと言つてるだらう! 何だこれは?」

少女の表情が、培養液の中で、びくりと強ばるのを見た。音に反応したとしか思えなかつた。狡猾なフクロウのようじ、相崎博士は小首をかしげた。

「愚問だな。さつきから、なんぞん説明してある筈だが」

「黙れ。詭弁を弄しているのはどうちだ? おれはあんたが嫌いだが、少なくとも軽蔑はしていなかつた。ろくな実験はしないにせよ、非人道的なマネだけはやらない男だと買いかぶつていた。ところがどうだ。こいつは悪魔の所業じやないか? 場末に巢食う、悪魔に魂を売つたマジドサイエンティストどもと、あんたは同類だつたわけだ」

けれども博士は顔色ひとつ変えず、冷たい表情に薄笑いすら浮かべて、静かに首を振つた。まるでビリじょうもなく頭の鈍い教え子を前にした、数学教師のようじ。

「ならば問おう。いつたいきみは、彼女をどうのよくな存在と考へておるのかね」

おれは改めてカプセルの中身を見下ろした。螢光を発する培養液は、まるで少女自身の輝きを伝えるようだ。一糸まとわぬ……と思っていた彼女の左手首に、ごく細い、金属の腕輪らしきものがみとめられた。プラチナに似た質感。象形文字をおもわせる浮き彫りがあり、唯一、この部分にだけ数本のプラグが接続されていた。

彼女の表情は少し硬くなっていた。眉間に小さな皺を寄せ、光る液体の中で、わずかに身をのけぞらせたまま、苦悶するようでもあり、恥らつているようにも思えた。

「合成ゲノムを用いた人造人間だ。ほかに考えようがない」

いや、ひょっとすると、「普通の」クローリンである可能性も高い。そう考えたのは、左手首の腕輪がみょうに気になつたからだ。何らかの理由で「手首だけになつた」少女の、本体のほうを再生させたのかもしれない……いずれにせよ、非人道的な所業には違いない。

相崎博士こそ、現代のフランケンシュタインであり、プロメテウスの亡靈ではないか。

「当たらずとも遠からずと言つておこひ。しかし頭脳の回転が極めて緩慢な点はともかく、きみくらいばか正直なほうが、彼女を託すには向いているのかもしねないな」

「託すだと？　おれのやり方でいいのなら、遠慮はしない」

ジーンズのポケットからM36を抜いた。少女の心臓に狙いをさだめ、親指で撃鉄を起こした。博士が眉間に皺を寄せた。その哀れむような表情に、不本意ながら、おれは少々たじろいだ。

「いやはや、呆れてモノが言えんよ！　きみの脳細胞はピルトダウン人の化石かね？　いつたい処理班にて何を学習したのやう」「いじうするのが彼女のためだ」

「それこそ、傲慢極まりない人間のエゴだと思わんのか。まあ、撃ちたければ撃つてみたまえ。そんな玩具が、ニッケルコイン一枚ぶんの役にも立たんことくらい、きみが一番知っている筈だがね」

おれは銃口の先を見つめたまま、これ以上ないほど目を見開いていたと思う。

極めて緩慢な頭脳の回転が、ピルトダウン人の化石なみの脳細胞が、ようやく一つの事実の前にたどり着いていた。

ならば無意識に、悪夢から逃れようとするかのように、首を振ったのは、ほかのアイデアを懸命に探そうとしたのだろう。けれど、直感という名の制御不可能な力が、最も信じ難い、信じたくない、驚嘆すべき事実の前に、おれを連れ戻すのだった。

「まさか……」

「その、まさかさ」

不敵な笑みを浮かべた博士の顔が、眩暈の中で揺らめいた。圧倒的な力で、おれの視線は少女の、無垢としか言いようのない裸身の上に引き戻された。脳裏で一つの単語が、烈火のごとく燃え上がる気がした。

イミテーションボディ！

5

八幡ブラザースは語る。

「カプセルを掘り起こしたのは、およそ一月前。区域の北の郊外でした

「アハハ、一朗兄さん、エイジさんにまで嘘をつかなくてもいいだろ。境界線よりも十キロ近く先でしたよ。もちろん汚染地帯に入っています。でも北のあの辺りは、比較的汚染が軽微で、近年はエBも全く確認されていませんからね。事実上は緩衝地帯と考えてよいでしょう。そうしてぼくたちジャンク屋にとつては、宝の山でもありました」

「その日は、二葉の学校が休みだつたもので、店番を妹にまかせて、珍しく一彦と二人で出かけました。北の境界は警備が甘く、フェンスも老朽化しているため、抜け道は複数確保しています」

「例えば、フェンスに突っ込んだまま干からびている、二十メートル級の多脚ワームがありますよね。じつはあの虫の体内が、いい感じにトンネルになつていてるんですね。死骸とはいえ、無数の脚を突き出したワームの口に飛び込もうなんて、誰も考えませんものね。でも、うちのトラックくらいなら、わりとスムーズに通れるんですよ」

一説によると、多脚ワームは退化したイミテーションボディと考えられていた。ワーム類の中では、兇暴性、攻撃力、再生力、どれも桁違いに突出しており、最も恐れられている害虫のひとつだ。もちろん、駆除対象の第一種に指定されていた。

弟の語を兄が継いだ。

「五キロ以内はあらかた調査済みなので、もつ少し遠出してみるとしたんです。一応用意してはいましたが、十キロ以内なら、防護服もいらないだろうとタカをくくって」

「なにせ初めての場所ですから、ぼくたちは当てずっぽうに車を走らせました」

「辺りは雑草に埋もれかけた瓦礫の原で、トラックの強化タイヤはパリパリと、常に何らかの障害物を粉碎しながら進みます」

「シートにもたれて、ぼんやりとリアウインドウを眺めていたぼくは、急に跳ね起きて、ハンドルを握る兄の肩を叩きました。一軒だけ、ぽつんと建っている家を見つけたのです」

「教会のような工場みたいな、みょうでけれんな建物でしたね。ジヤンク屋のカンといいますか、一目で『これは』と思いましたね。瓦礫を割りながら、どうにか建物の近くまで車を寄せました。ガス爆発でも起こしたように、屋根が半分吹き飛んでいて、全体はびっしりと蔓草に覆われています」

「大気汚染と温暖化によつて季節は狂い、一年の四分の三を夏が占めるようになつていて。夏と冬の間に、春と秋は存在せず、ゆえに二月前といえば、まだ夏の盛りだった。」

「さつそく車を降りよつとした兄の腕を、ぼくはつかみました。目の前のポーチで、蛇腹草が毒々しい、赤い実をつけていたからです。周りと異なり、この建物の中だけ、いちじるしく汚染されている可能性があります。目配せして防護服を着こみ、高圧ガス銃を装備しました」

「玄関のドアを蹴破るのは造作ありませんでしたよ。空爆を受けたみたいに、中はがらんどうで、壁はあらかた吹き飛び、二階の天井から一階の床まで、吹き抜けになつっていました」

「小型のワームが数匹這つてはいるだけで、やっぱそうな生き物の気配はありません。そのかわり、めぼしいものも何もなくて、拍子抜けしたよ」、  
「顔を見合わせました」

「引き返そうとしたところで、急に足もとがぐらついて、おれは思わず叫び声を上げて倒れました」

「振り向くと、床の石畳がすり鉢上に陥没しています。ぼくはトラックまで走り、大きなハンマーを取ってきました。思いきり打ち下ろすと、案の定、四角い穴がぽつかりと口を開けました」

「よほど深いのか、中は真っ黒です。覗きこむと、冷気がひんやりと顔にかかります」

「ハンマーを捨てて、懐中電灯で中を照らしました。礫で組まれた四角い壁が、はるか下まで垂直に伸びているようです。壁には、鉄の梯子が打ちつけられていました」

「一彦が降りようとするのを、おれは慌てて引き止めましたよ。なにしろ、ここは汚染地帯です。人間の領域ではありませんから、何が潜んでいるか、知れたものじゃありません」

（お宝が詰まっているかもよ）

（よく聞け一彦。むかしむかし、一人のミイラ取りがおつてな）  
（わかつたよ。心配性だなあ、兄さんは。安全ベルトとロープを持つてくるから、何かあつたら引き上げて）

「エイジさんもご存知のとおり、おれの右腕は強化アームですからね。しぶしぶOKしたんですね。弟のやつは、するすると身軽に下りて行きます。懐中電灯の灯りは揺れながら、たちまち闇に呑まれました」

「ゆうに四、五階建てのビルくらいの深さはありましたね。底までたどり着くと、飛び上がるほど冷たい水が、くるぶしまで溜まつていきました。梯子の向かい側に横穴があり、やはり礫で囲われていて、身を屈めれば支障なく進めそうです」

「ロープの動きが急に止んだかと思うと、今度はずつと緩やかに解け始めました。それも一分とたないうちに、またぴたりと止まつ

たんですね

「横穴の突き当たりに、木の扉がありました。場合によつてはハンマーを投げてもうつもりでしたが、材木がすっかり腐つていたらしく、簡単に蹴破ることができました。中は意外に広く、弓形の天井に光を向けると、コウモリが驚いて、わらわらと飛びたちました」そこは地下の礼拝堂をおもわせたといつ。朽ちかけたベンチが並び、横に聖歌隊席が、奥には祭壇らしきものがみとめられた。ぼろぼろの垂れ幕。落下した額縁。石畳の床を黒々と満たす水の上で、懐中電灯の光ばかりが、散り散りに乱れた。

「神様の像はひとつもありませんでした。かわりに、銀の板をくりぬいたような、奇妙なシンボルマークが、祭壇の奥の壁にかかつっていました。そうですね……ちよつビアルファベットのAを逆さにじたような」

おれは目を見張った。

まぎれもなく、ツアラトウストラ教のシンボルではないか。

「カプセルを見つけたのは、祭壇の中です。蠟燭や供物をのせる台の下で、半分水に漬かっていました。いい地金になりそうですが、こんな金属の塊、とても一人では運べませんから、ロープを結んで、兄に引き上げてもらいました」

「すっかり苔むして汚れきつていましたが、こすつてみると、きらきらと金色に輝きます。掌を当てると、かすかに、ぶーんという震動が伝わってきます」

「いつたいこれが何なのか、一人ともさっぱりわかりませんでした。そこで毛布でぐるぐる巻きにして持ち帰り、一階の相崎博士に鑑定を依頼したというわけです」

こうして無邪氣で愉快なハ幡ブラザースは、パンドラの箱を持ち帰つたのである。

自分が絶叫していることにさえ気づかなかつた。

目の前で、五発の弾が瞬く間に撃ち尽くされるのを、遠くのできじとのように眺めていた。

少女は目を閉じたまま。その静かな寝顔に、かすかに哀しみの色がうつろつた。

まるでスローモーションの映像のように、少女の左手が突き出されるのを見た。プラグが次々と引きちぎられ、ほつそりとした左腕が、湖底に潜む未知の爬虫類のように、培養液から浮上した。腕輪が眩い光を発したかと思うと、手首から先が、五本の鋭い刃をそなえた、複雑でまがまがしい機械へと変化した。

M36が撃ち出した五発の弾丸は、鋼の刃によつてじどじく破碎され、カプセルの外に飛び散つていた。

#### (胡桃割り人形)

混乱を極めた脳裏に、脈絡のない単語が浮かんで消えた。おれは汗にまみれ、荒い息を吐きながら、それでも目を逸らせずにいた。再び腕輪が輝き、鋼の粉碎機の形状が崩れて、ふつくらと白くて柔らかな、五本の指に戻つていった。その手はまるで、おれに救いを求めているようだつた。

培養液の中から、少女は目を見開いて、じつとおれを見つめていた。

再び絶叫がほとばしつた。

数秒間、今どこにいるのかわからず、闇の中で目をしばたかせた。

見慣れた蒼い薄闇。空気清浄機の低い震動……半身を起こすと毛

布が床にすべり落ち、かわりに冷たい空気が身にまとわりついた。それでいて、寝汗をびっしょりとかいでいるのだ。

カーテンは閉まっているが、常夜灯の蒼い光が入り込み、ものの形をおぼろげに浮かび上がらせた。まぎれもなく、おれの部屋だ。シャツとジーンズを着たまま、ソファの上で眠つていたらしい。胸ポケットを探ると、くしゃくしゃにつぶれた煙草の箱があらわれた。一本取り出し、火をつけず口にくわえた。硝煙のにおいを記憶から追い払うため、軽く頭をふった。

少女の片腕がゆっくりと液の中に沈んだとき、薄い瞼もまた閉じられていた。それでもガラスのようにうつろで、小動物のように無心な鳶色の瞳の残像が、悔恨の中で胸をえぐつた。

「気がすんだかね」

おれの指から、M36が床にすべり落ちた。「…」といつ、といつ音が空虚なこだまを返した。

「いつたい……なんだって……」「んな

「不用意に驚かせたことは、素直に謝るわ。E-Bの恐ろしさを知り尽くしているきみだ。ただし彼女は、きみが考へているような野生種の自己進化型とは、根本的な出自が異なる」

ぽんやりと、相崎博士に目を向けた。かれの顔が白く滲んで見えたのは、おれが涙を流したせいだろう。恐ろしかったのだ。

「自己進化型ではない?」

「さよう。彼女の全身のうち、真にE-Bである部分は、きみも見たとおり、左手首から先だけだ。そこに野生種が一体、まる」と封じこまれておる。残りの部分は、いわばコピ―されたE-Bと考えてよろしい

頭をめぐらして、粉碎された弾丸を手で数えた。破片のひとつは床に深々と突き刺さり、あるものは計器のガラスをまつぶたつにしていた。博士は続けた。

「きみはさつき、合成ゲノムの名を口にしたが、ちゅうどあれと似

たやりかただよ。ただし、実験室で合成されたのは人間ではなく、IBの遺伝情報だがね」

「何のために？」

「もし政治的な思惑についての質問なら、わからない」としか答えようがない。吾輩は一介の科学者に過ぎないのだから。まあ製作側の善意を前提に考えれば、対IB用の兵器として、これほど強力なものはあるまい」

「少女の姿に似せる意味がわからない」

「そのほうが汎用性は高くなるだろう。同じ能力をもつのなら、何も好き好んでグロテスクな形体をとる必要はない。むしろ外見は無力さを装つたほうが、様々な点で有利に運ぶ」

「汎用性、か。大立ち回りから暗殺まで、何でもこいというわけだ……それで、なぜこの子をおれに押し付ける気になった。八幡兄弟に入れ知恵したのも、あんたなんだろう？」

ありがたいことに、ジーンズのポケットを探ると、ちゃんとライターが入っていた。煙草に火をつけても、炎は消さず、部屋の奥へ目をこらした。壁際のベッドが、ぼんやりと眺められた。その上で、毛布にくるまつて横たわる、華奢な体の線も。

壁のほうを向いて、その体は横たわっているらしい。ほんのわずか、背中をまるめて。毛布で顔を覆うようにして。

ライターの炎に映えて、髪の毛がしつとりと光沢を宿す。エナメルをおもわせるが、金属的な硬さは感じられない。呼吸にあわせて、肩がかすかに上下する。羽毛のような寝息が聞こえた気がした。

(イミテーションボディも、夢を見るのだろうか)

炎を消すと、ほっそりとしたシルエットはまた闇に覆われた。まるで、夢そのもののように。

「極めて情緒的な問題からだよ。ヒトは所詮、情緒という飴玉をしやぶつていなければ、せちがらい世の中を生きるに忍びない、じつに脆弱な生き物だ」

「おれがこの核弾頭より危険な女の子の、お守に向いていると?」「いかにも。娘にするにはちと大きすぎるが、年の離れた妹くらいに考えれば、かわいいものだらう」

「冗談じゃない。おれはそうつぶやいて、拳を握りしめた。何が情緒だ。さつき彼女の左手が瞬く間に変形して、弾丸を木つ端微塵にするのを田の当たりにしたばかりだ。そこには、イミテーションボディがある」と一体、封じこめられているといつ。

「カプセル」と、地中深く埋めてしまつのが最善策だ。北の境界から一十キロほど行ったところに、廃坑があるだらう。そこに放りこんで、上からハッパをかけばいい

「はん、たとえ日本海溝に沈めても、その気になれば、この子は自力で這い上がることができるよ。そして、この子のような存在を涎が出るほど欲しているヤカラに、みすみす利用されるのがオチだ。次にきみが彼女と会つとき、これほど友好的な対面になるとは限らんよ」

返す言葉がなかつた。

おそらく、そのとおりだらう。古い諺にもある。一度動き始めたIBは、誰にも止められない、と。

「酷なようだが、エイジくん。運命だと思つてあきらめるんだな。今すぐきみは一つの選択肢のうちの一つを選ばなければならぬ。すなわち、彼女を味方につけるか。それとも、敵にまわすか、だ」

闇の中で煙草を吸うのが好きだ。ほんの鼻先で、螢火ほどの炎が楽しげに瞬き、次に紫煙が宙を舞う。眠れぬ夜にあらわれる、羊たちの「靈のように、煙は闇の中でジーグを踊る。

もし眠れぬ夜が訪れたとき、彼女は何を数えるのだらうか。

今をときめくメタルスター、ジギー・バンデル・ルーデンの超絶テクをおもわせて、キーボードを叩く黒木の指は見えなかつた。漆黒の夜のようなモニターの中を、白い数字や記号が星の数ほど流れゆく。

このいかにも旧式のノート型コンピュータは、少女の眠るカプセルに直に接続されていた。さらにもう一台の、似通つたコンピュータがそれに繋がれ、こちらのモニターでは無数のポリゴンが描き出す少女のシルエットが、刻々と変化するグラフや数値に囲まれて、ゆるやかに回転していた。

一時間近くも、キーを叩く音だけがうつろに響いていた。そしてかなり唐突に、黒木の指がぴたりと止まつた。おれの顔を注視しているが、相変わらず一言も発しない。代わりに博士が口を開いた。いつになく、緊張に上ずつた声で。

「セットアップ完了だ。起動させること、きみが名前を考えなきやいかん」

「名前を？」

「もちろん、この子の名だよ。決まったら、そつちのモニターに手をかざしてくれ」

当然おれは戸惑つた。子供どころか、仔猫さえ飼つたことがない。人生において、何かに名前をつける経験なんて、これが最初ではあるまい。黒木は感情のない目を、対して博士は好奇の眼差しを注いでいる。額に汗を浮かべたまま、おれは目を閉じた。

(この花が一番好きなの)

単調なメロディが、頭の奥で鳴っていた。玩具のピアノを叩くような、あるいはよちよち歩きをするような、たゞたゞしい音……おれは目を開き、こくりとうなずいた。

モニターからはいつのまにかポリゴンが消えて、ほとんど真っ白になっていた。そつと右手をかざすと、そつくり同じ輪郭があらわれた。黒木に目で促され、おれは手をかざしたまま、カプセルの中を覗きこんだ。

名を呼んだ。白い光があふれた。培養液の中で、少女はゆっくりと目を開き……

花のように微笑んだ。

……ぶつづーーんんんーーんん……。

どこかで翅つきワームが飛び回っていた。いやそれとも、時計が鳴っているのだろうか。しかし、こんな妙てけれんな音をたてる時計など、存在するとは思えないが。

眠気が深い霧のように纏わりついていた。百年も錆びたままの鎧戸みたいに、瞼が重かつた。

……ぶつづーーんんんーーんん……。

不可解な音は、しだいに近づいてくるようだ。渾身の力で薄田を開けると、容赦なく白い光が飛び込んできた。なんてこった、カーテンが開いているのか。おまけにすっかり陽が昇っているというわけか。

夜行性の吸血虫が日光を嫌う気持ちが、今こそ理解できる気がした。こここのところずっと仕事がなかつたせいで、おれの生態もやらと似たり寄つたり。日の光を避けて、闇につじめぐ。あとは血を吸うか吸わないかの違いしかない。

猫のように虹彩を調整しながら、少しずつ瞼をこじ開けた。ほつそりとした一本の脚が、目の前に並んでいた。レースに縁どられて、太腿もあらわに、白い長靴下につつまれて。

なるほどこれは女の脚だ。それもまだ少女らしい。さうといちちらに尻を突き出す恰好で、前屈みになつて何かしているのだろう。翅つきワームみたいな音をたてながら……霧の中に、昨夜の記憶の断片が、ぼんやりと浮かんだ。

(エイジさんは先に戻られてください。追つてお届けにあがりますから)

あの悪夢のような研究室で、そう言つたのは一朗だつたか一彦だ

つたか。

とにかくおれは疲れていた。何を考えるのも面倒だった。八幡兄弟の提案を、わたりに船とばかりに帰宅した。電灯をともしたまま、上着だけを脱ぎ、帰り道で買った合成ビールと毛布をソファの上に持ちこんで、ぐつたりと身を沈めた。時計を見ると、十一時を回っていた。部屋の鍵は開け放しにしておいた。

間もなく記憶が途絶えて、次に目を覚ましたのは真夜中とおぼしい。電灯は消えて真っ暗だつた。眠っている間にブラザースが訪れ、「納品」して帰つたのだろう。煙草を吸うために火をつけると、ベッドの上に横たわる、華奢なシルエットがみとめられた。煙草を一本灰にして、おれはまた目を閉じた。

……ぶつづーーんんんーーんん……。

唸り声の余韻を残して、音が止んだ。ふんわりと、レースがひるがえり、たつぱりと結んだ白いリボンが揺れた。

「お目覚めになつたのですね」

見知らぬ少女が小首をかしげていた。

肩をふくらませた濃紺のワンピース。フリルのついたエプロンが、童話的で可愛らしい。この服装に、けれどおれは見覚えがあった。たしか新東亜ホテルで働く、客室係のメイドの制服ではあるまいか。首長連合の時代、新東亜ホテルはなれば官営の施設で、首長かその血族以外泊まれない、高級ホテルだった。人類刷新会議が政権を握ると民営化され、庶民も無理をすれば泊まる程度には、料金が下げるられた。二葉がそこでアルバイトをしていたのだ。

希望者が多いため、倍率がすごかつたらしいが、それだけ給料がいいのだろう。採用が決まった時は彼女も喜んで、おれに制服を見せびらかしたものである。

しかしどう考へても、ここは高級ホテルとは似ても似つかない。キノコが生えそうなおれの部屋に違いない。少女が手にしているのは、おそらく旧式の電気掃除機のノズルらしい。なるほど、あれは掃除機の音だったのか。けれど、そもそも由緒正しき新東亜ホテ

ルのメイドが、こんな所でキノコ人間の世話を焼く道理など……

「わああっ！」

おれは跳ね起きた。ソファの背を乗り越えて、後ろに転げ落ちた。こんなヤツな素材が盾代わりになるとは思えないが、一秒くらいは時間が稼げるだろ。ポケットからM36を引き抜き、銃口を床につけたまま、トリガーに指を添えた。弾薬はすでに装填してあった。少女はくるくると目をまるくした。

「どうかなさいましたか？」

「きみは……」

イミテーションボディ。

と、言おうとして口をつぐんだ。いや、髪形といい顔立ちといい、確かに昨夜、培養液の中で見たのと同じ少女である。けれど、弾丸を粉碎したときの凄まじい殺気が、今は微塵も感じられない。あどけない少女が、無防備につつ立っているだけである。おれが銃を構えていることなど夢にも知らないような、はにかんだ表情で。

おれは混乱した。あの狂氣の実験室で、カプセルの中に横たわっていたからこそ、恐ろしげだったが。今こりうして、エプロンをつけてもじもじしているところは、普通の、いや普通以上に可愛らしい女子にしか見えない。

だがしかし、これが擬態に過ぎないことは、やうべ思い知らされたばかりではないか。彼女が超殺戮兵器であればこそ、外見は無力さを装ったほうが何かと有利にはたらく。それこそ新東亜ホテルの客室係のふりをして、泊まり客の要人を、強化人間のボディーガードごと抹殺することもたやすい。とはいづもの……

「あの、お食事になさいますか？　すぐにご用意できますけど」

少女のこまつたような顔を見ていると、さすがに居たたまれなくなる。いじめているような気がしてくる。変態博士ではないが、ヒトはなんと情緒に弱い生き物か。

「きみは、その……おれに危害を加える意志はないのか？」

我ながら間の抜けた質問だ。もしそのつもりでも、ハイと答えるばかりはない。少女は、本当にわけがわからないといったふうに、また小首をかしげた。

「マスターがそれをお望みになるのですか」

「は？」

「マスターがそれを望まれるのでしたら、ご命令どおり致します」

少女の目つきが変わった。掃除機のノズルを放り出し、素早く片膝について、左手を突き出した。こちらへ向けて真っ直ぐ伸ばされた指が五本とも、ハガネ色の、鋭い円錐形に変化した。

「わあっ！　望んでないし望んだ覚えもないし金輪際望まない！」

「では何をお望みですか」

「そ、そうだな。いつ、一服しよう。うん、そうしよう。コーヒー

でも紅茶でも梅昆布茶でも何でもいいから、と、とりあえず淹れ

てくれないか

そう言つたとたん、田の表情が和らいだ。左手が瞬く間に復元し、上品な仕ぐさで立ち上ると、両手でスカートをちょっとつまんでお辞儀した。

「かしこまりました」

胡蝶のような白いリボンを、ふわりと揺らして、キッチンのほうへ行きかけ、思い出したように立ち止まつた。おれの心臓が一秒ほど止まつたが、振り向いた田つきは柔軟だつた。

「伝言がありました。十一時ごろ、八幡商店さまがお見えになるそうです」

彼女の姿が見えなくなると、おれは床にへたりこんだ。鼓動が高鳴り、汗でシャツが貼りついていた。時計に田をやるとまだ九時すぎ。最近のおれとしては、とんでもなく早起きた。八幡ブラザースが来るのは、おそらく彼女の「取り扱い説明」のためだろう。けっきょく表向きは、家事用チャペックを一体、購入したことになるのだろうか。

得体の知れない超兵器を押し付けられたうえ、金までとられてはかなわないが……軽い食器の音が止んで、少女が顔を出した。

「お待たせしました。どちらでお召し上がりになりますか

「そつちへ行くよ

キッチンは見違えるほど片付いていた。スペースの三分の一以上を占めていたゴミの山が、奇麗さっぱり消滅し、流し台から床に至るまで、ピカピカに磨き上げられていた。ダイニングテーブルには、清潔なテーブルクロスがかけられ、鉢植えの花まで飾つてあつた。コリの花に似た赤い……

(この花が一番好きなの)

頭の中で、たどたどしいピアノの音が鳴り始め、おれは思わず、こめかみを押された。白い霧の向こうで、柔らかな笑顔の幻影が揺れた。赤い花。妻が一番好きだった……

「……アマリリスト

「はい」

「えつ？」

テーブルに片手をついたまま、おれは目を開けた。ユリに似た赤い花から、少女へと視線を移した。ティーカップの載った盆を手にしたまま、彼女は微笑んだ。

「昨夜、マスターにつけていただきました。わたしの名前です」  
薔薇の紅茶は申しぶんなかった。比べては申し訳ないが、ナナコ七式にここまで纖細な芸当はできない。彼女は……アマリリスはまるで人間そのものではないか。円い盆を胸に抱いて、かたわらに立つている少女を見上げた。とても、人造人間とは思えない。

「きみは、その……紅茶は飲めるのか」

「はい。 いただきます」

「じゃあ、きみのぶんも用意して、ここに座ってくれないか」

アマリリスは軽くうなずき、手際よく自分のカップを用意して、目の前に腰をおろした。おれと色違ひの赤いカップだし、椅子の音はたてないし、メイドの恰好をしていることも相まって、自分の部屋にいることさえ、うつかり忘れそうになる。

ソーサー」と持ち上げて、薄いカップの縁を口へ運ぶ。たしかに「美味しい」という顔をしたが、本当に味がわかつているのかどうか。そんなことも含めて、さて、何から尋ねたものか。考えてみれば、おれは彼女のこと有何も知らないに等しいのだ。

カップセルが発見されたイキサツなら、ブラザースから聞いていた。しかしそれ以前の「過去」に関しては、まったくの謎だ。第一次百年戦争時に作られたらしいと変態博士は言うが、それから現在まで膨大な時間が経過している。彼女は何をしていたのか。ずっと眠っていたのか。そもそも記憶があるのか……

思わずカップの前に指を組んで、また前方に目をやった。アマリリスはカップとソーサーをテーブルに戻し、おれを見てちょっと首をかしげた。お話があるのでしたら、うけたまわります、といったところか。よく機転のきく、この年頃の少女の仕ぐさそのもので、やはりタベの出来事との接点を見失いそうになる。

八幡ブラザースが来れば、もうちよつと突っ込んだ話も聞けるだろう。が、心情的に、かれらが来る前に、彼女と少しば話し合おうとしたかった。とりあえず、無難なところから尋ねることにした。

「きみは、その……お腹は空くのかい」

「空腹感はございません。設定を書き換えれば、それを感じることもできますが」

「きみにとつての食物、つまりエネルギー源は何だらう?」

「基本的には必要ありませんが、たまに外部から摂取するほうが望ましいようです。熱に換えられるものなら、何でも摂取できますが、

現在の設定では、マスター同様、食事による方法に最適化されます

基本的に腹は減らないが、たまには飯を食つたほうが健康にいい、といったところか。

しかし、少女はさらりと言つてのけたが、基本的にエネルギーを必要としないという事実は、あまりにも驚異的と言わざるを得ない。それは彼女の内部にも、あの「永久機関」が内臓されていることを意味した。はからずも、おれはしょっぱながら、最も本質的な質問をぶつけてしまったわけだ。

一度動き始めたIBは、誰にも止められない……この諺は、イミテーションボディの根本といえる、永久機関の驚異を語つたものだ。言つまでもなく、それはエネルギーを必要としないエンジンをあらわす。理論上、このエンジンは決して止まることがない。

ゆえにIBは、理論上、死ぬことがない。

イミテーションボディを神とあおぐ新興宗教もあると聞く。例のカプセルが発見された地下室が、ツアラトウストラ教と関係があるらしいことは、八幡兄弟の証言から知れた。この教団は秘密結社的な色合いが濃く、表向きは神の存在を否定し、「超人」としての再生を説く。一方で、IB崇拜の温床であるといつ噂もあるのだ。もちろん、永久機関とえいども、かつて人間が作り出した機械に過ぎない。ただ、現在では最大級のロストテクノロジーとみなされている。

おれの知る限り最も高い技術力をもつ、あの相崎博士でさえ、いまだにそのメカニズムを解き明かすことができない。永久機関の秘密を手に入れた者が世界を征す、と言われるくらい。人類刷新会議にせよ首長連合の残党にせよ、謎の解明に血眼になつているのだが。

「マスター」

呼ばれてびっくりと顔を上げた。何度も呼ばれてもなかなか慣れない。「紅茶をもう一杯、いかがですか。それとも、ほかのものをお作りしましようか」

「あ、ああ、ありがと。じゃあ、紅茶をもらおうか」

メイドのほうが主人より百倍気品があるのも、考えものである。砂糖を断り、一杯めの紅茶を一口すすつて、おれはまた推理した。アマリリストが内蔵している永久機関は、おそらく野生種のIBのそれと比べて、不完全なものではあるまい。昨夜も聞いたとおり、彼女の中で、純粋にイミテーションボディである部分は、左手首から先だけであり、残りの体は、IBの遺伝子に改良を加えて合成されたものだから。どうしてもオリジナルとの差異が生じてしまうのだろう。

彼女はオリジナルのIBではない。とりもなおさず、この事実は、おれを少なからず安堵させた。

「つかぬことを訊くけれど、きみはきみ自身を、どういう存在として把握してるのかな」

我ながら変なことを訊いたものだし、案の定、アマリリストも小首をかしげた。どうやらこれが少女の癖であるらしく、なかなか可愛らしげに仕ぐせであることは、認めねばなるまい。

「『質問の意味がよく呑みこめません』

「つまりその……ぼくひとつ、きみはどうこう存在なんだろ?」

少女が何か答えるとしたとき、チャイムが鳴った。

時計に目をやると、まだ十時になつていない。おれは首をひねりながら席を立つた。わりと時間に正確なハ幡兄弟にしては、ずいぶん早いお出ましである。

「あつ、わたしが出ますから」

「いいよ。その恰好で出られると、なんだかこっちが照れくさい」  
カメラつきインターフォン、などという高級なものはハナからついていない。小廊下でアマリリスト追い抜いて、何気なくノブに手をかけたとき、なんでも屋のカン、というやつか。一瞬、頭の中で警報が鳴つた。

「どちらさま？」

返事がない。ドアスコープに目を当てたが、真つ暗で何も見えない。

「いよいよ「やばい」と感じたところで、勢いよくドアが引き開けられた。昨夜から、鍵は開け放しだったのだ。身構える間もなく、胸元に自動小銃を突きつけられた。反射的に振り返ると、すでにアマリリストは猫のように身を低くしていた。

「手を出すな！ おとなしくしている」

今にも飛びかかる体勢から、少女が身を起こすのを確認して、おれはゆっくりと手をあげた。ガスマスクのようなものを被つたコマンドが一人、目の前に並んでいる。後ろにもう一人立っている黒服が、指揮官だろうか。コマンドの服装から、すぐに人類刷新会議の武装警官だと察しがついた。それも、テロリストの検挙を主な任務とする別働隊とおぼしい。

近頃、なんでも屋をはじめ、私的に武装した組織への風当たりが

強いのは確かだ。しかし、おれは下つ端の契約社員に過ぎないのであって、ガサ入れならワットの所へ行くべきではあるまいか。それでも、すでに事務所へは踏み込んだ後で、ついでに下つ端もしおり引ひつとこりわけか。

無言でコマンドに促されるまま、おれは頭の後ろに手を組んで、中へ後退りした。最後に入ってきた指揮官は、黒いバイザーのついたヘルメットで、頭部をすっぽりと覆っていた。まだかなり若いのが、みょうに華奢な体つき。アマリリスの姿をみると、さすがに驚いたリアクションを見せた。

「あの子は？」

バイザーにさえぎられて、くぐもった声は、明らかに女のものだ。  
「年の離れた妹だ」

「ほう。なぜ新東亜ホテルのメイドの恰好を？」

おれはニヤリと笑つて答へなかつた。じつは内心、パニックにおちいりかけていたのだが。しかしこのタイミングで、刷新会議がアマリリスの正体を嗅ぎつけているとは考へがたい。少女にメイドの恰好をさせて喜ぶ変態、くらうに思わせておくのが無難だろう。変質者の逮捕は、別働隊の管轄外なのだから。

コマンドは一人ともおれに銃を向けたまま。まったくアマリリスを警戒していないのだから、擬態の効果恐るべし、である。素早く周囲を見わたして、黒服の指揮官が言う。

「とつぜん驚かせてすまなかつた。少し話したいのだが」

「十一時にお客が来るんですがね。それまでに終わるんでしたら」

「出方次第と言つておく。ともあれ、それは預からせてもらつ」

そう言つておれに近づき、ポケットからM36を抜き取つた。香水のにおいがした。壁に押し付けるなり床に転がすなりして、身体検査されるのかと思つていたが、反対に彼女は、コマンドを一人とも後ろに下がらせた。おれは肩をすくめて腕をおろした。お世辞にも友好的とは言えないにせよ、いきなり身柄を拘束するつもりはないらしい。

「アマリリス、この方たちにお茶を」

ガスマスク越しに飲めるのか疑問だが、半分は皮肉のつもり。もう半分は、なるべくかれらの視界から少女を遠ざけておきたい気持ちで、そう命じた。黒服は何も突っ込みず、少女がお辞儀をしてキツチンへ向かうまで、無言で見送っていた。おれは目顔で促して、かれらを居間へ案内した。

さっきまでおれが寝ていたソファの上で、黒服は足を組んだ。いかにも武装警官らしい横柄な態度だが、間近で見ると、細くて柔らかい体の線は隠しようがない。おっぱいもけつこうありそうだ。口マンドは銃を上に向けて両脇にひかえている。小テーブルを挟む恰好で、おれは椅子にかけ、わざととぼけた質問をした。

「何があつたんですか」

「我々の素性はわかっているな?」

「ある意味で。もつとも、身分証や令状の提示が必要になるくらい、刷新さんには治安回復に励んでもらいたいんですけどね」

「残念ながら、ＩＤの提示は義務付けられていない。コードネーム『カラリ』、とでも名のつておこつか」

黒服はそう言って、バイザーを少しだけ持ち上げた。真紅に塗られた唇が、薄く微笑んでいた。きっといい女に違いない。おれはそういう直感した。

「おれのＩＤは見なくていいんですか？」

「ふん。モグリのなんでも屋なら、偽造はお手のものだろう。エイジさんとやら。以前は連合の処理班にいたそうじやないか」

「よくご存知で」

胸ポケットを探ると、ガスマスクの一人が素早く銃口を向けた。薄っぺらな煙草の箱を、ひらひらと振ってみせたが、実際に一本取り出すまで、狙いを定められたまま。たしかに小型爆弾である可能性はゼロではないが、『苦労な話である。その間も、核弾頭より恐ろしい超兵器が、台所でお茶を淹れているとは、夢にも知らずに。おれは苦笑しつつ、煙を吐いた。コードネーム「カラリ」が尋ねた。

「今でも連合と繋がりはあるのか

「まったく」

「正直に答えたほうが身のためだぞ」

「疑うんなら、家宅捜査でも何でもすればいい。三年前に辞職して、それつきりだよ。だいいちおれは、首長の血族じゃない。ちょっとばかし給料はよかつたが、連合政権時代の処理班といえば、今のあんたたちよりも、ずっと位は下なんだぜ。今さらやつらに義理立てる理由は何もないよ」

信じたのかどうなのか、カラリは何も答えない。黒いバイザーに向ひついで、どんな顔をしているのか、まったく読めない。ただ、やつらの目的が、首長連合の残党狩りらしいことは、だいたい察しが

ついた。

ふと、レイチエルの顔が浮かんだ。次の瞬間、いやな予感は見事に的中した。

「隣は一一〇七号室だつたな。住人と交流はあるのか」「顔を合わせれば、挨拶くらいはしますがね。それだけです」

アマリリストはキッチンに入つたきり、なかなか戻らなかつた。食器の音も全く聞こえず、静まり返つてゐる。電池切れ、という考えを、煙草とともに揉み消した。たつた数時間で止まつたのでは、七式にも劣る。永久機関の名がすたる。

それにしても、レイチエルが首長の血族ではないかという疑惑は、図星だつたのだろうか。相変わらず相手の表情の読めないことが、おれを苛立たせた。残り一本になつた、貴重な煙草にまた火をつけた。

「隣人の名を聞いているか」

「レイチエルとか言つてましたね。学校で芝居でもやつてるんですかね」

「学生だと思うのか」

「さあ。若い娘のことを根掘り葉掘り訊くのは、マナー違反でしょう。おれなんか相手にするより、隣に行つて直接尋ねたらどうですか」

「調べたさ。とつゝロドロンされた後だつたがね」

「えつ……」

目を見張つてゐる間に、彼女は立ち上がつた。薔薇に似た、香水のにおいが漂つた。

「邪魔したな。見送りは結構。機転の利く妹さんにも、よろしく言っておいてくれ」

カラリが先に立ち、ガスマスク一名が後に続いた。部屋を出て行くまで、三人とも一度も振り向かなかつた。ドアの閉まる音が聞こえたところで、振り返ると、盆を手にアマリリストが立つていた。紅茶ではなく、冷たい水を満たしたコップが一つだけ載つていた。

なるほど、さっき飛びかかりかけたことといい、命令に忠実なばかりでなく、おそらく機転が利く。おれは水をひと息に飲み干すと、盆に戻すついでに、少女の耳もとに顔を寄せた。

「おそらく盗聴器が仕掛けられたと思うが、探知できるか?」

少女は無言でうなずき、盆を小テーブルに載せて、ソファの足もとにしつづくまつた。間もなく、色も形もコガネムシに似た装置が差し出された。自力で潜り込めるタイプらしく、これならカヲリが一度も身を屈めずに仕掛けられたのも道理だ。おれは棒読みで言つてやつた。

「おや、煙草を落としたと思ったら、こんなに変な虫がいやがつた。えい、虫め。害虫退治の専門家を舐めるなよ。いつしてくれる」

床に叩きつけ、ついでに鉄板つきのスリッパで踏みつけた。ぐしゃっと潰れる感触は、決して気持ちのいいものではなかった。

アマリリスを連れて部屋を出ると、一一〇七号室のドアの前に立つた。ノックしたが、やはり返事はない。ノブを回して引いてみると、何の抵抗もなく開いた。チエーンもかかっていない。刷新の中がピッキングしたに違いないが、まったく物音がしなかつたのだから、プロの泥棒顔負けである。

玄関に靴は一足もなく、傘の類いも見当たらない。静まり返った小廊下の突き当たりに見えるドアは、ぴつたりと閉ざされている。人が生活していた気配を全く感じないまま、廊下を進み、ドアを開けた。グリーンのカーテンがぴつたりと閉ざされている以外、調度類は何もない。がらんとした四角い空間で、剥き出しの床が冷たい光沢を浮かべているばかり。

残り一本に火をつけるついでに、おれは身を屈め、アマリリスに囁いた。

「何か仕掛けられているか?」  
しばらく辺りに目を走らせて、少女は首を振った。すると連中は、レイチエルがもうここに戻らないと踏んだのか。

台所も同様に藻抜けの殻で、食器や調理器具はおろか、「ゴミ」と落ちていない。ただ、蛇口からこぼれる水滴が、ぴちゃつ、ぴちゃつ、と、数秒おきに滴っている。覗きこむと、ガラスのコップがひとつだけ置き去りにされ、水が縁まで溜まっていた。

おれは煙草をくわえたまま、もう一つの部屋へ通じるドアに近づき、引き開けた。こすらもカーテンが閉められており、隣室や台所より、さらに暗く感じた。何もないのかと思えば、シングルベッドがぽつんと、壁に寄せられている。シーツが蒼白く目に映え、まるで病院のベッドのようだと考えた。もちろん、上には誰も寝ていない。お世辞にも趣味はよくないが、おれは掛け布団をめくって、顔を近づけた。女らしい、残り香があつた。

「いつたいどういうことだ。昨日まで、確かに彼女はここに住んでたんだぜ。夜逃げにしたつて、手際がよすぎねえか」

と、アマリリスを相手にぼやいても仕方がない。急に息苦しさを覚えて、カーテンを半分開き、窓を開けた。鍵をかけなくとも内側からしか開かないのは、おれの部屋と同じ仕組みだ。煙草の灰を落とすついでに、窓枠に肘をかけ、外を眺めた。郊外では、この雇用促進住宅が群を抜いて背が高く、じちやじちやと建てこんでいる灰色の街並を見下ろす恰好。

首長連合にせよ人類刷新会議にせよ、一言目には復興、復興と口にするが、その言葉は、いわば神様のいない教会の鐘のようなもの。むなしく響くだけだ。内戦状態は果てしなく続き、IBやワームが駆逐されることはない。闇商人やモグリのなんでも屋がいなければ、ヒトの暮らしは成り立たない。

むしろ「復興」など、されないほうがよいのではないかと、よく考える。長期にわたる悲惨な戦争の果てに、イミテーションボディを生み出したのは何だったのか。悪夢のような経済力と技術力の産物ではないのか。欲望が生み出したシステムの暴走……そんなものを再構築することを「復興」と呼ぶのなら、おれは願い下げである。空はどんどんようと曇っていた。市街地のほうは、さらに濃いスマッグが降りて、灰色にかすんで見えた。丘の上のビル群は、ヨーロッパの古城のように見えなくもない。ほんの半年前までは、首長が統括する企業のオフィスが占めていたガラスの塔も、今は刷新会議に接收されて、行政府と化していた。無人の監視用ヘリが何機も、まわりを飛んでいた。

「一二、BB-33地区に、最高府を置く計画もあると聞く。おれは軽く舌打ちして、最後の煙草を投げ捨てた。

本日二度めのチャイムが鳴ったのは、十一時一分前。兄弟で来る

のかと思えば、一朗が二葉を連れてあらわれた。そのうえ人が住め  
そうなほど巨大な段ボールを台車にのせて、無骨なチャペックに引  
かせていた。帽子の唾に手をかけて、一朗が言つ。

「いろいろ入用かと思いまして」

「ありがたいね。段ボールの中身は全部、煙草なんだろ?」

たちまち一葉の蹴りが炸裂した。つまらないジョークへの突つ込  
みとしては、ひどすぎる仕打ちである。代わりに優しい兄が、黙つ  
て一箱わたしてくれた。

「きみ、学校は?」

「創立記念日よ」

おれを一睨みして席を立ち、一葉はアマリリスの世話を焼き始め  
た。今日は眼鏡をかけておらず、ミリタリージャケットをざっくり  
と着て、ジーンズを穿いていた。髪はうしろで一つに束ねてある。  
「似合つてるじゃない。このまま新東亜ホテルで働けそう。窮屈な  
ことない?」

はい、と答えて、少女は例のスカートをつまむ仕ぐせ。

「やつぱりな。きみがアルバイトで着ていたやつか」

「少し寸法は詰めたけどね。それにしても、ここで美味しいお茶が  
飲めるなんて、思つてもみなかつたわ」

「ああ、そのことなんだが。なぜこの子に、いきなり紅茶を淹れるスキルがそなわっているのか、単純に疑問だ」

一葉はアマリリスの服の点検を終えると、立つたままソーサーごとカップを持ち上げた。皿そこに一口飲んで、いかにも呆れ果てた口調で言つ。

「それを言つなら、会話が成り立つている時点で、疑問を感じるべきじゃない」

「ま、まあ。たしかにな……」

おれは内心、絶句していた。なるほど、たいていのチャペックには、人工知能が埋めこまれている。簡単な会話なら、たしかに成立。けれどそれはあらかじめ記憶された、膨大なパターンを読みこんでいるだけであつて、天気を聞けば晴れだと答えるが、雨の日に「いい天気だ」などと会話をふると、たちまち相手は混乱する。ところが、

「なあ、アマリリス、今日はどんな天気だ？」

「スマッグの影響で、だいぶ曇つているようです。午後からは小雨が予想されます」

「そうか。じつにいい天気だな」

「もしあお望みでしたら、午後には濃いめのダージリンをお淹れします。雨の音を聞きながら、お召し上がりください」

と、じつに機転が利く。では、さらに難題をふつかけてみよう。

「なあ、もし、コウモリ傘とミシンが解剖台の上でフォックストロットを踊つていたら、おまえはどう思つ?」

「とつても、シユールです」

じつに面白い。パターンを読みとるだけの人工知能には、とても真似できない芸当である。カップを置いて、一葉が言つ。

「ある程度、こちらで設定できるのよ。CNOC溶液を通じたパルス

のやりとりでね。彼女の場合、こわば、あなたのお手伝いさんとして最適化してあるの。本当はこいつの、悪用されたらこまるから、慎重に人を選ばなくちゃいけないんだけ……」

「おれにロリー・タ趣味はない」

「や。大日本おっぱい党员の食指は動かないと判断して、エイジさんの命令は基本的に何も拒まないよう、設定されているわ」

何も拒まない、ことはないだろ。武装警官が乱入したときも、彼女はをかれらに茶を出さなかつた。いやそれ以前に、命令を出すより先に、飛びかかるうとさえした。首をひねつておれを、一

朗が目ざとくフォローした。

「あくまで基本的には、ですね。彼女は鉄の塊ではなく、生きた細胞の集合体ですから。細胞のひとつひとつが、独自の思考を持つているわけです。もちろん、博士の受け売りですがね」

頭脳万能主義を真っ向から否定する、相崎博士らしい理屈である。例えばチャペック、いやロボットの設計においても、電子頭脳だけ発達させたものは、木偶のぼうでしかない。末端の回路が、頭脳と同等のはたらきをしなければ意味がない。ちょいちょい、脳から採取しても皮膚から採取しても、細胞が基本的に同じ作りであるよ。クララトウストラ教ではないが、この考えを突き詰めれば、細胞をもち、遺伝子をもち、自己増殖するエビこそが、最も理想的な機械生命体ということになる。人類への憎悪を、生きる糧としていなければ……

「しかし、よく博士がこの子を手放す気になつたな。永久機関……博士流にいえば、タオエンジンか。その生きた標本みたいなものだろに」

「手放してはないでしょ。博士としては、あなたに託すのも実験の一環なんだから。なんでもフルに使ってみないと、性能はわからないものね。そのかわり、彼女は定期的に博士の実験室でメンテナンスされるわ……ほら、そんな渋い顔しない。むやみに電流を流したりして、苛めるわけじゃないんだし」

十万ボルトの電気風呂に入れても、涼しい顔をしているのではないか。おれはため息混じりに、入り口のほうをかえりみた。どうやつて運びこんだのか不思議なほど、巨大な段ボールが据えてあり、かたわらに、油圧チューブや計器類が剥き出しの、作業用チャペックがひかえていた。

「大荷物の中身は何だ？」

「花嫁道具、といったところかしら。ダイニングの奥に、もうひとつ小部屋があつたわよね。あそこをアマリリストちゃん用に使わせてもらつわ」

「もらつわ、つて。問答無用なのか」

問答無用なの。そう言つて二葉は片手を閉じた。ジャケットのポケットからコントローラーを取り出し、音声とボタンを使って、作業用チャペックに荷解きをするよう、指示を与えた。小部屋は確かに使つていなかつた。というより、前にいつ覗いたのか覚えていなといという、いわゆる「開かずの間」と化していた。

大段ボールの中には、さらに幾つかの段ボールに分けられて荷物が入つているようだ。大きさといい形といい、最も大きな箱がベッドだと思っていると、大昔の空想科学小説に出てくる宇宙船のよくな、金色に輝くハマキ型の物体があらわれた。

「カプセルじゃないか。研究室から持ち出してよかつたのか」「レプリカなんですよ。博士お手製の。彼女を休息させるには、この溶液がベストですからね」

一朗がそう説明する間にも、荷解された段ボールから、いくつものポリタンクが出てきた。ほかにも、カプセルの周りに置くのであろう、機械類が次々とあらわれた。

開かずの間を開くときは、さすがに緊張した。何かを収納した記憶があるのだが、それが何だったのか思い出せない。生ハミでも放置していようものなら、ワームが湧いている可能性がある。けれど、いざ開けてみると、蠢くものはなく、ただ軍用らしい一体のチャペックが、直立不動の姿勢を保っていた。一葉が目をまるくした。

「なに、これ？」

「処理班時代の相棒だよ……」

おれはぼんやりとつぶやいた。あらゆる装甲が傷つき、歪み、穴だらけになつていた。頭部のセンサーは打ち碎かれ、両脚とも膝から下が吹き飛ばされていた。それでも両手に装填された機関銃を構え、向かってくる敵への闘志を漲らせているようだ。一度と動かない体で……こいつがいたことを忘れていたなんて、おれは呆れた薄情者だ。

どうするのよ、これ。と、眉をひそめた一葉の前に、目をきらきらさせながら、一朗がしゃしゃり出た。

「エイジさん！ これはもしかして山田式ポッド三型、通称『山ボッド』ではありますか！」

「ああ、よく知ってるな。見てのとおり、今はスクラップ同然だがね」

「譲つてください。是非に、何としても。なんでしたら、言い値で買い取らせていただきます！」

「ちょっと兄さん、何言つてゐるよ。こんなガラクタ……」

「ガラクタとは何事か！ 山ポッドといえど、たつた四機の試作機しか作られなかつたレアモノ。それでいて名機の誉れ高い。計器の一つでも手に入れば、マニアは涎を垂らして氣絶するほどなのに……」

「こんなところに、これほど完全な形で一機眠つていたとは」

一朗の目は輝きを増す一方。対して一二葉は、ますます顔を曇らせて、「変態だわ」とつぶやいた。おれは震えて一朗の肩を叩いた。

「持つてていいよ。金なんかいらない。捨てるに捨てられず、処置にこまつていたぐらこせ。きみに引き取られるのなら、こいつだって本望だつ」

涙を流して踊り狂う一朗を尻目に、一二葉はてきぱきと支持を飛ばした。山ポッドが運び出されると、あとはこの部屋には何もない。今さらながら、おれはあいつを、ここに葬つたつもりでいたのだな、と考えた。山ポッドを開かずの間に、妻の思い出を胸の中に封印したまま、その日暮らしの生活を、ただぼんやりと送ってきた。

アマリリストが甲斐甲斐しく掃除機をかけ、雑巾がけをすると、たちまちピカピカになつた。古いカーテンが外され、一二葉の選択らしい、木馬の柄がプリントされたカーテンがかけられた。そこへ作業用チャペックが、次々と機械類を運びこむ。カプセルが据えられ、周辺機が接続されると、じっこ溶液がポリタンクから注がれた。

独特な、木の香をおもわせるにおいが広がる。

部屋はすっかり、博士の実験室と変わらぬ様相を呈したが、衣装箪笥や本棚、書き物机に椅子くらひは、なんとか置けたようだ。本棚はまだ空つぽだが、段ボールのひとつに、若干の衣類が入つており、二葉が一枚ずつ広げては、アマリリストの前にかざしている。

「今日は午後からでないと、マーケットが開かなくてさ。古着屋の親爺を叩き起こして、急遽、調達してきたんだけど。うーん、これもなんか地味よねえ」

「このような服はもうございませんか？」

「えつ。新東亜ホテルのメイド用の？」

「はい。これでしたら、とても動きやすいですし、マスターのお役にたてます。それに……」

少女は言葉に詰まり、Hプロンをぎゅっと握りしめて、うつむいた。ここにしか、頬を染めているように見えた。なんということだ。この機械生命体には、恥じらいといつ感情まであるのか。それになんという可愛さだらう。Hプロンを握る小さな手のひとつは、その氣があれば、三十分でこの地区を壊滅させられるというのに。

「気に入ったのね。たしかに、あのセンスゼロの親爺が見つくれった服なんかより、百倍可愛いからなあ。じゃあ帰ったら至急調達して、バイク便の兄さんにでも持たせてあげる」

搬入が終わると、おれたちはまた居間に戻った。もう十一時を回つており、外では雨が降り始めたらしく、ぱらぱらと窓を打つ音が聞こえた。

「アマリリスちゃん、申し訳ないんだけど、簡単に構わないから、昼食を作つてもらえる？ 材料は買つてあるわ」

初めからここで食うつもりだったらしい。アマリリスが台所へ入ると、間もなくいい香りが漂い始めた。あの台所が料理に使われるのは、何週間ぶりだつたか。そもそも、ナナコ七式は自分の体内に材料を取り込んで調理していたので、包丁やフライパンが使われるること自体、かつてなかつた。

一葉はソファの上で軽く腕を組み、意味ありげな視線を向けた。おれは、いやな予感がした。

「お隣のグラマーさんは、お元気？」

ポーカーフェイスは、あまり得意ではない。だいたいほとんび、顔に出る。単純ばかりだから仕方がない。もとよりカンの鋭い二葉のこと、おれの動搖を見逃すわけがなかつた。

「何があつたわね」

しかし考へてみれば、隠す理由も存在しない。むしろ、おれ一人の頭では処理できずにいたのだから。訊かれなくても、こちらから話していたかも知れないのだ。

たいして長い話でもなかつた。

いきなり刷新の武装警官があらわれ、レイチエルのことを訊いた。隣室はすでに藻抜けの殻だつた。武装警官たちが、なぜレイチエルを探していたのか。そしてまた、なぜ彼女が忽然と消えたのか、それはさつぱりわからない。

話し終える頃に、ちよつビアマリリストを運んできた。少女が補助的に食物を必要とすることを聞いていたので、自分のぶんも用意するよう言つてある。メニューはパンにオムレツにサラダ。シンプルな料理ほど腕前が問われるものだが、山ボッドの一件で舞い上がつている一朗が「皿」と感動した時点で、保証されたといえるだろう。

四畳とも、それぞれの理由で腹を空かせていたらしく、昼食は黙々と、速やかに進行した。食後にアマリリストが用意したのは、いかにも濃く淹れたコーヒーだつた。

「これまで、レイチエルさんの部屋に入つたことは?」

香りを楽しむのか、カップを手にしたまま、二葉が尋ねた。多少、猫舌であるひじぐ、そういうえば、田つきや仕ぐてもビニンが猫をおもわせる。

「あるわけがない。ドアがちょっと開けていたくらいこじり、簡単に部屋の中が覗けないのは、二じこと同じだ」

「じゃあ、もとから部屋の中が、あんなふうだつた可能性もある、  
と」

ゾツとしないアイデアだ。

が、たしかにベッドだけはあつたのだから、外で食事を済ませるなりすれば、あんな寒々とした部屋でも、住めないことはない。衣類を詰めた手荷物ひとつで、いつでもドロンできるだひ。レイチエルは、いつか手入れがあることを予期しながら、隣に隠れ住んでいたといつわけか。だが、しかし、

「わざわざ、おれの隣に部屋を借りた理由がわからなー。空き部屋なら腐るほどあるんだし、おれ自身、この階のどじにじんなやつが住んでいるか、それさえ全く把握していない。つまりこの雇用促進住宅なら、他の住人に気づかれず隠れ住むことは、そう難しくはないことだ。なのに彼女は、部屋に虫がいるよう怖いと言つた。今度調べてくれと言つたんだぜ」

「ついでに、おっぱいも調べるつもりだつた?」

「そりゃまあ少しさ……いや、だから、おかしいだろ? 最初からドロンするつもりなら、部屋に虫がいようがミノタウロスが出ようが、怯える必要はない」

「演技だったと考えるのが妥当じゃない? ゆうべ彼女がエイジさんに抱きついて、サミダレムシに追いかけられたと言つたときも、演技くさかったんでしょう」

「何者かに追われていたのは事実だよ。ただ、それは虫じゃないと感じただけだ。どうしてもおれには、彼女がおれと関係を持ちたがつていたように思えるんだよ」

「助平」

「いや変な意味じゃないぞ。おれの助けを必要としていたのは、嘘じゃない気がする」

「ほんと、男つてみんな、うぬぼれ屋なんだか!」  
冷徹に言ひ放つて、コーヒーを口へ運んだ。いつも思つたが、本当にブランザースよりハつも年下なのだろうか。ものすくく頭が切

れるし、落ち着いている。まあ、おっぱいはアマリリスといい勝負だと踏んでいるが。そして竹本ワットといつ、一葉に輪をかけて早熟な小僧を知っているのだが。

とはいって、次の二葉のセリフには、たちまち脳髄を吹き飛ばされた。

「監視カメラを仕掛けはどうかしら」

「どこに？」

「決まってるじゃない。隣の部屋よ。まだベッドが残っていたんだから、レイチエルさんが戻ってくるかもしれないってことでしょう。もしかしたら、運よくたまたまいなかつただけで、武装警官が踏みこんだことさえ知らない可能性も、ないわけじゃない。ちょっと力ゼ気味でとか言つてさ、何食わぬ顔で訪ねてくるかもよ」

おれが絶句している間にも、一葉は一朗にトラックから機材を運んでくるよう指示している。兄の威厳のカケラもない動作で、一朗は階下へ走り、油で汚れた段ボールごと、機材をかかえて戻ってきた。そもそも、なんでトラックに監視カメラを一式積んでいるのか、理解に苦しむ。

アマリリスは鼻歌まじりに食器を洗つていた。よく聞けば、ワーグナーの『タンホイザー』序曲であつた。おれは思考停止状態のまま、かれらについて部屋を出、再び隣室に侵入した。もちろん誰もおらず、ひととおり点検した一葉の驚くべき発言を、どこか遠くのできごとのように聞いていた。

「カメラは寝室と浴室に仕掛けるわ」

「なんだつて？」

「居間に仕掛けたつて意味がないもの。覚えておいてね、エイジさん。女が隠れて何かするときは、必ず浴室を使つものよ」

ドアの開く音を聞いた気がして、うたた寝のうたた寝から覚めた。書きもの机に突つ伏して、おれは眠っていたようだ。部屋の中は薄暗い。カーテンは開いたまま。窓には、この世のものとは思えない夕焼けが映っていた。夢の中の情景を、四角く切りとつたように。さっきの音を最後に、辺りは静まり返っていた。耳を済ませたが、ことりとも音がしない。かすかな人の気配だけが、残像めいて漂っているばかり。ではあのドアの音は、誰かが出て行く音だったのか。肘が何かに触れて、蒼い光がぱっとともった。旧式のノート型コンピュータのモニターだと知れた。このタイプは相崎博士のお気に入りで、四角い奇形の二枚貝のように、研究所の至る所で口を開けていた。これは今日の昼間、八幡兄妹が置いていったものだ。

ディスプレイには、「Bed Room」および「Bath Room」の文字が左右に並んでいた。右側が、アクティブの状態にあるようだ。

おれは眉をひそめつつ、無意識に耳を澄ました。ときどきカリカリと、コンピュータの内臓ディスクが空咳するばかりで、やはりほかに音はない。もう一度窓のほうを振り向いた。ついさっきと比べても、いつそう紫がかつた空を、サーチライトの筋が手をぐりしながら横ぎつた。

アマリリスは買い物に出たのか。それとも自室に下がったのか。そもそもおれは、いつ頃から居眠りしていたのか……一向に冴えない意識の中で、「Bath Room」の文字だけが、夕空に血を混ぜたような色で、くつきりと浮かんでいた。

どうもなかなか意識がはつきりしない。ひょっとすると、まだ夢を見ているのかもしない。夢を見ながら、これは夢じゃないかと

疑っている状態。もしさうなら、しめたものだ。夢の中なら、何をしても罪に問われない。例え罪に問われても、目覚めてしまえばチャラになる。両手で札束をつかんでも、やっぱりチャラになるようにな。

ネズミとかいう、有線の入力装置に手を伸ばした。カーソルが動いて「B a t h R o o m」の上に止まる。文字が血の色に染め上げられた。押せ、と主張しているように見えた。

(夢の中なら、何をしても罪に問われない)

クリックする指が震えた。眩暈のように、画面がぐらりと揺れたかと思うと、背後に強烈な人の気配を感じた。部屋を漂っていた無数の、影のように薄い気配が、急に凝り固まり、一個の人間を捏ね上げたかのように。血の色をした夕焼けを背中から浴びて、そこにはレイチエルが立っていた。

彼女は何も身につけていなかった。

雨に降られたのか、長い髪が海藻のように張りついていた。血の色をした逆光が、華奢でありながら、圧倒的に肉感的なシルエットを描きだしていた。暗い影の中で、肌がしつとりと潤っているのがわかるのだ。黒曜石のように、濡れた眼差しが、じつとおれの視線に重ねられた。

(レイチエル、きみは……)

自分でも、何を言おうとしたのかわからない。いきなりけたたましく鳴り始めた電話のベルが、おれの声を搔き消し、同時に彼女の幻影もまた消失した。うたた寝から覚めたおれは、見事に椅子から転げ落ちた。

「痛え……っ！」

机に這い上がり、重い受話器を持ち上げた。聖歌隊じみたボーカソプラノ。聞き慣れた、いや聞き飽きたワットの声が、こうこうと笑っていた。

「どうせ寝ぼけたまま電話をとろうとして、つまづいて転んだとか、そんなところでしょう。よからぬ夢でも見ていましたか？」

「余計なお世話だ。」とさら、あんたみたいな子供には言われたくない

「子供の忠告も聞けないようでは、大物になれないよ。神様はときどき、少年少女の姿を借りてお出ましになる」

と、少年のくせに抹香くさいことを言つ。おれが苛立つていたのは言つまでもなく、こいつのせいでの夢を破られたからだ。おれの雇い主で竹本商事の十一歳の社長、竹本ワットは澄んだ声で続けた。

「社に連絡を頂ける時間は、とっくに過ぎますが」

「あいにく、夢の中で電話をかける特技は持ち合わせてないんでね。そもそもここ二十日以上も、せつせと電話をかけ続けたというのに、一回だつて仕事があつたか？　いい加減うんざりするのが、人情つてもんだろう」

偉そうに言い放つたものの、本当に一日も電話を欠かさなかつたか、じつは心もとない。逆に言えば、ワットのほうからかけてきたことが、内々おれを驚かせていた。窓のほうをかえりみると、血のよくな夕焼けが映つっていた。夢の中の光景とあまりにも似ていたので、思わず辺りへ視線をさまよわせた。

むろん、レイチヨルの姿はどこにもなかつた。ただ、百合の花のよくな残り香が、うつすらと漂つているばかりで。

「エイジさん、起きてますか？」

「おかげさまですな」

「もう一度言いますよ。明日、いつでも構いませんので、我が社に寄つてもらいたいんですが」

時々ワットは「我が社」という古風な言い回しをする。いや、そんなことよりも、我が社に寄せ、ということは、むろん仕事の話以外考えられない。

短い冬の間は、ワームの活動もさすがに鈍くなる。おれたち害虫屋にとつては、いわばシーズオフとなるうえ、例の政権交代の影響でこの有様。これはもう、次の夏季まで仕事はお預けか、と、ならば覚悟していた矢先、唐突にお呼びがかかったのだから、驚きもある。

(間違いなく大モノだな……)

小口の仕事なら、電話口で済ませられるだろう。だいたいそんな軽い依頼が、元処理班に回つてくるわけがない。しかもこの季節、刷新の圧力を突破して舞い込んだのだから……受話器を持つ手が汗ばむのがわかつた。ＩＢとお見合いするよりは千五百倍ましだが、緊張するなどいうほうが無理だ。怖気づかないよう、おれはわざと話題を変えた。

「つかぬことを訊くが、刷新の愉快なガスマスク部隊がそっちに行かななかつたか？」

「身に覚えがありませんね。武装警官にでも踏みこまれたのですか」「お目当てはおれじゃなかつたけどな。ガスマスクなだけに、いろいろと嗅ぎつけていたよ。そっちの端末、ガス洩れは大丈夫か」

「我が社では、従業員の個人情報はクローズドサークルシステムで管理しております」

「いかにも問題やら殺人やらが起きそうなシステムだな。ともかく、

明日は寄らせてもらひ。こかにもヤバそつなおいがするけどな。

背に腹は変えられん」

一名余分に養わなくちゃいけなくなつたし。そう考えながら苦笑してみると、いきなりやつは天井まで飛び上がりそうになることを言つた。

「そうそう、忘れるところでした。明日はエイジさんの新しい家事用チャペックと、『同行願います』

問い合わせす前に電話はきていた。

かけ直そうと思い、電話機のフックを叩いたところで、思い直した。都合の悪い電話に、やつは出ないし、出てもはぐらかされるだけだ。三十にもなろうという男が、十一歳の渋たれに翻弄される姿は情けないが、ワットは特別、といつより異常だ。ガキの皮をかぶつた怪物だ。

やつがどこまでアマリリストの実情を把握しているのか、わからぬ。ゆうべの電話で、チャペックの買い替えを勧めたことからして、八幡兄弟か、あるいは博士あたりとグルだったのかもしれない。竹本商事は、八幡商店の立派な取引先であり、またどうやらワットは変態博士と個人的な付き合いがある様子だから。どこのから情報が洩れても、不思議はないのだ。

部屋はほとんど闇に包まれ、相変わらず静まり返つっていた。煙草を探ると、肘が何かに触れて、蒼い光が間近でともつた。机の上のノート型コンピュータは、夢の中同様、二つの「R.O.O.T」のうち一つを選択せよと、無言の催促を続けてくる。あんな夢を見るなんて、一葉に何を言われても文句は言えまい。

(案外、ものすごく女に飢えているのがもな)

レイチエルの裸体が思い返された。手を伸ばせば触れられそうだったし、触れたとたん彼女の肌は、指の間でぐにゃりと押しつぶされそうだった。なによりも、薄闇の中に浮かぶ目の輝きが、生々しく脳裏に焼きついていた。現実に、彼女がそこに立つていたとしか思えないほどに。

煙草に火をつけて、深々と煙を吸つた。氣のない素振りにシンシンな興味を隠しつつ、ネズミを動かし、クリックした。たちまち画面が黒く塗りつぶされ、時折走る走査線のほかに、何も見えなくなつた。おれは煙と一緒に苦笑を洩らした。寝室のほうを選択すると、窓から射す外光がわずかに映る程度で、一いちらも画面の大半を闇が占領していた。

「マスター。もう起きていらっしゃいますか。ご夕食は、いかがなさいますか」

あたふたと、コンピュータの電源を落とした。寝起きなので、たいて腹も減つていながら、かといってすることもない。

「電気をつけていいよ。これから作るのかい？」

「温めるだけですので、十五分以内にご用意できます。メニューはシーフードドリアと玄米のスープ。それとマカロニサラダです」「シーフード、ね……。いたくとしようか」

かつては生命の故郷といわれた海も、現在は突然変異体のルツボだ。両極をのぞく、ほぼ全域が汚染地帯に指定されていた。

海底油田から大量の原油が流出し、その他の汚染物質と混ざり合ひ、さらに水棲のイミテーションボディが入り込んで、生命体の遺伝子はめちゃくちゃに焼き乱され……要するに、何が棲んでいるのかわからない状態。のんびり釣糸でも垂らそうものなら、オルドビス紀に絶滅したような化け物が、うじやうじや釣れるだろう。

むろん食卓にのぼるのは、戦前に保存された遺伝子を「解凍」した魚介類だ。アマリリスはエビや貝を上手にキノコと組み合わせ、見た目も奇麗なソースをたっぷりと用了。曲がりなりにも、ここにおいておれは、念願のキノコ料理にありつけたわけだ。

もしもその道を突つ切つて行けたら、イシカワの遅刻は少なくとも半減していただろう。

この道が通れないばかりに、まるごと一区画ぶん、回りこまなければいけないのだから、同じ走るにしても、五分は差がつく。この五分差が瀬戸際となる。

校門には必ず風紀の鬼久保が待ち構えていた。軍用チャペックに人の皮をかぶせたような恐るべき体躯。それでいて護身体育の教師ではなく、旧文学を教えているのだから、恋歌を詠んでも脅迫状にしか聞こえない。手製の短い竹刀を常備しており、遅刻者には容赦なく尻に一撃食らわせた。

今やイシカワは、鬼久保に完全に目をつけられていた。不良っぽい外見のせいだと、自分でもわかつっていた。詰襟の学生服のボタンを外して、赤いセーターを覗かせ、裾からはわざとシャツを食み出させたうえ、ズボンの裾は常に地を引きする恰好。サイドだけ髪を後ろに撫でつけた姿は、額縁に入れて不良博物館に展示できそうである。

親からも教師からも眉をひそめられたが、イシカワ自身、自分を不良だとは考えていない。ちょっと個性的なだけで、本当はものすごくいいやつなのだと独り、悦に入っている。

「今日はもう来ないんじゃないかな」

四本めの煙草に火をつけたところで、立てたキックボードにもたれて、タミーが言つた。吉田民雄は眼鏡をかけて背が低く、いかにも氣弱そうな優等生タイプ。毎朝、イシカワの「儀式」に付き合つているのは、脅迫されているからだと、ほとんどの教師が信じていた。

「それにここで煙草を吸うのも、まずいんじゃない」

「刷新か？ やつらは腰抜けさ。何回もお巡りに見つかってるが、

すぐに消せば文句一つ言つてこない」

「でも、しつかりファイリングされてると思うつた。変な煙でも出そうものなら、たちまちソフトボールが三、四個飛んでくるんじゃない」

ソフトボールとは、最近よく見かけるようになった人類刷新会議の超小型無人偵察機である。探知機能のほかに、小型拳銃程度の火力も備えている。見かけによらず汎用性が高く、ふだんは路上を転げ回りながら情報を収集し、不審者に対しても銃身をあらわして、威嚇することもできる。噂によると、現行犯で射殺された者もいると聞く。

鼻で嘲おうとして、イシカワは囁らズモ、ぞくりと肩をすくめた。煙草はいつも、路上に立っているイースラック人から買っている。完璧にガラのよくない日本語をあやつり、「ばかばつか」が口癖だが、商売はわりと良心的。ところが最近、売り物の質があやしくなってきており、一口吸つたとたん、ひどく噎せて、揉み消してしまったことがよくあった。

どうもそのへんの雑草を乾かしたものに、違法な薬物を混ぜて、煙草と称したものが紛れ込んでいるらしい。タミーに怖気づいたと悟られぬよう、かれはさりげなく煙草を捨てた。

「おどといは、來たぜ」

タミーも一緒に走ったのだから、言つまでもないのだが、あえて口に出すことと、ミントガムのような幸福感を噛みしめた。ついでに尻ポケットから合成革のカードケースを取り出し、宝の地図でも広げるよう開いた。なけなしの金をはたいて、情報屋に隠し撮りしてもらつた一枚の写真が、そこにはさまっていた。

女学生のバストアップ。下校中をズームで狙つたのか、手前に写りこんだ友達の肩の向こうで、顔もこころなしか、うつむき加減だ。清楚なセーラー服。お下げ髪に眼鏡という、いかにも地味な組み合

わせの下に、華やかな素顔が垣間見られた。間違いなく美人だ、とかれは目を細める。おっぱいは小さいが、それもまたよし。

彼女の名は八幡一葉。区立第三女子高校の二年生だ。

自宅は13市街の古物商であるらしい。両親の所在は不明。年の離れた二人の兄があり、商売は兄たちが切り回している。学校の成績は良好だが、病弱らしく欠席が多い。男女交際の痕跡は認められず……情報屋の報告を鵜呑みにすれば、そういうことになる。おおむね正しいのかもしねないが、病弱、の一文字だけは何としても納得がいかない。

病弱な娘が、あんな殺人的な速度で走れるものか。たしかに彼女は改造ローラーシューズを履いているが、それでも中学時代、四百メートルで地区大の準優勝経験をもつイシカワと互角か、ともすればぶつちぎる娘が、病弱なわけがない。

区立第三女子と、鬼久保が待ち受ける第九男子高校とは、通りをはさんでほぼ向かい合っていた。ただし道の上には陸橋が立ちふさがり、しっかりと目隠しの役目を果たしていたが。イシカワが韋駄天のごとき三女生の存在に気づいたのは、一月ほど前。イースラック人が立つ場所を変えたため、やむなくいつもの通学路を少し迂回した時だった。

(ごめん、遅刻しそうなの。そこどいて!)

ライターがなかなかつかず、歩道の真ん中に突っ立つて、力ちからやつていた。彼女はたしかそう叫んだようだが、食パンをくわえていたため、うまく聞き取れなかつた。かれの口から煙草がぼろりとこぼれ、目は驚愕に見開かれた。瞬く間に、いや瞬く間もなく、改造ローラーシューズを履いた彼女は、イシカワの面前に突っ込んできた。

「うわああああ！」

反射的に、かれはうずくまつた。それを予期していたような絶妙なタイミングで、セーラー服が宙を舞つた。朝の陽光が一瞬の影を描き、頭をかかえたまま見上げたかれは、すんなりと伸びた脚と、

純白のパンティーをたしかに見た。

次の日から、彼女と走るのがイシカワの日課になつた。彼女はべつに迷惑がる様子もなく、かれが伴走するのを黙認した。三度めからは、挨拶もしてくれた。

(おはよう)

(おれ、いつ、イシカワ。だつ、だつ、第九の一年)

(そなんんだ。急がないと遅れちゃうよ、お隣さん)

なにしろ全力疾走しているため、茶を飲みながら話すのとはわけがちがう。女の子は息ひとつ切らしていないが、こつちがちょっと気を抜けば、たちまち引き離されてしまう。けつきよく二葉のプロフィールを知るためには、情報屋に頼るしかなかつた。

もちろん下校時刻も狙つたが、なぜか一向につかまらない。陸橋を越えて待ち伏せていると、必ず三女の教師から追い払われるし、この場所にも再び、暗くなるまで立っていたが、帰りは違う道を通りののか、一度も逢えずじまい。だいいち、彼女が毎朝必ず、この場所を駆け抜けるとは限らず、一日に一度逢えればラッキーなほうだ。「だからさあ、手紙をわたすとか、いろいろ方法はあるわけじゃない。家だつてつきとめてるんだろ?」

タミーが言うのも、もつともだ。ちなみにタミーが付き合つようになったのは、家がこの近くで、同じクラスのイシカワを見かけ、やあ、何やつてるの? と、声をかけたのがきっかけ。イシカワとしても、待つて居る間は退屈なので事情を話すと、タミーはさつそくキックボードを取つてきた。

かれは考える。柄にもない手紙はともかく、偶然をよそおつて家を訪ねることは可能だ。さいわい一葉の家は、八幡商店とかいう古物商なのだから、オーディオの部品でも探しに、男子高校生がふらりと訪れても、まったく不自然ではない。ただし進展にはリスクがつきものであり、決定的な破局に対する漠然とした不安が、かれの

足を鈍らせた。

せめてもうしばらぐの間、この奇妙な朝の逢瀬を楽しみたい気がした。

「そろそろやばいな。タミーは先に行つていよいまだ待つのかい？」

イシカワはどこか痛むように口の端を歪め、煙草を抜き出そうとして、また引っ込めた。

今朝は親とひと悶着あり、虫の居所がよくなかった。小遣いの前借りがかさんでいることから始まり、成績だ服装だ煙草だと、お定まりの説教が続いた。多少の個性は認めるよ。おれはこんなにもいいヤツじやないか。そう思うのだが、力ネの弱みを握られている以上、おとなしく拝聴するしかない。親に楯つくのは不良のすることだから。

だから今朝はいつにも増して、八幡二葉に逢いたかつた。大好きな彼女と全力で走つて、スカッとしたかつた。

「タイムリミットだな……」

腕時計を眺め、泣きそうな声でイシカワがつぶやいた。タミーは所在なさげにキックボードを弄びながら、いつも暴走女子が突進していく方を眺めた。ほとんどシャッターで覆われた殺風景なビル群。錆びの浮いた鉄板の歩道。スクランップと判別し難い、違法駐車の車たち。周りにかれら以外の人影はなく、仔猫一匹歩いてこない。

いい加減、自分たちも走らないと間に合わないが、イシカワはふとくされたように、ポケットに手を入れたまま。二葉抜きで走るとなると、まるで鬼久保が怖くてそうするようで、とても癪にさわる。ふいと振り返ると、ぴつたりと閉ざされた鉄の扉が、威圧的に立ちふさがっていた。

豪邸の門扉をおもわせる鉄格子には、枯れたツタが絡みつき、鬱蒼と茂る常緑樹に埋もれかけて、石畳の小道が向こうへ続いていた。番線でくくりつけられた注意書きを見て、イシカワは眉をひそめた。「私道につき通行できません、だとよ。通行できない道なんか、道

じゃねえよ。なあ、タニー

「近道でもするつもり？」

「いつもこいつが癪にさわってたんだよ。私道つて、何様のつもりだよ。ケチケチしやがって」

もう間に合わないとあきらめたのか、タニーは私道を封鎖する扉に背中でもたれ、腕組みをしたまま、つぶやいた。

「こじが本当にやばいって噂、聞いたことない？」

いつになく沈痛な声だったので、イシカワは驚いた目を向けた。鉄格子の向こうで、常緑樹の梢が、不穏な揺れかたをした。かん高い声で鳴きながら、黒い鳥が飛んだ。

「何だよ。侵入したとたん、刷新が飛んできて、パクられるとでもいうのか」

「その逆だよ。この土地は、旧首長連合系の財力が絡んでいるらしいね。刷新会議といえども容易に接收できずにはいる、大げさに言うと海外法権地帯さ。そして近所の噂では、私道に入ったきり、一度と出て来ない者があとを絶たないらしい」

「一度と、出て来ない？」

「消えてしまうんだよ。今のイシカワくんと同じように、近道をしようと思つて入りこんだきり、ね」

イシカワの背筋を、冷たい稻妻が貫いた。日頃は気弱そうなタミーの姿が、私道を守護する小さな怪物のように見えた。

ビルの壁面の間を、鉄格子の扉は、いかにも唐突な感じで塞いでいる。注意書きがなければ、誰もが個人宅の門扉だと思うだろう。道に敷かれた石畳は蒼みがかり、広さは大人一人が肩を並べられる程度。わずかな上り勾配で、左にゆるやかにカーブしながら、常緑樹のトンネルに隠れて先は見えない。

いつたいどこに出るのか。道である以上、必ず出口がある筈だが、その地点を明確に指示せる者は、極めて少ないだろう。イシカワもずいぶん探した。区画をぐるりと回りこんで、ようやく「ここだと見当をつけたのが、廃材で組まれた鳥居の奥。鉄板を溶接した、あやしげな祠が、いかにも不自然に行く手を阻んでいた。

祠の上には、常緑樹の梢が覆いかぶさっていたから、まず間違いない。こちら側みたいに、立派な扉があるわけではないのだ。そうして思つたとおり、三女と第九は目と鼻の先である。

「どうということだよ。道を通つたくらいで、人がそう簡単に消えちまうのか」

声がかされたのは、口の中がからからに乾いていたからだ。タミーの口ぶりだと、まるで人間がドロンと消えてしまうように聞こえる。俗に行方不明になることを「蒸発」というが、文字どおり、煙と化してしまうようではないか。おぞましいイメージを振り払うよう、かれは首を振つた。

「あり得ねえだろう。たとえばアブナイ無法者がたむろしていて、通りかかったやつの金品を奪うついでに、殺して木の根元に埋めちまうとか。それならわかるが」

「どうかな。噂によると無法者とは程遠い、女の子が立つていろらしいね」

「女の子？」

我ながらばかみたいに口をあんぐりと開けた。ぽつりと、私道にたたずむ八幡一葉の姿が、脳裏に浮かんだ。

「うん。十歳くらいの子で、服装はその時々で異なるけれど、必ず赤い靴を履いている。夜中や、薄暗い雨の日なんか、その子が私道にじっと立っているんだけど。よく見ると、全身がぼうっと光っているんだって」

「ばかばかしい。何を言い出すかと思えば、今どきガキも怖がらねえような怪談話かよ。私道に食われちまつた子供の幽霊が、うらめしゃ～ってわけか」

「ちがうつよ。その女の子が、人を食うんだよ」

イシカワはまたぽかんと口を開けた。笑い飛ばすかわりに、切羽つまつたような呻き声が洩れた。たいした風もないのに、常緑樹がざわめき、石畳の上で濃い影が揺れた。化け物どもが舌なめずりしながら、囁きあつてているような光景……唐突にまた、一葉のイメージが目の前の光景に重なった。

(おとといは、来たぜ)

だが、昨日は来なかつた。そして今朝も、彼女は現れそうにない。もちろん、「病弱な」彼女が休むことは、そつ珍しくはない。けれど考えてみれば、二日続けて来なかつたことなど、これまであつたろうか。あつたかもしれないが、かれの胸騒ぎは、ほぼ頂点に達していた。鉄格子の間に細い体を滑りこませる一葉の姿が、妄想と呼ぶにはあまりにも鮮明に浮かんだ。

蒼い石畳の上を駆けて行く、セーラー服の後姿。その先で樹木はざわめき、おいでおいでをする暗い影の上に、血の色をした赤い靴が……

「わあああああっ！」

「イシカワくん？」

「タミー、どうしよつ。きっとあの子は、八幡一葉は、ここから近道したに違いない。もう食われちまつたんだろうが、なあタミー。

「ひょりう」

かれが眉をひそめたのは、その可能性がゼロとは言いきれないからだ。加えてイシカワの目を見れば、とても私道を探索せずには、おさまりがつきそうにない。のみならず、世の中には、他人に引きずられやすいタイプが存在する。タミーがそうであるよう。

「仕方ないなあ」

鉄格子を半分抜けたところで、早くもイシカワは進退窮まった。先に潜つたタミーがあもいきり引つ張ると、断末魔の「とき声を張り上げて、どうにか転がり出た。肋骨が折れたと騒いでいるが、本当にそなうなら、今頃ぐうの音も出まい。

また風が吹いて、影が踊つた。歩道から眺めた印象より、常緑樹の木立はいつそう深く、こうなると、ちょっとした森である。

「どう考へても、ただの道じやねえよなあ。公園か何かの跡地だろう」

肋骨を押さえて、かれは立ち上がつた。肩を並べて歩きだし、木立の陰に入ったとたん、しんしんと体が冷えた。肘をさすつて、タミーが言つ。

「もともとこの区画には龍門寺家の別邸が建つていたんだ。ところが三年前に急に取り壊されて、宅地として競売にかけられた。この『私道』だけを除いてね」

「龍門寺と言やあ、首長連合のナンバーシーだつた……？」

「実質、ナンバーワンといえるね。黒幕といつやつさ」「刷新に負けてから、当主は国外に亡命したと聞いたが」

「死亡説もあるよ。ただ、すでに龍門寺真一郎が死んでいたとしても、三人の息子たち……いわゆる龍門寺チルドレンがいる。まだ一人も行方がわからない以上、人類刷新会議は最大の不安要素を抱えたままのさ。武装警官やソフトボールが走り回っているのは、何もきみの煙草を取り締まるためじゃない」

「首長連合の残党どもを、龍門寺が陰で操っているってことか」

「活動資金がそこから出ているのは、間違いないだろうね。刷新会議は龍門寺家の資産を凍結しようと躍起になってるけど、カネに関するノウハウなら、向こうのほうが何枚もウワテだもの。きっと連中、かなり焦つてる」

会話が途切れると同時に、どちらからともなく立ち止った。

周囲は常緑樹の陰に、すっぽりと覆われた恰好。行く手は相変わらず木立に隠れて定かでなく、振り返ると、すでに門扉は死角に入っていた。影が濃くなればそれだけ、道は蒼みを増すようだ。まるで赤い靴が映えるよう、あつらえたようだと考え、タミーは眉をひそめた。木洩れ日が蛇の背の模様のように、まだらに浮いていた。どぼん、と近くで水の音がした。

「あれ……」

亀のようすに首を縮めたまま、イシカワが指さした。前方右側の灌木の中に、噴水らしきものが、ほとんど埋もれかけていた。雨水だろうか、水盤に水が溜まり、そこに映った緑の梢を、大きな波紋が乱していた。ミカゲ石の縁が所々欠けているが、黒い光沢を保つたまま。中央では怪魚の彫像が、とっくに水を吐かなくなつた後も、あんぐりと口を開けていた。

引き寄せられるように、タミーは道をそれた。止めるタイミング

を逸したまま、イシカワもついてきた。水盤を覗きこむと、思いのほか水は深く、澄んでいる様子。青々とした葉が何枚か浮いて、波紋にくるくると翻弄されていた。誰に言つともなしに、タミーはつぶやいた。

「さつきからずっと気になつてたんだ。封鎖された場所にしては、奇麗すぎるんだよね。噴水があるってことは、もとは庭の中だろう。石畳の遊歩道を、そのまま残したんじゃないかな……庭師の亡靈ごと」

「いい加減にしろよ。女の子の幽霊の次は、庭師のおっさんか」「おや。女の子が庭師では、不自然かい？」

振り向いたタミーの挑発的な笑顔が、かれを震え上がらせた。いつたい何の話をしているのか。自分たちは、一葉を探しに来たのではなかつたのか。混乱する頭でそう考えたとき、『ごぼつ』という音が響いた。反射的にタミーが振り返り、イシカワはミカゲ石の縁に手をかけた。

細かい泡を吐きながら、まるまると肥えたフナほどの、黒い影がゆっくりと浮上してきた。が、水面にあらわれたそれは、魚ではなく、まだ真新しいストラップシューズ。たちまちイシカワの目が真円形に見開かれたのは、それが区立第三女子高の「指定靴」に違いなかつたからだ。のみならず、サイズもぴったり合いそうな……

頭が真っ白になつた。飛び込むつもりで水盤に片足をかけたとき、何者かが、うしろから肩に手をおいた。タミーでない証拠に、かれも両手をミカゲ石にかけていた。ぎょっと振り返ると、お下げ髪の女学生が、眼鏡の奥で、リスのように瞳を動かした。

「おはよ」

タミーが支えてくれなければ、まともに背後へ引っくり返つていただろう。八幡一葉は、古風な学生鞄を両手で提げ、イシカワとタミーの顔を交互に見比べた。当然のことながら、「指定靴」を両足に履いている。これが改造ローラーシューズであることも知つている。

「泳ぐつもり？」

「いや。変わった魚がいたもんで……」

「なんだ。でも、命を賭けたいほど魚好きでなければ、この道は通らないほうが多いと思うな。噂は聞いてるんでしきう、イシカワくん」

名前を覚えていてくれた、という感慨は、彼女の刺すような視線を浴びて凍りついた。一葉はくるりとスカートを揺らし、一人に背を向けて歩き始めた。引き返すのではなく、先へ行くのである。残された二人は顔を見合わせ、あわてて後を追つた。歩きながら、彼女は言う。

「昨夜からね、三女の三年生が一人、行方不明になつてゐる。第九の男子生徒と、ここでたびたび逢つていたらしいのね。人を食う私道なんて、荒唐無稽なデマだと決めてかかつっていたのでしよう。わたしも何度も注意したんだけど、聞く耳持たなかつたみたいで……三女だけでも、今月に入つてもう四人めなのよ」

「四人も、かい？」

タミーの声は、珍しく震えていた。一葉は足を止めた。カツカツという靴音が途絶え、ざわめく葉叢の音が残された。お下げ髪が揺れて、セーラー服の衿の上から、彼女は振り向いた。

「学校側が揉み消しているだけで、第九のほうでもけつこう消えている筈よ。少なくとも、昨夜は一人」

事務所へ寄るのは、昼飯を済ませてからにした。外で食つてもよかつたのだが、へたな店に入るより、格安で旨いものが食えるのだ。アマリリストが超兵器である事実を、忘れたわけではない。けれど、料理が上手いのもまた事実ではないか。

今日も朝から少女は、新東亜ホテルのメイドの恰好をしていた。メタマテリアルで構築された機械生命体は、このエプロンドレスがお気に入りらしい。

一葉の言葉どおり、昨日のうちにバイク便のアンちゃんが届けに来たのだ。黒田竜夫といつ、バイク賊あがりの面白い兄ちゃんで、自称、覆面ライダー黒竜。一葉あたりは「タツちゃん」と呼ぶ。いまだに本多平八郎忠勝みたいな恰好で走り回るから、制限速度を守つても、警官にちょくちょく止められるとか。

それでも組織に属さず、バイク一台で食つているのだから、小学生にこき使われているおれからすれば、見上げたものだ。13市街界隈を縄張りにしており、商店街の使い走りが主な仕事。まだハタチ前で、どうも一葉に氣があるらしい。おれにはさっぱり理解できないが、小さなおっぱいが好きなのだろう。

アマリリストが浮かれているのは、なんとなくわかった。

昼飯を作る間、ずっと『タンホイザー』序曲を口ずさんでいた。一緒に飯を食いながら、通常の一倍くらい口数が多くつた。心なし目が輝き、頬がゆるんでいた。もともと無口で表情も乏しいほうなので、見ていてちょっと面白かった。

彼女には、過去の記憶がないらしい。

言葉や料理や歌は知つても、自分がかつてどこにいて、何をしたのか。そもそも、カプセルの外に出たことがあるか。それさえ

も、わからないという。相崎博士が記憶へのハッキングを試みたところ、完膚なきまでにブロックされたとか。ともあれ、少なくとも

「アマリリストとして」は、これが初めての外出となる。

「何を着ていくんだ？」

「このままではいけませんか」

「昨日、タツがいろいろ持つてきただろう。それはいわば作業服なんだし。せっかくだから、好きな服を着ていきなさい」と、まるでこの子の「おじさま」である。

食器を洗い終えて、彼女は自室に下がった。実際、どんな服を選ぶのか興味があった。マグマの中を泳げる少女は、元来、衣服を必要としない。けれど、擬態のアイテムとしては極めて重要なポイントといえる。おそらく伝説のカメレオンが環境に溶け込むように、アサシンとしての本能に目覚め、目立たない中にもキラリと光る……「いや、きみ……仮装舞踏会に行くんじゃないんだから」

フランス人形の前で、おれは目をまるくした。バッグンに機転の効く、家事から戦闘までこなす少女には、服装のセンスがまるでなかつた。結局、おれが部屋まで着いて行き、無難そうな服を選んだ。親戚の家を訪ねる中学生みたいな恰好になつたが、不服はないらしく、しばらく独りでぐるぐる回っていた。

ツーシートしかない軽量型ガス自動車の助手席に少女を乗せ、半地下の駐車場を出た。レイチェルは車を持つていたのだろうか……まばらにとめられた車を眺めながら、ふとそんな考えが脳裏をよぎつた。

竹本商事の事務所は、第四市街にある。駅裏の一等地である。とはいえる、大資本の商業施設が集中する駅前と異なり、日陰の印象はぬぐえない。小ぶりなビルが密集し、どれもが老朽化している。狭い道は入り組み、通行人の三割くらいは、確實に迷子である。

会社の駐車場は猫の額ほどで、毎度、車をとめるだけで、ひと汗かかされる。そこから近道しても、オフィスまで五分はかかる。いつも、近くに違法駐車したいところだが、近頃では警官の下請人が

見張つていって、へたをするとタイヤに磁気リベットを打ち込まれかねない。

下請人はリベット屋と呼ばれ、洒落ではないが、ドライバーたちに憎まれている。磁気リベットはタイヤの回転を完全に止めるため、専用の機械がなければテロでも外れない。仕方なくリベット屋の支部に電話して、来てもらうことになるのだが、外すだけで数千から数万サークルとられる仕組みだ。ふつう、口止め料として何万か支払うことになる。

三階建ての小さなビルが、竹本商事である。一階は展示場で、二階がオフィス。三階は居住スペースになつていて、外壁はセンスを疑う緑色。極めてせまい階段。エレベーターもあるにはあるが、乗つたためしがない。おれは大嫌いなモニターつきインターフォンのボタンを押した。

「あら、エイジさん。お久しぶり」

モニターの中で、茨城麗子が小首をかしげ、愛想笑いを浮かべていた。久しぶりも何も、仕事を回さなかつたのはそっちだらうと思つたが、ドアを蹴りつけたりせずに、おとなしく待つっていた。しかし考えてみれば、おれはアマリリスをけしかけて事務所を襲い、金を強奪することもできるわけだ。いやいや、その気になれば、世界征服だって可能だらう。

今さら思いつづこと自体、おれのやる気のなさを如実に物語つているが。

ドアが開いた。何というのか知らないが、いかにもブランドものの香水のにおい。茨城麗子は、衿ぐりがV字型に切れこんだ水色のニットを、ゆつたりと着ていた。少し身を屈めて会釈するとき、豊満な胸の谷間がくつきりと刻印された。

歳は、八幡兄弟より少し行っていると思う。ヤミロングのストレートヘア。見事に通った鼻筋。きつめの顔立ちを、柔らかな物腰がカバーしていた。何といっても、マグナム級のおっぱいの持ち主だった。さらに目のやり場に困るほど身をかがめて、麗子はアマリリスの顔を覗きこんだ。

「いらっしゃい。可愛いのね

「なぜ驚かない？」

おれの質問に彼女は答えず、意味ありげに微笑んで背中を向けた。有能な秘書もいたものだ。目の保養をさせてもらつたくせに、仏頂面のまま、おれは彼女の背中に従つた。観葉植物と磨りガラスの衝立で隠しされたオフィスの中を通り抜けた。十名近い内勤者がいる筈だが、おれは麗子以外、顔もろくに覚えていない。奥のドアの前に立ち、彼女がノックした。

「どうぞ」

忌々しいボーアソプラノがこたえた。応接セツトのソファに、十歳の少年は沈みこむように身をあずけていた。童話に出てくる王子様の挿絵を切り抜けば、竹本ワットになると考えていい。淒みを感じるほど美しい顔だち。抜けるような白皙。ガラス細工のように、華奢な体つき。お掛けください。と言ひてかざした指もほつそりとして、工芸品をおもわせた。

おれたちが座ると、麗子はワットの前に黒い木製の角錐を置いた。そこに白い達筆で「社長」と書いてある。かれの背後には、ボッティエールリの『春』の複製がかかっている。首長の屋敷からくすね

てきたような、草花模様の赤いソファといい、アマリリスの服のセンスの数段上をいつている。が、かれの美貌にみょうにマッチしているのも事実。

麗子が一礼して部屋を出ると、相変わらず鼻持ちならない流し目をくれて、ワットが口を開いた。

「少し痩せましたか」

「おかげさまでな」

「家事用チャペックが壊れたせいですね。でも、これからはだいじょうぶでしょう。アマリリスさんが美味しい料理を作つてくださいますから」

「だから、なぜこの子の名前を知つているんだ」

秘書に輪をかけて意味深長な眼差しを送り、ワットはほくそ笑んだ。

「この子……ですか」

対して、当の「この子」はといふと、料理の腕前を褒められたのが嬉しかつたらしく、可憐に頬を染めているのだ。おれは軽くテーブルを叩いた。

「わざわざ嫌味を聞きたんじゃない。この子がどういう存在か、だいたいわかつていいようだが、その点もあえて突つ込まない。仕事の話があるんなら、さつさと聞かせてくれ」

言い終わるのを待つていたようにドアが開き、コーヒー カップの載つた盆を手に、麗子が入ってきた。低いガラステーブルにカップを置く時は、躍動する白い谷間が垣間見られた。次に彼女は、かたわらのスチールデスクから、あらかじめ用意していたとおぼしいファイルを取り出し、ワットに手わたした。そのままかれの横に、姿勢のいい立ち姿で控えている。

ワットは、青いファイルカバーを開き、一人でさつと眺めて、また閉じた。そのままテーブルに放り出し、おれたちに「コーヒーを勧めて、自身もカップを口へ運んだ。切れ長の田の端で、麗子をかえりみた。

「少し、濃いですね」

「申し訳ございません」

「どう思われますか」

これはアマリリスに尋ねたようだ。穏やかな口調のわりに、鋭い視線が注がれていた。彼女は一口飲んで、カップを置いた。何と答えるか、おれもちょっと興味が湧いた。

「わたしは、これくらいが」

ハ長調のボーカソプラノを響かせて、ワットの笑い声が弾けた。嘲笑されたのなら即座に席を蹴るところだが、なぜか心底喜んでいるように聞こえた。それゆえに、かえって不気味ではあるが。

「気に入りました。もちろん、アマリリスさんには、エイジさんと同等の報酬を支払わせていただきます」

口をはさみたのを渾身の力でじらえ、相手の出かたを待つた。急に仕事が来たことが、少女の出現と連動しているのは確かだ。ほとんど無意識に煙草の箱を取り出し、禁煙の文字を見つけて、またポケットに引っ込んだ。薄笑いを浮かべたまま、ワットが切り出す。「第十一街区に私道があるのをご存知でしょうか。誰も通れないよう、完全に封鎖されておりまして、とくに学校のある側は、入り口がカモフラージュされているくらいです。もともと竜門寺家の別邸の敷地だったようですが……ここを通る者が、頻繁に『食われる』というのです」

「食われる、とは？」

古めかしい怪談話を聞くようだつた。それでいて、背中に水を浴びたような気がした。

「さすがエイジさん。よい質問です。情報屋が集めた噂話によると、消えるのでも、いなくなるのでもなく、食われるというのです」

「十一街区の私道なら、おれも知っているが。封鎖されている以上は、被害が続出するほど、通行人もいないんじゃないか」

「子供や学生が通りますね。通せんぼされたら、ますます入りたくなるのが人情ですから。ちょうどあの近辺には学校も多いですし」

「一葉の通う高校が、たしかあの辺りだ。何度か車で送られた覚えがある。ワットはマニキュアを塗った女のように、自身の指の爪を眺めながら語をついだ。

「それにどうも、あの道には人を引き寄せる、不思議な魔力があるようです。そのことを示す情報を、数え上げればきりがありません。詳しきは、ファイルを読んでいただければわかりますが、もちろん中には荒唐無稽な説が混じっています。ただ、ひとつだけ、あらゆる噂に共通するのは……」

赤い靴を履いた、十歳くらいの女の子。

「幽霊か」

「なんとでも、『自由に』

「ますます怪談じみてくるな。なんでも屋である以上、幽霊のお相手もしなくちゃいけないんだつが、おれにゴーストバスターの真似事ができるかな」

「その女の子が、人を食うのだとしたら？」

おれは口をつぐんだ。思い当たるフシが大いにあつた。すでに冷めかけたコーヒーを一息に飲んだが、味もわからなかつたほどに。

「まさか……」

「ハイジさんなら、」理解いただけたと思つていました

「しかし、そんなことができるの……」

「断定はさし控えるべきでしょ。何が生じるかわからない。それがぼくたちの住む現代、モダンワールドではありますか」

空のカップをひねくり回しながら、視線をさまよわせ、隣に座るアマリリスト目を止めた。ソファに浅くかけ、軽く握った両手を膝に添えている。少し俯いた顔に、生真面目な表情が浮かぶ。なぜだろう。彼女が視界に入ったとたん、安堵している自分に気づいたおかげで、皮肉を言う余裕ができた。

「この化け物退治の依頼は、どこから舞い込んだんだ？　おつと、

龍門寺家だというジョークなら、笑えないから却下だ」

「笑えませんね。刷新会議に知られたら、銃殺刑ものですよ。ぼくが子供でもね」

「否定しないのか」

「役所に届けは出していますよ。とあるお金持ちの有志が、現状を見るに見かねて、化け物退治を依頼した。ということになっています。匿名の有志の素性に関しても、我が社は全く感知しないし、する必要もないわけです。当然、来社したのは代理人ですからね」

「龍門寺とまでは言わなくとも、首長の残党である可能性が濃厚じやないか。よくそれで刷新がOKしたもんだ」

「複雑怪奇なオトナの事情が、絡んでいるんでしょう。けれど、我が社としてはノータッチです。依頼を遂行するのみです。それにはんといつても、ぼくはまだ子供ですから」

「ウインクいやがつた。オトナの事情はわからないと言いたいのか。女の子みたいな顔をして、どこまでも食えないガキである。

「ちょっと二人で話せないか」

そう言つと、ワットは麗子に目配せした。アマリリストを連れて彼女が部屋を出ると、おれは单刀直入にきり出した。

「あの子がイミテーションボディだと知つていてるのか

「シ（はい）」

「誰から聞いた」

「お察しのとおりですよ。ただ誤解のなによつて申しておきますが、仕事をさせるのは、アマリリストさんためでもあるのです」

「なんだと?」

「IBの存在意義が人間への憎悪に由来することは、元専門家のあなたに言つまでもないでしょう。彼女の本体からは憎悪が抜かれていますが、左手首から先だけは、生のままのIBです」

言われなくともわかつてゐる。彼女の左手は、血に飢えているのだ。殺戮を求めてゐるのだ。もし無理に左手の欲求を押さえこめば、いつか暴走するだらう。本体への浸蝕が始まらう……足を組みかえて、ワットは続けた。

「もうおわかりですね。そういうことなのです。ですからこのプロジェクトは我が社にとつても、アマリリストさんにとっても、そしてエイジさんにとっても、利益になるのですよ」

とても十一歳の少年とは思えない、もの凄い笑みをワットは浮かべた。

事務所を出たとたん、どつと疲れが出た。反対にアマリリスは、やはりどこか浮かれていた。機械なのだから疲れは感じないだろう。けれど、見るからに足取りが軽いのだ。

「せっかく駅前まで来たんだから、買い物でもして帰るか」「はい」

声が弾んでいた。

(イミテーションボディは、いわばエイジさんにとって、仇なのでしょう) 全てのIBを、あなたは今でも憎んでいますよね)

ワットの言葉が、残響のように頭にこびりついていた。

(それなのに、なぜアマリリスさんを引き取られたのですか。本体はロボーとはいえ、IBそのものである彼女を)

(当然、我を忘れたわ。弾丸を五発もくれてやった。もちろん、効きやしないよ。蠅が止まつたほどの効果もなかつたろう。けれど、あのとき彼女は、培養液の中で目を開いた。おれに向けられた眼差しはどうも……)

とても哀しそうだつた。

「駐車場代がもつたといから、南口まで歩くぞ。いいな」「はい。マスターがよろしければ」

擬態の成果だ。安っぽい同情だ。彼女が従順なのは、そう設定されているからに過ぎない。また、もし彼女が、これほどまでに人間の少女と見紛うばかりでなければ、おれの態度も確実に違っていただろう。

わかっているつもりでも、彼女を見ていると、胸の内に不可思議な感情が湧いてくる。この感情は、哀しみに似ている。胸がしめつけられるような。今すぐどこかに隠れて、こつそりと泣きたいよう

な。

「さつきの男の子は、社長なのですか」「ワットの」とか。男の子といつ言葉が、あれほど似合わないやつもないないな」

「マスターと気が合っていますね」

縁起でもないことを言つ。が、これほど罵りあいながらも、やつは一向におれをクビにせず、おれも一向に辞める気配がない。もちろんおれはワットが好きではないし、あんな腹黒い野郎は大人でも珍しいと思っている。にもかかわらず、お互いがお互いを、どこかで必要としている。

「教えてやる。そういうのを、腐れ縁というのだ」

「登録しました。応用するといつなるのでしょうか。わたしとマスターは、腐れ縁である」

思わず苦笑した。否定はしないが、微妙に「コアンスが違う。このでの融通のきかなさは、やはり「ロボット」らしい。

南口へ抜ける駅のコンコースは、ちょっととした街路と化している。つぎはぎだらけの殺風景な壁面。ぶ厚い鉄板で塞がれた岐路。明らかに場違いな、模造大理石の円柱。常に雜踏しており、電動一輪で通過する横着者もいる。両側には露天や屋台が並ぶ。しきりにウインクを送つてくる男がいたら、麻薬か武器の密売人だと思つてまず間違いない。

「あの女人ですが」

「茨城麗子?」

「はい。わざとマスターに胸を見せていました」

柱に頭をぶつけそうになつた。それにしても、珍しく少女がよく喋るのは、外の世界が面白いからだろう。変態博士も言つてなかつたか。

(そろそろ下界を歩かせてやつてもいい、とは吾輩も考えていたところだ。せつかく一本の足を持って生れてきたんだからなあ……) ただ、彼女が本当に初めて下界を歩くのか、それはわからない。

過去の記憶がないからだ。ただ、おれは至つて不信心な男だが、もし輪廻を信じれば、人間だつて同じかもしれない。この世界でじたばたと生き、死んで生まれ変われば、また振り出しへ戻つている。

「もしおれが死んだら、きみはどうなるんだろう」「うう

不意に、彼女は立ち止まつた。振り返ると、うつむいた顔に髪の毛がかかり、表情が読めなかつた。さつきまでとは打つて変わつた、低い声で彼女はつぶやく。

「マスター以外の命令をきくことはできません。ゆえに、記憶はリセットされ、全てのシステムは停止します。もしその状態で無理に動かそうとすれば、自爆装置が作動します」

聞いてはいけないことを聞いた気がした。雑踏の中でぽつんとうつむいたまま、少女はまるで泣いていたように見えた。

「すまなかつた。そ、そうだ。デパートに着いたら、何か好きなものを買つうといい。きみにも報酬が入るのだから、遠慮はいらないぞ」肩に手を置くと、少女は顔を上げた。ぱつと輝いた表情にて、泣いた痕跡はまったくなかつた。はた目には、おれは親ばか以外の何ものでもないだろう。

ちなみにアマリリスが買ったのは、ファッショングッズと料理の本とジグソーパズルだつた。

「遠慮はいらないと言つただろう。ほかに欲しいものはないのか」「いざいません」

と、嬉しそうに抱みを抱えている。なるほど考えてみれば、おそらくまだ、外の世界に対する情報量が圧倒的に少ないのでから、何が欲しいのか、わからないのもうなずける。

少女の服のセンスのなさが、それを端的に証明している。例えば、レシピなら古くなつても、まず問題なく使える。が、流行は時代とともにめまぐるしく変化する。女性の服装など、その最たるものだ。アマリリスはセンスがないのではなく、流行を知らなかつただけだ。まあ、それにしても時代錯誤がすぎていたが。

しかし、何ゆえにジグソーパズルなのだろう。

食料を買い終え、コンコースを北口へ引き返す途中、おれはふと足を止めた。長髪のイースラック人が、わざと柱の陰に陣どり、絨毯の上にあぐらをかいて、しきりにワインクを送つてくる。かれらは瞳の色がほとんど白に近いので、すぐにわかる。お互いに社会の裏道を歩く者のカンで、おれはびんときた。

「すまないが、ちょっとここで待つてくれ

アマリリスに食料の袋をわたし、両手の指をポケットに引っかけ、鼻歌まじりに近づいた。絨毯の前にしゃがむと、獣じみた、独特な体臭が鼻をつく。目の前には煙草の箱や、あやしげなアクセサリーが並んでいた。おれは片目を閉じてから、ラクダの描かれた箱をひとつ持ち上げ、それがずつしりと重いことを確認した。

ニヤリと笑つて目をあげると、ガラスのようにうつろな瞳が、おれを凝視していた。彫刻みたいに高い鼻。肌は皺だらけで髪の毛は真っ白だが、背筋はしゃんとしていた。

「強い煙草はあるかい。マグナム級のやつ」

無言でうなずき、かれは革のチョッキの内ポケットに手を入れた。おれもM36のグリップを握ったが、たいして警戒はしていなかつた。取り出された煙草の箱は見たこともない銘柄で、花束が描かれていた。趣味のよくないことに、花のひとつは頭にリボンを結んだ女の子の顔なのだ。意外に張りのあるバリトンが答えた。

「イズラウン製です。もう作っておりませんが

「買おう。いくらだ?」

おれは言い値で買い取った。イズラウンは第一次百年戦争で消滅した強力な武装国家だ。戦争の勃発時に暗躍し、またイミテーシヨンボディの開発にも一役買つていた。もちろん、まがい物をつかまれた可能性はあるが、闇取引にリスクはつきもの。最終的には、カソンを信じるしかないのだ。

待つているアマリリスの姿を見て、おれは苦笑を禁じ得なかつた。いくつも荷物を抱えているのに、左手はフリーのまま。もしちょうどでも、イースラック人が不穏な行動をとれば、コンコースに血の雨が降つただろう。

武装警官が来た時もそつだが、少々過剰に反応しすぎるように。ワットが言つたとおり、少女の左手は人間の血に飢えているのだろうか。

食事のあと、おれは青表紙のファイルを読むことにした。

「食器を洗つたら、あとは好きにしていいよ。部屋はせまいだらうから、ここを使ってかまわない」

「了解しました。明日の朝は?」

「そうだな。仕事も入つたことだし、昼まで寝ているわけにもゆくまい。十時には起こしてくれ」

かしこまりましたと言つて、アマリリスは台所へ下がつた。大きな屋敷ならこれで恰好がつくのだが、ここは居間と書斎と寝室をかねていて、しかもバスやトイレへの通り道だ。机に向かうおれの背

後を、ぱたぱたと少女が通り過ぎ、やがてシャワーを使う音が聞こえてきた。またぱたぱたが始まり、静かになったところで振り返ると、ぺたんと床に座っていた。

彼女の前には、ジグソーパズルのピースが散らばっていた。  
おれは仕事もそっちのけで、興味を覚えた。彼女の脳は電子頭脳なのだから、ジグソーパズルなどお茶の子さいさい。へたすると三分で完成させるのではないか。そう考えながらそっと机を離れ、覗きこんだ。

箱の完成見本を見れば、何百年か前の風景写真とおぼしい。花が咲き乱れる草原の中に湖があり、森がそれを取り囲み、雪を頂いた山が遠くに連なる。空も湖も、どこまでも青く澄んでいる。世界に汚染物質がばら撒かれる前、地球のどこかには、こんな天国みたいな風景が実在したのだろう。

それにしても、見ているこつちがむず痒くなるほど、アマリリスの手が進まない。たっぷり十分もかけて、四つのピースをやっと組んだが、そのうち一つはどうも違つようである。指摘してやると、少女は振り向いた。泣きそうな顔をしているのかと思えば、案外けろりとして。

「気づきませんでした。マスターは頭がよいのですね」と、電子頭脳に褒められた。

おれはファイルに目を通す作業に戻った。ざつと眺めた限り、ワットが簡潔に説明した以上の内容は、見当たらなさそうだ。ただ、どうやって撮ったのか、現場をほぼ上空から写した写真が入っていたのには、驚かされた。

よほど遠くから望遠で狙つたのか、ずいぶん不鮮明な写真だ。無理もない。政権がめまぐるしく入れ替わる中、為政者たちは空からの偵察に神経を尖らせてきた。ヘリやジャイロなどもつてのほか。たとえ冗談半分で、自作の無人偵察機を飛ばしても、見つかりしだい銃殺刑だ。眉をひそめて、おれは写真を灯りにかざした。

無機質なビルが建ち並ぶ区画を、こんもりと茂った緑の帯が、南北に縦断している。まるで巨大な多毛ワームが、街の中に食い入っているようだ、シユールというより、おぞましい。ところが、肝心な私道の中の様子は、木立にさえぎられて、全く見えないのだ。所持しているだけで後ろに手が回る資料なのに、これではまるで役にたたない。

「ち……」

「何か問題でも？」

床にぺたんと座り、ピースを一つ手にしたまま、アマリリスが振り向いていた。こんな姿は、パズルに興じる中学生と変わらない。おれは苦笑しつつ、ノープロブレムのゼスチュー。

さらに資料をめぐると、次にあらわれたのは、ペン画に薄く着色した私道の俯瞰図だ。ルナパークのパンフレットに載つているような、くだけた絵柄で、正確さは欠けるが、とてもわかりやすい。

常緑樹の木立の中を、石畳の道は左にゆるやかにカーブしている。南側の出入口は門扉に似た鉄格子の扉。学園通りに面する北側は、あやしげな神社の裏につながり、ここで木立がぐつと両側からせまり、祠でふさがれている。神社側から何気なく眺めただけでは、道

は全く見えないだろ？

（神社の祠が、秘密の出入り口というわけか。怪談話にはもつてこいのロケ地だな）

道の周囲には、枯れた噴水があり、壊れかけた東屋がある。これだけなら、庭園の一部だったという過去もうなづけるが、遊具や、動物を飼つ檻らしきものがみとめられた。絵柄と相まって、まさにルナパークではないか。

おれはさつきの写真を抜いて、透明シートにはさんだ。その上から、イラストを参考にしつつ、おおまかな物の位置を描きこんでいった。さらにファイルをめぐると、案の定、その辺りの地下の見取り図があらわれた。

現代の都市区はどこもそうだが、地下が鬼門である。

歴史家たちが「メトロポリス・ムーブメント」と呼ぶように、戦前は地下都市の建設が盛んだった。全盛期には、建築物が四割。交通機関に至ってはほぼ百パーセント、地底に移されたといふ。それらがイミテーションボディに蹂躪された時の有様は、ちょっと想像したくない。文字通りの、地獄絵図が現出したことだらう。

もちろん現在、地下都市の廃墟は全て封印されている。地上との間にぶ厚い鉄板が無数に埋め込まれ、IBや第三種以上のワームをはじめ、得体の知れないものたちが這い上がってくる隙はない……ことになっている。

どこが政権をとつても、為政者たちは、必ずそここのところを強調する。地下の封印は万全です。ずさんな前政権とは違うのです。地区民の皆様の安全と安眠は、当政権が保障します。とかなんとか声を大にするけれど、しかしそれが嘘である証拠に、おれたちの仕事はなくならない。

「マスター」

真後ろで声がして、思わずびくりと肩を揺らした。アマリ里斯はそのまま漫画に貼れそうな、眠たげな目をしていた。

「お先に休ませていただきます。パズルは、このままにしておいて

よいですか

「構わないよ。はかどつたかい？」

「はい。十二ピース組みました」

なぜか誇らしげであった。一時間近くかけてこれなのだから、九ハ九ピース、全て組み上るのはいつのことだらう。彼女が培養液のベッドのある自室に下がったのが、まだ十時すぎ。こんなところも、お子様である。

煙草に火をつけて、ファイルから地下の見取り図を外した。透明シートに入れて写真と重ねれば、縮尺もほぼ合っている。おまけにトレーニングペーパーに印刷されているので、これで、上空、地上、地下と、三つの階層の重なり具合が、手に取るようになるのだ。

「やつぱりな……」

背筋を三度、冷たい稻妻が貫いた。妖怪は鬼門からやつて来るもの。怪異は必ず地下とリンクしている筈だつた。そうして思つたとおり、第11街区の真下には、戦前に築かれた地底動物園が、そのまま埋もれていた。

四度めの戦慄が走つたのは、ノックの音を聞いたからだ。時計を見ると十時三十五分。今、武装警察に踏み込まれては、いろいろとまずい。緊急用の隠し場所にファイルを放りこみ、M36を片手に、おれは忍び足で玄関へ向かつた。

「わたしでなければ、今頃アマリリスちゃんが黙つていいないわよ」ドアを開けた体勢のまま、きょとんとしているおれの前で、腰に片手をあてて「一葉がそう言つた。こんな遅い時間に、学校帰りでもあるまいが、セーラー服を着て髪を編んだま。

「ちょっとお邪魔するね」

「お、お……」

「安心して。夕食をいただきに来たわけじゃないから」

面食らつてているおれを尻田に、勝手に上がりこみ、つかつかとリビングへ。ある意味、武装警察よりタチがよくない。

「さすがに片づいているわね。アマリリスちゃんは、もう寝たの？」

「残念だつたな。イブニングティーを」馳走できなくて

「これは？」

おれの皮肉をスルーして、ジグソーパズルの前に片膝をついた。眼鏡を外して胸のポケットに入れ、前髪を搔き分けて顔を近寄せた。ありふれた風景画のパズルの、どこがそんなに珍しいのか。ちなみに兄貴たちと違つて、彼女の眼鏡は伊達である。

アマリリスがつなげた部分は青一色で、空なのか湖なのか、それとも山脈の一部か、判然としない。おれはパズラーじゃないので、どこから組んでゆけば早いのか、そのてのコツはわからないが、もつと手がかりの多い部分から組めばいいのに、とは思つ。いきそつと説明すると、一葉はいかにも驚いた顔を上げた。

「す」「いじやない！」

「ど」「が？ 小一時間かけてやつとこねだせ。きょひび、小学生の

ほうがよほじ要領よくやれる」

小学生、と口にして、ワットの顔が思い浮かび、おれは苦虫を躊躇

みつぶした。赤ん坊と言つべきだつたか。一葉は立ち上がり、机から勝手に椅子を引き寄せ、腰かけた。

「ジグソーパズルは、電子頭脳が最も苦手とするもののひとつよ」「そうなのか？」でも前任のナナコ七式はチエスの名手だつたぜ」「チエスとパズルは別モノよ。もし七式にパズルをやらせたら、一ヶ月かけても、ひとつも組めないでしょう」

今度はおれが驚く番だつた。一葉は、満足げなウインクをひとつくれた。

「そ。それだけ、アマリリスちゃんが優秀だつてこと」

「驚いた。しかし、電子頭脳にも意外な盲点があるもんだな」

「センスというものを持たないからね」

「センス？」と、鸚鵡返しながら、必然的に今日の曇、フランス人形と化したアマリリスが思い起こされた。ロボットには、センスがない？

「ヤマカンとか直感と、言いかえてもよいかしら。パズルのピースを選ぶとき、エイジさんはいちいちモノサシで測つたりする？」

「いや。なんとなく、ピンときたやつを組んでみるな」

「それこそが、センスでしきう。機械にはそれがいいから、まさにいちいち計算するわけよ。ところがジグソーパズルのピースくらい膨大な数になると、とても処理が追いつかない」

おれは煙草に火をつけ、溜め息とともに煙を吐いた。

欲しいものを買っていいと言つたのに、なぜアマリリスは、パズルとファッショング雑誌を選んだのだろう。機械だから、おれに全くすよう設定されているから、おれのために、苦手を克服するために、これらを買ったのだろうか。処理班時代の相棒、山ボツドが、蜂の巣になりながら、おれたちを守ろうとしたように。

その疑問を口にすると、一葉は足を組みかえて、机に軽く頬杖をついた。

「一概にとも言えないんじやないかしら。エイジさんは、好きなものを買えと言つたわけでしょう。アマリリスちゃんにとって、

その命令は絶対よ。偽って嫌いなものを買つたり、やりたくないことをするとは考えられない

「ああ、なるほど。じゃあ、あいつことってパズルをやるのは……」

「面白いんだと思つ。料理や服に關しても同じ。そう考へると、中学生くらいの女の子と変わらなくなるわね。思い出してほしきのは、彼女がチャペックではなく、イミテーションボディだといふこと。わたしたちは、HBの全貌をまったく把握しきれていないのよ。だから……」

だから? と、おれはまた鸚鵡になつた。この年端もゆかぬセーラー服の少女を、縋るような目で見ていた。

「アマリリストちゃんに『センス』が存在しないとは、言こされないわ

くわえたままの煙草から、ぽとりと灰がこぼれた。怖いもの知らずの一葉の顔も、心なしか緊張しているように見えた。

言われてみれば、我々は「センス」を当たり前のように振り回しているが、こいつがどこからやって来るのか、じつは誰も知らない。こいつ言つてよければ、神の領域から到来するのかもしれない。なぜなら、ヒトは神が作ったものだから。

ならば、イミテーションボディとは何者か？　ヒトが作ったモノには違はあるまい。が、あるつことか、ヒトは神の領域に属していた禁断の技術を盗んで、この超兵器を創造した。そしてあたかも、神域を侵した罰を与えられたように、E-Bの反逆にあつた。

パンドラの箱を開いたようだ。

「そろそろ行かなくなっちゃ。外出の準備をしてくれない？」

造作あるまい。煙草を揉み消して、上着を引っ掛けるだけでいいのだから。しかし、いつたい彼女は、何をしに来たのだろう。

「送るのは構わんが。ここまでどうやって来たんだ？」

「カズ兄さんと一緒に。あとボーイフレンドが一人

「なんだと？」

ハ幡商店のトラックは、下の駐車場にとまっていた。助手席に乗り込むと、一彦が肩をすくめるように会釈する。一葉は後ろの座席に、学生服姿の男の子一人と、ぎゅうぎゅう詰めに収まった。彼女の隣に、小柄で利発そうな少年が。そのまた隣には、背の高い、石器時代の不良みたいな男の子が、半身をサイドウイングドウにへばりつかせていた。一彦が言つ。

「兄貴のやつ、はしゃいきましたよ」

「山。ボツドかい？」

「ずっとこじつてなきや、気がすまないみたいで。おかげで今夜は、ぼくが妹のお守です」

「こじつてるつて、まさか整備しているのか？ 床の間にでも飾るのかと思っていたが。どうあがいても、あれは一度と動かないだろう」

あまり思い出したくない光景が脳裏をよぎった。膝から下を吹き飛ばされ、動きを封じられたあと、まがまがしい無数の鉄の爪が、なぶるようにサンポッドの全身の装甲を貫いた。頭部はとっくに潰されていた。機械とは思えない断末魔。爪の先から腐食液が注ぎ込まれ、山ポッドの至る所から、厭な臭いのする煙が吹き出した。

それでも相棒は、弾が尽きるまで、機関銃を撃ち続けた。撃ち続けたからこそ、おれは助かったのだ。おれだけが……後ろから肩を叩かれ、のろのろと振り向いた。車内には計器類の光しかないのに、泣き顔はごまかせたらう。

「紹介しておくわ。タミーくんとイシカワくん。一人とも第九男子校の一一年生よ」

少年たちは、ぎこちなく頭を下げた。物理的にも心理的にも固まっている様子。「一葉はボーアイフレンドだと言っていたが、連行されているようにしか見えない。まあ、おれも一彦も裏側の人間だから、怯えるのも無理はあるまい。たとえスーツを着っていても、素性といふやつは、においのように表に出てしまうものだ。

「害虫屋のエイジだ。一葉にどう口説かれたのか知らないが、遅くまでほつつき歩いてて、だいじょうぶなのか？」

一週間塩漬けにして歯車の鋸びたチャペックみたいに、少年たちはうなずいた。いじめているようでは気が咎めるが、一葉に振り回されている点では、おれも似たような立場か。半分開き直りつつ、おれは胸ポケットからマグナム弾をひとつ、つまみ上げた。「においでわかるのか、一彦は身を乗り出した。

「それは？」

「駅の中でイーズラック人が売っていた。イズラウン製だというが、どう思う？」

一彦は弾薬を受け取ると、小型ライトの光を当てながら、じばら

くひねり回していた。兄の一朗と違つて、あまり感情を表に出さないほうが、それでも肩の辺りから、興奮が伝わるようだ。かれは、大きな溜め息をひとつもらした。

「まず本物でしょ。しかも、ここで始まる製造番号ですから……何発あるんですか」

煙草の箱の封を切るときの興奮は、今も忘れられない。花束の絵柄も悪趣味なら、紙も粗悪なパッケージ。銀紙を破ると、つんと血をおもわせる金属的なおいがして、おがくずに詰められていた、三発の弾薬が机に転がる。生き物じみた金色の光沢。磨き上げられたように、錆び一つ浮いていなかつた。

「不発はないと思いますが。たとえうち一発が湿氣でいても、充分、事足りるでしょう。ひょっとすると今回、アマリリスさんの出番はないかもしませんね」

「何言つているの、カズ兄さん。外したらそれつきりの弾薬と、超兵器を一緒にしないで」

ガンスリングガーとしては、ずいぶん見くびられたものだが、一二葉の言つとおりだらう。ただ、おれが大枚はたいてこんなものを買ったのも、心のどこかで、一彦が言つたような事態を望んでいたからかもしれない。甘い感傷なのはわかっている。けれど、できればアマリリスには、血なまぐさい仕事をさせたくないなかつた。

ヘッドライトがともされたとき、あまりの眩しさに、イシカワは目を閉じた。

ずっと考えていたけれど、どう見てもダイオード系の光源ではない。化学反応を利用した、未知の発光装置ではあるまいか。不安定ではあるが、光はかなり強烈。それだけで交通規制に引っかかりそうだが、そもそもこのトラック、叩けば叩くほどヤバそうな埃が、飛び出してくるようじゃないか。

運転席の男が、二葉の兄だという。なるほど端正な口もとは、妹にそつくりである。ちなみにイシカワは、女の子の口が好きなのだ。淫らな意味ではなく、純粋な口フェチ。二葉が上品な唇を動かして喋る様子眺めているだけで、頭がくらくらするほど。(ト)（もし、万が一、あの口にキスできたら、心臓が止まるかもしれない）

かれらを乗せたトラックは、奇怪なエンジン音を上げて、夜の街路に滑り出た。街灯などという、気のきいたシロモノは、ほとんど息絶えている。人影はおろか、すれ違う車もなく、郊外の街路は、ゴーストタウンのように閑散としている。

「午前中までに仕上げなくちゃいけないの。どうせあのヤローは、昼まで寝てるでしょうから」

古風な学生鞄の中からスケッチブックを取り出して、八幡二葉がそう言ったのだ。もちろん、今朝の私道での出来事である。人を食うといわれる道の真ん中で、悠長に芸術の宿題でもやり始める気なのか……かれの横から覗きこんで、タミーが感嘆の声を上げた。

「へえ、上手いんだ」

ふん、男がそんな軽口を。と思いきや、あらうことか一葉は頬を染め、小声で「ありがとう」と言つたのだ。明らかに先を越されて、イシカワは地団太を踏んだ。

スケッチブックいっぱいに描かれていたのは、この私道の俯瞰図らしい。ルナパークのパンフレットを、かれもまた思い出した。あらかた完成しているが、道に沿つた部分が所々、素描のまま残されていた。ピカソとレンブラントの違いもわからない。漫画しか読まないイシカワであるが、単純によく描けていると感心した。

日はしだいに高くなり、しかも晴れてきた。一葉は木洩れ日のする草の上に、ふんわりとスカートを広げて腰をおろし、スケッチに余念がない。そばで黙つて眺めているだけで、イシカワは天にも昇る気持ち。ここで何人も「食われて」いるという怪談話が、だんだん信じられなくなってきた。

### イシカワは夢想する。

神社の方角から、赤い靴を履いた十歳くらいの女の子がやつて来て、血だらけの口でニタニタ笑う。二葉は悲鳴を上げてスケッチブックを放り出し、かれに抱きつく。かれは彼女の身をかばい、拳を握つて化け物の前に進み出る。決して不良ではないけれど、なぜかいつもインネンをつけられるせいで、中学時代から喧嘩は百戦錬磨である。

（とつとと失せな。たとえあんたが人食いでも、女は殴らない主義でね）

化け物は、かれの騎士道精神に恐れをなして逃げて行く。おおセニヨリータ、これで一件落着です。このおれの目の黒いうちは、やつの悪事は許しません。「とろん」とした目で、彼女はかれを見上げている。ガラス細工のような肩を抱くと、その目は静かに閉じられ、摘みたての苺みたいな唇が、唇が、唇が、きつさつ、キスの予感に震えて……

「イシカワくん、涎、垂れてるよ」

至近距離からタミーが覗きこんでいた。わっ！ と叫んで、かれ

は後ろにのけぞつた。

それにしても、妙でけれんな私道ではある。噴水があり、壊れかけた東屋があり、動物園の檻のようなものさえ、常緑樹の間に散らばっている。古めかしいメリーゴーランドがあらわれた時には、さすがに我が目を疑つた。

「なんでこんなものが……」こはルナパークか？」

屋根の内側には、お伽話の挿絵みたいな、顔のある月や星がちりばめられている。木馬や馬車は陶製で、首がとれたり足が折れたり、あらかたどこか破損しているのが、いかにももつたない。規模は小さいけれど、このまま売つても、かなり儲かるのではないか。尋ねたいことは山ほどあつたが、熱心にスケッチしている一葉に、話しかけるわけにもいかない。彼女はほとんど迷うことなく、製図用のペンで線を決めると、鉛筆の下絵を消し、上から水彩パステルで、薄く色を置いてゆく。いろいろとやばい現状を忘れるほど、眺めているだけで楽しい光景だつた。一葉が描画を終えたのは、正午近く。

「意外に時間がかかっちゃつた。急ぐわよ、タミー。イシカワくんもタミーの後回しにされた不服を口にする前に、バレリーナのようにな、彼女の脚が水平に持ち上げられた。そのまま、かかとが石畳にまっすぐ振り下ろされると、カツンと音がして、靴底からローラーが飛び出した様子。もちろん、イシカワの目には、ひるがえるスクートと、やはりバレリーナのよう、しなやかな脚しか映らなかつたけれど。

石畳に火花が散った。一葉は鞄を小脇に抱えると、もう、二人のはるか先を走っていた。漫画ふうに飛び上がってイシカワが後を追い、タミーは素早くキックボードを組みたてた。ホビー用の強化イオンエンジンを底に取り付けてあるので、いくらか推進力の足しにはなる。

八幡一葉を懸命に追いながら、イシカワの胸は躍った。これよ、これ。そうこなくつちや。花に嵐の例えもあるや。走り抜けるのが青春だ！

とはいえ、ワンブロックを突っかかる道の、それも途中から辿るだけなので、たちまち北の端に突き当たる。イシカワも内側から見るのは初めてだが、常緑樹としぶとい蔓草に覆われて、鉄の壁がふさいでいる。その前に一葉が、ぽつんと立っていた。セーラー服の白いラインが、みょうに眩しい。かれらと異なり、息ひとつ切らしていない様子。

「ここが出口？」

一葉はふり返り、少し脇へ退いた。赤錆の浮いたドアが嵌めこまれていた。学校の屋上に出るドアみたいだが、赤錆がまるで血のりのようだ、イシカワはゾッと肩をすくめた。青表紙のファイルに網羅された怪談話によれば、赤い靴の少女があらわれると、このドアが開かなくなるという。逃げてもここで追いつめられて、食われてしまうという。

彼女はノブを握り、手前に引いた。ぎぎり、と音が鳴り、中は真っ暗。覗きこむと、シャワールームほどの空間があり、短い階段が奥の壁に達している。そこに、両開きの窓ともドアともつかないものが嵌まっている。

ちょっとお願い、といつ声とともに、鞄が投げ渡された。キャッチしたイシカワが呻き声を上げたほどなの、意外な重さ。

「『めんなさい。辞書が三冊入っているの』

階段の上で背中を丸めて、彼女は宙を搔くように両手を差し出し、蝶番のきしむ音がして、白い光が流れこんだ。ちょうど鏡通り抜けたアリスのポーズに似ているが、むろんイシカワは、そんな童話の存在すら知らないし、知っていたとしても、それどころではなかつた。

なぜなら両開きの扉を潜るとき、彼女はきわどい恰好でお尻を突き出し、スカートの中が覗けそうだったから。

一葉とタミーは容易に潜り抜けたものの、イシカワの番になるとまた一騒動あつた。けれど今回は、片方の手を一葉が引いてくれたため、激痛の中でも頬は緩みっぱなし。肋骨を全部ぐれてやつてもいいと考えた。

転がり出たのが、例のあやしげな神社の境内。イシカワの背後で、祠の扉がひとりでに閉まる音が響いた。とんだ人食い神社もあつたものだ。青い顔の神主でも出てきたら、もっと絵になるだろう。ここでは管理人はあるか、参拝者さえ見かけたことがなかつた。

鳥居の前に、いかにも目立つ赤い車が横づけされていた。変てこな軽量型トラックが、その後ろにつけてあり、一台とも進行方向と反対に頭を向けた恰好。かれがぽかんと口を開けている間に、赤い車のドアが開き、なまめかしくも白い脚が、すらりと降りてきた。続いてかれの目に飛び込んできたのは、青いニットにつつまれたメガトン級のおっぱい。

おっぱいの前にスケッチブックを差し出しながら、一葉が言つ。「間に合つたかしら」

「だいじょうぶ。まだ来社していないわ。今頃のんびり『飯でも食べてるんでしょう』

一葉が「あのヤロー」と言つていた男のことだ。白い谷間で溺れそつになりながら、イシカワは直感した。その一言はいかにも憎々しげに放たれたが、どこか正反対のトーンが籠もつていたのも事実。ちょうどかれが、自作の自称万能オーディオを「鉄クズ」と呼ぶよ

うな。いや、さらに細やかな感情が。

「『じめんなさいね。危険な仕事を押しつけちゃって。でも、あなたに頼むのが一番早くして確定だから』

メガトンおっぱいは、いきなりかれらに田を向けた。そこで初めてイシカワも顔を見た。薄い唇が真紅に塗られているため、笑うと赤い新月のよう。茨城麗子という名は、あとで一葉から知らされた。

「あのヤロー」が勤める会社の社長秘書だとか。

「頼もしいボディーガードが、一人もいたのね。ありがとう」

ミニサイズのワームも殺さないようなタミーとワンセットにされたのは不服だったが、おっぱいの魔力に呪縛されたように、エヘヘとかれは頭を搔いた。そのまま麗子は身をひるがえし、車に飛び乗ると、ブレーーキ音を響かせてリターンし、走り去ったのだ。あとには変てこな軽量型トラックが残された。乗っているのは、一葉の兄だといつ。

今運転している「カズ兄さん」と瓜二つだが、赤いキャップを前向きに被つており、「イチロー兄さん」と一葉は呼んだ。かれこそボディーガードとして来て居ることは、なんとなく理解できた。降りる前に「イチロー兄さん」はマイクつきのヘッドフォンを外し、どう見てもバズーカとしか思えない筒を、後ろの座席へ放り込んだから。一葉が訊いた。

「これからどうするの。学校へ行く？」

かれらは顔を見合わせた。全く選択肢に入っていないなかつたことが、お互の目の中に読みとれた。

「行かないんだ。じゃあうちに来ない？『ご飯くらい』馳走するよ異存はなかつた。イチロー兄さんは怖かつたし、茨城麗子も含めて、明らかに善良な地区民とは思えなかつたが、昼飯はおろか、夕飯までしつかり』馳走になつた。そして今に至るのだ。

震動だ。

気のせいかと考えたが、それは一度、二度と続ざまに体に伝わる。地震ではなく、爆発でもなく、何か重いものどうしがぶつかるようだ。例えば、一台のトラックが断続的に、追突を繰り返しているようだ。

最初、震動に気づいたのはおれだけのようだつた。相変わらず、暗い街路が続いていた。敏感な小動物のように、一葉がバックシートから身を乗り出したとき、おれの予感は確信に変わつた。

「何かしら

一彦がブレーキを踏んだのが三十秒後。車が止まるとき、かれはヘッドライトをアップにした。文字どおり、四基のライトがモーターで持ち上がり、強い光を前方に投げかけた。煙が見えた。路肩に乗り捨てられた車のうち、何台かが燃えているらしい。エンジンも燃料も抜かれていらない車が残っていたのは、驚きである。

深夜徘徊の不良少年どもが、面白半分に燃やしているのか。どうやら、そんな可愛い連中の仕業でないことは、路面をふさいで黒々と横たわるシルエットが物語つていた。

大きさは、ちょうどこのトラックくらい。ずんぐりむっくりして、背が丸く盛り上がり、頭部は小さい。後方では四本の細長い尾が、神経的に蠢いている。絶滅したアルマジロという動物を、何十倍も巨大に、何百倍もおぞましくしたような……そいつは乗り捨てられた小型バスに体当たりすると、一撃で見事にコの字にへこませた。ぐわんと音がして、地面が揺れた。

「エイジさん……

「ああ、間違いない。アーマードワームだ」

第三種に分類される。ここまでのデカブツはおれも初めて目にす  
るが、腹部を除く全身が、非常に硬いウロコで覆われているのが特  
徴。兇暴性は低く、普段はおとなしいくらいだが、こまつたことに  
人肉が大好物。一度味をしめると、人間を襲うようになる。

おそらくこいつも、車内でいちやついているカッブルでも食つた  
のだろう。それでほとんどがスクラップとも知らず、路上駐車の車  
を漁つていたのだろう。こんな具合に頭も鈍いので、処分は比較的  
楽なほう。動作ものろくさいし、一度引っくり返してしまえば、ミ  
ニリボルバーでも仕留められるが、いかんせん、こいつはでかすぎ  
た。

アーマードワームは、後退りして小型バスから離れると、体をこ  
ちらへ向け始めた。いくら動きが鈍いとはいえ、突進して来られた  
ら厄介だ。長い耳の下で、四つの眼がライトをぎらぎらと反射した  
とき、後ろの不良少年が、ひつ、と小さく叫んだ。

「やれやれ、いつからこの地区は、第三種のワームが公道をのし歩  
くようになったんだ。」のぶんじや、フェイズワンが発動するのも  
時間の問題だぞ」

「つべこべ言つてる暇があつたら、何とかしたらう? 専門家でしょ  
う」

後ろから一葉に首をしめられつつ、おれは再びイズラウン製の弾  
薬を取り出した。通常、アーマードワームを処分するときは、地雷  
へ追っこむか、チームを組んで一手に分かれ、一方がロープを使つ  
て引っくり返す役を受け持つ。もちろん、今のところそんな余裕はな  
さそうだが。

「カズ、サンルーフを開けてくれ」

屋根に出て片膝をついた。意外に強い夜風が、よれよれの外套を  
はためかせた。おれは脇に吊つたホルスターから六インチのパイソ  
ンを抜き、シリンドラーを外した。六発こめていた弾を全て抜いてポ  
ケットに收めると、かわりにイーズラック人から買つた弾を、一発  
だけ装填した。

通常の弾丸では、軽く弾かれてしまつ。ここの衝撃で、どうにかこうにか引つくり返すことができたら、あとは足で踏んでも処分できる。

前方に盛り上がる小山のような背中から、べぐもつた咆哮が洩れた。好物のにおいを嗅ぎつけて、四つの眼が、まがまがしい光をあげた。巨体の両脇がおぞましい蠕動を開始し、間もなく推進運動へと変換された。地響きとともに、アーマードワームはまっすぐに突っ込んできた。

思ったとおりの行動に出てくれるとは、なんて単純なやつ。一瞬先の行動も読めない多脚ワームに、爪の垢を煎じて飲ませたいくらいだ。とはいって、この一発がもし不発だつたら、まずもつておれはオシャカだ。ま、そのときはそのとき。やつが一番不味い男を食わされている間に、一彦がうまく逃げてくれるだらう。

「ナムハチマンダイボサツ」

こんな時に効くのだといふ、かつて妻から教わったマジナイを口にするごとに、急接近してくる黒い小山に狙いを定めて、引きがねを引いた。

轟音。そして、すさまじい反動。

ある程度覚悟して踏ん張っていたものの、おれは耐えきれず、トラックの屋根から後ろに弾き飛ばされた。ゆえに、ガス輸送車が丸ごと吹っ飛んだような音を聞いたときは、まだ宙に浮いていた。路面を転げて、ようやく顔を上げたとき、トラックの前方に巨大な火柱が出現し、辺りを昼のように明るく照らしていた。

動きを止めるどころの騒ぎではない。アーマードワームは、まさに木つ端微塵だった。

再び、トラックが動き始めた。

おれはぐつたりとシートにもたれ、目を閉じていた。ジャケットにこびりついた硝煙の臭い。冷却スプレーで応急手当はしたもの、右の手首がずきずきうずく。打ち身と擦り傷で、体じゅうが痛み、瞼の裏では、炎の残像が狂気のカドリーを踊っていた。

しかし、この程度で済んだのは、儲けものと言わざるを得ない。もしツキに見放されいたら、今頃はデカブツの腹の中か、あるいは手首から先を銃に持つて行かれたか。いずれにせよ、二葉のゴーツを音楽のように聞きながら、のんびり座つてなどいられなかつたらいい。

「まったく、専門家が聞いて呆れるわ。街なかで、野戦砲なみの火氣をぶつ放すなんて。もし屋根から落ちてなかつたら、エイジさん、今ごろあなたローストチキンよ」

肩をすくめた。チキンは臆病者のスラングなので、まさにその通り。世にも食えない鶏料理の出来上がりというわけだ。

「なんで黙つてるのよ」

「おれは食えないが、きみははつまうこと言つ」

「ばかじゃないの。曲がりなりにも、あなたが体を張つて守つたんでしょう。ズぶ濡れの野良犬みたいにしょぼくれてないで、少しは胸を張りなさいよ」

と、すこぶる機嫌がよくない。手首に包帯を巻いてもらつたとき、珍しく甲斐甲斐しいね、などと軽口を叩いたのが癪にさわったのか。隣で一彦が、しきりにくすくす笑つているが。

「しかし驚きましたね。バイソンは無事なんですか」

「ああ。とつぐにオシャカかと思つていたが。シリンドラーが焦げた

程度で、まだまだ撃てるよ」

コルト・パイン。何百年も前のオリジナルと外見は同じだが、電気弾や特殊な火薬が撃ち出せるよう、一応は改造強化されている。処理班時代から、ともに死線を越えてきた銃なので、さすがに愛着もある。ふくれ面のまま、二葉が口をはさんだ。

「そういえばエイジさんで、回転式ばかりよね。M36もそうだし。業界では珍しいんじゃないの？」

「クラシック銃を愛用している時点で、珍種の部類なんだが。普通はオートマチックだよなあ」

「どうしてリボルバーにこだわるの？」

弾倉がクルクル回るからさ。そう答えると、二葉の目がまるくくなるのが、見ないでもわかつた。数秒後、「変態」の一言で締めくくられた。まったくその通りなのだが、なぜか昔から、回るもののが好きなのだ。中でも観覧車は最高だ。乗るよりも、眺めているほうが面白く、とくに日が暮れてから、きらきらと回転する光景は、いつまでも見飽きなかつた。

今ではルナパークから、観覧車は撤去されている。派手好みの前政権から儂約路線へと移るに及んで、抹消されたもの一つだ。おれは決して前政権の支持者ではないが、無駄の一言でささやかな夢をつぶされるのは、やりきれない。

不意に、瞼の裏の残像が一人の女の姿を結んだ。きらびやかな観覧車を背景に、女のシルエットはたたずみ、夜風に髪をなぶらせていた。妻だろうか。幻影だと知りながら、意識は歩み寄ろうとあがいた。近くでいきなりオルゴールが鳴り始め、明滅する灯りが彼女の顔を照らした。

レイチェルだった。赤い月のように、微笑んでいた。

車が停車する反動で、短い夢から引き戻された。目を開けるまでもなく、おれのチキンな二の腕は、見事に粟立つていた。例の人を食う私道の前に着いたのだ。となると、なぜ二葉がこんな遅い時間に、下見と称しておれを現場に連行したのか、意図の十分の一くら

いはわかる気がした。

突進するアーマードワームを前にしたときも、これほど恐ろしくはなかつた。そもそも恐ろしさの質が違ひ。あのときは闘牛士の心境。対して今は、デカブツの何十倍もある鯨の背に乗つた、エイハブ船長の気分だ。

有名な物語と異なり、鯨の影は漆黒だ。海原の下に、漏出した海底油田のように広がつてゐる。そいつは限りなく兇暴で、全人類に敵意を抱き、血みどろのアギトで無数の人間を噛み砕いてきた。それはわかっているけれど、今はなぜか不気味なまでに、鳴りをひそめている。

船はおろか、島影すらない。見晴るかず大海原の中、漆黒の巨影の上に独り、ぽつんと突つ立つてゐる。そんな不安感……おれはあえて尋ねた。

「ここはどこだ」

「夜の動物園」

口の端を歪めて笑い、目を開けた。夜の動物園か。ガキの頃はそう聞いただけで、うきうきしたものだ。様々な遊具がきらきらと回つていたし、いじけた夜行性の獣どもにさえ親しみを覚えた。処理班で働くようになつてからは、仔猫を見るのも厭になつたけれど。

外はまだ風が強く、しかもみょうに生温かかった。にもかかわらず、ゾッと寒氣を覚えて、外套の衿を搔き合わせた。硝煙の臭いが、なぜか少しばかりおれを安堵させた。

「これだけの人数がいれば、まず彼女は仕掛けてこないわ」

「彼女？」

「赤い靴の、ね。青表紙のファイルにもあつたでしょ。彼女が襲うのは基本的に、一人。多くて二人までよ。もちろん、用心するに越したことはないけどね」

それで「ボーキフレンド」を一人も連れていたのか。

敵が襲撃する人数をしほるのは、明らかにトラップを使用するためだ。広範囲に攻撃できないうえ、一人でも逃げられたら、仕掛けがバレてしまうのだろう。

ならばどう出る？

依頼の内容によつて、おれは個人で行動するときもあるれば、チームを組む場合もある。今回のような大捕り物となると、もちろん複数で動く。その場合、人員の選抜はおれに任される。予算によるが、個人的に他の業者を雇うのはかまわない。

しばしばおれは、八幡兄弟に話を持ちこむ。ぼつたくられる心配がなく、へたな業者より手際がいいから。しかし薄々気づいていたけれど、私道の俯瞰図を一葉に依頼したのは、ワットの野郎か茨城麗子に決まっている。未成年者を巻き込むのは、おれの主義に反している。

ともあれ、私道にオトリを泳がせつつ、武装したハンターで周りを囲む、オーソドックスな戦術が最も効率的とえいる。が、居住地に囲まれた私道の性質上、それは不可能。必然的に、二人以下のハンターがオトリを兼ねるしかない。すると必然的に、おれとアマリリスが……

ワットの恐るべき笑顔が浮かんだ。何もかも、やつの思惑どおりじゃないか。

「夜間のご入園はこちらからお願ひ致します。硝煙臭いお客様さま」

一葉が片手でスカートを押さえ、もう片方の手で、鉄の門扉を差していた。すでに縄梯子がかかっているのは、一彦の早業だろう。

常夜灯代わりに、ヘッドライトが無言で奥を照らしていた。

いにしえのニンジャのようだ、おれと一彦は縄梯子に取りついた。背の高い不良少年が後に続き、どすんと尻餅をついた。一葉はもう一人の小柄な少年と、格子の隙間から易々と入ってきた。レディを受け止めるアテが外れたのか、不良少年は呆然としていた。

常緑樹の黒い影が風にざわめき、獣の唸り声に似た音をたてた。石畳の道がぼうっと蒼く浮かび、前方で闇に呑まれていた。車の中で感じた恐ろしさは飽和状態に達し、むしろ感情を麻痺させていた。それでいて、木の葉一枚一枚が鳴る音まで聞き分けられそうなほど、神経が研ぎ澄まされている……この感じ。

それは処理班時代に何度も味わった感覚と、よく似ていた。

さらに奥へ進んだところで、さつそく怪異にみまわれた。

噴水が湧いていた。みずから燐光を発するような、青い水しぶきを散らしながら、怪魚の口から水盤へと、滔々と流れこんだ。怪魚の眼はザク口石の色に輝き、苦悶にのたうつように身をくねらせながら、さらに大量の水を吐いた。水盤の中では、まるまると肥えた生き物が泳ぎ回り、水棲哺乳類めいた背中を、時折ぬらぬらと覗かせた。

パインソングリップにかけた手を、一葉が肩で制した。

「プラズマの亡靈に過ぎませんわ、お客様」

先を行く衿の白いラインを、慌てて追いかけた。道が蛇の背のように浮き上がり見えるのは、ライトによる錯覚とは思えない。ガラスの割れた常夜灯がひとりでにともり、しゃうしゃうとガス状の光を発した。そこへ群がるのは小型の翅つきワームではなく、とつこの昔に絶滅した珍種の昆虫とおぼしい。

肩にとまつた一匹を、ぎょっとして払いのけた。全長を越える触角。モダンアートのような、翅の模様。きしきしと首を振りながら、昆虫は石畳に吸われるよう消えうせた。

森の中に散らばる檻の中では、蒼白い炎が燃えていた。たとえ触れても、熱さは感じられず、むしろ氷のように冷たいのかもしれない。古い怪談話の中で、温度のない炎は「陰火」と呼ばれる。肉体を失った靈魂が、恨みを残して燃えるという。実際、それぞれの蒼い炎の中には、獣たちがうずくまっていた。

かれらは一様に、蒼い、凍りつくような眼差しで、おれを凝視していた。

(もうたくさんだ)

木立から日をそらし、道を急いだ。いつ二葉を追い抜いたのかわからない。左側でどつと光があふれたため、思わず身構えた。見れば、誰も乗っていない瀬戸物のメリーゴーランドが、くるくると回っていた。伴奏もなく、みずから陰火を発して、首のない馬や、天蓋の落ちた馬車が、ごとんごとんと音をたてて。いや……

一人だけ、白い馬に乗った少女がいる。つややかな鞍の上に、ちよんと横座りして、青いリボンのついた帽子をかぶり、リボンと同じ色のワンピースを着て。まるでスローモーションの映像のように、徐々に迫り出してくる。

白い、薄汚れたソックスの先に、エナメル質の赤い光沢をみとめたとき、おれは背中に水を浴びた気がした。

人間の顔ではなかつた。

見開かれた瞳は瞬きひとつせず、どこまでも虚ろな眼差しがじつとこっちを見つめて……木馬が遠ざかるにつれて、等身大のビスクドールの首は、あり得ない角度にねじ曲げられた。ふくよかな唇に、薄い笑みを浮かべたまま。

目を開けると、ほんの数センチ上にアマリリスの顔があった。

「わっ」

「お目覚めですか」

驚いた反動で、危うく頭突きを食らわせるとこ。彼女が軽く身をかわしたのは言つまでもない。

「十時になりました。今すぐ紅茶をおもちしますが、一いちらでお召し上がりですか」

目をしばたかせ、ほとんど惰性でうなずいた。彼女の姿が視界から消え、かわりに天井が白っぽくのぞいた。朝食の用意をしていったのか、部屋にはクロツク鳥の卵を焼いた、甘い香りが漂っていた。カーテンを開ける音が聞こえ、陽光が天井を明るく照らした。今朝は晴れているらしい。それにしても、

（さつき、偶然目を覚まさなかつたら、アマリリスは、どんな方法で起こすつもりだつたんだろう。この件はぜひとも、問いただしておかなければ）

と、決意してみたものの、起き上がると同時に忘れていた。言うまでもなく、おれの血圧は極めて低い。

「痛てえ……」

体の節々がずきずきする。ポンコツチャペックに神経があれば、こんな感じだらうか。右の手首には、真新しい包帯が巻かれまま……おれはハツと振り向いた。枕元には今朝の新聞が、きれいに折りたたまれていた。夜中の事件なら、もう出ている筈。新聞を引っかみ、がさがさと開きながら、社会面や地方版に目を通した。さびれた郊外だった。周囲にひと氣はなく、建物も見当たらなかつた。それでも街中で、あれほどの爆発が起きたのだ。それに、あ

の時のアーマードワームの行動からして、犠牲者が出でいないとは思えない。にもかかわらず、関連づけられそうな記事は、一行も出ていなかつた。

「紅茶をおもちしました。ジャスマシンとブレンドしてみたのですが、カップの載つた盆を手に、アマリリスが小首をかしげていた。本人は微笑んでいるつもりかもしないが、時計みたいにコツチコツチの無表情。

「えつ。ここで飲むの？」

「はい。九分三十五秒前に了解していただきました。それとも、変更なさいますか？」

「いいよ、ありがとう。なんだか本当に、新東亜ホテルに泊まったみたいだなあ」

ここで一緒に笑つてくれると聞がもつのですが、彼女はおれを置き去りにして、サイドテーブルにカップを載せた。彼女にウィットは通じても、ジョークは通じないという法則を得た。

「十五分後に、お食事でかまいませんか？」

うなずいてみせると、背を向けた。背中の白いリボン結びが、可憐に揺れた。ここでやつと気づいたのだが、昨日とくらべて、ちょっとよそよそしひきはしないか。機械によそよそしいも何もないのだろうが、やはり昨夜とのギャップを感じる。平たく言えば、どうも今朝は機嫌がよくない。顔には全く出さないが、出さないゆえに、滲み出てくるオーラを感じる。

けれど考へても仕方がないので、新聞をたたんで膝に載せ、カップを手にした。紅茶の味は申しぶんなく、しかもジャスマシンがほどよく効いて、ともすればまどろみそうになる神経を、じだいに覚醒させるようだ。ふと紙面に目を落とすと、「新型ワーム」の文字が目に飛び込んできた。

「なんだと？」

少々紅茶に噎せつつ、慌てて新聞を取り上げた。第一面の記事を見落としてたとしたら、「もと暗し」どころか、灯台そのものが見

えていなかつたに等しい。が、すぐにそれは全く別の地区を報じたものと判明した。CN-44地区といわれても、どのへんにあるのか見当もつかない。

嘘か誠か、新型ワームは天使とそっくりな姿をしてこりう。そんなものが現れるようでは、世も末である。

「世界の終末を象徴しているのかしら。シアラトウストラ教徒が聞いたら、放つておかいでしょ」

驚いて顔を向けると、ソファから一葉が立ち上がったところ。ソーサーごとティーカップを手にしたまま、いかにもうまそうに一口すすつて、音が出そうなウインクてくれた。

「きつ、きみ、学校は？」

「創立記念日よ」

髪を編んでなければ、眼鏡もかけてないので、最初から行くつもりなどなかつたのだわい。ずっとそこにはいたのかと尋ねれば、九時半からいたと言つ。

「起こしてくれればよかつたのに……もしかして、アマリリストに阻止されたのか？」

「まさか。そこまで融通が利かない子じゃないことくらい、あなたが一番わかっているでしょう。時間まで寝かせておくよう、わたしが頼んだの。だつてエイジさん、丸太のように眠つてゐるんだもの」肩を揺らして笑つてゐる。よく紅茶がこぼれないものだ。おれはさつと田を走らせ、一葉を小さく手招きをした。怪訝な顔で近づいてきたところ、彼女の耳に囁いた。

「なあ、どうしてあの子が不機嫌なのか、わかるか？」

いきなり囁くとは思わなかつたのか、一葉の横顔は目を見開いていた。みるみる頬が赤く染まり、音がしそうな瞬きをした。

「ば、ばかね。そんなの決まつてゐるじゃない。ゆうベエイジさんは彼女を置いて出かけ、擦り傷やら打ち身やらを、いっぱい作つて帰つてきた」

「それで？」

「アマリリストちゃんは怒つた」

複雑な方程式か、禅問答を前にしたように、うーんと腕を組んだ。木魚でも叩きたい気分でしばらく考え、ぽんと膝を打つた。

「つまり、置いてけぼりにされたのが気に食わなかつた？」

「ピルトダウン人みなの鈍さね」

アマリリストが顔を出し、食事の用意ができたことを告げた。ダイニングに入ると、テーブルの上には当然のように、三人ぶんの朝食が。クロワッサンにバター。ベーコンエッグにサラダ。唐辛子とトマトで味付けした玄三豆のスープ。パンとクロック鳥の卵以外、缶詰であることを忘れるほど、上手に調理されていた。

「豪家だなあ」

ばかみたいな、けれど素直な感想をもらしたもののは、依然、少女は表情を変えない。あからさまに怒つてはいながら、明らかに怒つている。

「最近では月に一種の割合で、新型ワームが出現しているそうよ。もちろん、第三種以上の、ね。でも、あくまでこれは政府が公認した数だから、現状はもつとひどいんでしよう」

クロワッサンをちぎつてはスープにひたしながら、一葉が言つ。まるで隣の猫が仔猫を何匹生んだとか、そういう口調である。おれは苦虫を大量に噛みぶつした。

「大規模な変動が起こる前ぶれ、か……」

「ツアラトウストラ教の信者でなくとも、天使型ワームの出現は、やっぱり気になるわ」

ワームとIBは根本的に異なるが、決して無関係ではない。これまで多くの地区が、イミテーションボディによつて壊滅させられており、最近また、惨劇が起こる頻度が増えていた。いくら政府が情報統制を行つても、そのての話は、おのずと耳に入るものだ。そうして、IBの侵攻が始まる前ぶれとして、ワームが必ず不穏な動きを見せた。

すなわち、大量発生や、極端な巨大化、奇形化、新種の出現などである。

ツアラトウストラ教の中でも過激な一派は、これこそ救世主到来の前兆と騒ぎたてる。かれらのいう救世主とは、神ではない。肉体を備えた「超人」であり、最終的には人類が超人へ進化することで、この地獄じみた世界から救われると説く。そして人類進化の鍵を握るのが、イミテーションボディであるらしい。

なかば無意識に、おれの視線はアマリリスに向けられた。  
少女はパンを切り分けるのにも、フォークとナイフを使つていた。一切れずつ、器用にバターを塗つて口へ運ぶ。中学生くらいの女の子が、マナー本を読みかじつた姿と何ら変わらない。しかしツアラトウストラ教徒にとっては、彼女はまさに「超人」の資格を備えていまいか。

「そうね。彼女の存在がジークムント旅団あたりに知られたら、ちよつと厄介よね」

まるでおれの頭の中を読んだように、二葉が言つた。ジークムント旅団とは、ツアラトウストラ教過激派の一つで、東アジアに勢力圏をもつ。宗派の理念のためなら人殺しも厭わない、テロリスト集団である。この地区にも潜入しているという噂があり、刷新会議は躍起なつてアジトを探しているようだ。

思い起こせば、少女が眠つていた黄金のカプセルは、ツアラトウストラ教の礼拝堂とおぼしい場所で発見されたのだ。二葉の言葉は、

鉄槌の音のように重く、胸の内に響いた。

「ところでわたし、エイジさんの意見を聞きに来たんだけど」  
彼女が来意を告げるとは珍しい。もの聞いたげな視線を向けると、  
手でつまんだレタスを口へ放りこみ、挑発的に指を舐めた。

「見たんでしょう、あれを」

「あれ？」

「赤い靴を履いた女の子」

寒氣におそれた。長い睫毛に縁どられた、決して瞬きしない、  
どこまでも虚ろな眼差し。ふつくらとした唇が、真後ろを向いたま  
ま、薄く微笑みかけるさまが、ありありと浮かんだ。

木馬の回転につれて人形が視界から隠れると、メリーゴーランド  
は、いつのまにか静止していた。常夜灯は消え、噴水は死に絶え、  
檻の中の獣たちは、蒼い燐光ごと見えなくなっていた。あとには、  
闇を孕んだ常緑樹のざわめきだけが残された……

「人形だつたよ。等身大のビスクドールだ」

たしかに、世にもおぞましい光景だった。けれどあれが人形であ  
る以上、最もおれが恐れていたものとは違っていた。そのことを確  
かめられただけでも、夜中の下見は無駄ではなかつた。

「そう……あの入形は明らかに、「擬人」ではなかつた。

「わかつてゐるわよ。わたしも見たんだから。そうじやなくて、少女入形と連續失踪事件との繋がりについて、どう考へてゐるわけ？」

なぜかいつも一葉は、サラダにドレッシングをかけない。指先でレタスを器用に折りたたんでは、そのままさくさくと噛んでいる。おれは答えた。

「そういうえば、だいぶ前にそんな怪奇映画を観たな。古い屋敷で、夜な夜な入形が動き出して人間を襲うという。むごたらしい連續殺人事件の犯人が入形だなんて、最初は誰も疑わない。昼間、やつらは愛らしい顔で座つてゐるからね。ところが夜になると白目をむき、牙を剥き出しにして歩き出す。包丁を逆手に持つて、寝室に忍び込む」

面白い映画だったの、つい言い方に熱が入つた。随所でチャペックをうまく使つた仕掛けも凝つていた。おれはキッチュな怪奇映画が大好きなのだ。けれど目をやると、一葉は世にもつまらなさそうな顔をしており、反対にアマリリスは、まん丸い目をして、身を乗り出していた。

「あの……マスター、そのお話の続きは、どうなるのですか？」

もしかしてこの超兵器は、怖がりなのだろうか。

「心配しなくとも、最後はちゃんと退治されるよ。悪魔祓いの専門家が事件解決に乗り出すという、お定まりのパターンさ」

「まさか少女人形が牙を剥いて、被害者たちをペロリと食べたなんて、言わないでしようね」

「ああ。間違ひなく、入形は目くらましだよ。注意を引きつけるためのオトリさ」

「典型的なトラップというわけね。絶滅した深海魚みたいな」

おそらくアンノウのことを言つてゐるのだろう。牙だらけの巨大

な口をもつこの魚は、海底の砂の中に潜み、頭部の疑似餌を動かして他の魚をおびき寄せ、捕食するという。

「問題は、本来の敵がどんなやつで、どれほどの能力をもっているか、まったくわからないことだ。私道のどこに潜んでいるやら、それも含めてね」

「一応、スキヤナーは雇つ?」

情報屋の中でも、機械による探知機能に特化した業者を、スキヤナーと呼ぶ。どうかな、と、おれはつぶやいた。

「ゆうべは愛らしい手品に夢中で気づかなかつたが、一彦が複合力ウンターで、私道の端から端までスキャンしたそうじゃないか。けれど、狂った磁石のように、始終めちゃくちゃに針が触れて、お話にならなかつたとか。小型とはいえ、一彦のカウンターは博士がチューングアップした精度の高いやつだろ? そのうえプロを雇つたところで、成果があがるかどうか」

計器が狂う理由は、わかりきつている。あの辺り一帯の地下に、とんでもない汚染物質が埋まつてゐるからだ。住民たちはその上で、何も知らずに寝起きしている。よくあることだが、やりきれない話だ。

アマリリストが食器を下げ、紅茶一式を載せたカートを押してきた。相変わらず感情がつかめないが、少しは機嫌が直つた模様。ソーサーを持ち上げて、一葉が言う。

「昨夜の怪異については?」

「きみはプラズマの亡靈だと言つていたが。やはり、あのワングロックの地下に、汚染された動物園が埋まつていてこと、関係があるんだろう? か」

「大ありでしうね。情報やエネルギーを地下から汲み取つて、幻影に変換した、といつた感じかしら。まさに亡靈が出現するプロセスと同じなのよ」

「変換機の役目を果たしたのが、深海魚……本来の敵なんだな」だとすると、並大抵の能力ではない。狡猾な多脚ワームでさえ、

あれほど大規模な幻像を生み出せるタイプには、そろそろお目にかかるないだろ？……煙草に火をつけ、深々と吸つた。えらく染まると思えば、起きてまだ一本めの煙草だ。

ノックの音がした。

このあいだ、武装警察に踏み込まれたばかりなので、おれはぴりぴりと緊張した。

「一葉はここを動くな。アマリリストが応対に出る。相手が誰か名乗らせんんだ。おれが合図するまで、決してドアを開けるな」  
まだ長い煙草を揉み消し、一秒間迷ったあと、パインソングを手にした。なんとなく、胸騒ぎがしていた。アマリリストがドアの前に立つと、向こう側から死角になる、左側の壁に張りついた。少女が誰何する声を聞きながら、カメラつきインターフォンは買うべきだと考えた。

「クラウン宅配です。お隣の一〇七号室のかたがお留守みたいなので、よろしければ、荷物を預かっていただけませんか？」

少女の隣に割り込み、ドアスコープを覗いた。黄色いぶかぶかの作業着に、緑の帽子をかぶった小男がたつており、後ろに運搬用チヤペックが。同様な帽子をかぶり、商標入りのエプロンをつけ、ボール箱をひとつ抱えていた。何の変哲もない、宅配業者の姿。

伝票を見れば、レイチエルの本名がわかるかも知れない。そんな好奇心は、たいてい面倒な結果を招くものだが。アマリリストを後ろに下がらせ、パインソングをベルトにはさんで、ドアを開けた。小男は年齢不詳で、この業者のトレードマークであるピーポのメイクをしていた。

「ここにサインをお願いします」

チャペックの腕が前方に伸びて、ボール箱が差し出された。上に貼られた黄色い伝票に目を走らせるとき、たしかに住所は隣の部屋。宛名は、「レイチエル様」だ。送り主は、株式会社東部ネットワークという、何屋ともとれる会社名。拍子抜けした気分でサインすると、ピエロは控えをもぎとつた。

「じゃあ、お荷物のほう、お渡ししておきますね。ちょっと重いので、お気をつけください」

満面のニヤニヤ笑いで言う。チャペックは、緑色の帽子をかぶった頭部をペコリと下げ、腕の位置を心もち低くして、ロックを外した。横幅が四十五センチほどの段ボールは無地で、なるほど、リンクをいっぱい詰めたように、ずしりと重い。一旦、床に下ろそうと思いつつ、振り向いたところで、おれは驚愕に目を見開いた。

アマリリストの左手は、すでに長大な金属の爪状に変化していた。

「マスター、箱を投げて！」

思案する暇はなかつた。渾身の力で箱を放り出すと、少女は片膝をつき、爪の切つ先を揃えて、真っ直ぐに突き出した。何かが貫かれる確かな手ごたえが、鈍い音と化して響き、次に化け物じみた、世にもおぞましい悲鳴が炸裂した。粘性をともなう青黒い液体が、壁に、大量に飛び散つた。

銃を抜くことも忘れて、おれは床に落ちたボール箱を見つめた。青黒い染みがみるみる段ボールを濡らし、床に広がる。裂け目から黒い毛の塊が覗いており、ぴくぴくと痙攣しながら、六十センチほどの針金のように細い突起を何本も突き出した。

突起のいくつかは宙に跳ね上げられたまま、別の何本かは脚の役目を果たして、球状の毛の塊である本体を持ち上げた。そのままのろのろと、玄関の方へ這つて行こうとする。

「藻状ワームか」

本体である頭部と、細長い十一本の突起から成り、頭部には魔除けの目とそつくりな感覚器が、縦に三つ並んでいる。カテゴリーは第三種。家屋に棲みつかれたが最後、寝ている人間のもとに音もなく忍びより、毛むくじゃらの頭部の下から針を伸ばして首に突き刺し、あくまで血を啜るのだ。

玄関にたどり着く前に、藻状ワームは、ぐしゃりと音をたててくずされた。頭部がほぼ両断されており、切断面から、脳髄に似た臓器がどろりと垂れた。

飛ぶように、アマリリスが目の前を横切つたので、ようやく我に返った。パインソーンを抜いて後を追つと、回廊で先程の運搬用チャペックが、お出迎えとばかりに、三重チーンソーを振りかざしていた。

頭部を狙つて一連射したが、一発とも帽子のツバにのめりこんだ。海綿体金属による防弾装甲だ。その間に、発狂したタービンのような唸り声を上げて、チーンソーが少女の頭上に振り下ろされた。ギイイイン、という、世にもおぞましい音が、回廊に鳴り響く。少女は挨拶するように左手を上げて、三重チーンソーを受け止めていた。

ひととおり火花を散らしたあと、爪の間でチーンソーは完全に沈黙した。バーがぐにゃりと握り潰された。チャペックは武器を手放し、恐怖するように頭部のセンサーを明滅させて、一、二歩後退した。チーンソーを床に放り出し、体勢を低くしたところで、アマリリスは肩越しに振り向いた。もの聞いたげな眼差し。

「動力だけを止める。メモリーカードは回収したい」

彼女が踏み込むまで、一秒ほど間があったのは、チャペックの内部をスキヤンしたのだろう。ハガネの爪が、軍用なみのぶ厚い装甲を貫き、引き抜かれたときは、エンジンをまるごとつかみ出した。文字通り、チャペックは立ち往生していた。ピエロはとっくに逃げていた。

「とんだとばっちりね。この間の武装警察といい、隣のお嬢さんは、

なんて人騒がせなかしら

いつの間にかドアの横に、一葉がもたれていた。両腕をさすりつ  
つ、思いきり眉をひそめているのは、藻状ワームの死骸を見たから  
だろう。

「こう考えるのが妥当かしら。愉快なピエロの宅配屋さんは、お嬢  
さんを殺すために放たれた刺客である。もしお嬢さんがいれば、遠  
慮なくチェーンソーで切り刻んだし、留守の場合は、飼い慣らした  
藻状ワームがやってくれる。いずれにせよ、早急に始末する必要に  
せまられていた、と」

「しかし、曲がりなりにも人類刷新会議は、政府当局だぞ。ここま  
であからさまな暗殺をやらかすと思うか？」

武装警察の指揮官、コードネーム「カラリ」の姿が思い起こされ  
た。バイザーを持ち上げたときの、赤い唇……彼女があんなピエロ  
に化けたなんて、考えるだけでナンセンスだ。ワームをけしかけた  
り、三重チェーンソーを振り回したり。刷新の肩を持つ気はさらさ  
らないが、あまりにもスマートさに欠ける。

「エイジさんだって、刷新会議のしわざとは、はなから考えてない  
んじゃない？」

「だが、ほかにどんな勢力がレイチャエルを殺す必要があるのか、皆  
目見当がつかない。首長の残党どうしの内輪もめか？」

「あり得ないとは言えないでしょう。レイチャエルさんが、首長の血  
族だという仮設にしたがえば……アマリリスちゃん」

呼ばれて少女は振り向いた。左手は元に戻っているが、袖口が見  
事にぼろぼろだ。

「そのチャペックのエプロンを外してみて」

うなずいて運搬用チャペックに歩み寄り、上半分が焦げたエプロ  
ンを丁寧に外した。胸部にぽっかりと開いた穴から、金属臭のする  
煙を吹いていた。その下の黒いボディーは磨きあげられたような光  
沢があり、白いラインでくつきりと、Aの字を逆さにしたマークが  
入っていた。おれは目を見張り、さすがに一葉も口に手をあてた。

「シマラトウストラ教  
……！」

レイチェルの部屋の合鍵は、とうくにハ幡兄弟がこしらえていた。ふだんは施錠してあり、この日も当然、閉まつたまま。鍵を開けて調べてみたが、誰もいないし、いた形跡もみとめられなかつた。

一葉の連絡を受けて、一彦が運搬用チャペックを引き取りに来た。

「それにしても驚きましたね。エンジンだけを抜き取るなんて、まるで手品ですよ。このまま売りに出せるくらい」

電気で動く家事用と違つて、運搬用にはガスディーゼルエンジンが使用されているため、へたをすると大爆発につながりかねない。このタイプがよくテロに使われるのは、さんざん暴れたあと爆発すれば、さらに死傷者を増やせるからだ。ほぼ完全な形を残したまま動きを止めるなど、たしかにマジックだ。

「カードさえ解析してくれたら、あとは売るなり部品をとるなり、好きにしていいよ。ただ例のマークは忘れずに消しておいてくれよ」

Aの字を逆さにした、ツアラトウストラ教の紋章……

しかも攻撃性から考えれば、ジークムント旅団である可能性が高い。かれらがワームを兵器として使用する研究を、密かに行つているという噂がある。もちろん南京議定書に違反するが、テロリストにルールは通用しない。

「面倒なことになつたわね」

一葉に言われなくてもわかつていた。逃げたピエロは、教団に報告するだろう。アマリリストが藻状ワームを一刀両断にし、鉄筋コンクリートの柱も切り倒す三重チーンソーを片手で受け止め、チャペックのエンジンを引きずり出したことを。さすがに彼女が、イミテーションボディだとは気づくまいが、確実に目をつけられた。

では、あの場で箱の中身を処分しないほうがよかつたのか、それ

は何ともいえない。即座に箱を放り出さなければ、藻状ワームが先に飛び出して、まずおれたちを屠り、腹ごしらえした後で、レイチエルの帰りをじっくり待つつもりだったのかかもしれない。

「引っ越ししたほうがいいんじゃない？」隣の空き部屋には、魑魅魍魎が引き寄せられて来るみたいだし。このままじゃ、身がもたないでしょ？

毛布にくるまれた置き土産を、一彦と作業用チャペックが運び出した。アマリリストはきつたりと顔を吊り上げ、腕まくりして、さつきからモップ掛けに余念がない。立つたまま紅茶を口に運びつつ、二葉が語を継いだ。

「なんなら、うちに来ない？」

考えておくという返事に、彼女は苦笑いしてみせた。相崎博士とおれの仲睦まじさを思えば、無理があると悟ったのだらう。ただいたい片づいたのは、すでに夕方近く。

「すぐに夕食をお作りします。三十七分後には食べられるよつに致しますが、それでよろしいですか？」

藻状ワームを生「ミミ」の袋に詰めて外に出し、階段を駆け上がりてきた勢いで、少女の声は弾んでいた。ヘッドドレスが斜めに傾き、エプロンはぼろぼろ。おれはくすりと肩をすくめて席を離れ、ハンカチで鼻の頭についた汚れを拭いてやつた。少女は始終、目をぱちぱちさせていた。

「飯の支度なら、ゆつくりでいいから。その前にシャワーを浴びておいで。今日はよくやつたね」

机に向かっていると、やがてシャワーの音が聞こえてきた。鼻歌がそれに混じるが、いつもの『タンホイザー』序曲ではなく、聞いたこともない、けれどどこか懐かしい奇麗なメロディーだった。アジア的で、子守唄をおもわせる……それはとっくの昔に忘れ去られた歌が、カプセルで眠る少女の記憶の中で、ひつそりと息づいていたのかもしねない。

なんという歌なのか、あとで尋ねてみようか。そう考へながら机

の上に目を戻したとき、視界が、ぼうとかすんだ。涙が一筋、頬を伝うのが意識された。

夕食後、ひとつ風呂浴びてから、おれはまた机に齧りついた。とんだ邪魔が入ったおかげで、今夜は徹夜してでも、ミッションの予定を組まなければならない。プロジェクト名は「人食い私道事件」とした。ファイルをめぐりながら、会社に提出する計画書を記入しつつ、個人的な覚書を作成した。

昨夜の下見のおかげで、余計な回り道はしなくて済みそうだ。基本的に、おれとアマリリスでやつづけるしかないのだから、計画もごくシンプルなものとなる。むしろ問題は、確実に化け物を引きずり出せるかどうかだ。私道をうろついても太鼓を叩いても、無視されでは手も足も出ない。

「なあ、アマリリス。どうすればいいだろ？」

こんな時こそ、一葉がいれば頼もしいのだが。仕方がないので少女に話を振ると、こちらにお尻を突き出した姿勢のまま、ジグソーパズルの上から、きょとんとした顔を上げた。

「処分する対象は、ワームと定義してよろしいのですね」

「ああ。一度に多くて二人しか狙わないという、グルメなやつさ。青少年が好物みたいだしな」

そこがまた問題なのである。おれなんか食つたところで、ゴムを噛むように味気なからうし、最初から食指も動かないだろ？

「わたしはワームの感覚器から、生体反応を消すことができます。よってマスターはもう一人、オトリを私道に連れて入ることが可能です。一葉さんが適任でしょう」

おれは目をまるくした。

ミッショーン決行まで、三日のブランクを置いた。

その間に犠牲者が出でては寝覚めがよくないので、警備員を雇い、二十四時間体制で、私道の両側を監視させた。費用をケチるのは事故の元だ。成果は期待できないにしても、一応、スキヤナーにも依頼を入れた。

どんよりとした曇り空のもと、私道の南側の入り口で待ち合わせると、装甲車と見紛うばかりの、ごつい軽量型バンがあらわれた。降り立つた男は、むかし、初めて月面を踏んだ宇宙飛行士のような、しかも金ピカのスーツを着ていた。異様に背が低いのは、この業者の職業病のひとつ。

「竹本商事さんですね。このたびは、お世話になります」

シールドが上げられると、ヘルメットの中に皺くぢやの笑顔が埋めこまれていた。みょうにひずんだ声は、胸元のスピーカーから聞こえた。年齢不詳。体毛が全くなく、瞳の中で金色の虹彩が、絶えず収縮を繰り返す。かれらは人体の七十パーセント以上を改造されていた。

膨大な報酬と引き換えに、旧首長連合に肉体を提供したのが、かれら「スキヤナー」だ。当時は公務員扱いで、処理班の頃は、おれも仕事をともにした。人類刷新会議は、医療目的以外の人体改造を禁止し、スキヤナー班は解散。ただ、民間の業者として平和的に活動するぶんには、今のところ黙認されていた。

もちろん、かれらは徹底的にマークされており、もしちょっとでも反対勢力に与するような動きを見せたら、即座に消される。実際、そんな話は腐るほど耳にした。

「そちらのお嬢さんも、どうぞよろしく

相変わらず異星人じみた笑顔で、スキヤナーはアマリリスに向き直り、握手を求めた。コイルを巻いたような奇怪な指を、少女はおつかなびっくり握り返す。宇宙開発技術の応用、もしくは悪用の産物であるスキヤナーの握力は、たしかに岩石を粉碎する。が、おまえが怖がるなという話で。

外で立ちあうだけなので、アマリリスを連れて来る必要はなかったのだが、現場を見せておくよい機会と考えた。ベレー帽を被り、濃紺のコートをふつさりと着たところは、童話の主人公みたいで、なかなか絵になる。スキヤナーと並ぶと、そのまま『オズの魔法使い』の舞台に出られそうだ。

「可愛らしい娘さんですね」

「歳の離れた妹です」

ひよっ、ひよっ、ひょ、とかれは笑い、準備にとりかかった。バンのハッチを開け、無数のコードを引きずり出して、自身の体のあつちこつちに接続してゆく。そのまま門扉にかけた梯子を乗り越え、私道に入った。ヘルメットやバックパックから、いくつもアンテナがよきよきと伸びた。

わかつてはいるが、複合カウンターも何も持たないのは、やはり驚異だ。ひょこひょこと、ゼンマイで動くブリキの人形みたいに歩き回るだけで、「スキヤン」としているのだ。しだいに遠ざかる後ろに姿に向かって、おれは叫んだ。

「危険を感じたら、すぐに知らせてください。発光弾を使う許可はとつてありますので」

むろん、最初に護衛を申し出たけれど、ノイズが入るという理由で断られた。かれは背を向けたまま、片手をあげてサムアップ。まあ、おれがワームだつたら、好んで食いたいとは思わないが。

かれが視界から消えたあとは、少しずつ伸びて行くコードを、腕組みをしてぼんやりと眺めていた。交通量が少なく、路上駐車の車ばかり目立つ。午前十時を過ぎているため、学生の行き来も途絶えて、閑散としている。住宅密集地とは思えない静けさ。

ここへ来る前に、ワットに計画書を提出してきた。

「お電話頂ければ、受け取りに参りましたのに」

茨城麗子がおれの顔を見るなり、赤い唇で微笑んだ。ワットは留守らしく、茶でも飲んで行けと言うが、一秒でも長く事務所には居たくない。スキャナーとの約束を口実に、おっぱいだけを揉んで、そそくさと階段を降りた。その足で駅へ向かい、柱の陰に例のイーブラックを探したけれど、場所替えしたのかパクられたのか、どこにも見当たらなかつた。

かれらの大半が、住所不定の不法入国者である。けれど、あまりにも神出鬼没なため、当局でもなかなか尻尾をつかめない。ワームに汚染されて、封鎖されたビルや住宅に住んでいるという話も聞く。となると、雇用促進住宅の下の階の空き部屋に、何人か身を潜めていても不思議じやない。

ひょっとすると、レイチャエルも……？

「マスター、終わったようです」

バンの中で自動巻取り機が作動して、コードをたぐり寄せていた。以前、サルベージ班で語られていた厭な実話を思い出し、思わず眉をひそめた。巻き取られたコードの先がちぎっていたのでは、洒落にならない。が、ひょこひょこ歩きのスキャナーは、手を振りながら無事に戻ってきた。月面を歩いて帰還するよつて。

「どんな具合ですか?」

「いや、ひどいもんです。わたしの叔母がフォックス教の巫女をやつてあるんですが、彼女の話を思い出しましたよ。除霊……というんですか。悪魔祓いみたいな仕事を頼まれたそうにしてね。とある古いお屋敷に入ったところ、そこいらじゅう、顔だらけというんですな」

アマリリストがおれの外套の裾を、ぎゅっと握った。お化け屋敷に入った女の子のように。スキヤナーは笑顔で語を継いだ。

「もちろんそれらは、叔母にしか見えないです。彼女に言わせれば、その家には靈が『集まつてくる』のだとか。建っている場所とか間取りとか、様々な条件が重なって、そんな現象が起るらしいのですが。厄介なことに、こうなると森に木の枝を隠すようなもので、もともと家にとり憑いている『主』がどれなのか、見分けがつかないそうとしてね」

おれは幽靈を信じないが、例え話としてはわかりやすい。かれの叔母は幽靈を探知する有能な「スキヤナー」であり、それゆえに、古屋敷に巢食うありとあらゆる『靈どもを、いちいちスキャンしてしまうのだろう。性能がよすぎるのも、時には仇となる。

「できるだけのことはやりましたが、そんなわけで、お役に立てたかどうか。とりあえず、データはお渡ししておきます」

かれの金ピカスースのみぞおちあたりに、小さなつまみが三つ並んでいた。カリカリと、旧式金庫の要領で、みずから番号を合わせると、長方形の隙間があらわれ、モーターの音を響かせながら前方に押し出された。いわば、お腹が引き出しになつているようなもので、中にぎっしり詰まっている機械は、かれの臓器にほかならない。おれの戸惑い顔に、かれはニヤリと笑つてみせ、引き出しの側面に指を触れた。蟹の脚をおもわせる、細長いマニキュレーターが横

から伸びて、内臓から異物を摘出する手術機械のようだ。一枚の金属のカードを取り出した。ぽたぽたと滴る油が、いかにも生々しいが、機密の保存場所としては、考へうる限り最も安全なのだろう。「C型の解析機はお持ちですね。最近は、対応する機種が減つてしまります。あと十年もすれば、わたしたちはただのポンコツ扱いですよ」

指先から水を出してカードを洗浄し、プラスチックのケースに入れて渡してくれた。伝票にサインをもらい、バンに乗り込むと、片手をひらひらさせながら去つて行つた。かれは十年後を心配していだが、そこまで生きられるかどうか疑問である。車が視界から消えたところで、煙草に火をつけた。歩き出そうとするが、外套が、ぎゅっと後ろに引かれた。

アマリリストがまだ握っていたのだ。

「そんなに怖かったのかい？」

苦笑しつつ尋ねたが、少女はじつと私道の方に顔を向けたまま。うつろな眼差しを覗きこめば、瞳の色素が薄くなつており、虹彩が収縮を繰り返していた。いやでもスキヤナーの目を思い出す光景だ。「ミチ、ノ……マシタ、一、イ、マス……」

「え？」

「……ヘビ、ノ、アタマ、ハ、サソリ……デ、ス、ジット……ジット、ロッヂ、ヲ、ミテ……イ、マス」

車に乗つて五分も走る頃には、少女のバグも治まつていた。さつきの状態が一種のバグなのか、それはわからないが。スキヤナーの話ではないが、フォックス教の巫女が「御宣託」とやらをくだす時のトランク状態にも似て、自身が何を口走つたのか、もはや覚えていないという。

アマリリストにスキヤンする機能があることは、運搬用チャペックを破壊した時に確認済みだ。けれど全身、一つの機能に特化したスキヤナーとは比べようもない、あくまで付隨的なもの。彼女の汎用

性の高さを示す好例ではあるが、スキヤナーもてこずる私の道に用いたところで、当然オーバーワークを引き起こす……といった解釈が、最も妥当なところか。

「疲れただろう。ちょうどいい時間だし、飯にするか」  
相変わらず無表情に「はい」と答えるが、嬉しがっていることは、ここ数日のつきあいでわかるようになつっていた。チャペックと一戦交えたあとは、前より調子もよさそうである。その理由は考えたくなかつたので、あえて頭から締め出しつつ、おれはレストランの駐車場へハンドルを切つた。

ウエイトレスに案内されて席に向かう間、周囲の視線を痛いほど感じた。それほど少女は可愛らしく映るらしい。同時にあれのあやしさが強調され、子供にも妹にも見えない、いたいけな少女を連れまわす誘拐犯か変質者の類いだと、疑われているのは確実だつた。彼女が二口りともしないのだから、なおさらだらう。

だからというわけではないが、あまり食欲がなかつた。反対にアマリ里斯は、目覚めた当初より、よく食べるようになつていた。環境に適応し始めているのだらう。

「盲い？」

「はい。とっても」

ここでにつっこり笑つてくれると絵になるのだが。考えてみれば、彼女が笑うところを、まだ一度しか見ていない気がする。あれは相崎博士の実験室。CNC溶液の中で、おれを「マスター」と認識したとき、アマリ里斯はたしかに笑つたのだ。

眠つている少女に弾丸を放つたおれなのに。

八幡ブラザースによれば、二葉は学校だといつ。珍しく、創立記念日ではなかつたらしい。

「で、例の件なんだが……」

ガレージの中では、古めかしい「泥炭」ストーブが焚かれていた。炭化した植物から成る本物の泥炭ではなく、産業廃棄物のクズをそう呼ぶのだ。例によつて当局はこれを禁じたが、採集が容易なので、現在も盛んに闇取引されている。独特の臭いに慣れてしまえば、安価でよく燃える、いい燃料である。一彦が言つ。

「予期されていたとは思いますが、一重二重どころか、十重二十重にロツクされていました。ぼくも二葉もお手上げというわけで……」

「変態博士に回つたわけだ」

一彦は肩をすくめ、油の染みたツナギのポケットから、プラスチックのケースを無造作に取り出した。中におさめられた銀色のカードの表面には「逆さA」の紋章が大きく入り、かたくなな沈黙を象徴するような、冷たい光を浮かべていた。

「会わせてみてはどうでしょう。アマリリスさんのメンテナンスも兼ねて」

少女は「泥炭」が上げる緑色の炎を見つめていた。その肩がぴくりと震え、次にこちらに向けられた眼差しからは、けれど何の意志も読みとれなかつた。おれは席を立ち、メモリーカードをケースごとポケットにおさめ、少女の肩を軽く叩いた。

「気が進まなければ、ここで待つていていいよ

「問題ありません、マスター」

真つ赤に錆びた階段は、一步ごとにぐらぐら揺れた。仰々しい鉄の扉の前に、紐のついたガラスのベル。まだ真昼だというのに、玄

関灯が蒼白くともつてゐる。ベルの余韻が消えないうちに、ドアのノブが裏側から回された。先刻から、監視カメラに映つていたのだろう。

助手の黒木は相変わらず、「看護婦」をおもわせる恰好で、相変わらず二一四つともせず、おれたちを一瞥したあと、くるりと背を向けた。さらに三つのドアを彼女が開けば、例の、悪趣味を絵に描いた部屋に通された。ガレージの一階の主は、ソファの上で片手をあげた。

「そろそろ来る頃と思つておつたよ」

いつになくくつろいだ様子で、珍しく小奇麗。髪を奇麗に後ろに撫でつけ、遊び心たっぷりにネクタイを結び、チェックのスラックスの上から、ワインレッドのVネックセーターを小粋にまとつた。似合つてはいるが、狂人科学者らしさは少しも緩和さないどころか、むしろ強調されていた。

ソファの前では、箱型のテレビジョンがつけ放しで、四隅のまるい画面には、極めて不鮮明な、それでいて御伽話の挿絵をおもわせる映像が、映し出されていた。政権が変わって間もないため、電波系のメディアはまだ情報統制下にあり、娯楽番組など望むべくもない。ゆえにこれは、海賊版のヴィデオカードか何かだろう。

「まあかけたまえ。黒木くん、客人にコーヒーを頼む……おつと。エイジくんは、器にこだわるデリケートな男だつたな」

皮肉を無視して、指されたソファに腰をおろした。

アマリリスを呼ぼうとすると、テレビジョンの画面に見入つてゐる様子。つられて目を遣れば、赤い三角帽子に、星をちりばめた緑のマントという、中世の占星術師のようないでたちで、十人くらいの人物が動き回つてゐるところ。舞台は洞窟の中なのか、いかにも作り物くさい岩に、赤や緑のコケが張りつき、金属的な光を発しながら、ゆるやかに明滅していた。

三角帽子たちは、黒い、長方形の物体を、懸命に運び出そうとしていた。形は棺に似て、その何倍も大きい。ロープで引き、梃子を

使って動かそうとするのだが、とてつもなく重いのか、ほとんど進まないうちにロープが切れて、梃子が外れ、人々はオーバーアクションで跳ね飛ばされてしまう。

音質の低い管弦楽が始終鳴っているが、それ以外は全くの無言劇だ。

「あれを、盗むのですね……」

どこか憑かれたように、アマリリスがつぶやいた。三角帽子たちが盗賊だという意見には、おれも賛成だ。やつらは明らかに焦つており、しかも追っ手に怯えているようだ……そう思った矢先に、画面全体がぐらぐら揺れて、盗賊どもは大わらわ。大きな岩が光りながら「じろじろ」と転がり、やがて背後にぽつかりと巨大な穴が口を開けた。

リアリティのカケラもない、ばかばかしい映像なのに、おれはゾッと身震いした。ある意味、大金を投じた怪奇映画より恐ろしい光景だった。

穴の中からは、二階家ほどの怪物があらわれ、真っ黒い、無数の脚を蠢かせながら、這い出してきた。三対の長大な顎を、牡牛の角のように振りたてて、一人の盗賊を捕らえると、手足をじたばたさせている間、思つさま振り回し、ちょうどカメラのある方へ向かって放り投げた。哀れな盗賊がたちまち大写しになり、おれは思わず叫び声を上げた。

一瞬のことだった。けれど、盗賊のマントの裏地いっぱいに染め上げられた「逆さA」の紋章を、たしかに見たのだ。

画面がふつつと途切れ、サンドストームがあらわれた。狂騒的な管弦楽曲も、ザーッというノイズに呑まれた。

「いつたい……？」

博士はリモコンを持ち上げ、テレビジョンの電源を切った。ブン、と、電気的な音が響き、真横に光の線が走ると、画面が沈黙した。自身が腰を浮かせていることに、ようやく気づいたとき、黒木がコーヒーを運んできた。濃厚な香りがおれの鼻面を引いて、現世に連れ戻した。

いつものあやしげなビーカーではなく、小奇麗なカップに淹れてあるが、なぜか一人ぶんしかない。アマリリストが「普通に」飲み食いできることは、二人とも承知している筈。抗議しようと睨みつけところで、博士の不気味なワインクに機先を制された。

「これでいいのだよ。メンテナンスの準備は済んでいるからね。風呂は熱いうちに入るものだ」

「みょうな実験をしようなんて、考えてないでしょ？」

「残念ながら、吾輩は先にひとつ風呂浴びて、あとは休むばかりさ。代わりに黒木くんがやってくれる」

どうやらこの男、真昼から夕方にかけて寝るつもりらしい。ネクタイを締めたまま棺桶にでも入れば、さぞかし絵になるだろう。いや、洒落になつていないところが恐ろしい……アマリリストが黒木とともに、奥の実験室に入るのを待つて、おれは切り出した。

「さつきの映像は何ですか？　どう考えたって、ただのヴィデオカードじゃない」

「根拠は？」

「最後にあらわれた怪物は、間違いなくミミテーションボディでした。この田で何十体も見てきたから、よくわかるんですよ。とでも作り物とは思えませんね」

「あの映像 자체も？」

返答に詰まつた。赤い三角帽子に、星をちりばめた緑色のマントの盗賊たち……あれがリアルな映像に見えたなら、おれは間違いないなく狂人だ。

眉間に皺を寄せたまま、だいぶ冷めた「コーヒー」を飲むと、その間に博士は、どこに繋がっているのかわからない、透明な管のついた煙管をふかし始めた。有名な童話の有名な挿絵の一場面が、否応なく想起された。キノコのてっぺんに座つて、イースラック人みたいな芋虫が、水煙草をふかしている。女の子がうんと背伸びをして、それを眺めている。

（一日の間に、こんなにたくさんの背丈になつたやうなんですもの。頭がここんぐらがりますわ）

まるで童話のとんちんかんな問答と、おれたちの会話は大差ない。むさくるしいおれの代わりに、アマリリスがここに座つていたら、そのまま挿絵が出来上がるだろう。そう考えたところで、ハツと顔を上げた。

「夢……なんですか、あれは、夢なんですね？」

我ながら、みょうに丁寧な口調になつた。香料の効いた煙を盛大に吐き出し、相崎博士は意味ありげに口の端を歪めた。

「さよう。きみたちを襲つた運搬用ロボットのメモリーカードから、抽出したイメージだ」

「趣味のよくない冗談です。電子頭脳が電気羊の夢を見るなんて、大昔の駄洒落を引っ張り出すつもりですか。チヤペック……いえ、ロボットは決して夢なんか見ませんよ。夢を見たりしたら、その時点でロボットとは呼べなくなる」

「いわゆるロボット三原則には、そんな禁則事項はなかつたと思うが。まあ、きみの言い分は間違つてはおらんよ。ロボットは電気羊の夢を見ない。ぐだんの運搬用も含めてね」

水煙草の煙のせいか、頭が少々ぼんやりして、博士の言葉が、スキヤナーの声のようにひずんで聞こえた。

「ただし、夢といつもののは、現実を湾曲して再生する特徴がある。

昼飯にクロツク鳥の目玉焼きを舌なめずりして食つておれば、夜の夢の中では、皿の上で親鳥がフォックストロットを踊りながら、金の卵を産んでみせる、という具合にな。そういうつた夢が生成されるプロセスと、非常に似た現象が起きてしまつたのだよ」

「ここにきてピルトダウン人みなみに鈍い頭にも、ようやく理解できた。すなわち、運搬用チャペックの「十重二十重に」ロツクされたメモリーカードを解析するに及んで、どうしても現実に体験された記憶を、そのまま抽出することができなかつた。ゆえに、ああいつた「湾曲」された映像が取り出されたのだ。

あまりにも夢に似た映像が。

「どう解釈したらいいんでしょうね」

ポケットからオリジナルのメモリーカードを取り出し、ひねり回しながら尋ねた。夢はここから抽出され、博士のヴィデオカードに記憶された。

「精神分析は専門外だよ。おっと、そう睨まないでくれたまえ。ここまでしほり出すだけでも、けつこう骨が折れたのだ。あまり手荒なハッキングを繰り返せば、オシャカになつてしまつからね。かといつて、指をくわえていたら何も語つてくれはせん。そんなところは、人間の脳味噌とよく似てゐる」

「哲学を語りに来たんじゃありませんよ」

博士はニヤリと笑い、水煙管を手にしたまま、ソファから立ち上がりつた。眠くなつたらしく、大きく伸びをする姿は、それこそピルトダウン原人をおもわせた。

「カードは置いて行きたまえ。もう少し調べてみよう。だけどきみ、哲学なき科学は、一生眠らない人間のようなものだよ。ココロに夢がない」

「あ、エイジさん。スキヤナーのデータを解析機にかけたぶんが、あがつてきますよ」

いささかやつれ氣味にガレージに戻ったところで、一彦に呼びとめられた。そういえば、来た当初は兄の一朗もいた気がするが、仕入れにでも出たのか、ずっと姿が見えない。

「助かる。見てくれるか」

かれの案内で、売り場とはカーテンで仕切られたスペースに通された。暗めの照明のもと、いくつものモニターが明滅するさまは、昼間の光景とは思えない。

アマリリストのメンテナンスは、まだ小一時間はかかるという。博士はナイトキャップを被つて寝室に引き上げるし、鹿の生首の飾つてある部屋で待つのも厭なので、独りで下りてきたのだ。

四つのモニターを交互に眺めつつ、プリントアウトされたデータと見比べながら、おれ啞然とし、かつ凍りついた。低熱源・高周波体の氾濫……といえば少しはスマートに聞こえるが、要するに、百鬼夜行。どんな切り口から眺めても、あやしげなプラズマの妖怪変化どもが、所せましとぶちまけられていた。

「まあ、スキヤナー本人が予想したとおりではあるな……」

一つの首のうち、ひとつが人面の虎がのし歩くさまを眺めながら、おれはつぶやいた。するうちに、私道の真ん中を少し過ぎた辺りに、目が引き寄せられた。ロータリーをおもわせて、ちょうど少し膨らんでいる所で、常夜灯やベンチがぽつぽつと置いてある。

もちろんその辺りにも、コウモリの羽をつけたトカゲが飛び交い、本体のない人間の影法師が四つん這いで這い回り、サイは頭足類の腕足を蠹かせているが。石畳の上に目を凝らせば、巨大な意匠を思

わせる複雑な影が浮き出でているのだ。その部分をモニター上で拡大すると、最初首をかしげていた一彦も顔を近寄せた。

「何に見える？」

「甲殻類に似ていますね。蟹……いや、サソリかな……」

……ベビ、ノ、アタマ、ハ、サソリ……デ、ス。

耳もとで囁かれたように、アマリリスの声が脳裏で響いた。こわれた機械をおもわせる、それでいて歌うような。予言詩にも似た少女の言葉を、もしからかじめ聞いていなければ、影の存在に気づいたかどうか疑わしい。それは敵が隠れ潜んでいる位置を、正確に指摘した言葉ではあるまいか。

「大きいですね」

一彦の声は、いつになく恐怖の色を帯びた。

さつきから根を詰めつ放しだったので、コーヒーが欲しくなった。率直に催促すると、ガレージ内のいつものポジションに収まつたところで、濃い「コーヒー」を淹れてくれた。合成豆だというが、ブラックで充分いけた。

「いつも掘つちまつたほうが早いんじゃないかと、迷つていたんだが

「許可がとれたんですか？」

首を振った。公道でさえ、たつた一メートルの掘削を行うのに一十枚の書類がいる。上下水をはじめ、各種配管は九十九パーセントが剥き出しのまま、地上を渡されている。最近では、いにしえの「電柱」の復活がいちじるしい。それほど地下は禁断の領域なのだ。いわんや私道をや。しかも直下には、重度に汚染された動物園が埋まっているのだから。

こんな状況下で掘り起こしたりすれば、対テロリストの武装警察が飛んで来るだろう。

「だがその必要もなきやつだ。当初の計画どおり、お転婆姫はお借りするよ。未成年を巻きこむのは、主義じやないんだが」

「今さら外されても、妹は承知しないでしょうね」

泥炭マッシュを摺つて煙草に火をつけた。煙を吐くついでに何気なく振り返ると、死靈のよつな男が立っていた。顔は蒼ざめ、頬はこけ、落ちくぼんだ眼窩の中で、ぎらぎらと目だけが光っていた。一瞬、一彦がズヌビーになったのかと疑つたが、本人は隣にいるし、帽子を前向きに被つているから、死靈は兄のほうである。

変わり果てた姿の由来を問えば、生ける屍と化して復活したのではなく、ここ二日の間、ほとんど寝ていないし、食べた記憶もないという。山ポッドの整備に夢中で寝食を忘れていたらしい。

「あれをもう一度動かそなんて、本氣で考えちゃいないだろうね」

一朗は何やらぶつぶつ呟き、おれを手招きした。ガラクタの山を抜けて、ガレージの裏側の整備工場に出た。修理中の車やチャペックが居並ぶ奥に、工業用マニユピレーターが集中している一角があらわれた。かれは光る目であれを見ろと促した。防酸布にすっぽりと覆われた上に、軍用チャペックの頭部が露出していた。

黒い、艶やかな光沢を宿している、それは明らかに、山田式ポッド三型……おれのよく知る相棒の頭部だった。

イミテーションボディによって叩き潰される前の、懐かしい顔がそこにあつた。

「人食い私道事件」、ミッション決行の日。おれは当然のように、昼ごろまで寝ていた。

一応言い訳をすれば、前日までけつこう忙しかったのだ。打ち合わせをしたり、書類を作ったり提出したり。それらを昨日の夕方までに片付けておいて、アマリリストにせっぱりしたレストランに入った。ちょっと血のものを食い、合成ではないワインを飲んだ。おれなりの、士気を高めるための儀式だ。

当日は、現場に入るまでとくにすることがない。ちょうど舞台の初日をむかえた役者と似ているかもしない。稽古もやつた。衣装や小道具も揃つた。ゆっくり寝て鋭気もやしなつた。あとは本番まで緊張のあまりのたうちまわろうと、ふてぶてしくあぐらをかけていようと、各人の自由。おれは明らかに後者だが。

本番は夕方四時半スタート。この季節、ちょうど日が暮れかかる頃。道行く人の顔もわからなくなり、「誰そ彼?」と尋ねなくなるタソガレ時。もしかしたらそれは人ではなく、魔物かもしないので、「逢魔が刻」と昔の人人が名づけたのは、言い得て妙であった。まさにおれたちは魔物に逢いに行く。青表紙のファイルを熟読した結果、最も多く人が食われているのが、その刻限と推定された。

「マスター、一葉さまがお見えです」

シャワーを浴びて出てきたところで、アマリリストが告げた。まあ、来るだろうとは思っていたので、たいして驚きはしない。どうせ今日も創立記念日なのだろう。と、苦笑しながら、少女が手わたした寝覚めの合成功能を片手に、上機嫌でリビングに入った。

「そろそろ起きてる頃かと思つて」

紅茶のカップをソーサー」と手にしている立ち姿は、いつもどおり

り。だが、しかし、おれの顎は胸に届くほどあんぐりと開き、合成ビールの缶は床に転がり落ちた。

「なんだその恰好は！」

「失礼ね。一生懸命お洒落してきた女の子に対して、今のは一番言つてはならないセリフよ」

「お洒落だと……」

いつものセーラー服にお下げ髪といつスタイルとは、どこへ吹き飛んだのか。一週間ぶんの寝癖をつけたような頭に、武装警衛のゴーグルみたいなサングラスをちょこんと載せ。青々とアイシャドウを入れて、口紅をきりきりと塗った。

ラッパ状の袖以外は、体にぴっちりと纏いつく、黒のジャケット。大きく開いた襟ぐりに、たっぷりとした、真紅のリボンを結んだまでは許せるとして、タイトスカートの短さは尋常ではない。黒のストッキングは膝上までだから、赤いガーターベルトがまる見え。白いブーツは異様にヒールが高く、歩くと盛大な音をたてた。

これでは八幡兄弟に申し訳が立たない。と、なぜか第一に考えた。田舎の街区から都市区の大学に入った姪っ子を任されたのに、みすみすグレさせてしまった「おじさん」の心境がわかる気がした。二葉はアイシャドウの下から、おれを睨んだ。

「エイジさんが何を考えてるか、だいたいわかるんだけど。わたしがちが今日、恋人どうしを演じるんだということ、忘れたわけじゃないでしょ。その上でセーラー服のほうがよかつたと言つんなら、すぐ着替えてくるけど」

それはこまる。別の意味で逮捕されかねない。しかし考えて見れば、最初はアマリリスと二人で潜入する予定だったのだ。そうして青表紙のファイルを一瞥すれば、私道の怪物が一人の侵入者を襲う場合、カップルの割合が圧倒的に高いことは一目瞭然。必然的に誰と入ろうと、恋人どうしを演じることになつただろう。

じつは、この人選に関して、ひと悶着あつたのだ。

アマリリスは二葉を推薦したけれど、当然気が進まなかつた。ワ

ツトに電話して、適當な相手を探してくれるよう頼んだ。すると即座に折り返し電話がかかり、茨城麗子がみずから行くと申し出た。ばかを言え。あんたはたしかに有能な秘書だが、武器の扱いに関しては素人だ。危険すぎると言つて断ると、すかさずワットが電話を横からひつたくり、

（では、ぼくがお相手しましょうか。こう見えて、女の子の恰好をすれば、十人中十人は信じるでしょう）

ここにおいて、おれはサジを投げた。十一歳の女装美少年と腕を組むよりは、見た目は女子中学生のアマリリストのほうが、千倍ましだ。けれど、敵の感覚器に捕まらない少女には、ぜひ伏兵となつてもらいたい。となると……

「言つておくけど、今さらわたしを外そうなんて思わないことね。銃なら三歳の頃から玩具がわりに扱つているし。ダガーツキ拳銃の達人、栗林小五郎先生には五歳の頃から師事しているわ。アマリリスちゃんは、伊達にわたしを指名したわけじゃないのよ」

「そのスカートは、なんとかならんのか」

「大日本おっぱい党員に対抗するには、美脚で勝負するしかないでしょう。だいじょうぶ、下には護身体育用のブルマーを穿いているもの。見る？」

「いや見せなくていい！」

何がだいじょうぶなのか。なぜ勝負する必要があるのか。そもそも誰と勝負するつもりでいるのか。様々な疑問の渦に呑まれながら、「これくらいが一番動きやすいの」といつ一言に、からうじてしがみついた。

「ならば、よし」

今日の昼食もまた、当然のように三人ぶん用意された。相変わらずレタスを折りたたんで醤油ながら、一二葉が言つ。

「わたしがあらためて言う必要もないと思うけど、今回のミッションにおける最大の問題点は、敵が出てくれるかどうかよね。確率的には、どんなものなの？」

「数値化しようがないね。様々な面で、可能性が高いほうを選択したという意味では、百に近いとも言えるし。しょせん運任せである点は、ゼロに賭けているようなものだ」

「ゼロに賭ける、か。エイジさん、時々、顔に似合わずブンガク的なことを言うわね」

「顔は関係ないだろ？。いくら頭をひねって計画を練つても、賽の目だけは操れない。最終的には、出たとこ勝負がものをいうんだ」

兵士にギャンブラーに営業屋。かれら、最も過酷な人生の最前線に立たされている者たちは、最後は運がモノを言うことを知っている。ちっぽけな人間にはどうすることもできない、巨大で気まぐれな力の作用を、身辺にひしひしと感じながら生きている。兵士ではなかつたが、おれもまた、悪運の強さゆえに生きのびた。

そうして悪運の強さゆえに、大切なものが失われるのを、目の当たりにしなければならなかつた。

「ふうーん」

「なんだよ」

「エイジさんて、時々、ものすごく悲しそうな目をするよね。主人

をなくした犬みたいに」

「どうせおれは野良犬である。けつこう的を射ているので、思わず吹き出した。

「ひとつ忘れていたんだが、アマリリスにはどんな恰好で参加してもらおうか」

一葉に問いかけて、少女の顔をうかがった。急に話を振られたせいが、どぎまぎしたように頬を染めている。ファッション雑誌の成果か、彼女は外出着なども、あたりまえに自分で選べるようになっていた。先日の童話から抜け出したようなコート姿も、彼女自身のコーディネート。元がいいから何でも似合つが、「センス」もなかなかのものだ。

そこまで考えて、失言に気づいた。ふだんはそうでもないが、今日の恰好からして、張りきったときの一葉のセンスは常軌を逸している。現に、いたずらっぽく指を舐めると、得物を前にした猫科の肉食獣の目つきで、アマリリスを眺め回している。

現場にはワットや麗子をはじめ、けつこうな人数が待機するのだ。そこへ、仮装舞踏会に招かれたような少女を一人もエスコートして乗りこむ気には、ちょっとなれない。

「このままでいいんじゃない」

「は？」

「べつに本多平八郎忠勝みたいな恰好をさせめる必要はないでしょう。アマリリスちゃんはどう思つ？」

生真面目な表情で、少女はこくりとうなずいた。そういうえば、最初は違和感を覚えていた、新東亜ホテルの客室係の制服に、おれはすっかり馴染んでいた。けれど、このまま外出させたことは、もちろん一度もない。逆にいえば、仮装舞踏会的状況は回避されないとになる。異を唱えようと口を開きかけたところへ、一葉は人さし指を突きつけた。

「もちろん、エイジさんには拒否権があるわよ。マスターなんだから。でも過半数を超えて決議されたものをくつがえすのは、暴君の

所業ではなくて？」

もしおれが暴君だつたら、とつぐに世界征服しているという話で。食後の茶をゆっくり飲んでから、鞄ひとつさげて車に乗り込んだ。助手席には少女メイド。バックシートに、何とも形容しがたい「ゴーグル娘」を乗せて。私道の南口に到着すると、趣味のよくない赤い車が、いやでも目についた。おれたちが降り立つのを待つてドアが開き、紫のストッキングに包まれた脚が、すらりと路上にあらわれた。茨城麗子はこぢらに軽く会釈しつつ、後ろのドアを開けた。どうやらここにも一人、創立記念日で休んでいる小学生がいるようだ。

「ご苦労さま。もう少しゆっくりして来られるかと思っていたのですが、ちょうどよかつた」

赤いダブルのジャケットに、チエックの半ズボン。黒いハイソックスとニッカーボッカー。こんな珍妙な恰好がサマになるのは、この男くらいだらう。しかも不可解な威儀があり、親善大使のように手を広げると、アマリリスはともかく、二葉まで深々とお辞儀している。眉をひそめて、おれは尋ねた。

「ちょうどよかつたとは？」

大昔の漫画雑誌から切り抜いたような少年は、意味ありげに笑い、私道のほうを指さした。見れば門柱にもたれて、線の細い、影法師のような人物が腕を組んでいた。わずかに持ち上げた黒いバイザーの下に、薄く微笑んだ赤い唇が覗く……人類刷新会議の武装警官。コードネーム「カラリ」だ。

「エイジさんに、お寄さまです」

ワットを睨みつけたが、薄笑いを浮かべるばかりで埒があかない。思うに、もしミッションそのものにケチをつけに来たのなら、責任者がいる以上、おれを待ついわれはない。ではワットの言葉どおり、おれの個人的な客であり、武装警察としてではなく、「カラリ」として話があるということか。

私道へ向かつて歩きながら、おれはアマリリスに田配せし、指でサインを送った。何が起きても手を出すな、という意味の。

「治安課にも交通課にも書類は出しますよ。もちろん、許可証も持つている。見せましょうか」

「いや、管轄が違うからな」

姿勢をまったく変えぬまま、赤い唇だけが蠢いた。ハスキーガかつた、温度の低い声。もし、バーのカウンターで出会っていたら、ぜひお話ししたいタイプなのだが。

「見学はご遠慮願いますよ。これでも配置には気をつかっているんです。そんな目立つ恰好で門の前に立たれたら、計画が狂いかねません」

「ご挨拶だな。わたしもいろいろと手をつづっているのだとこう」と、忘れてもらつてはこまる」

「ああ、なるほど……でも、あれは正当防衛でしたよ。撃たなければ、こっちがオシャカになつていた」

ながば力マをかけた形だが、脣がに一つと横に広がるのを見て、的を射たのだと確信した。ぞくぞくするような、ハスキーボイスが言づ。

「化学鑑定の結果、炭化したアーマードワームの組織、および、重炉心弾の使用が確認された。その弾を所持している者を見つけ次第、わたしには射殺する権限がある」

おれは道化らしく、両手を広げてみせた。脇腹のホルスターには、

すでにパイソンがおさまっており、グリップの一部が覗いた。あえて今日は、一発の弾薬しか用意していなかつた。言うまでもなく、イースラック人から買った残りの一発で、一発はすでに装填しており、もう一発はジーンズのポケットにおさまっている。

カラリはもたれていた門柱を離れ、目の前に立つた。甘く危険な香水の香り。今にも銃を心臓に突きつけられるかと思えば、右手をあげて自身のヘルメットに軽く触れた。モーターがうなり、ゆっくりと、バイザーが上まで持ち上がつた。

角度的に、彼女の素顔はおれにしか見えていない筈。唇だけ見て予感したとおりの、いやそれを上回る、いい女……だが、しかし、武装警官が素顔を一般人にさらすなど、まず考えられない。いわば、黒衣の天使がいよいよ大鎌を振り下ろす際、顔を覆つっていた黒い頭巾を脱ぎ捨てるに等しい行為だ。

「わたしはおまえに俄然、興味が湧いた」

「光栄の至りです、セニヨリータ」

「ふん、これがどういう宣告か、もちろんわかっているのだろう、コードネーム『エイジ』。おまえを殺すかもしれない相手の顔くらいは、知つておいてほしくてな」

再びバイザーが下りて、彼女の素顔を黒い鏡面で覆い隠した。ただその後ろで、素早く動く彼女の視線が、はつきりと感じられた。どこへ注がれているのかも。

「またあの少女を連れているのか」

詰問されるのかと思えば、カラリは警察官らしい機敏な動作で、くるりと背を向けた。そのまま一度も振り返らず、路肩に停められた1000CCのバイクにまたがり、轟音をどろかせた。兇暴な海棲哺乳類をおもわせる、漆黒の車体が消える頃、おれは道化師のポーズを取り続けていたことに、ようやく気づいた……

茨城麗子と少し打ち合わせて、自分の車に戻つた。ワットの言つとおり、早く来すぎたかもしれない。窓から眺める間に、ようやく数台の車が到着して、警備員や無線技師が下りてくる。応対に出た

麗子のおっぱいを目の当たりにして、かれらは一様に驚嘆している。

「クローズドサークル、か」

なかば無意識につぶやくと、小動物のよつこ、アマリリスは助手席で首をかしげた。

「はい？」

「孤島だとか吹雪の中の山荘だとかね。閉ざされた環境をあらわす、ミステリー用語さ。私道の中では、驚くほど完璧なクローズドサークルが形成されている。一旦、その気で踏み込んだが最後、事件が決着するまで、周囲からは中の様子がまったくわからない」

スキヤナーのデータに映っていた、黒いサソリのポイントは、どこからも完全な死角。監視カメラの設置なら、とっくに二葉が試していたが、何度も仕掛けても、プラズマの亡靈によつて瞬時に破壊された。強力な無線機にせよ、周りのスタッフのために用意したもので、中では役に立たない。

あとは、閃光弾を使うのが関の山だが、持つだけ無意味だらう。応援を呼んだ時点で、おれたちはとっくにオダブツなのだから。

「やはり、二葉を巻き込みたくなかつたな」

誰に言つともなしにつぶやいて、煙草に火をつけた。

窓の外に目をやると、二葉は門扉の前で、いつぞやの少年一人と話しこんでいた。時折、彼女の澄んだ笑い声がここまで届く。一人のうち、背の高い不良少年のほうが色々な意味で硬くなつており、二葉の「美脚」をちらちらと盗み見ては、蒸氣を吹き出しそうな反応を見せた。

そろそろ時間だ。

声に出してつぶやいたのかもしだれず、心の声を聞いただけかもしないが。窓の外はすっかり「タソガレ」ていた。

カーラジオから、すり切れたような音質で、クラシック曲が流れている。刷新会議の統制下にある味も素つ気もない国営放送は、気象情報やワーム警報以外、一田じゅうこの調子。今流れているのは、ブルームスの一曲あたりか。こんなときこそ、ジギー・バンデル・ルーデンの新曲でテンションを上げたいところだが、今は望むべくもない。

かれは最近、ニューアルバムを出したといつ噂で、しかもかなりの問題作であるらしい。闇市にカードが流れていなか、今度探しでみよう。もし生きて戻れたら……口の端を歪めて笑い、煙草を揉み消した。計器類の灯りだけがともる薄闇の中で、無線機の回線を開いた。

「エイジだ。一朗かカズ、どれるか?」

「はい。八幡です」

割れた声だけ聞いても、兄か弟かさっぱりわからない。かれらは北口近くに、路上駐車を装つて待機している筈である。もちろん、いつも神社を吹き飛ばして、踏みこめる準備をして。肩越しに、二葉に目配せすると、真顔でうなずいて無線機を受け取った。

「あ、カズ兄さん、一葉です。ちょっと行ってくるから

「気をつけるよ」

「オッケー」

再び無線機が手渡されたところで、ぱりぱりヒノイズ混じりに女の声が響く。

「茨城です。エイジさんどうぞ」

「ミッションスターだ。あとはよろしく頼む」

「了解しました。ご武運を」

悪運の強さにだけは自信があるよ。そう胸の内でつぶやきつつ、無線機を切つて、計器のくぼみに放りこんだ。私道の中に入れば無用の長物。持つても仕方がない。

外はシユールな心象風景をおもわせる、不安定な明るさ。まばらな街灯がともり、路面には闇が貼りついているが、空はまだ残照をとどめたまま。ちらちらと瞬く星の下を、黒い紙をちぎったような雲が走る。おれたちが「星」と呼んでいるもののいくつかは、旧世界の測位衛生なのだけれど。

野次馬を避けるために、入口の周りは、一見、無人のようだ。今夜は警備員のみならず、無数の目がここに注がれているのだが。門扉の前で立ち止まり、誰にともなく手をあげた。蔓草の下に巧妙に隠された梯子に足をかけ、ひょいと乗り越えた。アマリリスと二葉は、ともに細い体を鉄格子の間からすべりこませた。

「無性にオムレツが食いたくなつた。帰つたら作ってくれるか」  
中に入ったとたん、濃い闇につつまれ、温度が三、四度低くなつた気がした。それでもこの距離だと、まだ少女の表情が確認できた。相変わらずの無表情であるが、こちらを向いたとき、大きく瞬きするのがわかつた。

「はい、マスター」

「たのんだよ」

石畳の小道を先に歩いて行く、少女の背中でひらひらと揺れるリボンが、闇に呑まれるまで見送つていた。ほつそりとした、二葉の腕が回されるのを意識した。歩き始めたおれたちの姿は、ワームの棲息地にわざと一人か二人ずつ侵入して証拠の品を取つてくる、肝試しというゲームに似ていただろう。実際にここでそれをやって、消えた男女が案外多いのだ。

「優しいんだから。あの子にだけは」

「これほど体を密着させて、肘に乳房の感触が伝わらない。化粧をしたり、ませた服を着てみても、やはり子供なんだと思えば、少々痛ましい。もしかすると一葉は、おれのケチくさい感傷を忘れさせようとして、わざとじぶつ飛んだ恰好をしてきたのではあるまい。」

「おれに似てるからかもしれないな」

「アマリリストちゃん?」

「ああ。きみはおれが飼い主をなくした犬のよつだと言つたが、アマリリストにもどこか、そんなところがある。あくまで印象なんだが。一度捨てられた経験があるんじゃないかなって、思つときがあるんだ。もちろん彼女は顔に出さないし、実際、記憶もないんだけど……ときどき、胸をしめつけられるよつな目をしている」

黒々と私道を覆う常緑樹のざわめきが、会話を途切れさせた。ぎゅっと腕にしがみつきながら、一葉が囁いた。

「せっそくお出ましみたい」

十メートルほど先の闇の中に「鬼火」が一つあらわれた。プラズマの蒼い炎。ひとつは、そのまま粘土のように形を変えて、双頭の犬と化した。山猫のように大きく、爬虫類じみた顔をして、四つの眼窓の中にも鬼火が詰まっていた。もう一つの炎は卵のように、中に女の子の形を宿した。十歳くらいで、肩のふくらんだ青いワンピースを着て、リボンのついた帽子をかぶり……赤い靴を履いていた。

双頭の犬はめらめらと揺れながら、威嚇するように身を低くした。地響きめいた唸り声が聞こえ、炎の涎がしたたると、石畳の上で、蟻をたらしたように燃えるのだ。しつゝと声を上げて、少女は犬をたしなめた。笛を吹いたような、うつろな声。揺れる炎の中にいるせいか、とても人形には見えない。

次に少女はこちらに向き直り、つゝと右手を差し出して、おいでおいでをした。炎の切れ端が何匹もの蒼いチョウと化して、彼女たちの周りを飛び交った。幻想だ。一種の電気催眠術だと理解しているが、頭の奥がじんとしびれ、甘い唾液が分泌された。炎の中から、少女はにつこりと微笑みかけた。

「だいじょうぶか？」

二葉の顔を覗きこむと、見開かれた目の中で、虹彩が収縮を繰り返している。よくない兆候だ。軽く頬を叩くと、びくんと肩が震えた。大きく目をしばたいた。

「ショーの前座に、つい見とれちゃったわ。行きましょう。真打の所へ案内してくれるみたいだから」

バレリーナの動作で、赤い靴の少女はくるりと背中を向け、先に立つて歩き始めた。双頭の犬はぐにやりと溶けて、巨大なアーマーと化してうずくまる。そのままずるずると少女の背に従つた。ひと氣のない深夜の待合室に、振り子の音だけが鳴っているように、

少女の靴音がコツチコツチと響いた。

アメーバーは這いながら、プラズマの蝶を一面にぱらまいた。また炎の一部はトカゲと化して走りまわり、時おり蝶を捕らえては、貪欲に呑みこんだ。中には背中から団扇状の羽が生えたやつがいて、こいつらは木から木へと飛び移りながら、空中で蝶を襲うのだ……ぱん、と頬に刺激が走った。

「ほら、目が泳いでる。ジャンキーはどうして卒業したんでしょう」「そのネタ、どこで仕入れたんだ？」

頬を押されたまま小声で尋ねたが、一葉は片目を閉じただけ。たしかにおれは処理班を辞めたあと、重度の薬物依存症におちいった時期がある。それをことさら吹聴した覚えはないが。ともあれ今の一発で、だいぶ頭がすつきりした。プラズマが捏ね上げた蒼い悪夢の洪水も、あの極彩色の幻覚には及ぶまい。

徐々に、ポイントに近づきつつあつた。

噴水は陰火を噴き上げ、常夜灯が明滅し、メリーゴーランドは音もなく回っていた。今や蝶にかわって、髪の毛状の触手を地面に引きずりながら、アンドンクラゲが浮遊し、水盤からは、脚の生えた魚が這い出してきた。靴底で陸棲の貝がぐちゃりと潰され、割れた殻の中で蛸に似た生き物がもがいた。

極力それらを無視しながら進むうちに、先を歩く少女が足を止めた。闇にこだまを返していた靴音が消えると、耳鳴りに似た静寂につつまれた。壊れたベンチ。梯子の取り外された滑り台。ジャングルジムには中が見えないほど蔓草が絡みつき、シーソーは永遠に傾いたまま……不意に、少女の姿が見えなくなつたので、あわてて視線をさまよわせた。

背の高い常夜灯が、広場の中央でぽつんとともに、その下のぶらんこを照らした。すっかり錆びた鉄柱の間に、一つ並んだぶらんこのうち、ひとつは片方の鎖が外れていた。少女は、もう一方に腰をかけ、赤い靴を路面につけたまま、軽くぶらんこを揺らした。

キイ、という音が高高く響いた。おれは神経を搔きむしられる

思ひがした。

少女までの距離は、もはや五メートルにも満たない。にもかかわらず、彼女は数日前の夜に見た等身大のビスクドールではなく、明らかに生身の女の子だった。相変わらず彼女の全身から、鬼火が放出されているが、そのせいで生じた錯覚とは思えない。

言葉にならない呻き声が、おのずと洩れた。暗雲のようなどす黒い憂鬱が胸から湧き出して、体じゅうに広がる一方で、頭の中が真っ白に染められてゆく。パニックだと知りながら、どうすることもできない。視界が白くかすみ、やがて霧の中にひとつ顔があらわれた。

妻の顔だった。

これ以上は不可能なほど見開かれた目には、苦痛と非難の色が交互にうつろつた。彼女は血まみれの手を差し伸ばした。救いを求めるように。あるいは、抗議するように……

(な……ぜ、撃つた、の……?)

頬に火がついたような感触がまた走った。いつの間に、石畳の上にひざまずいていたのだろう。一葉がおれを固く胸に抱きしめた状態で揺さぶっていた。

「エイジさん、聞こえる？ あれは『擬人』なんかじゃない！ ただのお人形よ！」

「しかし……」

「もう、お願ひだからしつかりしてよ。プラズマの炎の中にいるから、あんな芸当ができるんでしょう。でもしょせん、ただの幻惑よ。絶対に『擬人』とは違う。あのお人形は、決してエイジさんの心中に入り込むことはできないわ」

十七歳の小娘に勧まされて、おれはようやく我に返つた。ゆづくりと立ち上がり、彼女の肩に手を置いて、ささやいた。

「恩に着る。もうだいじょうぶだ」

赤い靴の少女は、依然、ぶらんこに腰かけていた。キイと音をたてて、時おり軽く揺らすばかり。漕ぎだす意志はないらしい。一葉を背後に残したまま、一人でぶらんこに近づいた。影が重なるほど接近したところで、少女は顔を上げた。栗色の巻き毛。泣いた後のような、腫れぼったい目もと。黒い瞳はどこまでもうつりで、ふくよかな唇は、きゅっと結ばれたまま。

あの夜、木馬に乗っていた人形とは、細かい特徴が異なっているが、それでいて紛れもなく同じ少女なのだ。あたかもこの子が死んだあと、嘆き悲しんだ親が、遺影から人形を作らせたように。

「きみは一人なのか」

自然にふるまつたつもりが、見事に声が震えた。燐光の中で、少女は大きく瞬きをしたきり。再び前を向いた拍子に、ぶらんこがキイと鳴つた。

「いけないなあ。こんなに暗くなつてから、一人で遊んでいたのは。ご両親が心配するだろう。家はどこなの？」

小さな右手が鎖を離れ、ある一点を指さした。赤い靴の少し先。蒼い火影を映している、石畳の上を。おれは背中に水を浴びせられた気がしたが、つとめて明るい声で、次の質問を発した。

「そんな所を指されても、かなわないなあ。お父さんはどこにいるの？」

じつと前を向いたまま、同様に右手が突き出され、すつ、とまた地面を指さした。もとは愛らしい手の影が、炎によつてグロテスクな虫の形にゆがめられた。

口の中がからからにかわいていた。本能は恐怖の仮面をつけて、

すさまじい力でおれの襟首をとらえ、後ろに引き戻そうとする。下がれ。そしてそのまま走り去れ。間違つても、最後の質問を口に出してはいけない……心の声とは裏腹に、呪縛されたように口が開き、寒風に転がる枯葉のような音をたてた。

「じゃあ、お母さんは？」

地面を指したまま、少女はいきなり顔を上げた。何も見ていない目でおれを見つめ、真横に口を開けさせた。これほどおぞましい笑顔が存在するだらうか。思わず後退りしかけたとき、大きく地面が揺れた。まるで蛇の背のように、のたうつた。

ウロコをおもわせて、石畳がばらばらに弾き飛ばされ、少女の足もとを中心に、巨大な亀裂が八方に走った。足をすくわれず飛び退いたのが奇跡のようだ。

石畳を割つてまず突き出されたのは、巨大な球根をおもわせる「口」だった。真横にぱっくりと割れて、無数の細長い棘のような牙を剥き出しにし、熒光を放つ唾液をしたたらせた。その両側から三対の脚が飛び出し、太い爪状の先端を石畳に食い入らせて地面を踏みしめると、ばらばらと瓦礫を吐き出しながら、漆黒の本体を持ち上げた。

多脚ワーム！

まさに漆黒のサソリに似ていながら、悪夢の中で何十倍も醜悪に歪めたような姿をしていた。細長い口吻の両脇に、いやに太い、先端が肉質の触覚があり、脚の上下には枝状の副肢が無数に蠢いていた。硬い瘤を並べた背中には、縦に四つの巨大な「目」が並び、それらはあまりにも人間の目とそっくりなのだ。

サソリ同様、尾は弓なりに反り返り、先端の「口」を大きく広げて、うねうねと蠢く牙を露出させた。おれを頭から丸齧りと、しゃれ込むつもりだろう。

「伏せる、一葉！」

叫ぶと同時に、片膝をついた。いろいろと盛りだくさんの趣向だったが、結局まんまと出てくれたわけだ。笑みを浮かべる余裕

すら、取り戻していた。パインソングを抜いて、六インチの銃身を向け、前から一番めの、最も大きな「目」に狙いを定めた。

引きがねをひいた。ガチッ、という不吉な音が手の先で響いた。

不発弾だ。

「くそつ！」

多脚ワームは歓喜するように脚を踏み鳴らし、瓦礫をさらに弾きながら前進した。団体がでかいわりに、動きの速さはアーマードワームの比ではない。シリンダーを抜いて不発弾を捨てたが、ポケットの中の最後の一発を装填する時間は、とてもなさそうだった。

逃げろと叫ぶつもりで振り向いたとたん、信じられない光景が飛び込んできた。一葉が、猛然と突っこんでくるのだ。

「うわああああっ！」

突き出された多脚ワームの「口」は、おれの頭上を越えて一葉にせまった。彼女の靴底から火花がほとばしり、地面に激突する「口」とは入れ違いに、細い体を宙に躍らせた。弾き出された二つのスプリングが、空薬莢のように降つてくる。一葉は空中で右腕を怪物に向かって真っすぐ突き出し、もう片方の手を添えた。

「お祈りを済ませておくれことね、ベイビー」

どこに隠し持っていたのか、彼女の手には、ドライバーを一回りほど大きくしたような、見たこともない銃が握られていた。『ほん！』と音がして、閃光も煙も火薬の臭いもない代わりに、衝撃波のようなものが、多脚ワームを直撃した。空砲だ。もともと子供の玩具だが、とんでもなく兇悪に改造されている。

石畳を爪で引っ掻く、気が狂いそうになる音を発しながら、漆黒のサソリは約一メートル後退した。全身を波打たせ、グギギギグゲエッ、と、一度と聞きたくないような悲鳴を上げた。

発射の反動で、二葉は後方に吹き飛ばされ、茂みの中に突っ込んだ。『キヤッ！』といふ悲鳴を聞く限り、お尻をぶつけた程度だろう。無理な体勢から無理してキメゼリふを吐いたわりに、相手にたいしたダメージは与えていないが、少なくとも、おれが第三の弾薬を装填する時間はかせ이다。

さて、

一発めはアタリ、二発めはハズレ。となると、この弾が生きている確率は五十パーセントだが、悪運の強さを加味すれば、七三パーセントくらいの自信はあつた。一葉にならつて、キメゼリふを吐かなければいけないような気がしたが、それも彼女が与えてくれた余裕にほかならない。

「お寝んねの時間だぜ、ベイビー」  
引きがねをひいた。

不発弾ではなかつた。

反動で吹き飛ばされ、三回転して顔を上げると、田の前に、炎の柱が出現していた。

天をも焦がすかと思われた、灼熱する火柱の中で、世にもおぞましい断末魔が地を揺らした。いつの間にかそばに立っていた二葉の肩を、自然に抱いた。火勢は見る間に弱まり、生き物の焼ける臭いを残して、円形に穿たれた穴の中に吸いこまれた。

がさがさと、耳障りな音が鳴っていることに気づいた。巨大なアリジゴクの巣をおもわせる穴の中を、赤い靴の少女が四つん這いで這い回っているのだ。等身大の人形の姿をあらわし、焼け焦げた服から、球体関節が露出していた。少女は突然動きを止めて、こちらを見上げた。

ガラスの眼玉は真円形に見開かれ、口は耳まで裂けて、ノコギリの牙を剥き出しにして、ニタニタ笑うのだ。

「そういうこと……」

一葉がつぶやいて、ぎゅっと身を寄せた。断片的な言葉の意味が、いやになるくらいわかる気がした。間もなく地面が揺れ始め、穴の中から、先端の尖った、細長い脚がいくつも突き出された。少女人形は再び這いながら、ずるずると螺旋を描いて穴の中心へ下りてゆくと、下半身をすっぽりと埋めた状態で、狂ったように両腕を振り回した。

この世のものとは思えない笑い声が鳴り響いた。人形の目が青く燃えた。

その頃には、私道全体が脈打っていた。脈動は蠕動にかわり、波のように揺れて、瓦礫と化した石畳を吐き出しながら、巨大な節足動物の黒光りする体をあらわした。おれたちはとうに立っていられなくなり、常緑樹の茂みに弾き飛ばされていた。ひざまずき、一葉の体を抱いたまま、穴の中央からせり上がりてくる化け物の本体を見つめた。

……ヘビ、ノ、アタマ、ハ、サソリ……デ、ス。

そういうことか。

と、遅ればせながら、心の中でつぶやいた。本体は首のないムカデだった。いや、さつき吹き飛ばした「アタマ」の代わりに、真紅

の、ペンシル状の器官の先端に、少女人形の上半身が、そつくり嵌まりこんでいた。巨大ムカデの脚は細長く、一つの節に二対ずつついており、また「丁寧」にも、腹部には一つずつ、「田」が嵌めこまれていた。

けれど、何よりもおれを驚かせたのは、最先端の真紅の節の腹部に白く刻印された紋章だつた。「逆さ△」の紋章！

「なんなの……こいつ」

腕の中で、一葉の震えが伝わつてくる。あるいはおれ自身、震えていたのかもしれない。気のせいではなく、明らかに耳を聾するような贊美歌が、どこからともなく鳴り響いていた。化け物の頭上には真っ黒な雲が渦巻き、幻燈のように、少女人形の恐ろしい顔を、でかでかと映し出していた。

こいつは多脚ワームに違いない。けれど、贊美歌といい、幻燈といい、ワーム」ときにできる芸当ではない。三十パーセント。いや、ともすると半分くらいは、イミテーションボディ化しているに違いない。

ギチギチと狂喜するよつた声を発し、私道全体が変じた化け物は、無数の「田」でおれたちを見下ろした。口の所在は明らかでないが、まあ、ミンチにすればどこからでも食えるだろつ。化け物の姿を見せまいとして、おれは一葉を背中でかばい……

待つていた。

伏兵は、先にあらわれたほうが負けである。

「はああああああ…」

声のしたほうを振り向いて、おれはまたしても、信じがたい光景を田の当たりにした。

石畠はほとんど掘り返され、代わりにどこまでも続く多脚ワームの胴体が、低く高く波打っている。その上を、アマリリスはエプロンごとスカートをつまんだ恰好で、振り落とされることなく、猛スピードで駆けて来るので。まるで、十一時の鐘の音を聞いたサンドリヨンのように。

次の瞬間、たん！ と、少女はワームの背を蹴り、逆さに宙に舞つた。

不思議な舞踏のように、両脚を空に突き出した姿勢のまま、背中から突っ込み、ワームの頭部に近い体節にぶち当たる直前で、半回転して正面を向いた。そのときすでに、彼女の左手はハガネの爪と化しており、高々と振り上げた状態から、おもむろに化け物の胸に切りつけた。

ガキッ！ という、硬いものどうしがぶつかりあい、かつ砕ける音が鳴り響いた。ワームの悲鳴が空を裂き、バランスを崩したクレーンから何本もの鉄骨が降つてくるように、化け物の脚がばら撒かれた。その中を、逆さまのアマリリスが飛んできたかと思うと、くるりと背を向けて、おれたちの面前に着地した。

ハガネの爪からワームの青い体液がしたたつている。化け物は、折られた脚を振り回し、「田」のひとつから体液を噴き出しながら、直立した上体をのたうちまわらせた。頭上に映し出されていた人形の顔は消え、もはや贊美歌も聞こえなかつた。

少女は間合いを保つたまま、なかなか踏み込まない。黙じみた唸り声を上げて、ワームは赤い三角帽子のような頭部の下を、たちまちコブラの首の形にふくらませた。さらに翼が生えるように、その両側から、巨大な鎌に似た腕が三対出現した。それらが体の全面で

噛みあうとき、ギチギチと音をたてて、蒼い火花を飛び散らせた。

「アマリリスト……」

思わず声をかけると、少女は必要最小限の角度で振り向いた。目礼するようにうなずき、また前を向いたとたん、怪物に向かつてダツシコした。

「はああああああ！」

土煙を引きながら高く飛び上ると、両腕を面前でクロスセセ、であろうことが、六本の巨大な鎌が待ち受けている怪物の胸に、まともに飛び込んだ。おれは眉をひそめた。腕の中で、一葉が身を硬くするのがわかった。大鎌が少女を抱きすくめるのを目の当たりにしたとたん、怪物の上体は、はるか後方へ吹き飛ばされた。

長い長い尾が、ずるずると引きずられてゆく。おれと一葉は顔を見合わせ、すぐに後を追つた。多脚ワームの絶叫に混じって、行く手から聞こえる、ぐちゃぐちゃとともに碎くような音が、しだいに大きくなる。前方の闇を見つめて走りながら、おれは無意識のうちに、少女の名を呼び続けていた。

ワームの大鎌は、明らかにIB化した部分だ。いくら少女自身がイミテーションボディだとしても、真にそうである部分は左手首から先に過ぎない。あの大鎌とともに張り合つたのでは、勝敗は目に見えていた……足を止めた。おれの爪先には、女の子の首がひとつ転がっていた。

それはノコギリ状の歯を剥き出した、ビスクドールの首だつた。切断面から臓腑のようなコード類が食み出し、ガラスの目玉はしきりに蠢いているが、チャペックとしての機能は完全に停止していた。

ワームの絶叫は続いていた。それはしだいに苦痛のトーンを増してゆくようだ。釘打たれたように背を地面につけて、ワームはすでにびくびくと痙攣していた。六つの大鎌のうち、あるものはへし折れ、あるものは砕け、あるものは自身の「目」を貫いていた。上に乗ったアマリリストが何度も爪を突き立てるたびに、体液が飛び散り、

絶叫がほとばしった。

さらに少女はワームの腹部へ深々と爪を突き立てるごとに、縦に裂きながら後退し、引き抜いたところで振り返った、瞳が真紅に燃えていた。我知らず身震いするおれを尻目に、左手を振り上げ、今度はすばりと真横に薙いだ。おぞましい断面もあらわに、多脚ワームの体は二つに切断された。

断末魔とともに、体液が滝のようにあふれた。

「アマリリス……アマリリス。もういい、充分だ……！」

声がおのずと震えた。少女は、けれどさらにもう一度左腕を突っ込み、臓物をつかんで引きずり出した。それを地面に叩きつけでは、また突き刺し、殺戮を止めようとした。一葉がつぶやいた。

「暴走……？」

「マスター」

繰り返される動作とは裏腹に、あまりにも哀しげな声が、おれをたじろかせた。灼熱する瞳からあふれる涙が、はつきりと見えた。

「お願い、です……わたしを……見ないで」

分断された多脚ワームは、すでに声を発しておらず、痙攣する肉塊と化しつつあった。

燐光を発する体液が少女のヒプロンを青く染め、頬に点々と飛び散つて、涙のあとを搔き消した。

28日午前2時ごろ、第111街区において、営業職、足立良文容疑者（29）が民間人宅へ侵入し、一家四人を惨殺、およそ15分後に突入した武装警察によつて射殺された。殺されたのは、金物店自営業、高松光男さん（59）、妻律江さん（54）、長男定正さん（32）、次男光正さん（27）。

区殺人捜査課の調べによると、足立容疑者は会社の同僚と酒を飲んで泥酔し、三人に支えられながら帰宅中、突然暴れだした。同僚らの制止をふりきり、金物店のシャッターをこじ開けると、ガラスを割つて押し入り、犯行に及んだ。

高松さん一家は4人ともすでに2階で就寝していたが、もの音を聞きつけて、1階に降りたところを襲われた。光正さんらが肉切包丁を持って抵抗したものの、首の骨を折られるなどして即死。止めようとした同僚2人も2週間のけが。また、武装警官2名がおよそ3ヶ月の重体を負つた。

武装警察が駆けつけたとき、足立容疑者はすでに胸など3箇所に肉切包丁が刺さつており、全身に銃弾を浴びながら、5分間暴れ続けたといつ。

28日に金物店自営業、高松光男さんら家族4人が殺害された事件で、司法解剖の結果、営業職、足立良文容疑者の遺体から大量のKr-13が検出された。Kr-13は通称「クランケン」といわれる、第二次百年戦争時に開発された合成麻薬。麻薬禁止法の最重要な取締り案件に指定されている。

捜査当局はKr-13と犯行の関連性を調べるとともに、入手経路の割り出しを急いでいる。

茨城麗子は窮屈なエレベーターを出て、狭いホールに降り立つた。配管が剥き出しの壁に、模造檜材のドア。看板も何もなく、向こう側からかすかに音楽が洩れてくるばかり。反射的に腕時計に目をやると、約束の十一時まであと一分。ノブをつかもうとして、一瞬ためらつたあと、彼女はドアを引き開けた。

「いらっしゃい」

バーテンダーがカウンターの中で、酒を作りながらつぶやいた。男に凝視されなかつたことなど、ここ十年の間に何度あつただろうか。思わず眉をひそめたほど、店内は極めて暗く、衝立や観葉植物が巧みに配されているため、この位置からでは客の顔がまったく見えない。

相変わらず見向きもしないバーテンダーの前を通り過ぎ、中へ進んだ。思ったよりフロアは広く、テーブルはほぼ満席。オールディーズのライブ音源に低い話し声の混じるさまは、宗教的祕密結社の会合をおもわせた。

最も奥まつた位置にある二人掛けのテーブル席に、待ち合わせの相手はすでに座っていた。気泡を上げる青いカクテルのグラスの前で、軽く頬杖をつき、麗子を見上げると片手をあげた。

「ひさしぶりだな」

温度の低い、ハスキーな声。赤い唇が、月の形を描いて微笑んだ。しばし、椅子にかけるのも忘れて、麗子は相手を見つめた。ほつそりした体を包む、黒いパンツスーツ。ブラウスもまた黒く、ネクタイだけがワインレッドだ。思いきつたショートヘアだが、男のようには短くはない。禁欲的な髪型は、むしろ彼女のなまめかしさを強めているようだ。

「ちょうど一年ぶりかしら」

「五日前に逢つているがな」

「やつだつたわね。あなたは少しも変わってないわ……」

ある名前を口にしようとして、手で制された。しなやかな指をひるがえし、向かい側の椅子をさしながら、女は言つ。

「昔の名で呼べば、親友のおまえといえども、命はない。とにかく座つたらどうだ、麗子」

椅子にかけて初めて、背中の冷たい汗を意識した。少しも変わつてないという言葉は、早くも撤回しなければなるまいと麗子は思う。少なくとも、今の厭じみた殺氣は、昔の「親友」にはなかつたものだ。

バーテンダーが注文をとりにきた。やはり客の顔を見ようともせず、始終壁の辺りを眺めていた。ドライマティニーを運んできた時も同様で、去つてゆくかれの背中を見送り、麗子はためらつた。

「変な人ね」

「おまえの胸を見ない男が、同性愛者以外にいるのかといふ言つぐさだな。やつの性癖など知るよしもないが、少なくともここでは客の顔を見ないよう、訓練されている」

ちょっと肩をすくめて、グラスを持ち上げた。たいして驚きもしなかつた。

「乾杯したいんだけど。あなたのこと、これからどう呼んだらいいのかしら」

女もグラスを手にした。気泡を上げる青い液体の上で、薄い笑みを保つたまま、赤い唇がこう告げた。

「カラリ、とても呼んでくれ」

お互いの健康を祝して、グラスが触れ合わされた。一口飲んだあと、麗子はしばらく無言で、カクテルグラスの中身を見つめていた。訊きたいことは山ほどある。現在の自分は九割がた、疑問符で構成されていると感じるほどだ。けれどそれゆえに、どう切り出せばよいのかわからない。

相手が笑う気配を感じて顔を上げた。

「相変わらずで安心したよ。口紅の跡をつけずに飲むところも、昔と変わっていない」

笑みを返して、またグラスを傾けた。今の仕事の半分は、喫茶店のウエイトレスと変わらないが、女性客のカツプに残った口紅の跡を見るたび、眉をひそめてしまつ。女の「本性」がそこに刻印されているようで、身につまされる。

唇をつけてもなお透明なグラスの縁を、軽く指で弾いた。麗子は学生時代、この技術を習得するのに、半年を費やした。「カヲリ」と知り合つたのも、ちょうどその頃だ。

学部は違つていたが、同じ区立大学の一年生だった。短い冬が始まりつとしていた。そのせいか、珍しく学食は満席に近く、テーブルの端の席を確保した彼女は、賭けてもいいが、目の前の空いた席には、軽薄な男子学生が座るだろうと考えた。

(じゃまでなければ、かけさせてもらつぞ)

予想はあらゆる面で裏切られたと言つていい。カレーライスを黙々と口へ運んでいた彼女の耳に、まず飛び込んできたのは、軽薄さからは程遠い、落ち着いた口調。次に顔を上げると、薄笑いを浮かべた男ではなく、目の覚めるよつた美しい女子学生が、上品に微笑んでいた。

当時のカヲリは長い真つ直ぐな髪を、頭の後ろで一つに結んでいた。弓道部にでも入つているのかと考えたほど、背筋をしゃんと伸

ばした姿勢のよさに目をひかれた。

（わたしの顔に、聖なるしるしでも見つけたのか？）

（いえ、ごめんなさい。あんまり奇麗だったもので）

声をたてて、カヲリは笑った。話しぶりとは裏腹な、高く澄んだ声。半径三メートル以内にいた学生たちが、いつせいに振り向いた。（じつはレズビアンだ、などという安直な展開は勘弁してもらいたい。もし本当にそしたら、心から謝るが）

そうではないかと直感したとおり、カヲリは富豪の娘だった。当時すでに富の大半は、首長の血族に集中していたので、彼女の実家もまた無関係だった筈はない。今も昔も、仕事以外では、あまり他人の生き立ちを詮索しない麗子だが、カヲリと付き合うようになつてから、竜門寺家の影がいやでもちらつくようになった。

ただ、姓が異なつていたし、血族会議に招かれるほど濃い繫がりはなかつたらしい。むしろカヲリの父親は凄腕の実業家で、新東亜ホテルに関する何らかの権益を独占し、莫大な富を築いたという噂だ。

麗子とは、気が合つたという以外にない。

お互に淡白で、べたべたした付き合いは好みないほうだが、それでもお互いが「親友」であることに疑問の余地はなかつた。大学を出てからも、当然のように二人の関係は続いた。麗子は大手商社に勤め、カヲリはただぶらぶらしていた。

（どういうわけか、わたしには勤労意欲というものが皆無だ。おかげさまで、何もしなくても食べてゆける身分だからな。せいぜいありがたく利用させてもらうよ）

実際には、彼女が言うほど気楽な身分でないことは、よくわかつていた。彼女の父親は金銭だけを信じる男だった。美しい娘を政略結婚に使わない手はなく、相手候補の筆頭には、またしても竜門寺の名が挙がつていた。ゆえに何年もの間、彼女が父親の圧力をかわし続けてこれたのは、奇跡と呼ぶに値した。

やがて人類刷新会議の猛攻が始まり、都市地区を中心に、内戦状

態に突入した。ただし、歴史家たちはこれを「戦争」とは呼ばず、クーデターと位置づけている。それほど電光石火の勢いで政権交代が行われ、首長連合は速やかに瓦解したのだ。

混乱の中で麗子は職を失い、カラリの行方はわからなくなつた。五日前、人類刷新会議の武装警官となつた彼女に、再会するまでは。

「わたしだと気付いていたのか？」

「平静を保つのがやつとだつた。でも、あなただとわかつたからこそ、エイジさんを撃たないと確信できた」

「ふん、見ぐびられたものだな」

そう言つた声に不機嫌な調子はなく、ただもの憂げな表情でグラスを傾けた。一年の歳月の中で彼女の身についた、麗子の知らない表情だ。

カラリの行方がわからなくなつてゐる間も、麗子は月に一度ほど絵葉書を出し続けた。彼女の実家は刷新会議に接収され、両親もまた行方知れずだが、読まれる確率はゼロではないと考へて。あえて封書にせず、自身の簡単な近況だけを添えた。

「葉書はすべて読んだよ。寝てもいい男がいると書いてあつたが、それがあいつなのか」

あやうくドライマティニーを吹きそつになり、麗子はおもつをま喙せた。

「図星か。あんな、くたびれた男が好みだつたとはな。何でも知つてゐるつもりでいたが、意外な一面を見る気がするぞ」

「肯定していないでしよう」

「この期に及んで言い募るか。だが、もしあの男を殺せば、麗子はわたしを恨むだらうな」

いきなり核心に触れられて、息を呑んだ。じつと注がれる冷たい眼差しの前で、唇をかんだまま、しばらくは何も言葉が浮かばなかつた。

呼び出しを受けたのは、今日の午後一時ごろ。外部から会社にかかる電話を何気なくとると、忘れられる筈もない、「親友」の声が囁いた。

(麗子か。頼みみたい用件がある。今夜十一時、旧第5街区の芦原ビルに来てくれ。五階の店の奥にいる)

それだけで切れたので、動搖をあらわす暇さえなかつた。けれども気がつけば、少年社長、竹本ワットの視線が、じつと彼女に注がれていた。

(間違い電話ですか)

(え、ええ。一方的に出前を頼んで、切れてしましました)

(遅い昼食なんですね)

ワットはそう言つたきり、とくに追及はしなかつた。が、これまでの経験上、何を嗅ぎつけたか知れたものではない。彼女の十倍頭がよく、完璧なサディストで、どこまでも底意地が悪い。それでも秘書を続けてこれたのは、無職の時に拾われた恩もあるが、かれの経営者としての天才的な能力に感服している部分が大きかつた。

いきなりの呼び出しには、もちろん、飛び上がるほど驚いた。

どんなにきさつがあつたのか知る由もないが、武装警官となつた以上、素性は隠したがる筈。間違つても、向こうからコンタクトを

とつてくるとは、予想していなかつた。他言するなど釘を刺すつもりなのか。あるいは……

(いっそ、わたしを消すつもりか)

いざれにせよ、何としても行く必要があつた。人類刷新会議の武装警官として、「親友」はエイジをつけ狙つてゐる。殺すとさえ宣告している。頼みこんで、誤解を解こうといふのではない。そんな甘い夢を見るほど、お互い子供ではないが、あの、レイチエルの一件に端を発する、武装警察の一連の行動の意味を知りたかつた。ワットに話すべきかどうか、これは最後まで決めかねた。性格はよくないが、かれの圧倒的な頭脳は頼りになる。相手に気づかれず護衛をつけるくらい、かれなら朝飯前だらう。とうとう話さなかつた理由は、麗子自身にもよくわからない。きわめて感傷的な何かが、踏みどまらせたとしか。

(少し疲れが溜まつてゐるようですね)

十時半を回つてゐた。間の悪いことに、今夜は夜勤の現場を五件もかかえていた。ワームの駆除ではなく、破損した配管の補修ばかり。この地区でも、多分に洩れず、あらゆる配管が剥き出しのまま、ビルの壁や道路わきを走つてゐるので、ちょっとしたアクシデントですぐ破裂する。とても政府の手に負えず、結局、なんでも屋に回つてくる。

立ち会つほどのことはない、簡単な現場だ。それでも五つ重なれば、秘書がハイさようならと帰るわけにはいかない。頭痛を訴えようか。親類に危篤状態になつてもらうか。考えあぐねていたところ、少年社長はいつになく優しい声で、そう言つたのだ。

(もうあがつていいですよ。だいたい、配管は扱わないと言つてあるんですが、親父の代からの付き合いがありましてね。古い職人を、簡単にクビにするわけにはいかない。なに、どれも報告書にハンコを押すだけで済む話ですから、明日の朝で構いませんよ) 声は不気味なまでに優しいが、目つきは最も兇悪なサディストのそれだつた。かれの言葉は鞭のように鋭く、彼女の背を叩いた。

(「人食い私道事件」の事後処理も、なんとかひと段落つきました。たまにはお友達とバーにでも寄つて、憂さを晴らしては如何?)  
いつのまにか、バー・テンダーがかたわらに立つていた。白い袖がひるがえり、空になつた二つのグラスを取りのけ、新しいカクテルをテーブルにのせた。いつさい手もとを見ずには……かれが去ると同時に、カラリは笑つた。昔と変わらない、澄んだ声が響いた。  
「そう硬くなるな。今夜はプライベートだ。麗子から何か聞きだして、やつのもとへ踏み込もうなどと、考へているわけではない」

ちょっとグラスをかかげて言つ。応じて麗子も一杯めのドライマティーニを手にした。決して弱いほうではないのに、先の一杯がけつこう効いていた。

「よかつたら、先に用件を聞かせてくれない? 賴みたいことがあると、電話で言つていたでしょ? つのは話は、それからという」とで

努めて快活な声を出しつとして、語尾が震えた。カラリは、何もかも見透かしたような目つきを送つた。青い液体の前で、唇が赤い月の形を描いた。

「麗子の会社は、いわゆるなんでも屋といつやつだろ?」「ええ

「ならば、建て前上は、客のあらゆる依頼を引き受けてくれるのだな」

建て前上はね。そう返してから、麗子はきゅっと置根を寄せた。思えば、じつに微妙な質問である。なんでも屋を名乗る以上、なんでもやるのが建て前だ。たとえ暗殺の依頼を受けても、引き受けなければ看板にもどる。けれども逆に、民間企業である以上、なんでもやれば後ろに手が回る。「建て前上は」法律を遵守しなければならない。

例えばワームを駆除するために、禁制の重炉心弾を使つたり、さらにはイミテーションボディまで投入したり……当局に提出する書類に、むろんそんなことは一行も書かれていない。

どっちなのだろうと麗子は思つ。看板どおり、何でもやつてくれることを期待してゐるのか。それとも、目的のために手段を選ばぬ、ゴロツキ企業を、ひとつ駆除したいだけなのか。

「今夜はプライベートだと言つただろう」

またしても、彼女の心を読んだようにカヲリは言い、青い酒を口へ運んだ。背景に流れる、はるか昔に録音されたライブ演奏は、電子楽器で単調なフレーズを延々と搔き鳴らしていた。神経症的な、それでいてどこか落ち着くような。こんな音楽に共感できる自身もまた、病んでいるのかもしぬれないが……カヲリは続けた。

「まあ仕事柄、全く切り離すことは不可能だが。麗子とこうして会つていることも、これから頼むことも、人類刷新会議の指示では決してない。わたしの個人的な意思だと思つてほしい」

「竹本商事にあなたが……カヲリが個人的に依頼を？」

「そうだ。じつはここ二ヶ月ほど、この地区に潜入している麻薬密売組織を追つてゐるのだが、どうしても尻尾がつかめない。多くの犠牲を払つて、アジトまで突き止めたんだがね。決定的な証拠がない限り、武装警察といえども、そつそつ手荒なマネはできないのさ」「エイジさんの部屋には、遠慮なく踏み込んだじゃない」

それにプライベートと言いながら、結局仕事の話ではないか。酔いも手伝つて、憤然と言い放つたあと、思わず口に手をあてた。力

ヲリは、けれど気とした様子はなく、薄い笑みの前で指を組んだ。

「なにしろ相手は麗子の想い人のような、一匹狼ではないからな。下手に手を出せば、当局の存亡にかかわりかねない」

「相当な資金力と組織力が背景にある？」

「さすが、呑みこみが早いな。すでに察していると思うが、問題はどんな組織がウラについているのか、全く見えてこないことだ。た

しかに大金が流れ込むのに、行く先は五里霧中でね」

「アジトまでつかんでおきながら？　まさか、そこに潜入して証拠を探して来いなんて、ばかなことは言わないでしううね」

「その、まさかだよ」

相手は眉ひとつ動かさない。美しい指をひるがえしてグラスの縁をもてあそび、次に中から砂糖漬けのチエリーをつまみ上げた。麗子の声は、おのずとかされた。

「民間人の出る幕じゃないと思つけど。刷新会議には諜報部員が一人もいないなんて、言わせないわよ」

「十九人だ」

「えつ？」

「ある者は客になりますし、ある者は仲間に化け、ある者はひたすら姿を隠して潜入したが、一人も生きて帰らなかつた。ただ切り取られた体の一部ばかりが、当局宛に送られてきたよ」

赤い唇がチエリーをくわえるさまを、眉をひそめて眺めた。

「麻薬の密売となると、当然、イーズラック人が絡んでいるのでしよう。アジトというのもまた、かれらの巣窟になるのかしら」

「鋭いね。やはり麗子に話してよかつた。かれらが絡んでいるからこそ、話が霧の彼方に紛れてしまうんだ。かれらは富を軽蔑している。生活のために武器や麻薬を横流しても、必要以上に儲けることは、かれらの信条に反する。貧者として生きるというのが、長い放浪生活の中で、かれなりに身についた生きるための知恵なんだ

ね」

富めば人間は必ず墮落する。嫉妬が生じ、盗みや争いの元になる。イーブラック人たちは貧しさを誇りとし、富の分配を最大の美德と考える。多く儲けた者は、持たない仲間に分け与えるし、そうしなければ、もはやイーブラック人として認められない。我々同様、墮落した人種とみなされ、集団から追われなければならない。

「よつて当然、密売による莫大な力ネは、かれらのもとには留まらない。ウラで吸い上げている組織が必ず存在する筈なんだ」

「それが……首長連合の残党だとにらんでいるのね」

もの凄いような笑みをカラリは浮かべ、麗子の背筋を、冷たい稻妻が何度も貫いた。ここにきてようやく、彼女の考えが理解できた。エイジをぶつけるつもりなのだ。彼女は明らかに、かれと旧首長連合の関係を疑っている。この一件にエイジをぶつけることによって、かれを試し、かつ、麻薬密売組織の解明にも役立てるつもりなのだ。

「あなたは、恐ろしい人だわ。でも、いつたい……それほどの利益を生み出す麻薬とは、どんなものなの？」

チエリーをくわえたまま、彼女の唇が蠢いた。全く発音されなかつたにもかかわらず、麗子の脳裏に、その単語は恐ろしい力で絡みついてきた。

『クラーケン』

電話が鳴っていた。

布団を引っかぶつたまま、いつと唸つて体を縮めた。ベルの音は頭の奥で頭痛と共に鳴し、氣の触れた一重奏を搔き鳴らすようだ。おれはほとんど、ベッドから転げ落ちる恰好。ふらつく足取りで電話機の方へ向かった。どこのどいつか知らないが、問答無用で叩き切つてやるつもりで。

足の裏で、合成ビールの空き缶がぐしゃりとつぶれた。ラックにもたれ、鉄アレイのように重く感じる受話器を持ち上げた。

「よかつた、いらっしゃったんですね。ハ幡です」

口調から察するに、一彦のまつと思われる。そうとわかれれば叩き切るわけにもいかず、阿呆みたく、ぱりぱりと頭を搔いた。今何時ごろなのか。そもそも、毎か夜かさえ判然としない。カーテンは閉めきられており、部屋の中は薄暗いが、つけっぱなしのキッチンの灯りが洩れてくる……急に寒々しい気分に襲われて、痙攣的に肩を震わせた。

よくないな、と思う。ウツの兆しが始まっている。

「Hイジさん?」

「ああ、すまない。今起きたところだ」

我ながらぎょっとするほど、疲れきった声。さすがに一彦も驚いたのか、息を呑むような間が生じた。いざか話しかけてやつに、かれは言ひ。

「お休みのところを、申し訳ありません。じつは先ほど、相崎博士から連絡がありまして。アマリリストさんが、面会可能になつたそうです」

受話器を握りしめた。危うく博士に換われと叫びそうになり、懸

命に呼吸をととのえた。

「カズは、もう会ったのか？」

「いえ、先にエイジさんに連絡しておいたと思いまして。もしこれから来られるのでしたら、一緒に立ち会いつもりです」「わかつた。二十分で行く」

受話器を置いて、うなだれたまま溜め息をついた。一日酔いだか三日酔いだか知らないが、あれほど執拗な頭痛が奇麗さっぱり消えている。かわりに全身を浸しているのは、圧倒的な悲哀だ。こいつから逃れたいばかりに、みずから酒に溺れたのではなかつたか。悲哀に溺れるのが恐ろしいばかりに。

振り返ると、「ヨミに占領されている床の一角に、作りかけのジグソーパズルが、まだ残つていた。湖と、その周りの花畠の一部が、どうにかこうにか組み上げられている。ここ数日、極力視界に入れないようにしてきたのだが、かといつて崩すわけにもいかず、そのままにしてあつた。

ようよろと外套を拾い上げ、鍵もかけずに部屋を出た。外はすでに夜らしい。上の空でハンドルを握り、十三分後には八幡商店の駐車スペースに車を入れた。シャッターの前に、一彦がぽつんと立つていた。

「一葉は？」

いるとばかり思つていたのだ。たしかミニショーン以来、彼女とは一度しか顔を合わせていない。

「まだ図書館だと思います。期末試験が近いとかで、珍しく猛勉強中なんですよ。田頃サボつてるぶんのツケが溜まつているんですね。何か用事でも？」

「いや……」

むしろ、あの男の子たちに勉強を教えているのではあるまいが。どこの高校も試験日は同じなのだから。二人の「ボーイフレンド」ができたのは大いに結構だし、そのぶんつき纏われなくなつて、なさらよしとすべきところ。おれ自身、淋しがつてはいるのだとした

ら、気弱になつたと言わざるを得ない。

ガレージの一階を訪ねると、相崎博士が髪を振り乱した白衣姿で、直々に出迎えた。その様子から、かなりハードな作業を、直前までこなしていたことが察せられた。黒木のほうは、実験室につきつきりなのだろう。

「ようやく持ち直したわい。一時は凍結も止むを得んかと考えたほど、浸蝕が進んだが……あの子は、じつに強いよ」

おれは眉をひそめたまま黙つていた。博士は苦笑したきり、珍しく皮肉を言わずに背を向けた。先に立つて案内する後姿には、疲労の跡がありありと浮かんでいた。常に年齢不相応な精力をみなぎらせているこの男には、ついぞなかつたことだ。

カプセルが置かれていたのとは、別の部屋に通された。壁や天井を機材が埋め尽くし、床にはコードやチューブが隙間なく走り、そして無数のモニターが明滅していた。

中心に、古代ローマの臥床をおもわせる奇怪なシートが据えられ、アマリリストが全身を黒いベルトで固定されていた。左手は元に戻っているが、時おり、発作的に指が鉤型に折り曲げられた。そのたびに、少女は目を閉じたまま、苦しげに呻いた。

「アマリリスト……！」

思わず駆け寄りうつとしたとき、数台のモニターが火花を吹いて破裂した。計器類は赤く染まり、何種類もの警報が鳴り始め、いかにも不穏な調子で部屋全体が明滅した。

頭部と両肩をのぞく少女の全身は、「ゴムをおもわせる素材でぴっちりと覆われていた。一種の拘束衣だろつ。至る所から細長いチューブが突き出し、臥床に繋がれてくるさまは痛々しい……少女の唇が震え、つぶやいた。

「マスター……ですか」

「わかるのか？」

「オム、レ……を……つく、り……」

「えつ？」

「オム、レ……はや、く……オム、レ……」

また次々とモニターが吹き飛んだ。少女の煩悶は激しさを増し、テスラコイルをフル回転させたように、臥床の周りで「ロナ放電」が生じた。無数の蒼い蛇と化して踊り狂つた。

「まずいぞ！ エイジくん、きみは何か彼女に命令したままだろつ。そいつが解除されちゃあらん！」

見たこともないほど取り乱して、博士が叫ぶ。髪がほつれ、汗ばんだ額に貼りついている。少女がどんな「命令」を実行したがっているのか、とつくにわかつっていた。わかつていたからこそ、咄嗟に言づべき言葉をなくした。

(無性にオムレツが食いたくなつた。帰つたら作ってくれるか) 覚えていたというのか。あのとき、なかば冗談でつぶやいた一言を。血みどろの殺戮を演じたあとも。これほどの後遺症に苦しみながら、ずっと……そのことだけを思いつめていたのか。

(はい、マスター)

(たのんだよ)

飛び散る火花をぐぐつて、おれは少女に駆け寄った。黒木が目を見張り、何か叫んで止めようとした博士の手を振りほどいて。そして彼女の左手を、人間の憎悪が生み出したイミテーションボディーそのものである部分を、両手で握りしめた。それは氷のように冷たく、怯えた小動物のように震えていた。

「アマリリス、聞こえるか？ 予定変更だ。オムレツは今はいらない。きみがすっかりよくなつて、家に帰つてからでいい。そのときに一人ぶん作ってくれればいい。一緒に食うのだから」

うつすらと、少女の目が開かれた。熱病に苦悶する表情の中に、かすかな安らぎがよけるのを見た。放電がおさまり、警報が次々と鳴り止んだ。放心したように黒木がひざまずき、相崎博士はゆっくりと髪を搔き上げた。

十分後、おれたちは鹿の首のかけられた居間に戻った。黒木が運んできたコーヒーに手をつけぬまま、湯気ごしに博士を睨みつけていた。よく見ると白衣は焦げ跡だらけで、両手の下に、べつたりと隈が貼りついていた。足を組むと、靴の先がぱくくりと割れて親指がのぞいた。

「コーヒーでも飲んで、少しばらかしてはどうかね。もはや峠は越えた。あとは快復を待つばかりだよ」

「楽観的な言い訳は聞き飽きました」

「そう睨みなさんな。言いたいことはわかつておるが、なにせ彼女が運びこまれてこのかた、吾輩にも余裕がなかつた。じつしてソファの上でコーヒーを飲むなんざ、一週間ぶりだからな」

と、なかば目を閉じて呻うめく瞬なのだ。おれはくしゃくしゃの箱から煙草を一本抜いたきり、火をつける気になれぬまま、指先で苛々ともてあそんだ。

「なぜ、あの子は暴走したんです？」

「約束が違う、と言いたいのだろう」

「ええ。彼女の本体はIBのコーヒーだけれど、左手だけは違う。エ

Bそのものであるゆえに、あくまで殺戮を望んでいる。もしその欲求を無理に押さえ込めば、いずれ本体を浸蝕する恐れがある……そう仰言いましたよね

「いかにも」

博士はカップを小テーブルに戻し、膝の上で指を組んだ。年齢を考えれば当然なのだが、それにしても皺くぢやな指だ。天才的な芸術家の指には、皺が多いと聞いた覚えがある。事実、学生時代に知り合ったピアノ弾きは、二十歳そこそこで老人のような指をしていた。科学者にもこの定義が当て嵌まるのか、それはわからないが。「計算ミスは素直に認めるよ、エイジくん。だからこそ、修理、いや治療と言つべきかな。アフターケアに全力を注いだのだ。これほど遮二無一働いたのは、何十年ぶりか知らない」

何十年ぶり、といつ一言が自嘲の色をおびた。驚いて目を向けたが、伏目がちな表情の中に、手がかりになるものは何も読みとれなかつた。何十年か前に、かれはこれと似たケースに直面したことがあるのではないか。そんな疑問がわだかまるほど、その声は悔恨に満ちていた。

次に顔を上げた博士は、いつもの傲岸不遜な面がまえに戻つていたが。

「しかしながら吾輩は、見解を変えるつもりはないのだよ」「彼女の左手は戦闘を必要としている、と？」

「負け惜しみを言つのではないぞ。今回の一件にしたところで、いわばワクチンが効きすぎたようなもの。事前に接種していなければ、もつと取り返しのつかぬ事態を招いたことだろ。ベストとは言わぬ。だが、これでよかつたと考えるべきだな」

思わず、どんとテーブルを叩いた。手をつけぬままのローハーが受け皿にこぼれた。

「ワクチンというより、麻薬ではないですか。戦闘という麻薬を与え続けることにより、からうじて禁断症状から逃れ続けるだけでしょう。何の解決にもならないどころか、彼女の中のIBをますます囮に乗らせるだけじゃないか」

「忘れてもらつてはこまるね、エイジくん。彼女自身が、イミテーションボディされることを」

挑発的な眼差しから顔をそむけた。頭を抱えるようにして髪を搔きむしり、わからないと何度もつぶやいた……わからない。おれは主人面をしながら、アマリリストのことを何一つわかつちゃいない。そもそもイミテーションボディとは何者か、その答えがいつたい誰にわかるというのか。

「混乱させてしまったのなら謝る。じつを言つと、このところの吾

輩も驚きの連続なのだよ。彼女は変わりつつある。そしてこれからどう変わっていくのか、吾輩にとつても未知数だ。ただ一つだけ言えるのは、エイジくん、きみが彼女を変えていくということだ

「おれが？」

「むしろこう言つべきだったかな。彼女がきみを選ぶことによって、進化を始めたのだと」

混乱を増したばかりで、研究所を出た。

これから部屋に戻ったあの自分の行動は、三文小説の次のページをめくるように、見え透いていた。ゆえに、一彦から飲みに誘われた時には、むしろ途方に暮れたのだ。目をまるくしていると、照れたように小鼻を搔きながら、かれは言つ。

「この近くで面白い屋台を見つけたんです。イーズラック人がやつてるんですが、商売はまつとうですよ」

ちょっとと支度をと言い置いて、一彦はガレージの奥へ消えた。イーズラック人が「まつとうな」商売をするいわれはないが、ニュアンスは伝わらないでもない。酒や料理の出所がどこであれ、客が満足できればそれで上等。だいいち一彦にせよおれにせよ、かれら同様、アウトサイダーに違いないのだから。

かれを待つ間、ガレージのいつものテーブルで煙草に火をつけた。二葉はもう帰ったのだろうか。例の「監視カメラ」でおれを見つけて、不機嫌そうな顔を出すことを期待したが、薄闇に煙が棚引くばかり。静まり返った中に、ただ奥のほうから、鉄槌を打つような音が、断続的に聞こえていた。まだ一朗が作業場にいるのだろう。やがて戻ってきた一彦は、赤いキャップはそのままに、ツナギを脱いで、若者らしい小さつぱりした恰好をしていた。

「兄貴を誘つたなんですが……」

意味ありげに奥へ目を遣り、肩をすくめた。外は少し風が出ていた。並んで歩きながら、二人とも外套のポケットに手をつつこみ、できるだけ首を縮めた。

この辺りは閻市にペンキを塗つたような商店街で、何度歩いても

おれには迷路としか思えない。『ちや』と建ち並ぶ小店の群れには、来るたび目新しい何軒かが混じり、かわりに何軒もの店が消えていた。夜ともなれば迷宮的混乱は深まる一方で、路地の角を三つも曲がれば、西も東もわからなくなる。

「よく刷新が見逃しているな。ちょっと『幽霊船』を思い出したよ」「なんですか？」

「旧第九街区の俗称だといえば、カズもわかるだろ？」「ああ、あそこ……」

戦時に要塞があつた地点である。軍事施設は戦後解体されたが、あやしげな連中が移り住んでスラム化。殺人犯、窃盗犯、政治犯、麻薬常習者、変質者、不法入国者などの楽園になつたと伝えられる。「幽霊船」の名は、要塞の構造を利用したスラム街の佇まいが、老朽化した帆船に似ているところからついたのだろう。

「幽霊船の中はミノタウロスも蒼ざめる大迷宮だとか。一度足を踏み入れたら一度と出られないとか、いろいろ取り沙汰されているが。実際のところ、恐ろしげな噂が一人歩きした部分は大きいんじやないかな。住人の大半は、至極『まつとう』だろ？ し、またそうでなければシャバは成り立たないからね」

「お詳しいんですね」

「じつは若氣の至りで、しばらく住んだことがあるんだ。ほんの半年程度だがね。兵役を解除されてすぐの頃だから、もう七年くらいたつのかな」

立ち止まつて煙草をくわえた。手で覆い、何度マッチをすつても、風に火をさらわれてしまう。肩を叩かれて振り返ると、一彦は銀色のライターをかざし、小型の火炎放射器なみの火柱を寒空に噴き上げてみせた。眉毛を焦がさないよう注意しながら、顔を近づけた。

「ありがとう」

「でもいったいどうして『幽霊船』に？」

「悩み多き年頃だったからね。雇い主があつさりと首長連合に降伏したのをきっかけに、兵隊稼業にも嫌気がさしていた。まあ、雇い主は敗残の兵にも給付金をくれるという、粋なはからいを見せてくれたので、少しばかりカネはある。ほどぼりを冷ます時間もいるので、しばらくの間、スラム街に身を隠すこととしたのさ」

噂に聞く犯罪者の楽園とはどんな所か、一度見たい気もした。それになんといつても当時は若く、エネルギーを持て余していた。ちよつとした鬼退治の心境でも手伝つたのだろう。

「ところが、いざ乗り込んでみれば、ずいぶんイメージと違つていね。無法地帯は無法地帯なりの秩序が保たれていた。鬼のかわりに氣のいいおじさんやおばさんがいて、薄暗い路地を子供たちがボールを追つて駆け回り、若い娘たちがシーツを干しながら無駄話をしているといった具合だ」

電気工事店の中年夫婦が、一つ返事で下宿させてくれた。駆け出しの新聞記者だと名乗つたが、まったく疑われなかつた。エイジという「偽名」も、じつはこのとき初めて用いたのだ。

夫婦はカノウさんといい、いつも忙しく立ち働き、それなりに儲け

ていたようだ。「幽霊船」で使用される電力の三十パーセントが、掘り起こされた旧世界の電線から引かれ、三十パーセントが独自の風力発電による。残りは地区の電線から盗んでくる。いすれにせよ供給は不安定なので、技師の存在は貴重だった。

かれらには十六になる娘があり、「幽霊船」の中の学校に通っていた。学校といつても、かなりいい加減なもので、国家の指導要領など完全に無視。それこそ相崎博士を彷彿させる自称「学者」たちが、気ままに偏った知識を吹き込み、おかげで九九も満足に暗唱できない子供が、相対性理論については、かなり正確に理解していたりする。

（試験なんかないわよ。受けたい授業を受けに行くだけ。サボるつてどういうこと？ 勉強は面白いわよ。だって、知りたいことを教えてもらえるんだもの）

髪を真紅に染めて、意想外な場所にピアスをつけることを好んだ。色白でそばかすが目立ち、美人ではないが、よく動くドングリ目が可愛らしい。ここの中の良家の子女は常識として護身術を身につけていたが、彼女はナイフを生き物のように操った。名前は、マキといつたつけ。もし生きていれば、今頃はいい女に育つことだろう。「けつきょく『幽霊船』本来のコアな部分は、ほとんど覗かせてもらえなかつた。新顔の自称新聞記者が半年住んだくらいでは、無理な相談だらう。正直、なかなか居心地よかつたんだが、拍子抜けしたのも事実さ。また訪ねたいとは思いながら、おれも何かと忙しくなつて、それつきりになつちまつたが。あのスラム街は、今も昔のままなのだろうか」

一彦が口を開きかけたとき、暗がりから娼婦がふわりと飛び出し、おれの腕をとらえた。外套の下の体は驚くほど柔らかく、上品な顔をしていた。

「お兄さん、だいじょうぶ。だいじょうぶ」

中国系の訛りがあるが、案外「イーズラック」のかもしない。たとえ西方砂漠地帯の出身でなくとも、かれらの集団に属し、かれ

らの信条を実践していれば、イーグラック人とみなされる。かれらは富をたくわえること以外の悪徳を、悪徳と考えない。合意の上の商取引が成立すれば、何を売つても問題視しない。

もし魂が高値で売れるのなら、かれらは迷わず売るだろう。売った金を「イーグラック」の貧者にほどこすだろう。……おれは思わず訊き返した。

「何がだいじょうぶなんだい？」

「お兄さん、わたし、慰める。わたし、お兄さん、慰める。だからだいじょうぶ。一万でいいよ」

そいつは魅力的だが。と、おれは素直な感想を述べた。あいにく今日は連れがいてね。これからあんたのお仲間の屋台で飲むつもりだ。あんたは奇麗だから、もし別の日に会つていたら、迷わず寝ただろうよ。おれもちよつとばかり残念だがな。そう言つと、彼女はあつたりと腕を外した。抱いていた水鳥が飛び立つたような、一抹の空虚さ。

「それなら、だいじょうぶ。縁があればまた会えるよ」

再び歩き始めると、一彦がくすくす笑いながら「いいんですね？」と訊く。

「いいんだよ。大仕事の後の一万くらい、ポンと出せるんだが、金を押し付けるのも失礼かと思つてね。それにもしあの女がイーグラックの信徒なら、信徒以外からのほどこしは受けまい。それよりカズは、『幽霊船』のその後について、何か知つてるんじゃないかな。さつき言いかけただろう」

「ええ。旧第九街区といえば、最近かなりモメているんですよ。例によつて刷新が街区の全住民に立ち退きを命じ、住民のほうは断固、籠城の構えをみせておりまして。包囲中の武装警察と睨み合つている恰好です」

「武装警察か……」

おまえを殺すかもしれない相手の顔くらい、知つておいてほしくてな。そう言つた「コードネーム」「カヲリ」の赤い唇が、まがまがし

く脳裏をよぎつた。

屋台というより、廃材で組んだ「小屋と」呼ぶほつが相応しいかもしだれない。

このての小屋を作ることにかけて、イーズラック人は天才的である。長い放浪の歴史の中でつちかわれた、様々なノウハウを心得ている。砂漠の遊牧民に一脈通じるものがあるし、大昔はそうだったのだろう。けれど、かれらが放浪するのは砂漠ではなく、都市だ。その場の状況に応じて、変幻自在なキャンプを形成する。

使えるものは何でも使い、住居の様式にはまつたくこだわらない。ただ、ひとつだけ根底に流れるポリシーは、定住しないこと。いつでも住居を捨てて旅立てるライフスタイルを、かれらは堅持してきた。

なぜなら、かれらにとつて、定住は墮落の始まりだから。定住が富への執着を生み、富めば人はどうしようもなく墮落するのだと、かれらはかたくなに信じてきた。

「エイジさんは、占いはお好きですか？」

小屋の前にたどり着いたところで、一彦が尋ねた。

そこは薄い鉄板で完全に覆われ、窓はなく、出入り口にだけ、廃材のドアが嵌めこまれている。ドアの上には細長い木製の看板がありベットで止められている。三日月の上で、猫がヴァイオリンを弾いている童話的な絵柄。イーズラック文字は読めないが、おそらく店名は「黒猫」だろう。

「好きか嫌いかという問には、嫌いだと答えるね。ただし、信じないという意味ではなく」

「そうですか。この店のお抱え占い師は、当たるといつ評判ですよ。常連客の半分は、彼女曰当てに来ているほどです」

店の中から、哀切でプリミティブな音楽が、低く洩れてくる。なるほど、最も由緒正しいイーグラック人は、密売ではなく、芸能で身を立てるのだと聞く。音楽やダンスと並んで、占術はかれらが最も尊ぶ「アート」なのである。

おれが占いを好まないのは、自身、験をかつぐほつだから。これまで見てきた限り、ガンスリンガーは迷信家か合理主義者か、どちらに偏る傾向がある。予測不可能な要素が生死を左右する場面に、いやでも直面させられるのが原因だ。ある者はその要素を「運」とみなし、ある者は「確率」と考える。前者は護符を身につけ、後者は徹底的に計算を繰り返す。

つきあつたことはないが、「コードネーム「カラリ」は明らかに後者のにおいがする。運、などという得体の知れない化け物の存在など、決して認めないし許さないだろう。対しておれは、どうしようもなくそいつを肯定している。認めたくはないが、認めざるを得ない。

そいつの存在を、いやというほど思い知らされた経験があるからだ。

未来を予知したいという願望は、人間として最も自然な欲求だと思う。この恐るべき不確定さに満ちた世界で、生きるために技術として、占いが発達したのも当然だろう。ただ、自身の実感として「運」の力は強大だ。星の運行を誰にも止められないように、予知したところで運命は変わらないと感じている。

変えられない運命を、あらかじめ知ったところで、どうしようもないではないか……そう考えるがゆえに、おれは占いが恐ろしい。

「じゃあ、入りますよ」

一彦がドアを開けた。

音楽と紫煙と談笑が、温められた空気」と吐き出された。細長いカウンターと、壁に寄せられたいくつかのテーブル席。なるほど一彦が「屋台」と表現したとおり、中の光景は箱の中のそれである。立錐の余地もなく居並ぶ客たちの背中は、新たな闖入者に対し、無

関心という甲羅をまとい続けている。

「ザー・ラ・ドベルカ」

いらっしゃい、という意味のイーグラック語だ。カウンターの中から、毛織の四角い帽子を被つた男が、じっとおれたちに目を注いでいた。駅で弾薬を売っていた男同様、年齢が判別し難い。日に焼けた皺くちゃの顔。無精ひげには白いものが混じっているが、目つきは猛禽類のように鋭い。そしてかれの瞳もまた、白に近い灰色だった。

店主はこりともせずに、カウンターの奥を指し示した。ちょうど一人の男がのっそりと席を立ち、勘定を払って出て行った。並んで腰かけると、何も頼んでいないうちにグラスが置かれ、コルクを抜いた陶製の瓶から、乳白色の酒がみなみと注がれた。あくまで無愛想に、店主がつぶやく。

「腹が減っているか」

「ええ。エイジさんも夕食はまだでしょう」

おれが曖昧にうなずくと、何も言わずに店主は背を向け、鍋の蓋を開けた。湯気がたちのぼり、スパイスの効いた、どこか郷愁を誘うにおいがした。そういえば、朝から何も食べていなかつた。とうより、前に固形物を口に入れたのがいつのなのかさえ、思い出せそうにない。一彦が耳打ちした。

「料理も酒も、一種類ずつしかないんですよ。もつとも、料理のほうは日替わりですけどね。味はぼくが保障しますよ」

酒には獸脂をおもわせるにおいがあり、どろりと粘ついたが、口当たりは驚くほどよかつた。それでいてかなり強い酒らしく、ひと口飲んだだけで、もう全身が火照つてくるようだ。その間に亭主は、陶器の皿に入れた料理を目の前に置いた。豆と肉を煮た上にスペイスとネギが散らしてある。

いかにも原始的な料理だが、ほろ酔い気分も手伝つて、急に空腹をおぼえた。それに煮豆は好物である。大きな木の匙ですくうと、半透明なスープの中で、肉がどろりと煮崩れた。いかにも無骨な味がしたが、面かつた。昨今の、やたらと合成甘味料でじまかした料理と違い、骨をじっくり煮込んだときに初めて生じる、本来の旨みが染みていた。

ありありと顔に出ていたのだろう。一彦はいたずらっぽく瞬きした。

「保障したとおりでしょ？」

ずっと流れている音楽は、砂漠地帯の舞曲とおぼしい。ヴァイオリンとパークッシュ・ショーンのみで構成され、テンポは速いが、いかにも牧歌的だ。やうやうとノイズまじりなのは、黄ばんだスピーカーが原因ではなく、コピーにコピーを重ねた磁器テープのせいだろう。演奏をじかに吹き込んだものかもしれない。

いつのまにか料理を半分平らげ、コップは空になっていた。亭主が無言で酒をつぎ足した。

「例の占い師は？」

「まだ来ていませんね。いつも十時頃にならないとあらわれません「流し、なのが」

「そういうわけでもないようですが。ここに一、二時間いるだけで、彼女が食つにこまらないほど稼ぎはあるのでしょうか。やはう気になりますか」

肩をすくめた。かれの言つとおり、無意識に気になつているとしたら、おれは何を占つてもらいたいのだな。夢も希望もない、自分の行く末などどうでもいい。」  
「いつ言つとペシミスティックに響くが、さほど苦しい心境ではない。夢や希望こそが、人を苦しめるのではあるまいか。究極的には、

人を愛することが。

「気になるといえば、アマリリストの容体に及ぶるだろ。博士はあれで持ち直したというんだから、先が思いやられる」

グラスをあり、半分飲みほした。煙草の箱を取り出して、一つくわえたところで、一彦がライターを差し出した。炎が上がる前に慌てて手で制し、マッチを摺つた。かれは言つ。

「あの戦闘で、思いがけないところまで、能力が引き出されたのですね。それでバランスを崩してしまった」

「予想以上に、相手が強力だったというわけか。しかし、あの化け物はいつたい何なんだ。IB化した多脚ワームなら、そう珍しくはないが、あそこまでひねくれたやつは初めてだ。へたなイミテーションボディよりよほどタチがよくない。それに……」

「『逆さA』の紋章ですね」

つなづきながら、記憶とともによみがえる戦慄を意識した。化け物の体に、くつきりと刻印されていた「逆さA」の紋章。あれは決してワームの体の模様が、たまたまそう見えたのではない。悪意にも似た暗いエネルギーを、ひしひしと感じた。しかも、用意周到な二葉が、赤外線カメラで撮影した写真にも、人工的なその文字が、鮮明に写っていた。

「ヴァラトウストラ教徒の過激派が、ワームを戦闘用に飼い慣らそうとしている。と、そこまでは噂に聞いていたが、どうしてあんな所で、あんな化け物が『逆さA』の紋章を身につけていたのか。考えれば考えるほど、混乱するばかりだ」

あの私道は、旧首長連合のナンバーツー、竜門寺家の別邸だった。ところではないか。そして街区の地下には、ルナパークがある」と

埋もれていた。煙を吐いて、おれは続けた。

「化け物が人を食うために、あの場所に巢食つていた単純な理由ならわかる。地下から負のエネルギーを吸い上げて、プラズマの亡靈を現出させるには、もってこいの場所だ。亡靈は人形にもとり憑き、生きもののように動かして、犠牲者をどこかの穴に誘い込む。やつは地下に横たわったまま、ただ口を開けているだけでよかつた」

「典型的な、トラップを形成するタイプのワーム……」

「そう。だが通常のワームに、人形を使うような芸当はとてもできない。やつの体が半分以上、IB化していたからこそ、可能になつたのだろう。口にするのもおぞましいが、間違いなく、『擬人』の応用だよ」

しかし、ここではたと壁に突き当たる。やつの動きは単純な捕食行動に過ぎず、何もウラはないように見える。私道に巢食つっていたのも、単に立地条件がよさが原因ではないか……どうもまだ、パズルのピースが足りない気がする。アマリリスほどではないが、おれもジグソーパズルは得意ではない。

入り口が開く気配がした。わずかに流れこんできた外気が、火照つた顔に心地よく触れた。思わず顔を向けたところで、一彦がささやいた。

「彼女が来ましたよ。今夜は少し早いようです  
ほつそりとした娘だ。

漆黒の髪を頭の後ろで一つに結び、柘榴石だろうか、細い鎖で額の真ん中にとり付けられていた。褐色の肌。外套も着ずに、白いワンピースだけをゆつたりと身につけて、胸に一匹の黒猫を抱いていた。金色のイヤリングの輪を揺らし、にこやかに会釈しながら、ゆっくりと近づいてきた。

## 「ザー・ラ・ドベルカ」

薔薇をおもわせる香水、というよりも、香木を焚きしめたような匂いがした。それがはつきりと感じられるほど間近で、おれと目を合わせたまま、彼女は立ち止まり、小首をかしげて微笑んだ。やはり瞳の色は白に近いが、亭主のように濁つておらず、青みすら帯びて透きとあるようだ。

体つきから、最初は十五にも満たない少女に見えたが、ハタチは過ぎているとおぼしい。おれが驚きの眼差しを引き剥がせなかつたのは、彼女が醸す雰囲気が、アマリリスにとてもよく似ていたからだ。瞳の色をそのまま移したような声で、彼女は尋ねた。

「どこかでお会いしましたかしら？」

少しアクセントに訛りがあるが、充分に流暢な喋りかた。あるいは日本人の血が混じっているのかもしない。知り合いに似ていたのだと、むしろおれのほうが、しどろもどろで答えた。

真後ろのテーブル席で、どつと笑い声がわいた。下手な口説き文句と受け取つたのだろう。見れば山賊じみた、あまりガラのよくな連中が陣取つている。占い師はおれに会釈しながら、すまなそうに眉をひそめた。山賊どもはしきりに彼女を手招きし、下つ端の人を立たせて代わりに座らせた。大将とおもわれる肥つた男が、細い肩に手を回した。

「いつもの調子なのか」

カウンターに向き直り、多少の非難をこめてつぶやいた。けれども亭主は無言のまま、代わりに一彦が答えた。

「今夜はたまたま、変な連中が来ていますね。不法ギルド系の土地のブローカーあたりでしょう」

不法ギルドは旧首長連合と癒着して、おおいに幅を利かせていて、政権交代後、一応は権力との繋がりを絶たれたことになつてい

る。とはいえる、いつの時代、どんな場所でもかれらが撲滅された話など、聞いたためしがない。ヒトの作り上げた社会はどんな形態をとろうとも、必ずどこか歪んでおり、そこには必ず、不法ギルドを必要とする者たちが生じる。

現在かれらは、かつて首長たちが所有していた土地を切り取り、転がす事業に血眼になつてゐる。刷新会議による接收が追いついていないことは、人食い私道の例からも明らかである。いわば旧恩のある首長に掌を返し、かれらの遺産に食らひついて、骨までしゃぶり尽くそつという構えだ。

「コソン、と何かが足首にぶつかつた。

床に皿をやると、黒猫が緑色の瞳で、じつとおれを見上げていた。占い師が抱いていた猫だ。夜そのもののように、つややかな毛並み。ピンと尻尾を立て、前足を揃えた立ち姿は、いかにも姿勢がいい。もともと奇麗な上に、手入れが行き届いている。決して動物愛好家でないおれが嘆息するほど、美しい猫だ。

亭主にもう一つ匙をもらい、皿から肉を選んで、小さな肉食獣の鼻先に差し出した。猫はにおいをかいだあと、敏捷に小さな牙を剥いて塊をくわえ、床に落としてから食べ始めた。匙の中まで奇麗に舐めてしまうと、おれを見上げて、可愛らしい声でニャアと鳴いた。

「名前は何だろうな」

「猫ですか。それとも、飼い主のほう?」

両方知りたいね。一彦にそう答えると、意外な方角から声が聞こえた。日本語がほとんど通じないのかと思い始めていた、亭主が口を開いたのだ。

「名前はブルートウ。美しく勇敢な男だ。占い師は、アリーシヤ」  
どに冥王のような男がいるのか、思わず辺りを見回したところ、また足もとで猫が鳴いた。どうやらかれの名前らしく、まるで飼い主のほうが付属物みたいな言い方である。そういうば、店の名も「黒猫」というくらいだし、亭主はよほどの猫好きなのか。かたくなに沈黙を守っていた口が緩むのを見て、おれは話しかけた。

「あんたがあの子を雇つたのかい」

「そうだ。たとえ敬虔なイーザラックでも、よそ者は雇わない。アリーシャはおれと同じトーテムの生まれだ」

トーテムとは、守護神といった意味だろうか。かれりのうちでも最も伝統的な「イーズラック」は、おのれの血筋をさかのぼれば、力の強い動物や植物に行き着く信じている。鹿なら鹿、狼なら狼、櫻の木なら櫻の木が自分たちの先祖であり、血族はそれらの精靈に守られていると考える。

亭主とアリーシャのトーテムは「猫」なのだろう。なるほど、しなやかな占い師の肢体は、月を背景に四つん這いになれば、猫と見紛うばかり。ずんぐりむつくりした亭主もまた、どこかずんぐりむつくりした猫を連想させた。

「あんたがここに店を出したのは最近だらう。以前から、彼女とは一緒だったのか」

亭主は首を横に振った。猫の話題にしか興味が湧かないのか、また口を硬く閉ざそうとしていた。ぶつぶつ言つ声が、からうじて聞き分けられたが、それによると、かれはアリーシャの素性をほとんど知らないらしい。

ここに店を出すようになつて間もなく、彼女はふらりとあらわれた。一見して占い師であることが知れた。彼女が抱いていた猫、ブルートウが氣に入ったので、うちで働くかないともちかけた。今でもアリーシャがどこから来てどこへ行くのか知らないし、興味もないといったところか。

(呆れたもんだな)

おれは溜め息をついた。よその者は雇わないと亭主は言つたが、履歴はおろか、現住所すら知らないといつのだ。それでもかれが彼女を「身内」と考えるのは、同じ守護精霊をもつ「トーテム」に属しているからにほかならない。

背もたれに肘をかけ、肩越しに目を向けた。ならず者たちが占めるテーブル席では、酒や料理が隅に追いやられ、空いたスペースにアリーシャが一枚ずつ、裏返したカードを並べてゆくところ。首領の肥満漢は、もはや彼女の肩に手を回しておらず、精一杯縮こまつた姿勢で、カードの行方を凝視していた。

なるほど、カードを使うときの彼女は、一種近寄りがたい神秘的なオーラに包まれていた。背筋をしゃんと立てたまま、つややかな黒髪の光沢だけが揺れる。長い睫毛が、伏目がちな瞳に青い影を添え、生真面目に結ばれた唇はあでやか。

どうしてもその横顔は、ジグソーパズルに熱中しているアマリリスを連想させた。

けれど何よりも目を惹いたのは、あまりにもしなやかな彼女の指と、その動きだ。まるで未知の楽器を演奏するようで、音楽が聞こえてこないのが不思議なくらい……幾何学的な形にカードを並べ終えると、アリーシャは手を止めた。テーブル席の周りだけ時間が静止した。

「未来をご覧になりたいですか。後悔なさいませんね？」

目を伏せたまま、彼女はつぶやいた。古代の鈴が鳴り響いた気がした。山賊の首領は身を縮めたまま、こくりとうなずいた。ここからは見えないが、神祕に氣おされて、瞠目しているに違いない。生唾を飲みこむ音が、たしかに聞こえた。

「わかりました。では、未来をお見せします

褐色の手がひるがえるとき、未知の美しい蝶が飛ぶさまを見る思いがした。中心に近い位置から、カードは一つずつ、確實に表に返されてゆく。妻が一デッキ所持していたので、タロットカードの絵柄は知っていたが、それとは似て非なるものらしい。緻密な彩色がほどこされた中世ふうの絵柄は、一枚一枚が美術品と呼べるレベルだ。

一枚を除いて、すべて表に返されたあと、アリーシャはテーブルの端に軽く手をかけ、静かにカードを「読み」始めた。並んでいるカードは十枚で、残りは手前に重ねられている。やがて彼女は口を開いた。囁くような声だが、おれの耳までよく響いた。

「これは不正な取り引きです」

「わかりきつたことを言つんじゃねえ」

腺条ワームのように痩せた男が、彼女の向かい側でニヤリと口の端をゆがめた。骨ばった手で弄ぶナイフの光が目障りだ。アリーシャはけれど、まったく気にかけず語を継いだ。

「あなたがたが手を出すには、相手は大きすぎます。行く手に待ち受けているのは、あまりにも巨大な憎悪です。あなたがたはデビルフィッシュに憑かれ、悲惨な死をむかえるでしょう」

椅子を蹴倒す音を響かせ、腺条ワームが立ち上がった。真っ青な顔をして、口の端から泡を吹きながら、紙のように白い唇を震わせている。典型的なヤク中である。今にも踊りかかるとしたところ、よせと叫んで、首領が肉厚の手を広げて制した。次にゆっくりと席を立つた肉厚の顔に、ナマズをおもわせる不快な笑みを浮かべて。

「あんまり舐めたことを言つなよ、ねえさん。それ以上減らす口を叩くと、次はこいつのナイフが、間違いなくあなたの咽をえぐるぜ。おれたちにはウラがあるってことを、忘れねえでほしいもんだな。イースラック人を一人どうこうしたところで、何とでも言い逃れできるんだ。しかもこいつは、小娘をなぶり殺しにするのが三度の飯より好きときいていてね」

「約束どおり、未来をお見せしただけです。三千サークルいただき

ます」

アリー・シャの声は少しも震えておらず、必要最小限の角度で肥満漢を見上げた。硬質な無表情に憤ったのか、首領はかん高い声を張り上げた。

「ふざけるな！ われたちの命は、たつたの三千サークルぽっちか。いつたいどこのどいつが、われたちを殺つちまおうってんだ？」

こいつは内心、占いの結果に動搖していたらしい。アリー・シャは小さくうなずくと、しなやかな右手をひるがえし、残り一枚のカードを表に返した。

「三つ首のドラゴンです」

「それがどうした」

「あなたがたを殺す者」

テーブルがひっくり返った。花びらのようにカードが宙を舞い、ぎらぎらとナイフをふりかざし、奇怪な両棲類のような恰好で腺条ワームが飛びかかった。M36を抜こうとしたおれの手を、とっさに一彦が制した。同時に、黒い影が目の前をよぎり、次の瞬間、怪鳥じみた悲鳴が響きわたる。

鋭い爪で引っ搔かれた顔から血しづきを上げながら、腺条ワームは背後にもんとりうつた。倒れたテーブルの縁に飛びのると、ブルートウは優雅に尻尾を立てたまま、アリー・シャのほうを振り返り、小さな声で鳴いた。猫がウインクすると、緑色の火花がぱちりと弾けた。

いざこざに顔をつっこむのは主義じゃない。それでもつい手を出してしまったのは、おそらく彼女がアマリリスト似ていたからだろう。

黒猫がヤク中男の額を引っ搔いたあと、一瞬、店内の時間が止まつた。おれはポケットのM36から指を放し、かわりに外套の中に手を入れて、パイソンを抜いた。ゆうらりと立ち上がり、ぶよぶよした首領の頬に迷わず銃口をのめりこませた。

店内の空氣にも温められることなく、銃口はきんきんに冷えている筈である。案の定、首領は「ひつ」と声を洩らし、体を硬直させた。瞳だけ動かして銃を見、次におれへ視線を移した。もちろん床を転げ回っているヤク中以外の連中にも、兇悪な六インチのパイソンがよく見えたことだろう。

「ヤクはあるかい？」

最近の不撲生が幸いして、おれの顔は蒼く頬はこけ、目の下に隈ができていた。髪はぼさぼさで、眼光だけが鋭く、実際カタギではなし、やばそうなにおいがふんふん漂つていただろう。すみやかに相手を怖がらせるには、狂人を演じるに限る。しかも過去に中毒していた経験上、禁断症状の演技はお手のもの。

文字どおり「頭」を押さえているので、仲間は手をだせない。むしろ相手がカタギでないほうが話は早い。おれがどんな種類の人間か、黒光りするパイソンが何よりも雄弁に物語つてくれる。首領は頬をぴくぴくと痙攣させ、からからに乾いた声を発した。

「何が欲しいんだ。ド・クインシーか？ それともコクトオ？」

「けつ。古臭え、しけたやつしかねんだな」

と一蹴したものの、両銘柄とも、宇宙の果てまでぶつ飛ばされる

薬であることは体験済み。ジャンキー特有の腕と体を斜めにクロスさせた姿勢を保ち、口の端から涎を垂らしながら、薄笑いを浮かべた。むかし、おれの薄笑いほど不気味なものはない、妻にからかわれたことがある。

「まあいいさあ。何でも結構だから、ありつたけ置いて行きなよ、ベイビー」

今はこれしかないと言いながら、首領は下つ端の一人へ目配せした。おれは左手でM36を抜いて、下つ端の方へ向けた。けれど「下手な真似」をする氣は毛頭ないらしく、内ポケットから煙草の箱を一つ取り出し、震える手で差し出した。不法ギルドを笠に着ているが、所詮中身はシロウト。ただのブローカーに過ぎない。

「けつ。そんなものより、酒のほうが百万倍ましだぜ。いいか、ベイビー、一度しか言わねえからよく聞けよ。田障りだからとつとと失せる。さもねえと、てめえのぶよぶよしたほつぺに、とびつきりのご馳走を食らわすぜえ」

痙攣的に笑いつつ、舌なめずりする音をたつぱり聞かせてから、おれはやつの臭い耳に顔を近寄せ、囁いた。

「重炉心弾をな」

「こけつまろびつ、といった古い言い回しもそのままに、連中が店を去るまで、それから三分もかからなかつただろう。腺条ワームは目を回して額から血を流しつつ、両脇を下つ端に支えられながら退場した。あれほど威勢がよかつたわりに、猫に引っ搔かれたくらいで情けないやつである。

ついでに客が一人もいなくなつたことは言つまでもない。

「すまなかつたな、親爺さん」

「いや、おかげで店を壊されずにすんだ」

おれは肩をすくめた。醉狂で下手くそな芸を披露してしまったような、ばつの悪さを感じていた。礼を言われても非難されてもこまるで、アリーシャのほうはわざと見ないようにした。それでも彼女がカード一枚一枚、大事そうに拾い集めていたことは知っていた

し、店を出ると、じつと背中に注がれる視線にも気づいていた。

「飲みなれますか」

空き地にさしかかったところで、一彦が尋ねた。すでに風はなかつた。立ち回りを演じたせいか、酔いが回つたのか、ほとんど寒さを感じない。おれは廃材にもたれ、薦のからまる常夜灯の下で、ポケットに手を入れた。取り出した煙草の箱は、さつき下端が落としていったもの。どさくさに紛れて拾つておいたのだ。

「それより力ズ、こんな銘柄を見たことがあるか」

光にかざすと、箱の表面には海の中から帆船に触腕をからめた、巨大な蛸の絵が描かれていた。頭部は大型帆船の三倍はある。あの状況下で、下つ端が二セモノを差し出す余裕はなかつた筈。だとすると、これは煙草に偽装したクスリだと考えて、まず間違いないだろ。

一彦は「ああ」と首をひねつた。封を切つて、一本取り出した外見は、やはり煙草と変わらない。上のほうを揉みほぐすと、最初は掌の上に茶色い草がこぼれたが、やがてさらさらと白い粉が流れ出た。指先につけて舐めてみたところ、阿片に似ているが、どうやら合成ものとおぼしい。たいていの麻薬は試したおれも、こいつはたぶんキメたことがない。

もとより粉の上に草を詰めて、箱に戻した。足もとで猫の声がした。

黒猫は相変わらず優雅に尻尾を立て、笑顔ともとれる表情でおれを見上げていた。思わず周囲に目を走らせたが、飼い主らしき姿はない。一人で、いや一匹で散歩しているのだろうか。かれの前にしやがみ、指で軽く頸の下を撫でると、気持ちよさそうに目を細めた。「すっかりなついていますね。ぼくには近寄りうとさえしなかつたのに」

そう言つて身をかがめた一彦は、軽く驚きの声をあげた。どうしたのか尋ねると、「首輪」、とだけ答えた。

なるほど、ブルートウは赤い金属製の首輪をつけていた。ありふれた首輪なので気にもとめずについたが、表面をよく見れば、細かい模様がびっしりと彫りこまれていた。古代遺跡の彫刻をおもわせる、凝つた幾何学模様である。一彦がつぶやいた。

「電子回路みたいですね……まるで最新式の読み取り機だ」「読み取り機?」

言われてみれば、幾何学模様は精密機械のようでもある。やはりメカマンだと感心しつつも、かれの例えには、シユールな違和感を覚えた。何故に読み取り機?

「ええ。レンズ式に代わって、最近、より暗号性の高いロジック・ストーム型が出回り始めているんです。旧式に比べれば、例えばメモリーカードを改ざんされたり、盗み見られたりする可能性が、ハ十パーセント以上も低くなります。あまりの性能に、かえつて刷新が規制をかけてきたくらいですよ」

まるでかれの話に相槌をうつよつて、ブルートウは小さく鳴いた。技術的なことは珍粉漢粉だけれど、それについて思い合わされるのが、例のヴァラトウストラ教の紋章が入った運搬用チャペックだ。やつのメモリーカードの解析に、稀代の変態ハッカー、相崎博士でされてこじつっていた。

しゃん、という鈴の音が頭上で響いた。

気の迷いではなく、小さな鈴をいくつも連ねた音に違いない。驚いて見上げると、いつのまにか空はすっかり晴れわたり、スマッグによって拡大された月が君臨していた。ほぼ満月に近く、クレーターの形まで確認できそうだ。そうして、まるでたつた今その天体から降りて来たように、ほつそりとした女のシルエットが映えていた。きめ細かな長い髪が、微風に揺れていた。どうやって登ったのか、うずたかく積まれた廃材の上で、アリー・シャは猫のように小首をかしげ、おれに微笑みかけたように思えた。彼女が身動きすれば、しゃん、と、また鈴の音が響く。おれは何度も目をしばたかせた挙句、彼女の左の手首と右の足首に、いくつかの鈴がリボンで結びつけられていることを確認した。

「先程のお礼を」

彼女はたしかにそう言つたようだ。やがて細い両腕が翼のように広げられ、頭上高く持ち上げられると、クロスするときに鋭く鈴が鳴る。その音を、ゆっくりと上昇する右足の鈴が、さらさらと装飾する……不思議な舞踏だった。水の中を漂うような、ゆるやかな動きに身をまかせながら、静止するときは、一枚の絵と化したような、言い知れぬ緊張をはらんだ。

手足もさることながら、首の動きがアクセントとなり、時には優美に、時には野蛮なまでに、異国ふうのダンスを際立たせた。水のように風のようにはじめ、彼女は踊つた。鳥のように獸のように、あるいは奔放に、あるいは思慮深く彼女は踊つた。この壊れた世界、薄汚れた都市にありながら、彼女の本来の体は、どこまでも続く青い草原の中にいるようだつた。

おれは目を見開いた。踊るアリーシャの周りには、アマリリスを作ろうとしていたジグソーパズルそのままの、天国のような風景が見えたのだ。

叫び声を上げそになつたとき、不意にダンスが終わつた。巨大な月を背景に、軽業師のように彼女の体が宙を舞つたかと思えば、

おれの目の前に、ふわりと降り立つ。エキゾチックな衣装がひるがえり、薔薇の香りがたちこめた。

「逃げてください」

「え？」

「憎悪の塊があなたを追つて来ました。よみがえりし死者。それはデビルフィッシュの呪いなのです」

アリー・シャが何を言つてゐるのか、もちろんさっぱりわからない。正氣を疑つたほどだ。けれど、正面からおれを見つめた、ほとんど銀色に近い瞳は、決して夢に溺れていない。真撃な危惧が読みとれた。間もなく闇の中から、せいぜいと喘ぐような声が近づいてきた。荒い息づかい。にもかかわらず、その呼吸には明らかに生命の存在が感じられなかつた。

地の底へ通じる暗い穴から吹き上げる、風の音にも似て……一步ずつ、つましくよつた足音がそれに混じつた。振り返ると、奇怪な人影がふらふらと揺れていた。そいつがさつきのブローカーの仲間、腺条ワームをおもわせるヤク中男だとわかるまで、五秒ほどかかつた。

首は不自然な角度に折れ曲がり、膝の関節は壊れたよう。だらりと垂らした両腕が振り子のように揺れていた。額にこびりついた、どす黒い血。完全に白目を剥いており、横に開いた口は二タ二タと笑つているようで、異様に長い舌が食み出していた。口や耳尻や鼻から垂れてくる粘液は、膿のようで得体が知れない。

報復に来たのだろうか。それにしても、この男の姿は尋常ではない。もし犬に寄生するサミダレムシの突然変異体があらわれて、人間の体を乗つ取つたとすれば、ちょうどこんなふうだらう。いや、その可能性がなきにしもあらずなので、おれは身震いした。さつきアリー・シャが口にした、「よみがえりし死者」という一言が、みよに引つかつていた。

ヤク中は突然両腕を前に突き出すと、この世のものとは思えない咆哮を上げて、突つ込んできた。

言い知れぬ不快感が、酸を舐めたように口の中に広がる。思いがけない動きの速さにも驚かされ、瞬時、退くべきか、応戦すべきか判断に迷つた。ぐつと手首を強く引かれ、そのままアリーシャと横に跳んだ。地面に転がると、ぐわんという音とともに、やつは廃材に突っ込んだらしい。

砂煙が、夜目にも白くたけのぼった。がらがらと崩れてくるパイプや鉄骨を肩に浴びながら、ヤク中は倒れないぞいろか、痛みを感じる気配すらない。背をまるめ、顔を前方に突き出し、おれたちを見て歯を剥いた。真円形に見開かれた白眼に、視覚があるのかどうか、それはわからないが。

咆哮。

ヤク中は先の曲がつた鉄骨を一本抜き取ると、狂人が操るマリオネットのような動きで襲いかかった。まだ倒れているアリーシャを肩でかばい、おれはM36を抜いた。弾はあやまたず右肩を撃ち抜き、やつはびくりと後退りし、叫び声を上げた。それでも右手に鉄パイプを握つたまま、まったく倒れないのだ。

「どうなってる？」

銃口を下方へ修正し、さらに一連射。一発とも両方の太腿にのめりこんだが、それでも倒れようとしない。ねばねばと腐ったような血を吹き出し、全身を痙攣させながら歩み寄り、鉄骨を高々と振り上げた。四発めが男の眉間に命中した。打ち抜かれた姿勢のまま、動きが止まつたかと思えば、嘲るよじて首をかしげ、歯を剥いて笑つた。

おれは地面を蹴つて男の胸に体当たりした。相手はよろめき、鉄骨があらぬ方向へ振り下ろされ、深々と地をえぐつた。ゼロ距離から最後の一発を心臓に撃ちこんだとき、腹を丸太で殴られたような衝撃が走つた。やつの膝蹴りをまともに食らい、おれは風に舞うぼ

ろ布のように弾き飛ばされた。

地上で何回転したのかわからない。まつたく呼吸ができず、うずくまつたまま呻き声を上げるのがやっとだった。なぜ倒れない？五発の弾丸のうち一発を急所に浴びながら、なぜ生きていられる？いくつもの疑問符が苦痛とからみあう。噎せながらようやく顔を上げると、一彦が高周波カッターを振りかざし、ヤク中に突進する光景が目に飛びこんだ。

それは一彦が護身用に携帯している工具で、二十センチほどの筒状のグリップから、電気の刃が短剣の形に放電される。鉄骨が振り下ろされるのを待ち構えて、かれは身をかわし、電気の刃をそれに当てた。たちまち蒼白い電流が無数の蛇のように這い上がり、男の全身に絡みついた。激しい痙攣と絶叫。

まともな人間なら即座に感電死するとこり、またしても男が不気味に笑うのを見た。鉄骨が振り回され、高周波カッターが弾き飛ばされた。一彦は腕を押さえたまま、後方の瓦礫の山に、もんどうりうつて倒れた。

「カズ！」

駆け寄りながらパインソングを抜いた。片膝をついて男に銃口を向けたとき、華奢な影にさえぎられた。

「アリー・シャ……？」

長い髪が微風に揺れた。薔薇の香りが、ふうわりと漂つた。彼女は僅かに振り向いて、田の端でおれをとらえると、小さくうなずいた。そのしぐさはどじょうもなく、アマリリスをおもわせた。運搬用チャペックにどじめをさす前に、少女もちょうどこんなふうに振り向いた。

不死の男が、だらりと垂らした両腕に鉄骨を握ったまま、ゆづくりと近づいてくる。ぼろぼろに焼け焦げ、全身から血を滴らせた姿は、この世のものとは思えない。アリー・シャは正面を向いた。彼女の左手に、一揃いのカードが握られていることに気づいた。

優美で魔術的な円を描きながら、右手が一枚のカードを抜きとつ

た。人差し指と中指の間にはさんで、差し上げられたカードは、月光をたくわえて青く輝くようだ。そこには一振りの剣が描かれていた。祭具のように不思議な形をしており、絡みあう二匹の蛇が、唾と柄を形づくっていた。

「ブルートウ」

鋭く囁くと、黒い影が走り、彼女の足もとに舞い降りた。アリーシャは右手をひるがえし、しなやかな黒猫の背にそつて、カードをさつと滑らせた。その瞬間、灼熱するように首輪が赤く発光した。（電子回路みたいですね……まるで最新式の読み取り機だ）

おれは目を見張った。ブルートウの全身は、まるで一度素粒子に解体され、再構築されたようだった。かれはすでに猫ではなく、一本の不思議な形をした剣と化して、地面に突き立っていた。絡みあう二匹の蛇が、唾と柄を形づくっていた。驚愕したように、不死の男が動きを止めたとき、蛇の剣を取つてアリーシャが踏みこんだ。

「はあつ！」

それはダンスの続きだった。

実際には数秒間の出来事だったらしい。けれど、水の中を漂つように、彼女が剣を振りかざし、突き出された鉄骨を足がかりに乗り越え、空に浮かぶ月の中から、不死の男の頭上に舞い降りるまで、おれはゆるやかな舞踏の続きを見る思いがした。

まつぶたつに切断された男の体は、まるで鬼火のように、めらめらと燃え上がった。

三日後に扉がノックされた。まる一日間、ほとんどベッドから出られなかつた。

さいわい骨は折れていなかつたが、蹴られた腹がステキに痛んだ。目覚めている間は呻き続け、断続的な眠りにおちては悪夢にうなされた。寝ても覚めても、不死の男の幻影に追いまわされた。

ワームやエビではなく、曲がりなりにも、おれは人を撃つたのだ。人間の心臓に弾を撃ちこんだのは、あれ以来だつた。あのとき、銃口の先には妻がいた。

理論上、おれが撃つた相手は「人間」ではなかつたと言える。そういう何度も自分に言い聞かせてきたけれど、やはり妻を撃つたという事実は搖るがない。そう、理論上、あれは一種の夢にほくなるまい。けれど夢と違つて、おれは硝煙のにおいを嗅ぎ、熱い返り血を浴びた。目の前で、妻は血に染まつた手を差しのばした。

(な……ぜ、撃つた、の……?)

跳ね起きた。電話が鳴つていた。

汗にまみれて、荒い息をついている間に、ベルの音は途切れた。雨が降つていてることに初めて気づいた。

布団から這い出し、ベッドに腰かけた。つぶれた箱の中に、煙草が一本だけ残つていた。雨の音を聞きながら、しばらく煙をふかしているうちに、刺すような空腹を覚えた。気がつけば熱は下がつてゐるし、筋肉の隙間に十本のナイフを刺し込まれるような腹部の痛みは遠のき、鈍いうずきに変わつていた。

ようよろと立ち上がり、ごみを搔き分けながら、台所に入った。戸棚に缶詰はなく、冷蔵庫は空っぽ。未練がましく手を突つ込むと、合成ビールの缶が一本だけ、奇跡的にサルベージされた。貪るように

に飲みほしたところで、ノックの音が五臓六腑に響いた。

「お電話したんですね」

紙袋から食み出したバケツとネギ。茨城麗子は控えめな笑みを浮かべて、玄関に立っていた。

「お加減はいかがですか」

「なぜ寝込んでいたことを知っている?」

「失礼します」

質問を無視したまま、彼女はハイヒールを脱いで上がりこんだ。リビングを見渡して眉をひそめ、次に何の断りもなくダイニングまで進んだあがく、溜め息までもらした。

いい加減、闖入者には慣れていたけれど、曲がりなりにもここはプライベートな空間である。多少臭かるうがキノコが生えようが、第三種以上のワームでも湧かない限り、報告する義務はない。まして、ワットの秘書に溜め息をつかれる筋合いはない。

「シャワーを浴びて来られては? その間に食事をご用意しますわ」

抗議しようと口を開きかけたところで、彼女は買い物袋をテーブルにのせた。外套を脱いで椅子の背にかけ、頭の後ろに両手を回して髪を束ねた。必然的に、圧倒的な胸の隆起が、目に飛び込んできた。おれは打ちのめされたように、すごすごと浴室へ退散した。

赤錆くさい湯を頭から浴びると、久々に生きた心地がした。汗と一緒に、どろどろの悪夢が流されてゆくようだ。けれどもやがて、足もどがぐらぐらするような、不安定な感覚にみまわれた。酔いが回ったのではない。むしろ頭は冴えてゆき、冴えるにつれて、当たり前の疑問が、むくむくと頭をもたげてきた。

茨城麗子が、今、おれの部屋にいる? のみならず、夕食を作っている?

(なぜだ?)

そもそも、麗子がこの部屋に入ったことなど、思い出す限り一度もない。仕事の打ち合わせなら、会社で済ませたし、急ぎの資料を届けるときは、喫茶店で待ち合わせた。もちろん、麗子は資料を受け

取れば、さつさと席を立つた。一人ぶんの代金を支払って。飲みかけのカップに、口紅の跡も残さずに……

(あり得ない)

混乱する頭をタオルで拭きながらダイニングに戻った。「テニム地のエプロンを身につけた彼女は、レードルを片手に、おれの姿をみると、マニュアル的な角度で頭を下げた。

「いきなり押しかけてしまって、申し訳ございません」

おれは言葉をなくした。シャワーを浴びていたのは、せいぜい二十分かそこいらだ。その間に彼女は驚異的な早さでダイニングを片付け、あまつさえ、雑誌の口絵を切り抜いたような料理を、テーブルいっぱい並べていた。

「お座りになつて。まる一日ほど、何も口に入れていらっしゃらないのでしよう」

椅子を引きながら、麗子は嫣然と微笑んだ。

「す」「いな、これは。短時間でこれだけのレベル……物理的に可能なのかと考えてしまつよ」

「物理的に不可能なこととは?」

「魔術だ」

相変わらず彼女は微笑んでいる。いっさい謙遜しないところが彼女らしくもある。おれが席につくと、麗子は向かい側ではなく、テーブルの側面に位置を占めた。目の前に、ぴかぴかに磨かれたワイングラスがあることに気づいた時には、彼女が瓶を傾けるといふ。「あまりよいものとは言えませんが」

「合成でないだけでも貴重品だよ」

唇に赤い三日月をつくり、彼女は酒をついだ。口ゼだった。自身のグラスにも注ぎ、ちょっと持ち上げてみせた。何に乾杯するのか尋ねると、

「魔術に」

グラスの触れ合う音が、神経を痺れさせた。

女は誰もが魔法使いの素質をもつている。中でも超一流の使い手たちが、最近、おれの周りに続々と引き寄せられてくるようだ。よれよれのガンスリンガーと美しき魔術師たちによる、ちょっとした冒険譚。そんな三文小説を書いてあぶく銭を稼ぎ、あとは寝て暮らせたらどんなにいいだろう。

「考え方でも?」

「うん。姫はだれだらうと」

「姫?」

レイチャエルの姿が、いやに鮮明に脳裏をよぎった。おれは首を振りながら、グラスを傾けた。ほどよく冷えており、上品な味がした。ワインなら赤と決めているが、美女に振る舞われるのなら、口ゼもいい。もちろんその予算は、ワットの懐あたりから出ているに違い

ないが。茨城麗子が個人的な興味から訪ねて来たと考へるほど、おれはナルシストではない。

料理も旨かつた。が、いつたい何を食つたのか、じつはよく覚えていない。アマリリスが作ったものなら、いちいち思い出せるのに。

「最近、秘書型チャペックが売れていることをご存知ですか」

と、茨城麗子は世間話を始めた。一気に本丸を攻め落とそうとせず、外堀から埋めて行くつもりらしい。彼女の真意はまったくわからぬが、何か面倒な問題を持ち込んできたことは、見え透いていた。間違いなく、「人食い私道事件」以上の。

「知らないね。だいたいそんなものに、きみが職を追われる心配はないだろ?」「

何気なく彼女のグラスに目を遣れば、ワインがまだ半分ほど残つており、相変わらず口紅の跡はみとめられなかつた。彼女の唇は、最初から真紅に染まつているのだろうか。彼女は就職活動中の女子大生が着るようなスーツを着ていた。開襟シャツの白い胸元が、グラスの後ろに君臨していた。

顔が火照るのを意識しつつ、おれは目を逸らした。そんな反応を予期していたようなタイミングで、彼女は言つ。

「それがそうでもないです。最新式の秘書型チャペックは、顔の部分が14インチ。胸に19インチのモニターをそなえていて、社長のスケジュールから最新のニュースまで、必要に応じてたちどころに表示させます。おまけに頭部のモニターには、通常、とびっきりの笑顔を浮かべる美女の顔が映し出されているのですから」

「顔を見飽きたら、取り替えればオーケーってわけか」

相崎博士が聞いたら、真っ赤になつて怒るだろう。はん、交換可能というテクノロジーの常識こそが、諸悪の根源だよ。平等のふりをした我欲に過ぎん。とかなんとか。

「ワットが購入を検討しているのか」

「まさか。社長はスタイリストですから。独裁者の多くがそうであつたように

「やつのことだから、今の発言もどこかで聞いているかもよ。なるほど、やつにとつて秘書は、陰口を叩くくらいがちょうどいいのかかもしれない。スケジュールやコースなら、言われるまでもなく頭に入っているだろうし」

そうかもしません。と、やけに素直な言い方をして、麗子は肩をすくめた。めったに見せない子供じみた仕ぐさがなまめかしくて、みょうにぞきまきさせられた。酒のせいで赤くなっているのだと、受けとめてくれればいいが。このままでは着々と籠絡されそ�で恐ろしく、おれは率直に切り出してみた。

「何か面倒な依頼でも舞いこんだんだろう？」

「はい」

「断るという選択肢は？」

「たぶん、ありません」

そんなことだらうと思つたが、それにしても彼女が直接、部屋に乗り込んできた理由は謎のまま。面倒であれ何であれ、依頼は依頼。まずは事務所に呼び出すのが筋だらうし、選択の余地がないのなら、なおさらである。人を丸めこむ腕前は、麗子よりワットのほうが百倍上なのだから。

「お察しのとおり、この依頼には私的な要素が含まれます」

おそらく顔に書いてあつたのだらう。どうも根が単純ばかなものだから、容易に考えを読まれてしまつ。思わず乾いた声が出た。

「きみの個人的な依頼なのか？」

「正確には、わたしの親友からの」

「きみの友達の頼みを、おれが断れない理由があるとは思えないが」「共通の友人はいない筈である。そもそも彼女の口から「親友」という言葉が出たこと自体、驚きだつた。日頃、プライベートなにありをまったく感じさせない点において、彼女は秘書型チャペック以上かもしれない。尾篭な例ではあるが、面談中、彼女がトイレに立つたところを一度も見たことがないほどに。」

唇を湿すように、麗子はワインをひと口飲んだ。それから姿勢を正して、側面からおれを真つ直ぐ見つめた。

「親友の名は言えません。言つたところで、エイジさんは存じていらつしゃらないでしよう。むしろコードネーム『カラリ』と申したほうが、よく存知かと思います」

黒ずくめの武装警官の姿がフラツシュバッケされた。ラバーをおもわせる生地のスーツ。漆黒のバイザーのついたヘルメット。軽く腕を組んで壁にもたれ、夜を貼りつけたようなバイザーの下で、赤い月の形に、唇が薄く微笑んでいる。

(おまえを殺すかもしれない相手の顔くらいは、知つておいてほしくてな)

すなわち、いよいよ抹殺にかかつてきただけだ。おれはほとんど無意識に、煙草に火をつけた。呆けたように煙を吐く男の前で、麗子は「カラリ」と親友になつた経緯から、淡々と語り始めた。学生時代に知り合つたこと。富豪の娘らしい身の上。末流とはいえ、竜門寺家の血筋であること。政略結婚を断り続けるうちに、クーデターの渦中に呑まれて……

そして「人食い私道事件」ミッションの当口、突然彼女が麗子の前にあらわれたこと。

「電話で呼び出されたのは、ミッションの五日後でした。どうして人類刷新会議の武装警官になつたのか。どのような任務を帯びているのか、そのへんの情報は全く得られませんでした。プライベートで呼び出したのだと彼女は言いました。親友として、この件を依頼するという意味でしょう」

彼女は「」もり、ためらつようつに視線を逸らした。ワインのせいか、頬をほんのりと赤く染めて。煙草を揉み消して、おれは指を組んだ。

「よくわからないんだが。カラリと名のる女は、組織の一員ではなく、あくまで個人の意志で、おれを何らかの事件に引きずり込もうとしているんだろう。おれときみが顔見知りだとわかつたら、生き延びるチャンスを与える、といふことかな」

「そうなりますね」

「きみにしては歯切れのよくない。勝手に民間の組織に情報を流すこととは、その、カラリにとつても相当なリスクをともなう筈だ。きみとカラリが親友だから? それはわかるが、おれを助ける理由にはならない。どうして、きみが秘書をつとめる会社の一契約社員に過ぎないおれを、彼女が庇う必要がある?」

茨城麗子が狼狽するさまを、おれは初めて目の当たりにした。上気したように頬を染め、目をしばたかせ、喘ぐよつに残りのワインをひと息に飲みほした。おれが瓶を傾けて注ぎ足すと、消え入りそうな声で「すみません」と言い、胸に手を当てて呼吸を整えた。

いずれにせよ、不可解なリアクションである。

「すみません……たしかにこれで彼女が有無を言わさずエイジさんを抹殺する可能性は、ほとんどなくなりました。ただし、この依頼は形を変えた死刑宣告とも言えるのです」

「興味深いね。依頼の内容を聞かせてくれ」

新しい煙草に火をつけた。けれど、それを吸うこともほとんど忘れるほど、彼女の語る内容は驚愕に満ちていた。複雑な話ではない。人類刷新会議は、イーグラック人によって大規模な麻薬の密売が行われているという情報をキヤッチした。巨利につながる組織的な商売を嫌うかれらとしては、例外的な行動である。ゆえになかなか発覚しなかつた。

売られていた麻薬は、K - 13。第一次百年戦争中に開発された合成麻薬で、通称「クラーケン」と呼ばれる。神経に強力に作用するうえ、極めて危険な副作用を引き起こすといわれ、戦後を通じて徹底的に規制されてきた。現在も、少量の所持が発覚しただけで、少なくとも十年は出てこられない。まして売買にたずさわろうものなら、銃殺刑は必至である。

「クラーケン」の副作用については謎が多い。当局が緘口令をしいでいるため、巷間では様々な憶測が飛び交っている。

諜報部員たちは、暗躍するイーグラック人の密売者を追つうち、ようやくアジトと思われる場所を特定した。それがここBB - 33地区の東の郊外に位置する、旧第九街区……俗に「幽霊船」と呼ばれる所だ。当然、諜報部員たちが潜入したものの、次々と送り込まれた十九名のうち、誰一人生きては戻らなかつた。

「つまり栄光ある二十人めの犠牲者に選ばれたのが、このおれであると?」

皮肉をこめたつもりはない。これでも、そしてこれからも、おれは流されるままに生きてきたし、生きてゆく。流れ着いた先に待ち受けているものが死ならば、それはそれで受け入れるしかあるまい。こんな商売を続けながら、今まで生きてこられただけでも、奇跡に等しいのだから。

麗子は頭を下げ、何度めかの「すみません」を発した。おれは笑つて手を振る。

「恐縮する必要はないよ。『幽霊船』なら、ちょうど行ってみたいと思っていたところだ」

「え？」

「七年ほど前、そこに半年間、身を隠していた。しかし、おれがいた頃にはイースラック人の姿はまったく見かけなかつたな。商売敵として、あの界隈では嫌われていたから」

「当局がアジトの特定にてこずつた理由のひとつも、そこにあるようです。いつの間にイースラック人が『幽霊船』に住みつき、元の住民どぎのように折り合ひをつけたのか……潜入した諜報部員が次々と消される現状では、多くは霧の中なのですが。わかっている限りの情報は、後ほどカラリから提供されると思います」

また会うことになるのだろうか。ほつそりとした、黒い鳥をおもわせるシルエットが再び脳裏に浮かんだ。ああなるほどとおれは思う。彼女がカラリと名るのは、カフカ鳥を意識したのだろう。人の死を予言するといわれる黒い鳥。そのすぐれた嗅覚が、時空を越えて死の「香り」をかぎつけるのだという。

「彼女はレイチャエルについて、何か話したか？」

「いいえ。とても尋ねる雰囲気ではありませんでしたし」

「この件を、会社には通してあるんだろう。おれが『なんでも屋』であるためには、曲がりなりにも竹本商事の社員であることが前提

となる。きみのことだから、そのへんは抜かりないだらう。もちろん、皮肉ではなく」

麗子がうなずくのをみとめて、ゆっくりと煙草の火を消した。

「あとはおれの返事を待つばかり、か。いや、先に選択の余地はない」と聞いているし、おれもそう思つ。ただし、じたばたしようと思えば、できることはないんだ。きみは忘れているようだが、その気になれば、おれは人類刷新会議を壊滅させることだつてできる」

むろん、アマリリスのことを言つているのだ。相崎博士の研究室

に乱入し、命令するだけでいい。もつとも、今のアマリリスなら刷新会議どころか、人類そのものを滅ぼしかねないが……啞然としている麗子に、おれは道化師のポーズで笑つてみせた。

「冗談を真に受けられると立つ瀬がない。まだあの子を『解放』する時期でないことくらい、承知しているわ。苦しむのをわかっていて、みすみす『本物の』H-Bにしてしまうようなことはしないよ。きみが直々に来たといつことば、この依頼をおれに受けてほしいといつ、きみの意志の表明と解釈していいのかな」

真顔で、彼女はうなずいた。

「わたしの意志で、あなたを死の危険にさらすのですから。何一つリスクを負わないとは申しません」

音を立てずに椅子を引いて席を離れ、おれの目の前に立つた。百合の花束の匂いがした。ちょっと腕を伸ばすだけで、彼女の腰を抱けるだらう。圧倒的な乳房を支えるには細すぎるような、その腰をサテュロスのように荒々しく持ち上げて、ベッドまで運んで行けるだらう。

ゆっくりと、麗子は両腕を頭の後ろに回し、結んでいた髪をほどいた。その動作から、おれはアリーシャの舞踏を思い出していた。  
「依頼は受けれるよ。でもこれは、一生後悔するような選択じゃない。次の選択に比べたらね」

席を立ち、彼女の前にひざまづいた。赤いマニキュアで武装された指先は、ひんやりと細かつた。ドン・キホーテの口吻けを手の甲

に受けたとき、電気を帯びたような彼女のののきが伝わってきた。ここにおいて一つだけ悟つたのだ。紳士とは、痩せ我慢の文化的帰結であると。

彼女が帰つたあと、テーブルの上からは魔法のようにすべてが消えていた。

呆けたように煙草をふかしている間も、勃起がなかなか治まらずこまつた。死ぬか生きるかの取り引きをしておきながら、未練たらたら。寄せては返す波のような後悔に責め苛まれた。後悔するくらいなら、なぜ抱かなかつた。おまえはそれでも大日本おっぱい党員か。

(やれやれ)

吸殻の山の中に煙草を放り込み、リビングに戻つて、書きもの机の引き出しを開けた。黒光りするパイソンの隣に、煙草の箱がひとつ。パッケージには、帆船の真下から絡みつく、巨大な蛸の絵が刷られていた。イーズラック人の酒場、黒猫亭で不法ギルドの連中が所持していた。煙草に偽装した麻薬である。

忘れていたわけではないが、麗子にはとうとう話さなかつた。すでに一本一彦に渡して、成分の分析を頼んである。が、結果を待つまでもないだろう。おそらくは、こいつが「クラーケン」に違ひあらまい。

円の中で踊るアリーシャの姿を、また思い浮かべた。間もなく再会する運命にあるとは、予想もせずに。

ワットからは何の音沙汰もなかつた。ふだんはしつこいくらいの男が、四田の間、うんともすんとも言つてこないのだ。

この一件をやつが重々承知していることは、麗子の口から確認済みである。やつなりに動いているのも確かだろ。依頼主のカラリは富豪の娘だと聞く。首長の血族とはいえ、政治犯として全てを没収されるほど、濃い繫がりはなかつたらしい。クーデター後も、それなりの資金力を保つていると考へるのが妥当だらう。

そして竹本ワットが、金のにおいのする話に飛びつかないわけがない。解凍遺伝子の魚を前にした猫のように。

麗子があらわれた夜のできことは、すべておれの妄想ではなかつたかと、考えるときがある。麻薬密売組織も、「幽靈船」も、カラリによる間接的な死刑宣告も。酔つたおれの頭がこしらえた、一場の夢に過ぎないのではないか。このまま放つておけば、おれとの接点をもたぬまま、すべては時の流れの彼方に押し流されてしまうのではないか、と。

(わかつてゐる限りの情報は、後ほどカラリから提供されると思ひます)

それに尽きるのかもしれない。ワットとしては、表向きは感知しない態度をとり続ける必要がある。それくらいやばいネタなのだ。ゆえにこちらから連絡しても、知らぬ存ぜぬで通すだらうじ、ばかみたいな話、窓口となる茨城麗子と話すのが気恥ずかしくもあつた。(何一つリスクを負わないとは申しません)

頭を搔きむしり、煙草を揉み消した。四田の間、ほとんど家から出ておらず、一田じゅう煙草をふかしては、思い出したようにぼそぼそと缶詰を食べた。このままおれは世間から消えてしまうのでは

あるまいか。他者に認識されない存在は存在しているとは言えない  
と、大昔の物理学者が言つてなかつたか。

それもまたよしと考へていたところで、電話が鳴り始めた。情け  
ない話、びくりと体が震えた。看守の足音に怯える死刑囚の氣分が、  
少しわかる氣がした。消えることはおろか半透明にもなれないまま、  
いかにも重い受話器を持ち上げた。

「ハロー、お久しぶり。このあいだ分けてもらつた蛸の切り身なん  
だけど。いかにも遺伝子解凍に失敗して、中毒起こしそうなやつ。  
あれの成分解析が済んでるから、うちに来てよ」

相槌をうつ暇もなく電話がきれで、ノイズだらけの不通音が鳴つ  
ていた。言つまでもなく、二葉は例の麻薬のことを暗示したのだ。  
万が一の盗聴を警戒したのだろう。そのことからして、あれが何で  
あつたのか、行かなくてもわかるというもの。

とはいゝ、このまま部屋にいてもキノコが生えそうで、出か  
けることにした。アマリリスを見舞い、車のボンベも交換したい。  
「やあやあ。ちょっと顔を見ない間に、前にも増していくびれた感  
じだね、エイジさん」

八幡商店のガレージの中。いつものスペースに座ると、「ヒーヒー  
の香りとともに二葉があらわれた。ダンガリーシャツにジーンズ。  
ピンクのマフラーを巻いたまま、よほど気に入つたのか、いつぞや  
のゴーグルを頭にのせていた。

「創立記念日か？」

「ノンノン。今日は日曜日。いつも頭の中が日曜日な人には関係な  
いでしようけど。誰かさんが部屋で頭からキノコを生やしている間  
も、世の中は動いているのよ」

一朗と一彦は、揃つて朝から出かけているという。

先に一階を訪ねたのだが、珍しく博士は不在で、かわりに黒木に  
案内された。アマリリスはCNC溶液の中で眠つていた。時おり痛  
みを感じたように眉をひそめるものの、おおむね安らかな寝顔を見  
て、快復に向かっていることを知つた。それにしても、八幡プラザ

ースといい変態博士といい、日曜日に出かける者の多いことだ。

「コーヒーをする間、一葉は机がわりの鉄板に両手で頬杖をついて、ゴロタウロムシでも見るようにおれを眺めている。」のワームは人畜無害で小犬とカブト虫を合わせたようなコモラスな形状をしているため、ペットにする物好きもいるほどだ。問わず語りに彼女は語る。

「最近忙しくてさ。家でゆづくつするのも、けつこう久しぶりなんだ」

「ボーアイフレンドと勉強してたんだろう」

「期末試験ならとっくに終わってる。ボーアイフレンドって、タミーくんたちのこと? 最近忙しかったのは、バイトのせいなんだけど」「新東亜ホテルの?」

おれは首をかしげた。一彦の言つていたことと、微妙に食い違う。「そうそう。いきなり別館のほうに回されちゃったのね。何で学生アルバイトのわたしが行かされるのか、よくわからないんだけど。ほら、別館といえば変な噂が絶えない所じやない。幽霊館だのondon塔だの。壁なんかも薦が這い放題だし、いかにも陰気な感じ。泊り客がいたこと自体、驚きたわ」

「首長連合の時代から、あそこはいろいろと言われているな。竜門寺家が危険視する首長を、表向きは接待の名目であそこに招き、その実幽閉して、密かに殺していたとか」

「へえ。だからondon塔なんだ」

「あくまで噂だけね」

刷新会議に接収されたあとも、長いこと別館のほうは封印されていたのではなかつたか。表向きの理由は、民間の利害が複雑に絡んでいるとかで、あながちでたらめもあるまい。あのホテル自体、首長連合の病的な側面を象徴しているようなところがあつた。スキヤンダルの坩堝であり、言語道断な宴が、夜な夜な行われていたとも聞く。

頬杖をついたまま、一葉は溜め息をもらした。

「さすがのわたしも、正直、疲れちゃったのよね。たしかに新任といつことで、ずっと掃除ばかりやらされたけどさ。それとは別な意味で。あそこ、絶対変よ」

「出るのかい」

「出るのよ。使われていらない部屋がほとんどなのに、中から変なものの音が聞こえるなんて、しょっちゅう。まるでこれから仮装舞踏会に出席するような、奇抜な恰好をした人物と廊下でたびたびすれ違つたし。振り向いたらもう消えているし。現に、泊り客や従業員が、たびたび消えてしまうみたいだし」

「消える？ そいつはまるで……」

「ね。人食い私道を彷彿させるでしきう

鋭い視線を向けて、すばしっこく唇をなめた。

「ま、明日あたり、ようやく掃除地獄からは解放されそっだから。客室につくようになれば、少しは楽になるし。もうちょっとと続けてみようと思うの」

「危険はないのか

「わたしの実力は、例の私道で確認済みでしょう。それに泊まり客に関して、いろいろと引っかかることがあつてぞ」「どんなふうに？」

彼女は答えずに席を離れ、背中を向けて伸びをした。その姿勢の

まま、くつろいだポーズとは裏腹な声を出した。

「新東亜ホテルの別館には、とんでもない客が泊まっているかもしない」

おれが突っ込んで尋ねる前に、一葉はくるりと振り返り、「そうそう」と言いながらポケットを探りはじめた。そこに無造作に突っ込まれていたのは、小さなチャックつきポリ袋に入れられた白い粉末。休日の高校生のジーンズのポケットから出てくるには、あまりにも場違いなシロモノである。

「これに関しては、エイジさんのはうでも、ある程度の予想はついているんでしょう」

「K-r-13。通称、『クラーケン』」

「ハイ正解。そこまでわかつていいのなら、わたしが兄貴や博士の受け売りを、くどくど並べる必要はないわね。ただでさえ、化学はちょっと苦手なんだから」

「博士だって化学は専門外だらう。しかし、やつ、いや、かれに回されたってことは、分析するのによほどこづったのか」

「何を言つているのやら。この麻薬の正体は、刷新会議の科学班にだつて、突き止められていない筈よ。人体実験こそ最良の手段なんだが。と、博士は言つたわ」

変態博士の顔が目に浮かぶようで、おれは眉をひそめた。合成麻薬K-r-13の故郷もやはり、消滅した武装國家、イズラウンだと伝えられる。IBの誕生、ひいては第一次百年戦争の勃発に密接に関連しており、またその精製技術は、今では完全に失われているという。ゆえにこの麻薬を「新たに」作り出すことは不可能なのだ。不可能でなければならぬのだ。

「人体実験ができぬ以上は、何とも言えんのだが。と、博士が言つには。ほら、エイジさんとカズ兄さんを襲つた男がいたでしょう。あの男こそ、クラーケンに中毒していたんじゃないかと……」「ちょっと待つてくれ。じゃああれば、クラーケンの副作用だったところのか？」

「そういうことになるわね。しかも驚きなのは、博士の意見による  
と、襲つてきた時点で、あの男はすでに死んでいた可能性が高いら  
しいの。」

「あり得ない……！」

混乱のあまり、頭を搔きむしめた。鉄骨を手にした血まみれの男  
の姿が、ありありと浮かんだ。首は不自然な角度にねじ曲がり、目  
は白濁し、口の端からだらりと舌を垂らしていた。全身からたちこ  
める厭な臭いは、明らかに腐臭をおもわせた。

それでもやつは、もの凄い力で鉄骨を振り回した。五発の弾丸に  
も倒れず、高圧電流を浴びてもなお、襲いかかってきた。あの時点  
で……男は死んでいたというのか。ではいつたい、どうやって動い  
たのだ？ 武器を持った大の男が一人がかりで取り押さえられない  
ほど、すさまじい力がふるえたのだ？

蒼古たる伝説にのみ聞く、夜歩く生ける屍のように。

電話が鳴つていた。ずっと遠くで鳴つているように思えたが、ガ  
ラクタの棚に一葉が手を伸ばし、受話器を持ち上げると同時に、ベ  
ルの音は途絶えた。短い応対のあと、彼女は送話口を手で押さえ、  
おれに告げた。

「ワットくんから」

胸の中で、いきなり心臓が跳ね上がる気がした。寿命が縮む思いとは、まさにこのこと。やつと付き合っていたら、決して長生きはできまい。耳に当たった受話器が飛び上がるほど冷たかったのは、室温のせいか、それともワットの声のせいなのか。例によつて、温かみの力ケラもない声で、やつは言つ。

「突然お電話して申し訳ございません。家にかけてもお出にならないので、こちらかと思いまして」

おれは黙つていた。体は心底冷えているのに、額が汗ばむのを意識した。

「折り入つてお願ひがあるのです。簡単な依頼を引き受けさせていただけますか？」

「簡単な、だと？」

刷新の諜報部員が十九人も消されている事件の、どじが「簡単」なのか。皮肉なのかと考えたが、それにしては一本調子な口調が気になつた。

政権が変わつてこのかた、電話がひどく混線するようになつた。無数の亡靈が苦しげに喘ぐようなノイズの向こうから、嫌味なくらいよく通る声がこたえた。

「ええ、極めて簡単な。エイジさんの手を煩わせるまでもない、ちよつとしたワームの駆除なのですが。偶然現場が重なつてしまい、人出が足りないのでですよ」

「ちよつとしたワームとは？」

「おそらく蠕動ワームQ5型、通称ゴクツブシとおもわれます。依頼主と電話で話しただけで、事前調査は行つていないので、まあ必要ないだろうと判断しました。もちろん現時点で、けが人は全く出でおりません」

いづれといった場合のやつの判断は、まず信用していい。ゴクツブシ

だと聞いて行つてみたら多脚ワームがあらわれたとか、そんなミスは決してしない男だ。それにしても、茨城麗子がうちに来たことも、彼女からの依頼をおれが承諾したこと、とつくに知っている筈なのに。よくもまあいけしゃあしゃあと、ゴクシブシの駆除なんか頼めるものだ。

おれの都合を確かめもせず、やつは続けた。

「そこからでしたら、ちょうど一いつ隣の街区になります。急な話で申し訳ないのですが、これから行つてもうれますか。概要をお伝えしますので、メモを」と用意ください

どうもおれといつ男は、強引なアプローチにとことん弱い。断るのが苦手である。思わず一葉にゼスチュアで示すと、彼女は三秒でメモと鉛筆をテーブルの上に滑りこませた。依頼主の住所を書き終えたところで「ではお願ひしますね」と言つたきり、電話は途切れだ。不通音に舌打ちして受話器を戻す間に、一葉はメモを光にかざした。

「へえ。ここって、親孝行横丁じゃない」

「善人の見本市みたいな所なのか

「逆よ。パラダイスと名のつく所は、たいてい賭博場か売春宿でしょう。どんなに意志の堅固な若者も、この通りに一歩足を踏み入れたが最後、たちまち墮落してしまう。そんな皮肉を込めてつけられた名前を、通りの店主たちが面白がつて、アーチにでかでかとかけちゃつたのね」

兄貴たちによるしくとことづけて、車に乗り込んだ。一葉は一緒に行きたそうだったが、健全な青少年を不道徳な界隈にともなうわけにはいかない。新しいポンベを積んだ車は、快調にガレージから滑り出した。政権が変わつて基本的に何一ついいことはなかつたが、ガスの質は向上しているようだ。もっとも、それだけ値段も上向いたわけだが。

急に「簡単な」依頼が回ってきたのは、むろん初めてではない。危険を冒さずに小遣いが稼げる、オイシイ仕事なのだが、今回ばかり

りは素直に喜べなかつた。今さらオイシイ仕事を回されても、「幽霊船」で命を落とせば元も子もない。皮肉にしてはブラックがきつすぎるし、ウラがあるにしては繋がりが読めない。

(あの野郎、何を考えてる?)

たいして遠くないわりに、街路が入り組んでいたため、現場に着くまでに二十分以上要した。片側が三車線ある、無駄に広い道路に車を止めた。うち2・5車線は潰れており、スクラップや、廃材を利用した住居や、露店で占められていた。よくある光景だが、そのうちここも当局の手が入るだろう。

相変わらずの曇り空。日没にはまだ間があるが、すでに飲食店の屋台が出没し、灯をともし始めている。汚れた空氣に、動物の骨でダシをとるにおいが混じる。横丁の入り口を見上げれば、なるほど二葉が言つたとおり、親孝行横丁の文字が、これ見よがしにかかげられている。

おれは車のハッチを開けて、駆除用の道具を用意した。めったにないが、このての仕事のために、一応は常備しているのだ。ゴクツブシが相手なら、防護服は必要あるまい。もつとも、慣れていないれば、頭からドラム缶いっぱいのトマトケチャップをかぶることになるだろうが。社名の入つたツナギを着て器具を背負い、殊勝な名前の通りに足を踏み入れた。

人食い私道とはまた違つた意味で、アーチをくぐつたとたん、たちまち空気が変わるのがわかつた。

あそこはこの世ならぬもの……すなわち死靈の妖気に満ちていたが、ここでは生きた人間の欲望が、濃厚な臭氣をかもしていた。極彩色の欲望。路上で交わされる金と欲の駆け引き。ありふれた商店街の外観の裏から、隠しあおせることのできない腐臭が臭いたつようである。

さすがにこの恰好をしていると、街娼は寄つて来ない。彼女たちは連れでも待つているふうを装つて立つてゐるが、猫科の肉食獸をおもわせる目つきで、すぐにそれとわかる。一見、つつましやかな

服を着ているが、座つたりすれば、脚や胸元があらわになる仕組み。以前はいかにも娼婦らしい恰好をしていたが、最近急に厳しくなった手入れへの対抗策である。

彼女たちはまるでワームを見たように眉をひそめ、ふいと顔をそむけた。

オキシジエン・テントの看板はすぐに見つかった。下半身が犬の男女が、異様に痩せた裸の上半身を絡めあつていた。ガレージ芝居の宣伝かと見紛うほど、けばけばしい絵柄。路地に入りこむと、すぐビルの壁にぶつかる。目指す映画館は袋小路の右の側面にあり、周囲の壁といわば電柱といわば、ポスターが所狭しと貼りつけられていた。

視線を感じて振り返ると、数人の娼婦が、素早く身を隠した。おれの美貌に引き寄せられたのでは、決してあるまい。この界隈で虫が湧いたとなると、彼女たちにとつては、死活問題につながる。彼女たちとワームの縄張りが、ぴったりと重なるからだ。双方とも闇を必要とし、闇から養分を吸つて生きている。

おれはツナギのポケットに手を突っ込んで、看板を見上げた。通りに出ていたのと同じ絵柄だが、犬男の股間には怒張する男根が露骨に描かれていた。当局に見つかれば、強制撤去は間違いなしだ。ペンキ絵の上からは、赤色のスプレーで「Oxygen Tent」と殴り書きされていた。

映画館というより、掘つ立て小屋に近い。チケットブースは、よくこの中に人が入れるものだと感心するほど狭い。その隣で鉄扉が閉ざされ、やはり表面を覆い尽くすほどポスターが貼つてある。これでは現在、何が上映されているのか、さっぱりわからない。

(ポルノ映画館と聞いていたが)

たしかにほとんどのポスターの中で、女たちは乳房を露出し、ぬめぬめとした唇を半開きにして喘いでいた。けれどもそれらは、他のセックスを見て楽しむという、通常のポルノ映画の趣旨からは明らかに外れた、異様な雰囲気をかもしていた。

例えば『瓶詰』というタイトルのポスターを見れば、文字どおり、大きなガラス瓶の中に全裸の女が、窮屈そうに体を折り曲げ、逆さに詰め込まれているのだ。瓶は女を閉じ籠めたまま、茫洋たる海原を漂つようだ。海中から蛸が蝕腕をガラスに絡みつかせ、どこから侵入したのか、海蛇が女の肌の上を這い回っていた。

特殊な性癖を満足させるための映画なのか。しかしいつた、瓶詰めの女にしか興奮しない男が何人いるというのか。あるいは犬男と犬女の性交を、何者が好んで観に来るのか……おれは首をひねりつつ、チケットブースに近づいた。ガラスには黒いフィルムが貼つてあり、四角い小窓の向こうは覗けない仕組み。

「竹本商事の者です。害虫の駆除に参りました。支配人の方に取り次いでいただけますか」

棒読みでそう言うと、ガラスの後ろで人の動く気配があった。無人ではないかと半分思いかけていたので、少々ぎょっとさせられた。若いのか年寄りなのかわからない、女の声がぼそぼそと答えた。

「キノは映写機についてあります。館内奥ですから、そちらへお回りください」

ワットの口からも、依頼主は「キノ」と聞いていた。普通に「木野」と書くのか。技師を雇う金がなくて、支配人みずから映写機を回しているのか。まあ、駆除料は区が払ってくれるのだろうけれど。そうでなければ、ワットが引き受けるわけがない。

ポスターだらけの鉄扉を押した。通路も何もなく、つい鼻の先に、もう一枚の、館内に通じているらしい鉄扉が立ちふさがっていた。上映中らしく、扉の向こうから声が洩れてくる。喘ぎ声ではないようだ。

扉を開けると、後方側面から入る恰好。中はきわめて狭く、五十人も座れるかどうか疑わしい。氣の毒なほどがらがらな席に、ほんの数人が座つていた。おそるおそる、スクリーンに目を向けた。映つていたのは、けれど瓶詰めの女ではなく、タイツで全身をぴっちりと覆われた人々だつた。

スパンコールと羽飾り。サークัส芸人かと思えば、どうやら異星人であるらしい。かれらが着てている薄手のタイツは、血管をおもわせるグロテスクな模様で彩られ、乳房や男根の形を、自慢げに浮き上がらせていた。顔にはピエロをおもわせる奇怪なメイクをほどこし、体の倍はある用途不明の機械を背負っていた。

背景は室内なのか屋外なのかわからない。クラシックな椅子や蓄音機があるかと思えば、うしろに空想科学的な尖塔が林立し、一重の輪をもつ蒼い惑星が夜空に浮かんでいた。アングルが変わり、若い男女とおぼしい異星人が映し出された。背後の機械に操られるマリオネットのような動作で会話を始めた。

（もしも惑星の磁場のから逃れることができたら、ねえあなた。宇宙はわたしの体に、すっぽりとおさまるでしょう）

（けれども、宇宙が一つでなければならない道理はない）

（もう一つの宇宙は、いつたいどこに隠れていますの？）

（それを調べるために、象牙の塔から派遣された）

と、さっぱり意味がわからない。柱にもたれて首をひねりつつ、それでも画面から目を離せずにいたのは、これと似た雰囲気の映像を、最近見た記憶があるからだ。とはいって、おれはとくに映画好きではないし、まして、このような難解な映画を好きこのんで観たりはしない。

考えあぐねているうちに、何者かが後ろで咳払いした。そんな所に突っ立つていては見えないという抗議か。それほど熱心に、昼間からこんな映画を観ているのはどんな人種か。興味を抱きつつ振りかえると、映写機の後ろから手招きする人影がある。

「竹本商事の者です。支配人の方ですか」

シルエットに近づき、軽く頭を下げた。見れば黒ずくめの痩せた男で、腕まくりしたシャツの先で、手袋だけが白かった。

「キノです。よろしく」

かすれた声。三十代なかばといったところか。ざつそりとこけた頬。高い鼻の下に髪をたくわえていた。顔が青く見えるのは、映写機が放つ光のせいばかりとは思えない。この男、少なくとも昼間は、映画館の暗がりから一步も出さずに暮らしているのではないか。

キノ氏は立ち上がり、自身がかけていたのと同じパイプ椅子を開いて、おれに勧めた。器具をおろして腰かけると、ぎちぎちと鳴り、錆のにおいがした。おれは事務的に切り出した。

「弊社の推定によれば、そちらに発生したのは蠕動ワームQ5型、ゴクツブシかと思われます。規模にもよりますが、さほど時間はかかりません。さっそく駆除に入りたいので、案内していただけますか」

聞こえなかつたのかと疑うほどの間があつた。じつと画面に目を注いだまま、キノ氏はひょる長い足を組みかえた。椅子の下には、ビールの空き缶やポップコーンの紙袋が、うずたかく溜まっていた。もう一度繰り返そうとしたとき、かれは口の端を歪める笑いかたをした。

「虫なら、きっとこの部屋のどこかにいるでしょう。だがご覧のとおり上演中でしてね。灯りをつけるわけにはいかんのです」

「ならば改めて出直しますよ。何時ごろ伺えれば、都合がよろしいですか」

声にいろいろが出ないよう、注意しながらそう言った。またおとずれた沈黙の中、かれはスクリーンから目を離さない。小刻みに瞼く瞳に、蒼白い光が映っていた。

「あいにく当館はエンドレスで上映しておるのです。」存知かと思  
いますが、この界隈は昼夜を通して往来が絶えません。ちょっとし  
た連絡場所に、当館を利用するお客様もいますのでね。もちろん、純  
粹に映画を樂しまれるお客様のほうが、わたくしは好きなのですが。

運営上、そうも言つておられません」

なるほど、ある種の受け渡しや、ある種の取り引きのための、「  
ちょっとした」暗がりを提供しているというわけだ。映画の料金と  
は別に、不法ギルドあたりから、場所代としていくらか受け取つて  
いるのかもしぬれ。となると……

「ひょっとして、今回の依頼は狂言ですか」

「狂言とは?」

「ワームなど最初から発生していないということです。駆除のため  
に区が金を出しますからね。もちろん、業者側で報告書を書かなければ  
金は下りませんが。書類一枚で金を得られるので、引き受ける  
業者も多いのです。降りた補助金は折半するのが相場のようです」

「ほお。そんなこともなさるのですか」

「弊社に関しては、ご想像にお任せします。ただ、もしそのような  
契約でしたら、事前にご連絡いただくのが原則です。自分のような  
作業員ではなく、事務の者の伺う形となりますから」

キノ氏は感心したように瞬きすると、身をかがめて缶を一つ拾い  
上げた。栓を開け、すっかりぬくなっているのか、盛大に吹き出  
す泡を器用にすすつた。

「虫がいるのは本當ですよ。おっしゃるとおり、ゴクシブシでしょ  
うな。すでに数人の客がトマトソース漬けにされておりますから。  
駆除してもらいたいと切実に願つておりますよ。ただし、映画を止  
めることはできない。継ぎ日にも場内を明るくできない理由は、さ  
つき申し上げたとおりです」

おれは唸つた。どこが「簡単な」仕事なのか。ワットの野郎は、  
わかつた上で、おれに振つたに違ひない。この時期に人出が足りな  
いというのも、もちろん大嘘だろう。方法はひとつしかない。時間

はかかるが、懐中電灯で端から端まで、しらみつぶしに椅子の下を照らしていくしかないだろう。

スクリーンの中では、まだ異星人の男女が、哲学的にシュールな会話を続けていた。こんな映画を撮るやつも撮るやつだが、好んで上演するやつも確実に頭がイカれている。おれは憤然と席を立ち、器具を背負つた。後ろから一列ずつ調べることにして、椅子の下に用心深く光を当てた。さつそく一発めで、ぞろりと動く影をとらえた。

(けつこう大物じゃないか、おい)

たかだかゴクツブシといえども、闇の中に潜むワームには、ある種の凄味がある。体側に並ぶ無数の目が、光を浴びて赤く輝く。おれは懐中電灯を持ち替えて、背中の器具からノズルを外した。先端をワームに向か、トリガーを引くと、鎌の穂先状の蒼い炎が伸びて、たちまちワームを貫いた。

貫く場所をあやまてば、一メートル四方に体液を飛び散らせることがある。が、ギツ、という断末魔とともに、ゴクツブシは油で揚げたように跳ね上がり、引っくり返ったままぴくぴくと痙攣するばかり。もう一度、今度は弁を緩めて炎を浴びせれば、めらめらと燃え上がり、跡には虫の形をした黒い灰だけが残つた。

もちろん、あまり気持ちのいい仕事ではない。これでまたじばらくの間は、遺伝子解凍した甲殻類が食えなくなる。

五席に一匹という、驚くべき確立で、ゴクツブシは潜んでいた。そのうえどいつもこいつも丸々と肥えていた。いったいこんな所で、何を食つてこんなに太つたのやら。とりあえず考えないようにながら、黙々と作業をこなした。一人の客にわけを話して立つてもらえば、その下にもいた。ゴクツブシが燃え尽きるのを見届けたあと、かれは無言で映画館を出た。

念のため一周したあと、映写機のもとに戻った。キノ氏は大きなポップコーンの袋を片手に、相変わらず缶ビールを飲んでいた。

「とりあえず、二十三匹処分しました。異常発生ですよ。一度ここを閉めきつて、バルーム酸で徹底的に消毒なさることをお勧めしますね」

館内には異臭がたちこめ、さすがに客は一人もいなくなっていた。こんなことなら、最初から灯りをつけろという話である。

「また出でますかな」

「さあ。成虫はすべて焼き払ったと思いますが。いつたいどこから湧いてきたのか、それが気になります。ひょっとして、古い下水管を使われていたりしませんか」

よくあるケースだ。下水管は比較的浅い所を通りているし、埋め立てられないまま見過ごされているマンホールが、まだ多く残つていた。その中へ汚水をどんどん流し込めば、地上の管と違つて維持費がかからず、格段に安上がりだ。ただし、古い薙はワームの通路でもあるといふ、諸刃の剣。まるごとワームに乗っ取られた建物を、何十棟も目にしてきた。

「そのような事実はありませんし、皆田見当がつきませんな。とりあえず、お掛けになつてはいかが?」

パイプ椅子に腰をおろし、キノ氏にことわつて煙草に火をつけた。煙を吐くと同時に、どつと疲労感にひたされた。思えば一時間近く、ずっと小腰を屈めてうるうるしていたのだから、無理もない。もう若くない証拠もあるけれど。

奇怪な異星人の出てくる映画はとつぐに終わっていた。スクリーンでは、グラスケスの絵から抜け出したような少女が、延々と縄跳びをしていた。体つきは十歳くらいなのに、アップになつた顔を見れば、三十路はとつぐに過ぎていい様子。リボンだらけの髪。白塗

りの顔に、真紅の唇。異国の言葉で、跳んだ数を延々と数え続けているのだ。

(……トレントウーノ、トレントアドゥーハ、トレントターマー、トレントアクワシットロ、トレントタチンクヒ、トレントセイイ……)

頭がおかしくなりそうなので、おれは田を逸らした。くしゃりと、キノ氏はポップコーンの袋に手をつっこんだ。

「お気に召しませんか」

「自分にはどうも、難しそうなようです」

「所詮映画ですよ。わたくしの趣味でね、いかがわしいものしか上映しません。ありきたりのボルノを観に来たお密は、がっかりなさるでしょうが。持論を述べれば、セックス映画は少しも猥雑ではない。むしろ、最も健康的、かつ現実的な類いのものでしょう。そしてわたくし自身、健康的、かつ現実的な映画には、まったく興味がない」

おれはちらりと画面に目を遣り、まだ縄跳びが続いているのを確認して、密かに溜め息をついた。

「つまり、病的な映画にしかご興味がない」と

「そうなりますかな。病んだ映像であればそれだけ夢に近づきます。そして夢とは元来、猥雑であるべきものです。わたくしはここに座って延々と夢を見続けます。眠つては夢見、醒めてまた夢を見るのです。これは復讐なんですよ」

「何に対する?」

「言つまでもないでしょう」

キノ氏は大量のポップコーンを口に放りこみ、ニヤリと笑った。

業務報告書に署名をもらつて、おれは席を立つた。出口へ向かいながら、ここにゴクツブシが異常発生した理由が、おぼろげながらわかる気がした。地下へも通じておらず、餌が豊富なわけでもないのに、なぜワームが殖えたのか……やつらは闇から湧いたのではあるまいか。

闇そのものから湧いて、夢の残滓を食らつていたのではあるまい

か。

(……ノヴァンタクワットロ、ノヴァンタチングエ、ノヴァンタセ  
ーイ、ノヴァンタセッテ、ノヴァントット、ノヴァンタノーヴェ  
……)

鉄扉を閉めて映画館を出た。外はすっかり暗くなっていた。ようやく悪夢から逃れた思いで、大きく伸びをした。雲の間をふらふらと横切る人工衛星が見えた。足もとで、猫が鳴いた。

驚いて見下ろしたが、近くにろくな灯りがないため、辺りにはべつたりと闇が貼りついていた。目を凝らすと、地面すれすれに小さな緑色の光がふたつ、螢火のように浮いていた。黒猫の目玉に違いなかつた。

「プルートウ、なのか？」

問いかねるように小さく鳴いて、猫は身をひるがえしたらしい。もしプルートウなら、当然、近くにアリー・シャガいるとおぼしい。なぜかおれになつていているこの猫は、においても嗅ぎつけて、主人のもとから、ひとつ走り寄ってきたのかもしれない。が、なぜ悪名高い親孝行横丁なんかに、彼女が来ているのだろう。

黒猫亭のある界隈から、距離的にはさほど離れていないが、心理的な距離というものがある。たしかに娼婦になるイースラック人は多いけれど、彼女は占いで充分、身を立てられる筈。そもそもこの界隈は、いかにも地域人の結束が固そうで、よそ者の業者を締め出そうとする雰囲気が濃厚なのは、ここへ来たときの街娼の態度からも歴然としている。

キノ氏のような人物は、例外中の例外と思われる。

目の前で黒猫が一振りの長大な剣に変化した光景を、忘れたわけではない。夢でも幻影でもない証拠に、一彦もまたそれを見たと証言した。おれたちの目撃談は完全に一致した。あれはいつたい何だったのか、当然おれは一彦に尋ねた。物理的な法則を、完全に超えているではないか、と。

物理的に説明のつかない現象は、魔術にほかならないのではない

か。

一彦は言つ。

(例えばぼくたちは経験的に、鉄を堅牢な物質と考えています。鉄壁の防御、などと例えます。けれども、ちょっと熱を加えるだけで、この堅牢な物質は簡単に形を変えます。熱膨張なんか顕著な例でしょう)

(なるほど、こんな硬いものが、熱によつてぐにゃぐにゃと形を変えて、剣にもなれば、フライパンにもなる。昔の人は、それこそ魔術を見る思いがしただらうな)

(実際に製鉄は、神の技とみなされたようですね。さらに突き詰めれば、あらゆる物質は震える原子から成ります。どんなにぶ厚い鉄の板も、原子、さらには素粒子の集合体に過ぎません。思うに、強力な磁場の中で、猫という集合体が一旦ばらばらに解体され、剣という集合体に再構築されたのではないか。と、今はそれくらいのことしかわかりません。あたかも……)

カード占いのように。

運命が時には猫となり、時には剣と化すよつに。  
(ならば、あの黒猫は機械なのか? 実際に触れてみた限りでは、柔らかかったし体温もあった。眼が奇妙な光りかたをするとは思つ

たが、とくに変わった要素は見当たらなかつた）

（例えばアマリリストさんは、柔らかいし体温もあるでしょつか）

（……）

（もうこうことではないでしょつか）

アリーシャの持つカードが鍵になつてゐるのは確實である。彼女は「剣」のカードを一枚抜き取り、ブルートウの首輪の上を滑らせた。剣が描かれているほうを、ほぼ水平に接触させた。首輪の模様を指して「読みとり機」のようだと言った、一彦の直感は当たつていたことになる。

では、ほかのカードを接触させれば、ブルートウはまた異なる変貌を遂げるのだろうか。例えば、黒猫亭でちんぴらたちを激怒させたカードの絵柄が、双頭のドラゴンだつた。もしあのカードを赤い首輪に読み込まれれば、ブルートウはどんな姿をあらわし、どれほどの破壊力をふるつのだろう。

あの生ける屍を、弾丸も電気カッターも通用しなかつた怪物を、それは一刀両断にした。たちまち焼き尽くした。ある意味それはアマリリストの左手を……すなわち、イミテーションボディを連想させずにはいられなかつた。

パイプだけの壁の間を猫は走り、路地を抜けた。がちゃがちゃと背中の器具を鳴らしながら、おれは小走りに追いかけた。漆黒の小動物は、眼玉が緑色の光を放たなければ、影と区別がつかない。鼓動は徐々にボリュームを上げてゆく。プリミティブな打楽器のように、不穏なリズムでおれの胸を叩く。走つてゐるせいばかりではない。それは不吉な予言と化して、何事かを囁き続ける。イーズラック語なのか。さらに古くて根源的な言語なのか、わからないけれど。

通りの空氣は、ぴりぴりと神経を搔き龜るような緊張をはらんでいた。闇に乘じて取り引きされる、欲望と快楽がかもす空氣とは、明らかに異質な……やがて血の色をした回転灯が闇を薙ぎ、まとも

に ore の目を射た。ポリスカーに改造された背の高い装甲車が、何台も停まっていた。捕り物だ。

野次馬が通りを塞いでいた。猫の姿はとっくに見失っていた。ただ不穏なリズムに導かれるまま、憑かれたように人垣を搔き分けた。娼婦のきつい香水のにおいや、怒号を遠くに感じながら、最前列に割り込んだ。

(よほど兇悪犯か……?)

四台の装甲車が、通りの両側を塞いでいる。その前に陣取つて、武器をかまえた十数名の武装警官が包囲しているのは、たった一人の男である。最初、ぶかぶかの赤い服を着ているのかと思ったが、鮮血に染まっていることがすぐに知れた。もとはコックコートであつたらしく、丈の高い帽子にもまた、血の斑紋が、まがまがしい模様のように飛び散つていた。

見世物レスラーのように体格のいい男だ。極端な猫背で、両腕をだらりと垂らし、痙攣的に肩を揺らしていた。不自然な角度でねじ曲がった首。どろりと白濁した眼。歯を剥いて、奇怪な薄笑いを浮かべた口の端から舌を垂らし、腐つたような粘液を吐き続けていた。右手の先で銀色に光るのは、肉切り包丁のようだ。

(襲ってきた時点で、あの男はすでに死んでいた可能性が高いらしいの)

おれは否応なしに、あの麻薬中毒者を連想せずにいられなかつた。

「撃て！」

号令とともに、前後の武装警官が一斉に発砲した。強烈な電流を浴びたように、地面から数センチ浮いた状態で、血染めのコツクの全身が踊った。無数の穴からどろりと吐き出された血は、粘り気があつて赤黒かつた。

弾が撃ち尽くされた。それでもコツクは倒れず、うなだれた姿勢で動きを止めた。立ち往生したのか。警官たちが前進しようとしたとき、いきなり男の肩が震え、丈の高い帽子ごと頭が持ち上げられた。男は笑っていた。ぐうと両棲類めいた唸り声を発しながら、膨れあがった舌を、歯の間から垂らして。

指揮官らしい男が、また何か叫んだ。カヲリのような軽装ではなく、かれもまたガスマスクを被った完全武装である。装甲車の間から三つの人影が進み出た。重々しいシエルエット。ぎくしゃくとした動き。最初、チャペックのように見えたが、装甲服をまとった警官であるらしい。かれらのバックパックから、太いパイプが車の中まで伸びていた。

「まことに……あの程度の武装では」

我知らずつぶやいた。麻薬中毒の男と実際に組み合つた寒感から、あまりに心もとない気がしたのだ。

「やはりそう思うか？」

まさか言葉を返されると思わなかつたので、驚いて目を向けた。野次馬に混じつて、黒ずくめの女が腕を組んでいた。極端なショートヘアだが、女性らしさを失わない、ぎりぎりのラインは保つている。サングラスの下で、赤い唇が月の形に歪む。私服の彼女を見るのは初めてだが、何者であるか、考へるまでもなかつた。

「やつは無能だ。部下を捨て駒くらにしか考えていない、冷酷な臆病者だ」

前方に目を向けたまま、吐き捨てるようにそう言った。あの指揮官を評したのだろう。装甲服の三名は、じわじわと前進しながら、ジユラルミンの盾を片手に、黒い警棒を構えた。といつても、通常の警棒の五倍はあり、バツクパツクとパイプで繋がっている。急襲すれば、小型の戦車くらい破壊できるシロモノである。

狂気の笑いを浮かべたまま、コックが跳んだ。ガラスにへばりついたヤモリのような姿勢で一回転し、左端の装甲服の上に降つてきた。警官の全身を怯えと驚きが貫くさまが、はつきりと見えた。それでもよく訓練された動作で、コックを警棒で叩き落とした。たちまちベチャリと、コックは地面に這いつぶばつた。その姿勢がまたヤモリのようなのだ。

「ぶうーん」と電圧がかかる音とともに、さらに警棒が振り下ろされた。同時にコックはバネ仕掛けのように跳ね上がった。「く」の字にへし折られた警棒が、くるくると宙を舞つた。警官は後ろに数歩よろめき、どすんと尻餅をついた。すかさずコックが飛びつき、逆手に肉切り包丁を持った右手を、高々と振り上げた。火花が飛び散り、金属の焼ける臭いがした。

装甲車の中のスピーカーから、この警官のものらしい絶叫がほとばしつた。

「どうなつている？　なぜあんなもので、装甲服を切り裂けるんだ？」

「知るものか。ひとつだけはつきりしているのは、即座に退却しなければ、隊が全滅することだけだ！」

いまいましげに、カヲリは唇を震わせた。

助けに入ろうとした体勢のまま、残り二名の装甲服は凍りついていた。機械油とも血ともつかないものでじるじるになつた顔をコックが上げたとき、二人とも完全なパニッケに陥り、腕を振り回しながら逃げ出した。が、中世の重い鎧を着ているよりもなお、その足は遅い。しかもバツクパツクから、パイプを切り離すことさえ忘れているのだ。

銃撃の音が響きわたる中、なだれをうつて逃げ始めた野次馬に逆らって、カラリが不意に駆け出した。指揮官のもとへ一直線に走り寄り、飛びかかるようにして叫んだ。

「援護射撃をやめさせろ！ 一般人がいるのが見えないか！」  
たちこめる硝煙。交叉するサーチライトの光が一つの輪を描き、死のような沈黙に震えていた。一つの輪は、当然、血染めのコックを捉えたまま。ぶすぶすと煙を吹き、血膿をしたたらせながら、うなだれたような姿勢で立ち尽くしていた。もう一つの輪は、横転した三輪トラックの上にあつた。幻灯のように、その上にたたずむ人影を映し出した。

おれはオキシジョン・テントで上映されていた、奇妙な映画の続きを観る思いがした。微風になびく長い髪。ふわりとワンピースに包まれた、少女らしいシリエット。作りもののように細い踝のかたわらには、しゃんと尻尾を立てた影のような猫……

猫の緑色の瞳から、小さな火花が散った。

「アリー・シャ！」

血染めのコックは獲物を追うのをあきらめ、彼女の方へ向き直つた。ぐるぐると唸り、でこぼこに変形した肉切り包丁を握つたまま、バネをたわめるように四つん這いになった。

いつのまにか、彼女の背後には月が出ていた。以前見たときよりも欠けていたが、スマッグに拡大されて、彼女の影をすっぽりと包み込んでいた。踊るように、あるいは未知の楽器を奏でるように、彼女は月の中でカードを繰つた。細い指がひるがえると、束ねられたカードの中から、一枚を抜き出し、頭上にかざした。

（カラスの聖杯）

まるで月から降ってきたような、澄んだ声が響いた。

この位置からでは、もちろん絵柄は確認できない。タロットカード同様、剣や聖杯の出る確率が高いのかもしれない。

アリーシャは片膝をついて、そっと猫の背を撫でるように、首輪の上にカードを滑らせた。赤い光がひらめき、緑色の火花が散った。猫の体が細かい粒子に分解されたところまでは、前に見たとおりだが、きらめきながら螺旋を描き、粒子がアリーシャの体に纏わりつく情景は初めて目にした。

翼の音が高々と響いた。彼女の背に、漆黒の翼が広がっていた。巨大な、カラスの羽だ。

血染めのコックは怒り狂ったように呻くと、装甲服が捨てていつた警棒を拾い、彼女に向かつて突進した。前回の麻薬中毒者と比べて、破壊力の違いは歴然としていた。コックは走りながら警棒を振り上げ、憎悪をこめて振り下ろした。轟音とともに、三輪トラックはまつぶたつに粉碎された。

黒い天使のように、アリーシャは宙を舞つた。まるで死を予言するかのように、無数の黒い羽根が男の上に降りそそいだ。彼女は大きな金細工の聖杯を手にしていた。中空でホバーリングしながら、それを振つた。大きな金の鈴を振りながら、踊るようにも見えた。真っ青に輝く液体があふれ、死神の大鎌と化して、空からコックを急襲した。

男の右肩を含む上半身が切り離された。ひとたび左手で宙を搔き、残つた体は仰けざまに倒れた。人蠅のように、またしてもそれらは燃え上がり、二つの火柱と化した。

彼女が着地すると、翼と聖杯は粒子に解体され、彼女の腕の中で一匹の猫の姿に戻つた。おれは反射的に叫んだ。

「アリーシャ、逃げる！」

すでに彼女は、猫を抱いた一人の少女と変わらない。コックを攻

撃していた一隊はすでに機能を停止していたが、カラリは決して見逃さなかつた。

「少し話を聞く必要があるかもしない。面白い武器を持っているようだが、この距離だ。弾丸を止められる念動能力者でもない限り、わたしの指示に従つたほうが賢明だということは、理解していただきたい」

背に銃口をあてられたまま、彼女はわずかにつなずいたようだ。身をかがめて猫をそつと降ろし、両手を上げた。カラリの背後から二人の武装警官が進み出て、アリー・シャの腕を両側からとらえた。どこに身を潜めていたのか知らないが、いつぞや、おれの部屋に踏み込んできた、彼女の直属の部下とおぼしい。

アリー・シャは腕を後ろに回され、三重の枷を嵌められた。強化人間をとらえるための手錠だ。ロックされる音が響き、アリー・シャは小さく呻いて、眉根を寄せた。アマリリスなら簡単に引きちぎるだろうが、彼女自身はあくまで生身だ。プルートウを用いない限り、戦闘力はゼロに等しい。

しかし、カラリがプルートウを見逃したといふことは、「魔術」のカラクリに気づいていない可能性が強い。不法ギルドの連中に絡まれた時と違い、猫は武装警官を攻撃しようとはせず、拘束された主人をおとなしく見上げていた。ゆっくりと、カラリが近づいてきた。

「一応、殺人の現行犯ということになる」

「正当防衛だろう。無能な警察の代わりに、体を張つて被害を食い止めたのは、彼女じゃないか。それとも、善良な市民に強化人間用の手錠をかけるのが、刷新のやりかたなのか」

「市民に蛇蝎のように嫌われるのもまた、国家権力の役目さ。ところで貴様は、あの女とは知り合いのようだが」

お得意の道化師のポーズで答えた。彼女は赤い唇を歪めて微笑んだ。銃口を向けたまま、ぐつと体を寄せ、耳朶に触れるほど唇を近づけて囁いた。

「どつち道、貴様には話があつたのだ。連行させてもらひついで

「任意同行じゃないのか？」

「公務執行妨害の現行犯だ。お望みなら、銃刀法違反と擾乱罪を加えてもいい」

罪状というものは、向こうがその気になれば、いくらでも付け加えられる。そもそも、罪を犯さずに生きられる人間なんて、一人もいやしない。再び道化師と化したおれの腕を、舞蹈に誘うには少々乱暴な手つきでカラリはとらえ、音を鳴らして手錠をかけた。残念ながら、こちらは強化人間用ではなかつたが。

間もなく小型の装甲車が横付けされ、おれとアリー・シャは後部座席に押し籠められた。二人のガスマスクが両側を占めた。三人めのガスマスクが運転席に座つており、カラリはというと、いつぞやの黒い大型バイクに乗り込むさまが見えた。彼女の先導で、車が走り出した。もはやプルートゥは、どこにいるかわからない。

アリー・シャは手枷のほかに、三つの金属の輪で体を固定され、銀色のマスクで口を塞がれていた。片方の肩が剥きだしになつたさまが痛々しい。おれと彼女の間は、透明な板でなかば仕切られていた。それでも彼女が身じろぎするたびに、薔薇の香りが匂い立つようだ。

「苦しくないか？」

小声で囁くと、彼女は目顔でうなずいた。たちまち隣のガスマスクに銃口で脇腹を小突かれ、おれは肩をすくめた。それにしても、この物々しさは何なのだろう。武装警察の分隊をまるごと壊滅させた、その男を彼女は一瞬で屠つたのだ。当然と言えば当然なのだが、引っかかるものを感じた。やつらはいつたい、何をそこまで警戒するのだろう。

（弾丸を止められる念動能力者でもない限り）

郊外の闇を抜けて、装甲車は区の拘置所のゲートを潜つた。留置場をすつ飛ばしてここへ直行したところからして、VIP的扱いと言えた。

窓のない部屋に拘留されて四日が過ぎた。

広さはハススペースほどか。鉄格子に面しておらず、軟質素材の白い壁で四方を囲まれていた。ユニット式のバス・トイレが別に付いており、ベッドは独りで寝るには広すぎるほど。机と椅子はもちろんのこと、本棚があり、ソファまである。室内はそれなりに清潔で、窓のないことを除けば、おれが住むボロマンションより、よほど快適なくらいだ。

飯は三度三度、食わせてくれる。俗にいう「臭い飯」ではなく、仕出し弁当ほどには無い。しかし何よりありがたかったのは、煙草が自由に吸えることだ。こいつさえあれば、あとは水とイワシの頭でも生きていける。

警察の宿の世話になつた経験なら再三あるけれど、ここまでのVIP待遇は初めてだ。逮捕したものの、ぞんざいには扱えない囚人を入れておく部屋なのかもしれない。しかしそういった人物は、ほとんどの顔の売れた有名人であつて、おれみたいな闇商人は、手つ取り早く、「豚箱」にでも押し籠めておけばよさそうなものだが。

四日の間、アリーシャはおろか、カラリともまったく接触できない。拘置所に連れて来られるとすぐ、おれはガスマスクに目隠しされ、この部屋に閉じ籠められて、それつきり完全に隔離された。ここにいる限り、外部のもの音さえまったく聞こえない。もちろん、脱走など望むべくもなかつた。

食事の盆は、ドアの下部にある数センチの隙間から差し入れられた。肌着が一揃い用意されていたので、洗いながら使い回せばいい。二挺の銃と害虫駆除の器具と発信機、および社名の入つたツナギは取り上げられていた。シーツには野戦用の抗菌布が使われているら

しぐ、ほとんど汚れない。床の埃はある程度自動的に吸い取られる。要するに、四日の間、一度も部屋のドアは開けられていないのだ。唯一、運ばれてくる食事だけで外界と繋がっていると言えた。どんなやつが運んでくるのか、指一本見えないし、話しかけたところで、もちろんノーリプレイ。この隙間からでは、猫も入れまい。

なんとか脱走できないものか、自分なりに考えてみたし、調べもしたが、お手上げの状態。隙だらけのようで隙がない。柔らかい壁は殴つても蹴つても、衝撃を吸收するばかり。逆にドアは、地獄の門のように頑丈である。

(この門を潜る者はいつさいの望みを捨てよ、か)

おれの不審な行動は当然、逐一監視力カメラに撮られている筈。なのにどんなに暴れてもまったく警告されないのは、檻の中の猿と同じ扱いである。カメラ越しにカラリを挑発することも考えた。依頼の件は彼女の弱みもあるのだが、うまくしたもので、アリーシャを人質にとられている以上、下手なことは言えない。

今頃アリーシャがどんな仕打ちを受けているのか、それは考えないようにした。ここから出られない以上、考えるだけ無駄だから。カラリが仕切っているからには、非人道的な拷問には及ばないという期待もあった。むろん、あのカフカ鳥のような女を信用するつもりはないが、少なくとも、スマートさに欠けることはやらないタイプと見ていた。

逆に言えば、スマートな拷問ならやりかねないことになるが。

(この電極は、ずいぶん神経に響くだろうね)

赤い唇が歪む。指一本動かせないまま、アリーシャの目が見開かれる……おれはソファに身を沈め、妄想とともに煙を吐いた。朝食時に一箱ずつ支給されていたので、節約すればまず一日はもつ。考えまいと思うことを考えずに済めば、それだけで、この世界はずいぶん住みやすくなるだろう。人は想像力によって苦しめられる。

古風な本棚には隙間なく本が詰まっていた。どうせ俳句か教育原

ラ、マルクスなどの著作が並んでいて、思わずのけぞつた。なるほど、ここに閉じ籠められるのは政治犯が多いのだろう。退屈責めの挙句、どの本を熱心に読み出すか、チェックするというわけか。

腰を落ち着けて読書する心境でもなかつたが、かといって、ほかにすることもない。政治的な主義主張もとくにない、大日本おつぱい党員に過ぎないおれは、古典は敬遠しつつ、昨今の過激派について書かれた本を何冊か引っこ抜いた。

中でも『武装國家』という本を面白く読んだ。第一次百年戦争を引き起こしたといわれる、イズラウンの研究書だ。

この国に関しては、あまりにも謎が多い。無理に語ろうとすれば、歴史という学問的分野を踏み越えて、オカルトの領域に片足を突っ込んでしまう。イズラウンは徹底的な秘密主義を貫き、戦時中もひたすら暗躍した。いくつかの言語道断な兵器の開発にたずさわり、イミテーションボディによつて滅ぼされた。

イズラウンが何者によつて支配されていたのか、それすら諸説入り混じり、はつきりとわかつていなし。宗教的指導者たちによる合議制だったことが、わずかに知られている。そしてこの本の著者によれば、現在のツアラトウストラ教こそ、イズラウンを支配していた謎の宗教の末裔だというのだ。

おれは眉に唾をつけたい衝動に駆られた。それがどんなものかは知らないが、明らかに「神」を信仰していたイズラウン人と、神の存在を否定するツアラトウストラ教との接点が見出せない。別モノに思える。半信半疑でページをめくると、こんな謎めいた一節が目に飛び込んできた。

……イズラウンの最も秘された神殿において、イミテーションボディは誕生した。その生成の秘密は、第一の試験体IBとともに、ツアラトウストラ教団に受け継がれたのである。……

(まるでオカルトだ)

第一の試験体IBについて語れば、なおさらそれに近づく。俗に「バルブ」と呼ばれるこの伝説のIBは、神秘主義的なベールを幾重もまとつて、巷間に語り継がれてきた。この本に書かれているのも、そんな巷説のひとつに過ぎまい。

『武装國家』の著者によれば、もともとバルブは、殺戮兵器として生み出されたものではなかつたという。教団の最高指導者たちによって取り出された、「神の一部」なのだという。ところが、指導者の一人に「悪魔に憑かれた者」があり、おのれの権力欲を満たすためにバルブを複製した。これが後に人類を滅亡寸前まで追い込んだ、イミテーションボディにほかならない。

オリジナルのバルブの行方は、杳として知れない。この著者は、ツアラトウストラ教団こそバルブの繼承者だと主張するが、それが「物理的に」繼承されたのか、それともあくまで精神的に受け継がれたのか、わざと明記していない。

宗教の常として、ツアラトウストラ教にも諸派がある。諸派どうしが、おのれこそ正統だと主張し、対立している。穩健派もあれば、例のジークムント旅団のようにテロリスト化した過激派も存在する。ただ根幹の部分で共通しているのが「超人」待望の思想であり、著者によれば、それこそがバルブだというのである。

何らかの方法で地上に取り出された「神の一部」こそが、かれらが待望する「超人」にあたるというわけだ。  
(やれやれだぜ)

少々頭痛を覚えて、おれは本から目をはなし、背もたれに身を沈めた。短くなつた煙草をさらに深々と吸い、溜め息とともに吐き出した。渦を巻く紫煙の中に、アマリリスの面影を見る思いがした。もしもこの本の説が正しければ、イミテーションボディとは、バ

ルブの「ピー」にほかならない。ただし、「ピー」する段階で夾雜物、あるいは邪念が混じつたため、ひたすら人類への憎悪に突き動かされた恐るべき殺戮兵器が生み出されてしまった……となると、鏡像の鏡像はオリジナルということにならないか？

（そうですね……ちょうどアルファベットのAを逆さにしたような）  
黄金色のカプセルを発見した経緯を語る、一朗だか一彦だかの声を頭から追い払いつつ、もはや指で挟んでいるのが耐えがたくなつた煙草を揉み消した。ドアのほうで音がしたのは、そのときだ。  
食事の時間にはまだ早い。となると、ドアが開けられようとしているに違いない。「ごく小さな音だつたが、いつかこの瞬間が来る」とを待ち構えていたおれの耳には、千人のオーケストラが搔き鳴らす『運命』の第一楽章に聞こえた。背もたれを乗り越え、素早く、かつ音をたてずに、ドアの横に貼りついた。

当然、このての扉は内側に開く。看守の側からすれば、破りやすい反面、致命的な死角が生じる。息を潜めて待つていると、予期したとおり金具の外れる音がして、地獄の門は開いた。一人がやっと通れるくらいの隙間を作った。すかさずおれは死角から飛び出した。体をたわめ、看守に一発お見舞いしようと身構えて、そのまま凍りついた。

目の前で、つぶらな目が瞬きをするさまが、いやにゆっくりと感じられた。

「……アリーシャ？」

背後から突き飛ばされたらしく、彼女は数歩よろめいた。体がぶつかったところで、反射的に抱きとめた。薔薇の香りと、しつとりとした重み。面食らっている間にドアは閉まり、ロツクされる音が重々しく響いた。どうやらおれの思惑は、しつかり読まれていたらしい。

アリーシャは依然、後ろ手に強化人間用の手錠で拘束されていた。四日前と同じ、黒いワンピース姿で、多少憔悴しているが、一瞥した限りでは、傷ついているようには見えない。間もなく手錠から電

子音が聞こえ、ロックの外れる音がした。後ろに回つて力を加えると、容易にそれは外れた。タイマーで鍵が外れる仕組みらしい。

「だいじょうぶか？ ケガは？」

彼女は首を振った。さらさらと髪が揺れた。自身で手首をさするため腕をまくると、滑らかな褐色の肌に、締め付けられた跡が赤く浮いていた。

「でも少し疲れました。シャワーを浴びてもいいですか」

「それは構わないが……」

かすかに微笑むと、アリーシャは首飾りを外すような動作で、背中に手を回した。そのまま一番上のボタンを外し、次に腕を下から回すと、無数のボタンを上から器用に外していった。ふつさりと、ワンピースが床に落ちるまで、おれはただ呆然と眺めていた。

ずっとアマリリスに似ているように感じてきたが、黒い下着だけを残した彼女の裸身は、成熟した女性らしいラインを描いていた。背にかかる漆黒の髪は艶やかで、腰は妖しくくびれ、充実した臀部を引き立てつつ、舞踏家らしい、見事な脚の線へと続いた。圧倒的な薔薇の香りが、めまいを覚えるほどたちこめた。

「できれば、後ろを向いていてもらいますか。下着を脱ぎたいのです」

「あ、ああ。すまなかつた」

ゆうやく混乱がおさまる頃には、シャワーの音が聞こえてきた。温かい雨のように、その音は心に染みた。すっかり感電したようになつたまま、どさりとソファに腰をおろした。実際に、指先がまだぴりぴりするようだから、ある種の電流を本当に浴びたのかもしれない。

煙草に火をつけて、垂直にたちのぼる煙をぼんやりと眺め、それから入り口のほうへ目を向けた。アリーシャを押し込んだきり、依然、ドアは閉ざされたまま。床には強化人間用の手錠が、グロテスクなワームの屍骸のように転がっていた。

おれは眉をひそめ、ぼんやりと天上を見上げると、また温かい雨の音に耳をかたむけた。褐色の肌の上を、水がなめらかに伝つさまが浮かぶようだ。が、しかし、

(カラリは何を考えている?)

「話がある」から、おれを連行したのではなかつたのか。この部屋に放置したきり、四日の間、一度も姿をあらわさなかつた拳銃、今度はアリーシャと二人きりで閉じ籠めておくつもりか。

カラリがアリーシャにどんな訊問を行つたのか、今のところわからない。後ろから見た限り、目立つ傷は確認できなかつたが、拷問されていないとは言いきれまい。彼女がどこまで話したかにもよるが、次におれとの会話を盗聴して、新たな事実を引き出そうとしているのは明白だらう。

頭を搔きむしり、たて続けに煙を吐いた。とにかく謎だらけで、何から考えるべきか、皆田見当がつかない。浴室に目を向けると、磨りガラスに彼女の裸身が、夢のようにぼんやりと浮かんでいた。

「アリーシャ、ちょっと質問していいか」

「はい」

「きみを取り調べていたのは、カラリ……あのサングラスをかけて

いた女か。まあ、一人ではないと思うが、その女が常に指揮をとつていたのだろうか

「そのようです」

彼女の声の調子は、どこかフォックス教の巫女をおもわせた。巫女たちは死者の靈魂を自身の体に乗り移らせ、死者の言葉を語る。トリックかどうか問うつもりはないが、そのとき彼女たちの声にはエコーがかかり、遠くで響いているように聞こえるのだ。

ともあれ、おれたちがまだカヨリの監視下にあることは、先に確かめておく必要があった。担当が替わっていたのでは、話がややこしくなる。いや、通常なら上司に引き渡すのが筋だろう。この部屋を勝手に使うだけでも、一武装警官の権限を明らかに越えている。となると、彼女は上に強力なコネクションを持つているのだろうか。竜門寺家に連なる家柄でありながら、血族とは距離を置いて栄えた大富豪の娘。クーデターの混乱の中で姿を消したあと、新政権の武装警官として、突如姿をあらわした……彼女もまた、あまりに謎が多い。

いつのまにか、雨の音は止んでいた。ドアが開き、薔薇の香りのする湯気があふれた。おれは慌てて目を逸らした。

「腹は減っていないか。といつても、何もおもてなしできないが。あと一時間も待てば飯が配達されるだろう」

声が上ずっている。我ながらくだらない質問だと思いつつ、子供じみた照れ隠しをしてしまう。思えば、同棲期間も含めて妻と暮らしていたのは、ほんの一・二年足らずであり、それ以外は基本的に女気のない人生を送ってきた。アマリリスは論外として、裸の女と一つの部屋にいるなど、非常事態にほかならぬ。少し間を置いて、彼女は答えた。

「お腹は空いていません。でも食事は楽しみです」

ふうわりと、微笑むさまが見えるようだ。訛りのあるアクセントが、妖しく耳をくすぐる。そういうえば、アマリリスもちょっとアクセントがおかしいのだ。一人の声の質は、どこか似てこるようだ。

「念のため先に言つておぐが、この部屋は監視されている。カメラが仕掛けられているし、当然、おれたちの会話は筒抜けだ。警察に聞かれたくないことは、うかつに喋らないほうがいい」

「わかりました、マスター」

「えつ」

思わず振り向いた。下着を身につけただけの、裸の背中がそこにあつた。濡れた髪。肌はしっとりと潤つて、内側から光を放つようだ。けれどおれが目を見張ったのは、その肌の上にあらわれた、いくつもの赤い線に対してだ。あるものは短く、あるものは長く、あらゆる方向に背中を這いまわっていた。

入浴する前にはまったく気づかなかつた痕だ。湯を浴びて、肌が熱を帯びることにより、浮き出たものに違いない。それも昨今ついた痕ではなく、何年も前に刻印されたものと思われた。アリーシャは恥じ入るように身をかがめた。

「ごめんなさい。かつてそう呼んでいた方の声と、とてもよく似ていたもので」

「そいつはきみを、ずいぶん痛いめにあわせたんじゃないかな」  
彼女が小さくうなづくのを確認して、おれは唇を噛んだ。

服を身につけたあと、彼女はさつきまでおれが読んでいた本を、指先でぱらぱらとめくっていた。何を話せばよいのかわからないまま、おれはぼんやりと煙草をふかしていた。いよいよ本田最後の一本になるが、火をつけずにはいられなかつた。

「カードを」

思い出したようにつぶやいた。アリーシャは顔を上げて小首をかしげた。

「はい？」

「返してもらつたのか。あれはその……大事な商売道具だろつ」

微妙な表情で、盗聴されているのだと念を押した。彼女は微笑んで、ワンピースの腰の辺りに手を添えた。布地が厚くなっている部分が折り返され、例の不思議なカードがワンデッキ、掌の上に落ちた。ちょっとしたホルスターといつたところか。

やはり、カラリはカードの秘密に気づいていないようだ。たまたま見なかつたのか、位置によるものか。いずれにせよ、もし目撃していれば、すんなりと返したりするまい。しかるべき機関に送られ、時間をかけて解析を試みるだろつ。同様に、「ブルートウの「変化」にも気づかなかつた様子だが……

（もしかして計算に入れていたのか？）

おれは弾かれたように立ち上がつた。不法ギルドの男を倒した時と違い、ブルートウを自身の体に纏う形をとつたのは、「読み取り機」のカラクリを第三者の耳からくらませるための策略ではなかつたか。

そう大声で質問しそうになり、慌てて言葉を呑みこんだ。微笑を浮かべたまま、アリーシャはかすかにうなずいた。慣れた手つきで、

カードをカットしながら言つ。

「例えばここから一枚抜き出したとします。それが何のカードか、もちろん見るまではわかりません」

心を読まれたとしか思えないほど、絶妙な答えだ。しかも動作とあいまつて、監視者の目にも不自然に映るまい。どうやら「カラスの聖杯」のカードは偶然に引かれたものらしい。

「偶然は存在しない、と、わたしたち占者は考えています。問い合わせば、カードはしかるべき答えを与えてくれます。本来は必ずしもカードである必要はないのです。例えば空に問い合わせれば、必ず何らかのカタチがあらわれるのですけれど、読みどるのは至難の技です。カードの中には、この世界で起こる全ての現象が、象徴として網羅されています」

カードを切りながら、訥々と話す声を聞いていると、気持ちが安らぐようだ。話の内容は、なかなかラディカルなものがあるが。「するときみは、例えばおれが一生の間にどんなことをして、どんな死に方をするか、生れた時から決まっているというのかい」「あるいはそうかもしれません」

「しかし陳腐な言い回しだが、人生は選択の集積じゃないか。右へ行くべきか左へ曲がるべきか。何の気なしに左を選んだばかりに、人生がガラリと変わってしまう場合だってある。それもまた偶然ではなかつた、と？」

「おそらくは。ただしカードでは、人間の一生を俯瞰的に見ることは難しいのです」

「得意分野でない？」

「はい。比較的近い未来の限定された出来事であれば、手に取るようになるのですが」

彼女は手をとめて、どこか放心したような表情を見せた。唇が半開きになり、うつろな視線があらぬところを彷徨つた。

「疲れてるんじゃないか。四日間、みっちり聴取を受けたんだろう」カラリに聞かせるつもりで、口調に皮肉を込めた。おそらく彼女

は、アリーシャが本当に強化人間か、もしくはサイキックだと疑つたに違ひない。どうも後者を念頭に置いていた感がある。当然「医学的な」検査が徹底的に行われただろうし、その過程で強化人間の疑いは晴れるだろうが、サイキックの検出は極めて困難だ。よつて自白に頼るしかなくなる。

過去にはサイキックの被疑者に対する凄惨な拷問の実態を、いろいろと耳にした。首長連合はどういうわけか、かれらを目の敵にしていたフシがある。けれど、最も危険視されていたのはパイロキネシスをもつ不満分子などであり、アリーシャが見せたような、人体そのものを変化させるサイキックなど聞いた試しがない。

カラリほど聰明な女が、荒唐無稽な妄想を追うとはどうしても考えられない。疑いを抱くからには、必ず何らかの根拠がある筈だ。「取り調べはすぐに済みました。あとはほとんど、眠つていたようです。一度目を覚ました気がしますが、夢だったのかもしれません。蒼いダイオードの灯りの中で、裸にされて横たわっているようでした。」じょじょと何かが泡立つ音が聞こえ、どこかでしきりに意見を言い合っていました。体は少しも動きませんでした

「そのあと自白を強要されなかつたか？」

静かに首を振った。目を覚ますとすぐに、ここへ連れて来られたという。次の質問は監視カメラの手前、口に出すべきかどうか迷つたあげく、率直に切り出した。

「最初に聴取したのはサングラスの女だろう。きみは何を話したんだい」

「伝統的な奇術のようなものです、とだけ。事実ですから」「あとは黙秘を?」

彼女がうなずくのを見て、おれは眉をひそめた。取調室という名の密室では、黙秘権などないに等しいのだ。たいていは、「割り屋」と呼ばれる自白させるための専門家が呼ばれ、精神的に、必要とあらば遠慮会釈なく肉体的に追いつめて、しかるべき調書を取る。善良な老人がいとも簡単に少女連續殺人鬼にまつりあげられる。

けれどカラリはそれ以上追求せず、ありきたりの職務質問に移つたらしい。

もちろん慈悲深さではなく、いかにも彼女らしい合理主義のあらわれだ。あれほどの力を有するアリーシャが、簡単に自白するわけがない。さつさと「検体」として「鑑識」に回したほうが手っ取り早いし、あとはここに放り込んで、じっくりと間接的に情報を得るのが得策だ、といったところだろう。

「考えてみれば、おれもきみのことを全く知らないし、きみもまた、おれの名前すら知らないんじゃないかな?」

煙草は燃え尽きかけていた。またソファに座り直し、名残惜しげにそれを揉み消した。アリーシャは手慰みするようにカードを軽くカットし、一枚抜いた。

「時間、に関するお名前でしょ? 『本名ではなさそうですが』」「エイジだ。なるほど、よく当たる」

「自分のことを話すのは苦手です。カードと猫は、祖母から伝えられました。一族の女に代々受け継がれるのです。住所は不定です。信教は一般的なイーグラック人に準じます」

淡々と、歌うように彼女はそう言った。時おり悪戯っぽく天井を見上げる仕草は、カメラはちゃんと意識しているといつ合図だろ。じつにシンプルな自己紹介だが、もともと人間のプロフィールなん

て、そんなものかもしないし、おれも根掘り葉掘り尋ねるのは苦手だ。自分が放つておかれないから。

イーブラック人の故郷は、イズラウンを含む砂漠地帯だと言われる。ただし、かれらのライフスタイルを受け入れ、「イーブラック」を自称しさえすれば仲間と認められるし、血はさほど重んじられない。ひとつ不思議なのは、砂漠地帯の民族とは全く血の繋がりがない、例えばおれみたいな男がイーブラック人の仲間になつても、目の色が変わつてくることだ。

比喩ではなく、実際に色素が薄くなり、瞳が白色に近づいてくる。これまで見た中でも、アリーシャの目は」とさら美しく、青みがかつた白銀だ。

かれらもまた、消滅した武装國家イズラウンとの繋がりが指摘されている。もはや入手は不可能と言っていた重炉心弾が、イーブラック人によつて、駅で無造作に売られていたように。イズラウンで失われた技術の一部が継承されているらしいのだ。ということは、「猫とカード」もまた、そこにルートを求められるのではあるまいが。

『武装國家』によれば、IBの失われた製造技術をツアラトウストラ教徒が密かに受け継いだという。かれらとはまた別のルートで、イーブラック人たちはほとんど無意識に、禁断の技術を集団の内に温存しているといえる。ちょうどばらばらになつたカードの一部を、ただ絵柄の美しさに惹かれて、たいせつに取つておくよ。

そういう意味では、ツアラトウストラ教徒と比べて、イーブラック人は無邪気だ。ある意味、前者が正統派で後者が異端ともいえる。意識的な前者と異なり、あまりにも無意識的である。無意識的であるがゆえに、夢や魔術の領域にぐつと接近する。

「さつきみは、比較的近い未来の限定された出来事であれば、手に取るようになります」と、たしかそう言つたね

「正確にそう言いました」

彼女は微笑んだ。やはり、アマリリストよく似ている。もつとも

少女は、ほんと笑わなかつたが。

「未来は変えられるのかな」

「わかりません」

「でもきみは、偶然は存在しないとも言つた。まあ、それはよしとして、例えば占つて、『ごく近い未来におれは石に蹴つます』って鼻の頭を擦り剥ぐと出たとする。そこで下ばかり見て歩けば、転ばずにつ済むのかな。それとも、カフカ鳥が頭に糞を落として驚いている間につまづくとかして、どうあがいても転ぶのだろうか。運命は変えられないのかな」

「難しい問題ですけど。基本的には、変えられないことを前提に、わたしたちはお話しします」

「基本的には、ね。そうつぶやいて、無意識に煙草の箱に手を伸ばし、苦笑して握り潰した。彼女は言つ。

「何か問題を抱えていらっしゃるのですね」

「ああ。この状況事態が大問題なのだが。とにかくおれは近い将来、どうあがいても死ぬ運命にあるらしい」

「占い者がそう告げたのですか」

「いや、状況的にさ。例えば一週間絶食させた獰猛な多脚ワームと同じ檻に入れられたら、どうあがいてもおれは食われるだろう。ほかに選択肢がない状況だ」

「でも腕のいい占い者が告げたのでなければ、当てにならないと思います」

彼女にしては強い自己主張に、おれは目を見張つた。スカートの裾をふわりと広げて、彼女は近づいてきた。ソファに座り、正面からおれを見つめた。とん、と、小テーブルの上でカードを揃える音が響いた。

「わたしが、あなたの未来を変えてさしあげます」

腹の底に響くような震動。

地面が揺れて、部屋の中のモノが次々と落下する音が響いた。前方に放り出されたアリー・シャが、危うく小テーブルに激突する寸前で、どうにか受けとめた。二人抱き合つたまま、床の上をぐるぐると転がり、止まつたところで、ぎゅっと彼女を抱きしめた。

次の衝撃にそなえた。案の定、第二波が来た。

おれの背中に、得体の知れない資材がばらばらと降り注ぐ。明らかに地震による揺れではない。どう考へても砲撃だ。何者かが、強力な火力を用いて、拘置所を襲撃しているのだ。おそらく小型の戦車か自走砲の類いだろう。

さらに衝撃がたて続けに走つたが、今度はだいぶ離れた地点に着弾した様子。彼女の無事を確認すべく、顔を上げて腕の力を緩めた。長い髪が解き放たれ、ぐつたりと目を閉じたままの、彼女の周りにあふれた。

「アリー・シャ、だいじょうぶか」

軽く頬を叩く。薄い瞼が震えて、白銀の瞳が開かれた。ジグソーパズルの中の湖を、おれは不意に思い出した。驚いた表情が、痛々しいほど幼く思えた。

「カードを……」

「そこにじつとしている。ちゃんと捨つてくるから」

彼女を壁際に落ち着かせると、大きめの衝撃が部屋を揺らした。よろめきながら倒れた小テーブルに近づき、カードを拾い集めた。さいわい、たいして散乱しておらず、一分と待たせずに手渡すことができた。また、繰りざまに衝撃が走る。一度部屋が真っ暗になり、赤っぽい非常灯に切り替わった。

「クーデターが起ころるなんて聞いてねえぞ」

ただの愉快犯ではあるまい。政治的な意図があつての襲撃だろう。政権交代後、間もない昨今だ。旧政権の重要な人物たちがまだ裁判中で、ここに拘留されている。亡命中とされる龍門寺家の大ボスなんかも、じつはこの中にいるのではないかという噂さえある。やえにどう考へても、襲っているのは旧首長連合系の過激派に違ひあるまい。

着弾がまた遠くなつた。警報機らしい、ブザーの音がかすかに聞こえた。それにしても奇妙な戦車だ。発射される間隔からして、一台か、多くて二台で来ているのは明白。なのに、これほど撃ちまくりながら、一向に弾が尽きないのはなぜだろ？

「火車です」

アリー・シャがつぶやいた。カシヤ、などといふ兵器は聞いたことがない。見れば、彼女は一枚のカードを、こちらへ向けて差し出していた。二つの、炎上する車輪が描かれていた。古い大砲に用いるような鉄製の大きな車輪が、血の色をした炎をめらめらと身に纏う。おぞましいことに、それぞれの中心には、蒼ざめた男の顔が嵌めこまれているのだ。

「こいつらが襲つてゐるというのか？」

「本質的には、デビルフィッシュに呪われた男たちと同じ者です。ただし、その者たちの血は燃えます」

何のことやら今ひとつわからない。わからないなりに、血染めのコツクや不法ギルドの麻薬中毒者と同様のやつが来ているらしいことは、何となく理解できた。今度は戦車で乗り込んできたのか。しかもこれまでと異なり、明確な政治的意図をもつて……

かなり近い着弾があつた。大時化の中の船のように部屋が揺れ、容赦なく資材が降り注いだ。

「くそつ。このままじゃ、生き埋めにされちまつ」

彼女の手を引いて、ドアに駆け寄つた。が、蹴つても体当たりしてもびくともしない。叩きつけた椅子ばかりが粉々に砕け、呻くほ

ど手が痺れた。次に書き物机を振り上げたとき、聞き覚えのある女の声が響いた。

「無駄だ。今開けるから待つていろ」

ドアの上部にあるスピーカーから聞こえてくるらしい。間もなくエアロツクの外れる音がして、バネ仕掛けのようにドアが開いた。砲撃は続いていたが、爆発は遠ざかっていた。震えるドアにもたれて、いやにゆっくりと、カラリはサングラスを外した。アイシャドウが細く引かれた目で、おれたちを一瞥して言う。

「条件つきで逃がしてやってもいい」

「そのセリフ、言う順番を間違つてないか」

「あるいはな。だが、わたしは最初から取り引きに応じてもうつもりでいる。貴様にだって、猿より少しは進化した脳味噌があると見込んだ上でだ」

ピルトダウン人、という単語を、おれは懸命に打ち消した。

「取り引きの条件は?」

「愚問だな。打ち上げ花火でもやつていると思つたか? 拘置所の警備だけではとてもあいつは倒せぬ。救援は間に合いそうにない。見たところ、ここを壊滅させるまで止まつてくれそうにないしな。つまり襲撃者を倒さなければ、どつちみちおまえたちは死ぬということだ」

轟音とともに地面が揺れた。赤い非常灯が不穏に明滅した。ドアにもたれたまま、カラリは表情一つ変えない。搖れがおさまると、片手をあげて合図し、後ろにひかえていたらしい、ガスマスクの人から何かを受け取つた。パインソングの入つたホルスターと、M36だつた。

今度は少し離れたところで爆発が起きた。ホルスターを身につけながら、皮肉を言わずにいられない。

「断つておくが、本日は通常の弾丸しか持ち合わせがないぜ。戦車だからなんだか知らないが、こんな豆鉄砲で太刀打ちできると思うか?」

「誰も貴様の戦闘力になぞ期待していない」

カラリはアリーシャを目の端で一瞥した。軽く拳を握つて立つている彼女からは、何も感情は読みとれなかつた。ただ月のように冷たく澄んだ瞳をしばたかせ、承諾の意志をあらわしただけで……カラリは語を継いだ。

「それに相手は丸腰だよ」

「ああそうかい。火車とかいう化け物なんだろう? 双子の火の車だ」

「なんだと?」

目が見開かれた。この女の驚いた顔を見るのは初めてだろう。これまでさんざん振り回されてきたので、胸のすく思いであるが、そ

んな子供じみた勝利感に酔つてゐる場合ではない。

「イーズラック流の占いをちょっとばかり伝授してもらつたのさ。そのうち恋の悩みでもできたら、彼女に頼むことだな。案内してくれ。化け物の居場所へ」

ドアの向こうは鉄板で覆われた通路だつた。床に資材がばら撒かれ、焦げ臭い煙がたちこめていた。窓と監房が見当たらないところからして、どうやらおれたちは地下の特殊な「離れ」に閉じ籠められていたとおぼしい。そうでなければ、今頃とつくにおしゃかだつたかもしねない。

カラリを先頭に通路を駆け抜けた。シンガリには一人のガスマスクが続いた。その間にも次々と着弾があり、この世の終わりがきたような揺れに見舞われた。途中、一人のガスマスクが待つており、カラリの姿を確認すると素早く敬礼し、壁についているハンドルを力をこめて回した。潜水艦のハッチをおもわせるドアになつてゐるらしい。

身をかがめてドアを潜ると、さらに狭い通路が続いていた。頭を上げてはとても通れず、オレンジ色の非常灯が並ぶ先は、モグラの穴のように曲がりくねつていた。乱れる足音がこだまを返し、うつろな重低音と化した。ここへ来て、印象よりカラリが小柄であることに初めて気づいた。敏捷に駆け抜ける彼女に、ともすれば引き離されそうになる。

「これから敵の背後に回りこむ。言うまでもないが、地上に出たら気づかれないよう注意しろ。別働隊を側面から当てて、やつの注意を引きつけるから、それまで待て」

通路は行き止まりになり、上方へ通じる金属の梯子が、壁に嵌めこまれていた。ガスマスクの一人が先に上り、続いてカラリが梯子に手をかけると、振り向きもせずにそう言つたのだ。

「了解した。アリー・シャ」

「はい」

彼女の声は澄んでいて、これほど走ったにもかかわらず、まったく

く息を切らしていない。振り返ると、小首をかしげてかすかに微笑んだ。それを見て、おれはしようと思っていた質問を引っ込めた。どうやらプルートゥは、ちゃんと上で待つていてるらしい。

ガスマスクは頭上のハンドルを回し、マンホールの蓋をぶ厚くしたようなハッチを開いた。地上は夜だった。ぱらぱらと小雨が降つており、意想外な静けさに浸されていた。激しい爆撃にさらされたように、あたり一面瓦礫の原で、血をおもわせる硝煙の臭いがたちこめていた。

百メートルは離れていまい。クレーター状にえぐられた地面の中。巨大なサーチライトが交叉する所に、二つの人影がくつきりと照らし出されていた。

子供をグロテスクにデフォルメした人形が並んでいるようだつた。二メートル近くありそうなほど、でかい団体のわりに、体形は子供のまま。異様に大きな頭に、犬の毛をおもわせる赤毛が、しょぼしょぼと生えていた。ボーダーの長袖シャツに、ぶかぶかのオーバーオールといった服装がまた、狂気じみた印象を強調するようだ。

一人とも極端な猫背で、両腕はだらりと前に垂れていた。コピペしたように、体形から服装から姿勢までまったく同じだつた。横にほんの少しずれた位置に並んでいる、後方の一人の顔の前で、真紅の光が炸裂した。

(撃たれた?)

エネルギー砲が顔面にヒットしたように見えたのだ。けれど次の瞬間、爆発を起こしたのはオーバーオールではなく、前方の獄舎だつた。火柱が上がり、地響きが伝わつた。いつぞやの重炉心弾以上の破壊力だ。瓦礫にしがみついたまま、おれは生睡を呑みこんだ。パイロキネシス! それも見たことがないほど、ド級のやつだ。

「あり得ない……」

思わずつぶやいた。警備隊は壊滅したのか、もはや一発の銃弾も撃ち返してこない。前方には溶岩を流したような赤い光が、グロテスクな模様を描き、半壊した建物のシルエットを黒々と浮かび上がらせていた。

おれは独房の中で、襲撃者には政治的な意図があると考えた。旧政権の要人を逃がすのが目的なのだ、と。しかし、これではただの殺戮だ。無差別テロだ。政治犯からこそ泥まで、獄舎にいた者の大半はすでに死んでいるに違いない。

ならばこいつらは、ただ殺すのが楽しくて、わざわざこんな所を襲ったのか。血に飢えた愉快犯に過ぎないのか。あるいは、犯罪者は全て抹殺すべきだという、狂信的な思想の持ち主か。いや、いや、かれらがモノを考えているようには見えない。明らかに、背後にある何者が二人を操り、ピンポイントでここを襲つたのだ。

けれどそもそもこの奇怪な双子は何者なんだ？

「ほんの半月前だよ。とある施設が襲撃されたのは」

心の声を読んだように、カヲリがささやいた。いつかおれに話があると言つたとき同様、唇を耳朵に触れそうなほど近寄せて。

「それは当局が旧政権から引き継ぎ、極秘裏に運営していた施設で、わざわざ汚染地帯に分散して建てられていた。もちろん常にI.Bの餌食になる危険性と背中合わせだが、区内に持つてくるより、はるかにリスクが小さいといった。なぜなら、こんなことが起こらないとも限らないから」

「サイキックを隔離するための施設か」

「そういうことだ。かれら兄弟は極めておとなしかつたと聞く。洗脳によつて自身の能力に関する記憶を消され、静かに暮らしていたようだ。襲撃者は職員を皆殺しにし、かれらを奪つた。言うまでも

なく、武器にするために」

おれは小型ワームの卵を噛み潰したような顔をしただろう。また赤い光が走り、見れば、今度は斜め前方にいる男の顔からそれは放たれた。こいつが兄なのだろうか。ぼんやりとそう考えたとたん、獄舎の一部が火柱と化した。

「いつたい、何者のしわざなんだ？」

「カラマーゾフ」

「なに？」

「ご多分にもれず、旧政権系の過激派だという。当局の調べによれば、竜門寺一門との濃厚な関係が指摘されている。首謀者が誰なのか、それもご多分にもれず、謎に包まれているが……来たようだ」機関銃の音が鳴り響いた。クレーターの両側に大型の軍用チャペックが三機ずつ居並び、両手に装着したガトリング砲を一斉に撃ち放つたところだ。

雨のような銃弾の中で、兄弟の体は激しく痙攣した。たちまちオーバーオールがボロ布と化し、数箇所からどす黒い血が吹き出した。けれど、通常なら一秒で五体がばらばらになるほどの大攻撃にさらされながら、それ以上のダメージは見られないのだ。否が応でも、血染めのコツクや麻薬中毒者が思い合わされた。

「生物学的には、とっくに死んでいる筈なんだがな」

忌々しげにカラリがつぶやいた。銃撃が止んだとき、兄弟はがっくりとうなだれて、類人猿をおもわせる姿勢になつた。両者とも全く同じ姿勢なのが気に食わなかつた。そうしてまったく同じ動作、同じ速さで、ゆっくりと身を起こした。兄が左を向けば弟もそつちを向いていた。光が走り、三機の大型チャペックが消し飛んだ。右側のチャペックが散開しつつ、突入を開始した。同時にアリー・シャが駆け出した。おれは慌てて後を追つた。

当然、兄弟はチャペックに気をとられている。二人とも右を向き、一機に狙いを定めて、弟の顔面が光を放つた。それを予期していたように、チャペックは横に跳んで避けた。どうやらカラリの部下の

手で、遠隔操作されているとおぼしい。爆発に巻き込まれた勢いを利用して、みずから一個の砲弾と化して兄弟に突っ込んだ。

宙からガトリング砲が乱射された。砲撃は手前にいる弟に集中したにもかかわらず、兄の体もまったく同じように踊るのだ。踊りながらかれは光の矢を放ち、チャペックがぶつかる寸前に撃破した。爆風によろめきながら、かれらは依然として倒れない。残り二機のチャペックはさらに機銃を連射しながら、じぐざぐ走行で兄弟にせまる。

この戦闘の間に、おれたちはかなりの距離をかせいた。逃げるが勝ちを座右の銘としているおれは、脚力にだけは自信があつたが、アリー・シャの足にはとても追いつけない。いつの間にかプルートウが瓦礫の中から飛び出して、彼女の左側を伴走していた。

走りながら彼女は、ポケットから一枚のカードを抜いた。指の間にはさみ、真横に高くかざした。どういうわけか、おれは何のカードが抜かれたのか、目の当たりにしたようにはつきりとわかつた。力、あるいは女力士。タロットカード八番めの大アルカナと、ほぼ同様の絵柄だ。

黒猫がジャンプした。頂点でカードに首輪が触れて、真紅の光を放った。

黒猫の全身が粒子に解体され、灼熱しながら膨張した。いわゆる質量保存の法則が、ここでどのように書き換えられているのか、おれにはわからない。宇宙を構成する物質のほとんどが、まったく解明されていないという。いわゆる暗黒物質を呼び寄せて、かれは膨張するのかもしない。

目には目を。炎には炎をというわけか。火炎が生き物のように渦を巻き、凝縮した。四肢があらわれ、耳まで避けた口が空を呑むほど開かれた。野獣の咆哮。それはまだ想像上の動物であつた頃の獅子をおもわせる、爬虫類じみた姿をしていた。尖った耳。たてがみは燃える炎で、全身もまた灼熱した金属のようだ。

ただ眼ばかりが、象嵌されたサファイアのように冷たく燃えていた。

これまでの剣や聖杯のカードとは、明らかに規模が異なる。巨大な燃える獅子が着地したところへ、アリーシャは駆け寄り、背中に飛び乗つた。燃え盛るたてがみに、ながば上半身をうずめた姿勢で身構えた。おれはカードの中の「女力士」を、目の当たりにする思いがした。

「ブルートウ！」

彼女が鋭く叫んだ。猫の名前は攻撃的な呪文のように響いた。咆哮。燃える獅子が後ろ足で地を蹴ると、そこから炎が巻き上がつた。真紅の尾を引きながら、真っ直ぐに突進するさまは、地上の彗星をおもわせた。

前方で爆発が起きた。残り一台のチャペックが屠られたのだ。結果的にかれらの犠牲は、ブルートウが「変身」する時間を与えた。血の色に揺れる巨大な壁を背景に、兄弟は同時に振り返つた。真円形に見開かれた眼は完全に白濁して、もはや生命の痕跡を留めていない。それでも一人の表情には、驚愕の色がありありと浮かんだ。

兄弟の顔面が一斉に輝いた。まるで頭部が爆弾と化して破裂したように見えた。強烈なハロゲンライトなみの光量があり、おれは銃を持つ手を思わず面前にかざした。次に襲うであろう爆風を予想して、前方に身を投げ出し、地面に伏せた。

轟音と震動。そいつは予想以上にすさまじく、もしあと一秒でも長く突つ立つていたら、奇麗なローストチキンができるがっていただろう。味は保障の限りではないけれど。

おれは子供の頃、人工衛星の発射実験を一度だけ見たことがあるが、プルートウの飛び上がるさまは、ちょうどあれと似ていた。煙こそ吐かなかつたが、すさまじい火花を上げながら、ほぼ垂直に舞い上がり、たちまち一点の星と化した。対して、落下していく速度は、優雅なまでに遅く感じられた。

古人が想像した幻獣のように。宙を駆るような動作で、斜めに駆け下りてくるのだった。

兄弟は砲台と化した首の角度を上方に修正した。頭部が交互に閃光を発した。そのほかの動きは全く同じなのに、発射するタイミングだけは自在にずらせるのだ。真紅の魔弾が、ほとんど間隔を開けずに獅子を襲つた。螺旋を描くように回避しながら迫る間も、連續攻撃は一向におさまらない。

(こいつらのエネルギーは、無尽蔵なのか？)

一発がプルートウの側面に命中した。赤い火花が弾け、咆哮とアリーシャの悲鳴が響いた。炎に包まれて落下した獅子のもとへ、おれは駆け寄つた。けれどプルートウは身を低くして衝撃に耐え、汗馬のように胸震いすると、まとわりつく炎を弾き飛ばした。通常なら軍用チャペック同様、木つ端微塵になつてゐるところ、一種のエネルギー・シールドを発生させたらしい。

アリーシャは燃えるたてがみの中に、ぐつたりと身を伏せていた。おれは熱くて近寄ることさえできないのに、彼女が火傷ひとつ負つていなければ、プルートウと超時空的にリンクしているからかもしれない。血染めのコックを倒したとき、黒い翼をみずからの背にま

とつたように。

「アリーシャ、だいじょうぶか？」

眠りから呼び覚ましたように彼女は顔を上げ、かすかに微笑んだ。それでもまだどこかうつろな眼差しでこう言った。

「足は速いほうでしたね、マスター」

「あ、ああ。人生そのものから遁走を続けているほどに」「頼もしいです。右、半分、左、でお願いします」

「了解した」

燃える幻獣の背の上で、アリーシャはゆっくりと身を起こした。髪の毛が真紅の炎と化しているように見えた。目で合図を交わし、左右に分かれて同時に駆け出した。この間に兄弟が攻撃しなかつたのは、やはりエネルギーを溜める必要があつたのだろう。おれは両手に銃を持ち、けれど撃鉄はまだ起こさなかつた。

兄弟の頭部が輝いた。おれは左側へおもいきりダイブした。頭上を獅子が逆方向へジャンプするのが意識された。銃を握りしめたまま、クレーターの斜面を前方へ転げ落ち、推進力が止まつたところで、左側にいる兄の足を狙つて、わき田もふらずに銃を撃ちまくった。

相手の足が踊つた。兄弟は連帶を乱されて、ブルートウへの連續攻撃をことごとく外した。燃える獅子は、まず弟の上に覆いかぶさつた。野獣が肉体を粉碎する音が響いた。弟が屠られている間、兄はただ呆然と立ち尽くしていた。やがて目の中の蒼白い光が消え、がっくりとひざまずくと、真紅に炎上した。

おれはブルートウのほうをかえりみた。幻獣の背の上から、アリーシャは燃え上がるサイキックの残骸を無表情に凝視していた。彼女は泣いていた。

新聞におれたちのことは何ひとつ載つていなかつた。おれたちのことはあるか、あのサイキックの双子に關しても、だ。さすがに拘置所が壊滅したことは隠し通せないので、一面に出でていたが、原因は目下調査中、などとまあ、いけしゃあしゃあと書かれていた。

そんなお粗末な記事にさえ、市民が納得してしまう要因は確かにあつた。ワットではないが、何が起こるかわからないのが、この現代。この世界だ。いつのまにかアパートの隣の四畳半にIBが引っ越してきても、ある朝、胸騒ぎのする夢から覚めると、一匹の多脚ワームになつていたとしても、不思議ではない。起じつる原因が現実の中には必ず見つかるのだ。

先の戦争によって、夢と現実の境界が破られてしまつた感がある。アフリカのある場所で誕生した人類が、やがて世界じゅうに拡散したように。イズラウンで生れた禁断のテクノロジーは地上を焼き尽くし、狂おしい夢の断片をまき散らした。燠火のように、それらは今も灰燼に帰した世界のどこかに埋もれ、赤々と息づいている。

アマリリス。

そして、アリー・シャ。

彼女たちこそ最も強烈な燠火であり、火の娘たちであり、夢を継ぐ者たちであるつ。

あのあと、コードネーム”カラリ”は約束どおり、おれたちを解放した。といつても、アリー・シャはすでにその場にいなかつたのだが。麻薬中毒者と血染めのコックを倒した時もまた、彼女はいつのまにか姿を消していた。「搔き消すように」という、古い怪談の常套句がぴったりの消えかたで、哀しみに満ちた眼差しの余韻をして。

娑婆に復帰して二日経つたが、何者も連絡してこない。おれ一人が文字どおり蒸発したところで、たい勢に影響はなく、ひょっとすると人一人の存在感なんて、こんなものかもしれない。派手に走り回つたせいで体の節々が痛く、アマリリスを見舞いたかつたが、とても出歩く気になれなかつた。

部屋でぼんやりと煙草をふかしながら、なぜかレイチエルのことによく考えた。

周りが静かなせいで、よけい隣室が気になるのかもしない。世の中から数日で忘れ去られるおれと違い、いなくなつて日が経つにつれて、彼女の存在感は増すようだ。昼も夜も、亡靈のように、彼女の気配ばかりが、壁を抜けてこの部屋をうろつきまわる。耳もとに息吹を感じて、ハツとつた寝から覚めることもある。

そんなときは心なしか、部屋の中に甘い香りが漂つっている。

一葉が浴室等に仕掛けたモニターを覗くのも、いつのまにか日課になつていた。情けない話だが、映像を呼び出すたびに、おれの胸は高鳴るのだ。シャワーの音が聞こえた気がして、這うように駆け寄り、スイッチを入れたことも再三ある。むろん、期待したものは何も映つていなかつたけれど。

すでに真夜中を回つているのだろう。雨がぱらぱらと窓を打ち、やがて通りすぎた。

目覚めなければならぬ理由があるのだが、それが何かわからぬ。意識の底のほうでもがくばかりで、体は闇に沈んだまま、眠りを貪り続けることを欲していた。

温かい闇。

低血圧のおれには不似合いなほど温かい、そしてどこか懐かしい闇の中に、ずっと沈んでいたかった。こんな闇から抜け出して、おれは何が悲しくて銃を振り回し、血を啜つて生きてきたのだろう。他者を壊し、自分を壊しながら、いつたいどこへ向かうつもりだったのだろう。ひたすら無意味な欲望に引きずられて……

「ずいぶんうなされているな。おかげで、考え方集中できない

カラリの声。といつことは、一段重ねの夢を見ているとおぼしい。眠りから覚めたつもりが、それもまた夢であったといつ。おれはつぶやいた。

「だいぶ前からだ。見る夢の九割は悪夢ときている。自分の悲鳴で目が覚めたり。何者かをぶん殴ろうとして、ベッドから落ちそうになつたり」

「ならば、わたしも貴様の夢に登場する資格があるな」「こんなふうにね」

「なるほど。よい夢を続けて見れるまで、枕を取り替えたらどうか」「本気で言つていいのか？　きみにしては、不合理な提案じゃないか」

ねつとりと、闇は囁き声を通じて皮膚に絡みつき、すべての毛穴から侵入して、神経を麻痺させる。気配の濃さに比べれば、意外に感じるほど匂いは薄い。けれども存在と分かつ難い匂いが、かすかに、だが確実に闇の底に居座っている。もしもガラスに香りがあれば、ちょうどこんなふうだろうか。

おれは痛いほど勃起していた。

「コストと結果が見合つていれば、試す価値はあると思うが。時に人は、夢に食い殺される場合がある」

仰向きに横たわったまま、全身麻酔にかけられたように体が動かない。ずきずきと脈動する男根ばかりが、闇の中で唯一血を通わせ、息づいているようだ。ほかのすべては気配だけの亡靈にすぎない。おれもカラリも、とつぐの昔に死んだ人間であり、ただの形骸なのかもしけない。

すぐ隣で、しなやかな肉体が寝返りをうつ、濃厚な気配を感じられた。気配が凝縮されて、肉体と化したようだつた。かちりという音が鳴り、瞼の裏側に、淡いオレンジ色の火影が映じた。何者かが、枕もとの読書灯をともしたらしい。気配はささやく。

「むかしの作家がうまいことを言つた。科学は人間の感覚機能を超えない、と。量子力学が取り沙汰される、百年も前にそう書いた。なんなら、科学を現実と置き換えてもいい。わたしが見ているものと、貴様が見ているものが同じだという、客観的な保障はどこにもない」

「我おもう、ゆえに何とか、か？」

「違うな。貴様の感覚器が認識することによつて、初めてわたしが存在する。存在したことになる。気障つたらしく言えば、きみおもう、ゆえに我あり、だ」

おれは誰と話しているのだろう。

「亡靈か？ 生靈か？ 夢か？ それとも実体か？ 少なくとも彼女が、そんな混乱を見透かして、皮肉つているのは明らかだらう。夢も現実も、所詮はおのれの感覚の中のできごとに過ぎない。が、しかし……何十年も閉ざされ、錆びついたシャッターをこじ開けるときの力をこめて、重い瞼を持ち上げた。

ぎりぎりと音がしなかつたのが不思議なくらい。瞼の隙間から入りこんできた光は、けれど思つたほど眩しくなかつた。近頃では燃料不足を理由に、夜中の送電が露骨に制限されている。読書灯はあるかなきかの電気を拾い、蠅燭よりもほの暗く、頼りない光を投げかけている。

「きみは考え方をするのに、いちいち他人のベッドを使わなければいけないのか」

カラリはうつぶせに寝ていた。少し乱れた髪。重ねた手の甲に顎

をのせ、至近距離から、皮肉まじりの視線をこちらへ向けていた。布団からはみ出した肩に、黒いブラジャーの紐が、しどけなく引っかかっていた。

むろんおれは驚いたが、体はなかば麻痺したまま。跳ね起きることはおろか、首を五度ばかり傾けるのがやつとの状態。眠っている間に、ある種の麻酔を打たれたのかもしけず、彼女ならそれくらいやりかねない。けれど、そうまでしておれの隣に寝ていなければならぬ理由が、眞田わからない。

となると、やはり夢なのだろうか。夢だと解釈するのが、最も自然ではあるまい。肉体と脳の覚醒が不均衡におどされたとき、生々しい夢を見るといつ。「科学的に」説明される、亡靈出現のプロセスと同じ理屈だ。

(きみおもづ、ゆえに我あり)

これほどリアルな夢があればの話だが……彼女は言つ。

「わたしが大富豪の娘だとか、麗子から吹き込まれているのだろう。彼女と子供らしい付き合いをしていた頃は、確かにそうとも言えたが。どうも麗子は、わたしという人間を買いかぶりすぎている」「少なくとも、得体の知れない男のベッドにみずから潜りこむ奇癖があるとは、夢にも思っていない

「そういうことだ」

小刻みに肩を揺らし、くつくつと彼女は笑う。圧倒的な虚脱感に浸されることで、かえつて皮肉を言う余裕すら生じていている自分に気づく。精神も肉体も、余計な力が入らなければ、ずいぶん消耗を免れるのかもしれない。それほど日頃のおれは力みまくつて、余計なことばかり考え、余計なことばかりしているのだろう。

なるようにならぬのに。

「わたしはとことんまで地に墮ちた女だ。もちろん原因は金以外にない。例のクーデターのどさくさの中で、父親は殺され、かれの遺産はすべてわたしに受け渡された。負の形でね」

「新東亜ホテルの利権は、きみの家が握っているんじゃなかつたの

か

「旧政権が機能してこそその利権だらう。たしかにあそここの権利問題は迷路のように複雑で、新政権も匙を投げかけている。接收しようにも接收しきれず、潰したくても潰しようがない。経済あっての中だからね。軍事力も権力も、経済という化け物の前では蛇に睨まれた何とかみみたいに身をすくめる。つかつに手を出せば、潰されるのはそっちだからね」

「資産家にとつては、有利な条件だらう」

「父親は資産家だったが、わたしはそうではなかつた。家畜のように金を殖やすトリックはあるか、計算機にさえ触れたことがない。わたしにとつて、金とは使うものでしかなかつた。まさに、赤子の手を何とやらひ。資産は凍結され、わたしは文字どおり丸裸にされた」

「文字どおり？」

彼女はまたおれに目を向け、凍りつくような笑みを浮かべた。

「わたしのような女にも興味を持つ物好きがいてね。厄介なことに、そいつが新政権の主要人物の一人だったという、よくある話さ。あとは言わなくともわかるだらう。わたしはそいつの要求を受け入れ、おめおめと生きながらえた。新政権の飼い犬に成り下がつた。麗子が夢見ているほど、高潔な女では決してない」

彼女は言葉を切ると、読書灯の方へ片腕を伸ばした。細い、けれど圧倒的な肉の存在。灯りを消すのかと思えば、おれの煙草の箱をまさぐり、よれた一本を抜き取った。

「不正規品か。まあ、大目にみよう

口にくわえてマッチを擦つた。煙を吐いて眉をひそめた。不味かつたのだろう。フィルターのない吸い口に残された口紅の跡が、いやに鮮明に見えた。彼女はその煙草を、隣でばかみたいに横たわっているおれの口へ、子供が悪戯でもするように、くわえさせた。心なしか、甘い味がした。

彼女は訊いた。

「アリー・シャとかいつたな。あの女とは、どこで知り合つた?」

「イースラック人の酒場に雇われて、客を占つていた。それ以外の素性は、まったくわからない」

「そのわりには、なかなかどうして、十年来の知友でも、ああまで息の合つた芸当はできまい。それとも、行きずりの女と瞬時に気脈を通じるのが、貴様の才能なのか」

「授かりたい才能だね。だが現状は、トラブルに巻き込まれているだけの話さ」

「サイレント映画の喜劇役者のように、か」

肩をすくめたつもりだが、実際に動いたかどうか心もとない。相変わらず手足は麻痺したように、ぴくりともしない。カヲリはおれの口から煙草を抜いて、灰皿に灰を落とし、次に自分でくわえた。なかば目を閉じて煙を吸い込み、吐いた。独り言のようにつぶやいた。

「あの女は、サイキックではなかつた」

「おれもそう思う。あのとんでもないパイロキネシスを有する双子と違つて」

「気の毒な双子さ」

「かれらは汚染地帯の施設から盗み出されて、あの麻薬……クラーケンを投与されたのだろう。それも親孝行横丁で暴れたコックと違ひ、明らかに政治的な意図において」

彼女は答えない。同じ布団にもぐりこみながら、次元を異にしているような感覚は消えない。ただ煙草の吸い口だけを通して、二つの肉体は触れ合っていた。

おれは語を継いだ。

「ピルトダウン人みなのおれの頭にも、おおよその見当はつくよ。あれはクラーケンの副作用というより、真の姿だ。服用した者には、死と引き換えに不死身の肉体と、恐るべき力が宿る。三流の恐怖映画に出てくる、ゾンビや吸血鬼みたいなものさ。もしそいつが統御できたら、不死身のモンスター軍団を手に入れたことになるものな」「だが結局クラーケンは不完全なまま、イズラウン人たちは開発を打ち切った。クラーケンを服用した者が、必ずリビングデッド化するとは限らない。確率的には百分の一程度だといわれている。また、たとえリビングデッド化したとしても、暴走あるのみで制御がまつたくきかなくなる。だから……」

言葉を切り、彼女が煙草を揉み消す間、おれの背筋を冷たい戦慄が走った。おのずと声が震えた。

「サイキックをリビングデッド化させ、砲台として用いたというのか。悪魔の所業だ。とても人間の考えることじゃない」

常人でも、一人で武装警察の分隊を壊滅させるほどの力を引き出せるのだ。サイキックをリビングデッド化させれば、それだけでどんなでもない殺戮兵器ができる。一本めの煙草に火をつけながら、カヲリはつぶやいた。

「悪魔より悪霊と呼ぶほうが適切かもしない」

「カラマーゾフとかいったな。旧首長連合系の過激派の名は。そいつらが気の毒な双子を使って拘置所を襲わせたのは、何のためだ。仲間の政治犯ごと焼き殺して何になる? それとも、双子の破壊力

が予想以上であつたため、計画が失敗したのか

「いや、見事に成功している」

問いただそうとしたおれの口は、煙草の吸い口でふさがれた。彼女は片手を頬にあて、まるで夜伽するようにこぢらを向いた。美しい鎖骨と、闇の中で息づいている乳房の谷間がのぞいた。

「襲撃の翌日、極秘裏に拘置されていた、旧政権の重要な人物の死体が確認された。内蔵まで焼け焦げていたが、遺伝子鑑定によつて本人であることが判明した。誰だと思う？」

煙草が抜かれた。理屈ではとても信じられない名前が、口をついて出た。

「龍門寺真一郎」

「そのとおり」

「ますます訳がわからない。カラマーゾフは龍門寺の息がかかつた過激派だと、きみ自身言わなかつたか。それとも龍門寺家の大ボスは、自殺でも望んでいたのか」

「まさか。あの男なら、オオサンショウウオのようにハツ裂きにされても、生き延びようとするだろう。考へ得る可能性はひとつしかない。早い話が邪魔だったのさ。龍門寺真一郎は、明らかに政治的な意図で、何者かによつて暗殺されたのだ。龍門寺家再興の名において」

放課後になつた。

全校集会が早く終わつたため、バイトへ行くにはまだ間がある。久しぶりに「千里眼」を訪ねてみてもよいだろうと、八幡一葉は考えた。

校舎は煉瓦づくりで時計塔があり、ツタの葉が絡みついていた。ツタといつても、紅葉して冬には枯れてしまう、従来のツタとは別種で、常に青々と葉を茂らせ、寒くとも旺盛な成長を続けた。今では学校の悩みの種で、根もとを切断されても枯れず、煉瓦の隙間に食い入つて、いざれば校舎をばらばらにするのではないかと危ぶまれた。

屋上には天体望遠鏡のドームがあつた。ここもツタに蹂躪され、とつゝの昔に開閉できなくなつたまま、うち捨てられていた。「千里眼」はドームの中に住みついていた。

「やあ、そろそろ来る頃じゃないかと思つていたよ」

スプリングの飛び出た黒い回転椅子に身をしづめ、足を組んだ姿勢で、かれは左手を上げた。女のように細い手首に、ばかでかい腕時計を三つも巻きつけていた。

千里眼が何歳くらいなのか、一葉にはわからない。同じ年くらいにも見えるし、中年を過ぎていると言つてても信じたろう。なにしろゴーグル状の眼鏡と、巨大なヘッドホンで顔の半分が隠れているため、年齢はおろか、人間かどうかさえ定かでない。趣味のよくないチャペックではないかと、たまに思うくらいである。

ヘッドホンからはみ出した蓬髪。サスペンダーで吊つた、ぶかぶかの黒いコーデュロイのズボン。冬でも上着を着ず、白いシャツの袖を無造作に腕まくりしている。ヒゲはなく、卵のようにつるりと

した顎。大きな頭に比べて、小石を投げればポキリと折れてしまいそうな、異様に華奢な体形は、デフォルメされたマリオネットをもわせた。

「お茶は出ないのかしら」

「ためしに押して」とらんよ」

かれは指さした。所狭しと並べられたガラクタの中に、自動販売機が埋もれていた。見本には、とっくに製造中止になつた銘柄が並んでいた。一葉は眉をひそめ、ボタンを押した。「コトン」と音がして、割れたカバーの間から缶が勢いよく飛び出した。持ち前の運動神経を発揮して、彼女はあやうく受け止めた。

「あつ、つー」

お手玉させたあげく、プルタブを引いた。レモンティーの甘い匂いがした。味もまあまあだ。

ドームがいつ閉鎖されたのかわからないが、ガラクタ置き場と化して久しいらしく、テレビジョンからチャペックまで、彼女の兄たちが見たら涎を垂らしそうな、年代ものの機械が積み上げられていた。見上げればドームの天井を覆うほど、様々なアンテナが吊るされていた。

機械どうしはコードでつなげられ、最終的には一本のコードに集約されていた。一方はアンテナに。もう一方はかれのヘッドホンに接続されているのだつた。ヘッドホンはゴーグル状の眼鏡と一体化されているらしく、要するに、無数のアンテナが拾つてくる電波が、かれの視聴覚に絶えず流れ込んでくる仕組みだ。

これでよく他人と会話できるものだと、一葉は感心する。

千里眼がドームに住みついたのは、政権交代直後だ。それまでは、こんな所を訪れるのは彼女くらいしかいなかつた。初対面していくなり、かれは彼女の名前を言い当てた。のみならず、家族構成や略歴からスリーサイズまで、ほぼ言い当てた。バストを一センチだけ多く言わされたことが彼女の気に入つた。

もし少なかつたら、この変態野郎と叫びながら、迷わずカカト落

しをお見舞いしていただろう。今にして思えば、そこまで見透かされていたわけである。

（そいつはたぶん「千里眼」だろう。情報屋としての腕前は、スキヤナー以上と言われているが、なにしろめったに仕事をしないやつでね）

特徴を話すと、兄たちはそう口を揃えた。かれらによれば、べつに女の子が目当てで女子高に住みついたわけではないらしい。新政権の追求を逃れて来たのだ。なるほどこの中なら超小型偵察機「ソフトボール」も入り込めない。隣の男子校では、トイレの中でも頻繁に見かけるらしいが。おちおち煙草も吸えないぜと、イシカワはぼやいていたつけ。

かれがどうやって生活しているのか、ひとつ謎である。ごく少數の顧客がいるのではないかと、兄たちは推測している。たしかに、食うにこまつているように見えないが、ドームの中で寄らしい人物と出くわしたことはない。いつもかれは黒い回転椅子の中にうずくまり、独り、得体の知れない電波を視聴していた。

「ときにきみは恋をしているね？」

「相手はどんな人かしら」

「ぱつとしない男さ。だがきみは、その男の目つきに惹かれている。どこを見ているのかわからない、ふらふらと不安定な目つきだ。麻薬中毒者にありがちだが、そいつはキメているわけじゃない。なぜだかきみは、悲しそうな目だと考えてしまう。そう考えるたびに、きみの胸の奥が不可解なうずきかたをする。ちなみに一センチ増えたね」

「余計なお世話」

彼女は頬をふくらませ、手ごろなガラクタに腰かけた。金庫か小型冷蔵庫のような箱型の廃品は、ひんやりとするお尻の下で、ぶーんと微弱な震動を伝えた。

「Uのあいだの、通学路にお化けが出るとこつ悩みは、解決したのかい」

卵型の顎をつるりと撫でて、千里眼はたずねた。声や身振りに呼応して、スクラップたちの計器類が明滅する。電気的なビブラー<sup>ト</sup>がかかつた声といい、まるでかれ自身が、廃棄されたジャンク品のひとつであるかのようだ。自慢の脚を颯爽と組んで、二葉は答えた。

「ええ、おかげさまで。本当に報酬はいらなかつたの？」

「仕事をした覚えはないし、これからも基本的に仕事はしない。もしボクのタワゴトがきみの利益につながつたとしても、とくに意見をもたない」

「わたしに話しかけられるのは、迷惑？」

「むしろ楽しんでもいいと言つておひづ。きみはとても、ユニークだから」

「乙女に対する褒め言葉じやないわね」

「参考にしておく。時に、また乙女の悩み事かい？」

彼女は脚を組みかえた。箱が震動しているせいで、どうしてもお尻がむずむずする。移動しようかと辺りを見回したが、ほかに無難なガラクタはなさそうだ。

「バイト先でいろいろあつて」

「悩んでいるわけだ。青春だねえ」

かれの笑い声はとても人間のものとは思えない。エレキヴィオラを幼児が搔き鳴らしているような音が響き、ぴりぴりと、箱が刺激を伝えた。彼女は少し頬を染め、落ち着かない様子で、また脚を組みかえた。

「竜門寺チルドレンについて知りたいんだけど」

「きみはアルバイト先で、壮大な悩みを抱えてるんだねえ」

「わざと茶化してるでしょ。わたしのバイト先は新東亜ホテルな

んだから。かつてあの場所を牛耳っていた竜門寺家に興味をもつのは、自然な成り行きじゃないかしら」

「自然、ねえ」

笑みを浮かべ、千里眼は無言劇の役者のように、指を蠢かせた。奇怪なゴーグルがなければ、それは爽やかな笑みと呼べたかもしれない。また顔の表情が読みにくいぶん、かれの指は能弁に動くのだ。「言つておくけど、ボクが知り得ている情報は、すでに新聞に書かれたことばかりだよ。あらためて、きみに話すまでもない」

「構わないわ。ちょっと頭を整理したいの」

「どうだか。情報とは迷路だからねえ。深入りすればするほど、帰り道がわからなくなる。が、まあお望みとあらば、つまらない話を一席ぶちましようか。一年ばかり前、竜門寺家でちょっとしたお騒動が持ち上がったことは知っているね」

「後継者争いね」

「さよう。竜門寺真一郎はまだ六二歳。氣力活力ともに少しも衰えていないどころか、鼻息はますます荒く。大日本連邦の支配者となるべく、あのてこのての権謀術策。並み居る首長を次々と蹴落としては、着実に地歩を固めていった。あと二千年くらいは後継者なんか必要なさそうな勢いさ」

大日本連邦とは、なんと滑稽な名称であるかと二葉は思う。たしかに第二次百年戦争初期までは、他国的政治的混乱につけ入って、アジアに侵出。複雑怪奇な経済操作で縛りつけ、広大な領土の実質的な支配権を得ていた。それが今では北海道さえ「北政権」に奪われたうえ、國土の七十パーセントが汚染地帯と化しているのだから。千里眼は続けた。

「ゆえに、いきなり後継者問題が浮上した時には、誰もかれもが驚いた。いつたいかかる心境の変化か。宗教にでも入れ込んで謙虚になつたのか、などと様々に取り沙汰されたが、なあに真相は单纯明快。竜門寺真一郎の体は不治の病に蝕まれていたのさ。きみもかれの姿をテレビジョンか写真で見ただろう」

「鼻が高くて、目がきょりと鋭くて、白髪をなびかせて。あとは  
げつそりと肉がそぎ落とされて、ミイラか骸骨が服を着ているよう  
だった」

「ずっとあんな風貌だったからね。病気になつたかどうか、外見か  
らはなかなかわからない。ともあれ、後継者はもちろんのこと、か  
れの三人の息子たちの中から選ばれる。いわゆる、龍門寺チルドレ  
ンだね」

「そこのところがよくわからぬのよね」

「ところで？」

「どうして世襲でなければいけないのかってこと。聞くところによ  
ると、龍門寺真一郎は、ずっと息子たちを遠ざけてきたそうじゃな  
い。愛するところが、むしろ疎ましがつていた」

そう言つて彼女はまたレモンティーを飲んだ。少しづるくなつて甘みが増し、なにやら淫靡な味がした。千里眼のゴーグルの表面に、シグナルめいた光が明滅した。口の端を歪める笑みを浮べたまま、パントマイムのように指を動かしつつ、かれは言う。

「後継者争いというものは古今東西、本人どうしの闘争というより、かれらを裏で持ち上げる者たちによる、勢力争いにほかならないのです。Aの勢力が長男を持ち上げれば、Bの勢力は次男を担ぎ出す。世襲という伝統的なルールにのつとつてね。では、長男のプロフィールからはじめようか」

「竜門寺慎一郎ね」

「さよう。三兄弟のうち、かれだけ母親が異なる。真一郎の最初の奥さんの子供だ。後に真一郎は好色漢として名を馳せるが、若い頃はそうでもない。かれと彼女は苦楽をともにした仲で、当初は模範的なカップルといえた。死滅した言葉を使えば、彼女はヤマトナデシコさ。生き馬の目を抜く政界に乗り出した真一郎を、陰でしつかり支えていた」

「ところが、産まれてきた慎一郎は性格破綻者だった」

「よく調べてるじゃないか。舞踏狂と引っかけて、舞踏卿の異名をもつ。踊りながら産まれてきたとか、這い這いしながらブレークダンスを踊ったとか、立ち上がった瞬間ステップを踏み始めたとか。そんな与太話がまことしやかに語られるほどのダンスキチガイ。いつも本職のダンサーにでもなれば、本人も周りも幸福だったのだろうが」

「野心家で金遣いが荒くて好色漢という、真一郎の負の側面をすべて受け継いでしまった」

「そういうことさ。ことあるごとにダンスパーティーを開いては、カネを湯水のように撒き散らす。娼婦だろうがやんごとなき奥方だ

ろうが、誰かれかまわづベッドに誘つ。生きていれば現在二十六歳。軍服のよく似合つ、なかなかの男前だものね。要人の奥方を寝取つては大問題を引き起こし、何度も父親を窮地におちいらせている。さて、次男はなんといつたかな」

「龍門寺武留」

「ボクに言わせれば、兄の舞踏卿と比べて面白みの少ない青年さ。絵に描いたような四角四面の学者肌。そのくせ政治的野心はしつかり持ち合わせている」

「かれの母親について知りたいわ」

「そうだった。真一郎の後妻となる、彼女は当時、中部地方全域を牛耳っていた有力者の娘だよ。言うまでもなく、政略結婚だ。これを期に、無名の青二才に過ぎなかつた真一郎は、めきめきと頭角をあらわしていく」

「先妻はどうなつたのかしら」

「大昔の小説に『ひかけの女』というのがあるが、悲劇だよね。ヤマトナデシコらしく、あつさりと身を引いた。舞踏卿がまだ一歳の頃の話さ。けれども理念どうりにはいかないのが、人間の心つてやつだらう。離婚した半年後には亡くなつている。病死とされているが、自殺その他の説もある」

「もし彼女が生きて慎一郎を育てていたら、あそこまで性格が歪まなかつたかもしれないわね」

「たしかに。舞踏卿は彼女の死後、あつちじつちたらい回しにされている。それも決して良家とは限らなかつたようだよ。支持するつもりはないが、踊り狂いたくもなるだらうわ。さて、後妻について話を戻せば、明らかに悪妻の部類に入った。手袋みたいに先妻をくるりと裏返したような女だつた」

「お嬢さま育ちで、高慢で、意地悪で、しかもめっぽう美人という。まるでわたしみたいな」

「最後の一言は記憶から削除しておくよ。実際、彼女が先妻を毒殺したという噂もあるほど、呂后や西太后みたいなスゴイ女さ。まあ、

政治的野心はなかつたようだがね。そのかわり、ツアラトウストラ教の熱心な信者で、ほとんど狂信者と呼べるレベル。どんどん深みにはまって、五年後にはとうとう出家した。文字どおりの、出家だねえ」

「籍は？」

「残したままさ。逆にこれが真一郎にとつて好都合となつた。猛烈な悪妻が、頼みもしないのに向こうから出て行つてくれたわけだからねえ。彼女の実家もかれに負い目を感じこそすれ、非難はできない。幼い二人の息子をとつととよそへ預けて、あとはやりたい放題さ。ちなみに人類刷新会議によるクーデター後、彼女の行方は杳として知れない」

「何か知つていそうな雰囲気だけど、まあいいわ。竜門寺武留のプロフィールを聞かせて」

「武留と書いてタケルと読む。が、名前に相違して典型的な文人だ。弟とは別々の家庭に預けられた。裕福な学者の家だったらしく、ま、三兄弟の中では、最も恵まれた少年期を過ごしたと言えるだろう。弱冠十八歳で第三大学を卒業。大学院に在籍し、物理学から文化人類学までオールマイティーにこなす。若き有望な学者として、マスクミニの寵児となる」

マスクミニを通じて、かれの顔なら一葉もよく知つていた。眼鏡をかけた、いかにも生真面目そうな面立ち。美男には相違ないが、父親ゆずりの陰鬱なかけりが、拭いようもなく貼りついていた。生きていれば、二十一歳になつているだろう。千里眼は続けた。

「頭のよさもあることながら、品行方正。物静かで落ち着き払つていて、年齢からは考えられない老成ぶりだよ。貞女の鏡のような先妻から舞踏卿が生まれ、絵に描いた悪妻の胎からこんな男が出てくるんだから、わからないものだね。さて、竜門寺チルドレン最後の一人は？」

竜門寺亞理栖。

「亞理栖と書いてアリスと読む。夢見る少女みたいな名前だが、歴とした男である、といわれている」

「歯切れのよくない言い回しね」

「きみは三男の顔写真を見たことがあるかい」

「一葉は首をふつた。」

「そうだろう。亞理栖が育てられたのは、お世辞にも金持ちは言えないが、敬虔な慈善家の家庭だった。またかれ自身、天使のよくな性格だという評判だよ」

「天使、ねえ」

「顔を引きつらせているね。亞理栖は少年時代、友人を助けようとして、氷の張った貯水槽に飛び込んだとか、小遣いをもらつても全部寄付してしまうとか。そのての逸話には事欠かない」

「気に入らないわ。ならばどうして、マスクミに顔写真のひとつも撮らせてあげないのよ」

「龍門寺の血族であるという理由で、特別扱いされたくないから。名もなき一人の人間として生きたいから。といったことを、きらきら光る目で訴えられると、さしもの鉄面皮のマスクミも、恥じ入つてフラッショを焚けなかつたのだと。もし宗教家だったら、確實にカリスマ教祖になれる器だねえ。実際に線の細い美青年らしいよ。生きていれば現在、十九歳」

「大学生？」

「いや、働いていたらしい。それも龍門寺の傘下とはまったく関係ない、小さな工場で。身分を隠してね」

「気に入らないわね。あまりにもできすぎているところが、かえつて胡散くさい」

「乙女の嗅覚つてやつかい？」

「なんかこう、腑に落ちないのよね。徹底的にマスクミへの露出を

避けたことも、来たるべきクーデターを予見した行動に思えてしま

う

「それこそまさに『千里眼』だ。宗教家というより、魔術師の部類に入ってしまうねえ」

かれが笑うとドームじゅうのガラクタが震えた。お尻の下で、箱が、ぴりぴりと電気を帯びた。ストッキングまで帶電するようで、なかば飛び上がりつつ、彼女はまた脚を組みかえた。

「で、後継者争いでは、誰がリードしていたの？」

「まず舞踏卿だが、これは論外だ。たしかに長男ではあるし、真一郎と苦楽をともにした最初の妻の息子という点では、おおいに評価できるのだが。なにしろ、本人の性格に問題があり過ぎる。かれ自身、父親を激しく憎んでいたようだね。ある四流雑誌に寄せたコラムには、殺すという言葉が十三回使われていたというよ」

「苦楽をともにした母親を虐待し、忘れ形見の面倒を見るビンචが、裸同然で放り出したから?」

「そうなるね。我こそは竜門寺家の正統な後継者であり、親父は悪辣なやりかたで、おのれの受け取つてしかるべき財産を剥奪したのだ、と息巻いた。あまりガラのよくない連中をバックに従え、見かけ上は、最も積極的にレースに乗り出した」

「あわよくば利権にありつきたい、不法ギルド系の親分連中が味方についたのね。でも、一族の幹部や、傘下の首長たちからは総スカンを食らつたのでしよう」

「舞踏卿が跡を継いだら、竜門寺家は一晩で破産する。誰もがそう考えていたし、ボクも同意せざるを得ない。ところで、次男の竜門寺武留センセイなんだが」

「どう見ても、かれを選ぶのがベストよね。慎一郎が竜門寺の財産を一晩で飲んでしまうなら、三男、亞理栖は一晩で寄付してしまいそうな勢いなんでしょう。武留はすでに、政治や経済の論文で名を知られていたのだし、なにかとソツがない。最も安全なカードだわ」

「事実、真一郎も最もかれを羨妬していた。ほかの二人と異なり、

武留は学費と称して豊富な費用を『えらっていたし、真一郎自身、たびたびかれと面談している』

「ほかの一人とは全く会っていないの？　といつか、そもそも三兄弟の間に付き合いはなかったの？」

「舞踏卿は金をせびるために、あの手この手でつづいてくる。茶話をする雰囲気ではないにせよ、いやでも顔を合わせただろうね。逆に亞理栖は、みずから父親との面会を避けていた。ゆくゆくは、竜門寺との関係を完全に絶つつもりだったのだろう。けれどもかれは同腹の兄、武留とは定期的に会っているね。特別仲良しではないにせよ」

「それで、尋ねるまでもない」とだけ。竜門寺真一郎が選んだ後継者とは？』

「亞理栖だよ」

三度目をしばたかせ、残りのレモンティーを飲みほしてから、

一葉は口を開いた。

「なんで？」

「ボクに訊かれてもこまる。幹部の中には真一郎の精神鑑定を提案した者もいたくらいだが。肉体は病んでも、かれの頭脳は少しも衰えていなかつた」

「かれほどの男が、ただ天使のような性格に惚れこんで、後継者に指名したりしないということじと。時に、竜門寺真一郎は今、どこにいるのかしら」

「死んだよ」

千里眼は口の端を吊り上げた。

七年ぶりに見る「幽霊船」の外観は、驚くほど変わっていなかつた。

「さて。鬼が出るか、蛇が出るか」

我ながら古くさい言い回しだ。鬼や大蛇なんて、IBや多脚ワームに比べれば、ペットみたいなもの。けれども、この世で最も恐ろしいものは何かと聞えば、それらを生み出した人間であると、誰もが口を揃えるだらう。そして今回の相手は麻薬密売組織……まさに、人間なのだつた。

鏑の臭いのする風が吹いていた。乱れる髪を気にしながら、茨城麗子が言つ。

「お渡しした見取り図の精度は、七十パーセント程度です。けれどこいついた場所は、案外変化に乏しいので、七年前に潜入された時の感覚が通用するかと存じますわ」

郊外もここまで来ると、空気がとても汚れている。さすがに彼女も防酸コートを着ているので、ステキなおっぱいを揉むことができない。もしもあの時寝ていたら、という浅ましい未練が、むくむくと頭をもたげそうになる。

「カンのほうが当てになるといつわけだ。せいぜい、鼻をひくつかせることにするよ」

「お話ししましたとおり、こ5番の入り口で情報屋が待っています。コードネームは、『アルチユール・ランボー』。合言葉を兼ねていますので、くれぐれもお忘れなく」

「覚えた覚えた。アル中の乱暴者とは、おれみたいなやつだ」

麗子は、くすりと肩をくめた。ずっと顔を引きつらせていた、本日初めて見せる笑顔だった。それを恥じるかのように、深々と頭

を下げた。

「本当に申し訳ございません。わたしの不注意で、危険に巻き込んでしまって」

「なに、とっくに巻き込まれていたさ。あの子を引き取った時点でね。きみのせいじゃない」

煙草を口の端にくわえ、火をつけずに彼女と向き合つた。書類入れを胸に抱いたまま、茨城麗子はまっすぐに ore を見上げた。その目は、心なしか潤んでいるように見えたが、酸をおびた空氣のせいだろうと解釈した。

「い」武運を」

片手を上げて応え、車に乗り込んだ。ポンコツのエンジンを始動させ、我慢していた煙草に火をつけた。フロントガラスの中には、一枚の絵のように、不気味な「幽霊船」の全景が嵌めこまれていた。煙を吐きながら、おれはつぶやいた。

「やれやれ」

どこの新聞記者が「幽霊船」を評して、ガウディ「ふうだと書いていた。ガウディが何かは知らないが、もし建築家だとしたら、よほど変人に違ひあるまい。用途不明な細長い塔が、高々と何本も突き出し、無数の風車が取り付けられていた。下部は建て増しに建て増しが繰り返されたコンクリートの丘で、大小無数の窓が、ごちやごちやと覗いていた。

都市地区と汚染地帯を隔てるフェンスが、ぎりぎりまでせまっているが、塔の高さは超えていない。パラシユートを背負つてひょいと飛べば、すぐに汚染地帯に降りられるだろう。もつとも、IBでものうづく領域を、好きこのんで散歩したがる者がいればの話だが。

辺りは何十年も舗装されていないので、砂塵がひどい。発車させると、バックミラーの中の麗子の姿は、夢のように搖き消された。「幽霊船」の周囲は茶色い荒地で、ぽつぽつと建つていてる家も、七年前と変わらず廃屋ばかり。道なき道を突つ切つて、おおよそ見当

をつけておいた場所に乗りつけるの」、「一分とはかからなかつた。車を降りて、ずだ袋を肩にさげた。真下から見上げると、もはや「船」の面影はなく、ただのスクラップの塊である。塀やバリケードの類いがないのも昔のまま。コンクリートの壁面に無造作に開けられた穴が入り口となる。出口があるかどうかは別として……」C5番はすぐに見つかった。

「アルチュール・ランボー」

「お待ちしておりました」

まだ暗がりに目が慣れないうちに、声が返ってきた。アル中かどうかは知る由もないが、美少年ではなさそうだ。

狭くてカビくさい、コンクリートの通路。奥から洩れるかすかな灯りを背に、ランボー氏は、ひょいと身をかがめてお辞儀をした。よれよれのスーツを着た瘦身の中年男。やはりよれよれの中折れ帽をかぶり、顎ヒゲをたくわえたといひは、情報屋を漫画に描いて切り抜いたようである。

茨城麗子によれば、ランボー氏のよつに、ガイド役を買って出る情報屋が、「幽霊船」の中にはけつこう住んでいるらしい。かつて単身、飛び込んだ時には存在すら知らなかつたが。麗子が選んだからには、間違いなくかれは有能なのだろう。が、しかし、

「余計なお世話だとは思うが、その……だいじょうぶなのかい」

おれの思惑を瞬時に察したらしく、ランボー氏はちょっと帽子を持ち上げた。睡から覗いた片目が、針のように鋭い光をおびた。

「立ち話もなんですから、昼飯でも食いませんか。まだお済みでなければ」

「悪くないね。ちょうど腹が減ってきたところだ」

ランボー氏は口笛をひとつ鳴らし、両手を帽子の後ろに組んで、背中を向けた。おれがガンスリンクガーであることは、麗子から聞いている筈だから、撃ちたければどうぞという意味であろう。数秒後、かれはバッハの無伴奏パルティータらしい曲を吹きながら、先に立つて歩き始めた。

通路はうねうねと曲がりつつ、時々、何方向かへ分岐している。まるでコンクリートの迷宮だ。じつとりと湿った壁には、何度もポスターを剥がしたり貼つたりした跡がある。その上からスプレーで落書きされている。ちょっとしたモダンアートふうの壁画に見えなくもない。

ここで生まれ、ここで死んでゆく者たちがいるのだ。かれら、迷路荘の住人たちは、目をつぶつて歩いても迷わず目的地へ辿り着けるという。けれど、半年ばかり住んだ程度のおれは一パーセント把握しているかどうかさえ、心もとない。

少しも迷う様子がないランボー氏もまた、筋金入りの迷宮入なのだろうか。俗に、事件が未解決に終わることを迷宮入りと言うが、実際にここへ雲隠れする犯罪者は数多いと聞く。迷宮が迷宮を呼び、闇が闇を呑む。その最深部には、恐るべきノタウロスが息づく……

口笛が不意にとぎれた。

それで堰が切れたように、雜踏の音が入りこんできた。横丁のまた横丁くらいの通路に、ぽつぽつと灯りがともり、人がひしめきあつていた。まだ正午近くだという事実を忘れてしまいそうな、夜の裏町をおもわせる光景。肉が焼かれ、酒が酌み交わされ、断続的な笑い声が沸き起こる。

おれはまだ平衡感覚を失つたまま、ぱんやりと立ち廻っていた。夢の巷に立つてゐるような気がした。目に映る光景は、いちじるしく現実味を欠いて、幻燈か何かに映し出されてゐるよつて思えた。

軽く肩を押された。

ランボー氏はまたちょっと帽子を持ち上げ、針の眼差しを向けた。おれは小さくうなずき、かれの背に続いて古中華ふつの居酒屋らしい、店のひとつに入った。そういうえば、ランボー氏の話し方には僅かに訛りがあつたので、かれもまた中国系なのかもしない。

これも旧政権の頃、とある事件が起きて、都市地区ごとに栄えていたチャイナタウンが、一瞬にして消滅した。けばけばしくも色あせた内装や、円卓が人であふれている眺めは、ゆえにどこか懐かしさをともなつた。

緋色のチャイナドレスを着た娘が出迎え、人込みを縫つて、おれたちを奥へ案内した。入り口の狭苦しいわりに、店の中は案外広いのだ。客たちのざわめきを差し引いても、ひどい音色の音楽が途切れがちに聞こえてくる。お約束のオペラ、『トゥーランドット』であるらしい。

小さめの円卓に、差し向かいで腰かけた。予約でも入れていたのか、中央にはすでに料理が盛られていた。緋色の娘が紹興酒を注いだ。おれはグラスを鼻に近づけた。

「本物かい？」

ランボー氏は軽く口の端を吊り上げた。もし本物だとしたら、こゝへ運ばれて来るまでに、少なくとも数人ぶんの血が流されているだろう。そう考へると、あまりよい気分ではないが、好意は好意として受け取つておくに限りる。乾杯代わりに、お互いグラスをかかげて、口にふくんだ。なるほどこの酒の味は、どこか血をおもわせる。かれは切り出す。

「先程の件ですが」

「ああ。失礼だとは思つたが、おれは単純な男でね。腹の探りあいは苦手なんだ」

「つまり、わたしが例の組織の下請けを兼ねているのではないが、と?」

思わず周囲をうかがつた。談笑が飽和して、中には誰を殺すの殺さないのと声高に「密談」している者もいる。じつは、声をひそめないほうが自然なかもしれない。

「それもあるし、まあいろいろだよ。刷新の密偵が、例の組織とやらに十九人も殺されたって話は、麗子……会社の秘書から聞いているだろう。あるいは、その前から知っていた可能性のほうが高そうだが」

「買いかぶつて頂き、光榮の至りですよ。いえ、誤魔化すつもりはありません。こう見えてもわたしは生糸の『幽霊船』育ちですからね。正直申し上げて、連中には義憤、みたいなものを感じております。ですから、このたびお声がかかつたのは、渡りに舟だつたのですよ。信じて頂けるかどうかは、保留にされて構いませんが」

「信じなければ話が先に進まない。とりあえず、『幽霊船』の現状が知りたい。おれが潜り込んだ頃と、どう変わったのか

かれはうなずき、目で促して料理を勧めた。じつはあまり食欲がなかつたが、適当に皿に取り分けて、箸をつけた。どろりとしたその料理が何かはわからないが、久しづびりの古中華は、懐かしく舌を刺激した。今度、アマリリスに作つてもらおうと、ぼんやりと考えるうちに、ランボー氏が口を開いた。

「あなたが滞在なさつたのは、七年前でしたか。それから二年後の五年前に、左翼にあたる東側で汚染が始まつて、今では端から三十パーセントが閉鎖されています」

「ワーム？ それとも……」

「いえいえ、IBではありませんよ。少なくとも第一種未満だと発表されております。すでにお察しのとおり、この閉鎖領域にイーズラックが住み着いたのです」

リスのような素早さで行き交う、緋色の娘たち。あれでよく盆を落とさないものだと感心する。体の線を這うドレスの中で、臀部の肉が左右に揺れる。

「真相は、じつにシンプルなものだな。」この住人とイーズラック人が、折り合えるわけがないと思っていたが

思い出したように煙草に火をつけて、溜め息まじりに煙を吐いた。一向に料理に手をつけぬまま、ランボー氏は顎ヒゲを指でしげりた。かれの容貌は、どちらかとこうと見る者に不快感を与えるが、愛嬌のある仕ぐさに救われている。

「やつらは、ウイルスもちのワームなみにタチがよくありません。神出鬼没でとらえどころがない。影のよつて『幽霊船』の中をつうつきまわり、隙あらば何でも掠め盗もうと、あの色素の薄い田を、猫のように光らせている。中でも最も厄まわしい点は、やつらが感染力を持つことですね」

皮肉っぽく笑うと、かれの顔は皺だらけになる。あたかも本来の顔の上に、他人の顔の皮膚を貼りつけているよつて。

「ちょっと待ってくれ。イーズラック人は、密売はやらかすが、基本的に盗みはしない」

「おつと、これはわたしの言い方がよくなかつた。やつらが掠め盗るのは、なんというか、もっと抽象的なものなんですよ」

「抽象的な?」

「魂だか精気だか、何というのか知りませんが、そついた田には見えないが、自身が自身するために必要な何かを、ごつそりと抜き取つてしまふんです。抜き取られた者は、しだいに瞳の色素が薄くなつた拳句、やつらの仲間にされるんです。閉鎖ブロックの壁の向こうに、吸収されちまつんですよ」

おれはさつきよりも盛大に、溜め息をついた。

「あんた詩人だね」

「お褒めにあずかり光栄です。じつは若氣の至りで、一冊だけ詩集なんぞを出した過去があります。本家本元のランボー殿下には、及びもつきませんがね」

本当に詩を書いていたとは。どんなものを書いていたのか。どこでどう間違ったのか。おおいに興味はあつたけれど、あえて無視した。

「まるで古めかしい怪奇映画だよ。親孝行横丁の映画館でこつそり上映されているような。それにどうも、おれが思い描いているイーグラック人のイメージとは、だいぶかけ離れている」

「ええ。わたしもたまには穴倉の外へ這い出しますからね。ここのはイーグラックどもが、極めて『特殊』であることは、承知しております」

「住民との仲は？」

「言つまでもなく、最悪に土星の輪をかけた状態ですよ。血なまぐさい争いが絶えません。ショバの問題もさることながら、プライドを傷つけられるんでしょうなあ」

詩の次は三文小説的な心理描写か。そう考えながら、おれは煙を吐き、耳を傾けた。

「こここの連中は、まあわたしも含めてなんですが、社会からはみ出した人間としての自覚と誇りを持つておりまして。文字どおり、『壁』の外にはみ出して住まう代わりに、税金を拒否し、治外法権を維持することで、やくたいもない政権抗争に明け暮れる権力の亡者どもを嘲笑つておつたわけです。ところが、イーグラックどもの侵入によつて……」

「お株を奪われた」

「そうなりますかな。我々やくざ者の集まりが、それなりに秩序を保つて暮らしてまいりましたのは、権力に近づかないという、暗黙のルールがあつてこそです。都市地区をのし歩く不法ギルドの連中とは、そこが根本的に異なるわけですよ。首長だらうが刷新だらう

が権力は権力。我々の敵であることに変わりはないのです

「つまり、共通の敵をもつことで、一つになつていた」

「あまり褒められた感情じゃありませんがね。ところが、ここのが特殊な』イーズラックどもは、それこそ権力の亡者の手先となつて働いているらしい。お株を奪うだけならまだしも、我々のアイデンティティーに泥を塗る恰好ですよ。『幽霊船』の存在を根底からおびやかす、腐食性ワームよりも恐ろしい病根となつてているわけです」節だらけの指を組み、かれは関節を鳴らした。始終、感情をおし殺して話すこの男の、心に秘めた唸り声を聞く思いがした。おれは煙草を揉み消した。

「時に、カノウさんという一家を知らないか。七年前に世話になつたんだ。主人の名前は忘れちまつたが、当時は電気工事店をやっていて、マキという娘が一人いた」

ランボー氏は初めて紹興酒のグラスを持ち上げ、ちょっと口をつけて顔をしかめた。アル中どころか、酒はいけない口らしい。いずれにせよ、かれがこれからあまり言いたくない事實を告げるであろうことは、予想できた。

「夫婦はすでに亡くなつておりますよ。三年前でしたか」

「二人ともかい？ まだまだバリバリ働く年齢の筈だが」

「ここが汚染地帯に食い込んでいることをお忘れなく。少なく見積もつても、平均寿命は都市地区より十歳は下回ります。とはいえるが、夫婦の死に限つて言えば、謎に包まれておりましてね。娘が帰宅してみると、家の中はめちゃくちゃで、おまけに血の海だつたそうです。死体は二つとも、ついに出ませんでしたね」

店を出て、アルチュール・ランボー氏とは一旦、別れた。カノウさんたちが住んでいた所を、訪ねてみるつもりだった。

かれらは「幽霊船」の南方、下部に住んでいた。都市地区から見れば裏側にあたり、要するに、「壁」の出っ張りに沿って、汚染地帯に食い入っている部分だ。しかも今ではワームだか、特殊なイーグラック人だかに占拠されている、左翼の閉鎖ブロックとほぼ隣接していた。

居住区としては、最悪に土星の輪をかけてひどい環境である。

当時から、この辺りは「幽霊船」の中のスラム街として知られていたが、カノウさんたちに関して言えば、決して貧しくはなかつた。かといって、お高くとまっていたわけではなく、停電が日常茶飯事に起ることの辺りの住民に、何かと重宝がられていた。カノウ氏は貧民からは金を受け取らず、気安く修理を頼まれていた。

そこにカノウ氏の思惑があつたことは、言つまでもない。現代社会における技師とは、なかなかヤバい職業なのである。大昔の日本人は、希少な水を自分の田に引くために、血刀を振り回して争つたというが、現代では電力の供給に関する諍いが絶えない。血を見ることもしばしばであり、技師が巻き添えを食う可能性もあり過ぎるほどある。

カノウ氏は貧民たちを味方につけることで、おのれの身を守つていたのだろう。

では「幽霊船」における高級住宅街はどこかというと、やはり最上部ということになる。ただし、「シャングリ・ラ」と呼ばれるこの部分は、ずっと無人のままだった。

「幽霊船」の本体は、シアラトウストラ教徒が作る誕生ケーキに似

た、上へ行くほど細い円筒形である。長大な蠟燭のよつな、七本の塔を突き立てたところなんかも、例のケーキとそっくりだ。シャングリ・ラは塔と内壁に囲まれて、外側からはほとんど見えない。

「幽霊船」の他の部分が、コンクリートで固められているのに對し、シャングリ・ラには、煉瓦塀と樹木に囲まれた瀟洒な邸宅が、静かに並んでいるという。外側の人間は、よほどの事情通でない限り、シャングリ・ラの存在を知らない。現に、麗子がくれた地図においても、最上部は空白になっている。

（なぜシャングリ・ラは無人なのか？）

それはここが「幽霊船」の安全弁になつてゐるためだろう。

珍しいことに、この無法者たちの巨大な共同住宅であり、街でもある「幽霊船」には、ボスがない。役員会らしきものさえ存在しない。それほどまでに、権力を厭つてゐるのだ。そうして、ボスや議会を抜きにして、秩序を維持するために考え出されたのが、ほかでもない、シャングリ・ラだった。

美しいシャングリ・ラをあえて無人にしておくことが、「幽霊船」における唯一の法律であり、住人たちのアイデンティティーの象徴なのだつた。

シャングリ・ラは当番制で管理された。ランダムに回される札を受け取つた者たちが、毎週土曜日の午後にここに集まり、掃除をし、修理をし、その美しさに溜め息をついた。どの家の入り口にも鍵はかかるつておらず、一切の警備も廃されていたが、当番以外で入り込む者は、まずいなかつた。おれはカノウ氏に尋ねたことがある。

（しかし、おれみたいなよそ者が、何も知らずに、ふらふらと入り込む場合だつてあるでしょう。「幽霊船」自体、出入り自由なんですからね）

氏は笑つてこう答えた。

（その人は、よほど不運だつたとあきらめるしかないね。確實に消されるよ）

今も昔も、おれには上昇志向というものが、まるでない。なるべ

く楽に生きたいが、偉くなりたいとはさらさら思わない。明るい天上を指すよりは、ゴクツブシのように暗い所を這い回りたがる、そんな性質が幸いして、当時のおれは命拾いをしたらしい。

店を出ると、ランボー氏に地図を見せて現在地を教えてもらい、あとはなんとか自力で行けそうだった。スラム街へ一人で行くと言うと、かれは顔をしかめたが。

（土星の輪をかけて、昔よりひどくなっていますよ）

ガイドと一緒に行動したほうが賢明であることは、むろんわかりきっていた。よく今までこの世界で生きてこられたと自分でも感心するくらい、お人好しなおれは、ランボー氏を疑つてもいなかつたが、どうしても、かつて一人で訪れた所を、今度も一人でたずねたかつたのだ。ランボー氏は苦笑しつつ、かれへのアクセス方法を何パターンか告げて別れた。

まさかこれが最後の別れになろうとは、夢にも考えなかつたけれど。

スラム街は蟻の巣をおもわせた。

曲がりくねつた路地を歩くと、猫の額ほどの広場に行き当たり、そこからまた八方へと路地が伸びていた。迷路の中の迷路といつた様相だが、さすがに半年這い回ったこの辺りは、だいたいの位置関係を把握していた。多少路地が増えているようだが、基本的には昔のままだ。

地面はコンクリートだつたり模造舗石だつたりしたが、じつとりと濡れていることに変わりはなかつた。壁から配線や配管が露出していた。おおっぴらにスパークしている電線もあつた。真昼の常夜灯がぼんやりと照らす中、いくつかの人影が闇からあらわれて、闇へと消えた。

カノウさんの家は、すぐに見つかった。

家、といつても、むろん一般的な一軒家とは異なる。家が家として独立しているのは、「幽霊船」の中ではシャングリ・ラだけなのだから。かといって、マンションやアパートのように、整然と部屋が並んでいるわけでもない。家屋のレリーフ、とでも呼ぶべきか。コンクリートの壁面に半分浮き彫りにされた住居が、何の法則性もなく連なっているのだ。

力ノウ電気工事店と書かれた看板も健在だった。入り口の前に、ごちゃごちゃと資材が積み上げられているところも、昔のまま。とくに破損している様子はないが、ただ、家庭の存在感が決定的に欠けていた。

おれは頭陀袋を、ざさりと降ろし、ドアに手をかけた。まったく予期に反して、取っ手を回すと金具が外れる手ごたえがあった。  
(さしそくこれだよ)

眉をひそめた。別人が堂々と移り住んでいるのであれば、看板をそのままにしておく筈がない。浮浪者か、あるいはもつと面倒なヤカラが住みついている可能性が高い。反射的に辺りを見わたすと、隣近所は鳴りをひそめたまま。常夜灯の照らす範囲内に、人影はまったくない。おれはジーンズのポケットから、M36を音もなく抜いた。

ドアを通り抜けた。落ちていた木片を引っかけて、外の明かりを入れるために、細めに開いたままにしておいた。餽えたような、空家特有のにおいが鼻をつく。両側は作りつけの棚で、工具類がぎつりと詰めこまれていた。どれも厚い埃をかぶつており、一度も触れられなかつた歳月の長さがしのばれた。

一つめのドアは中途半端に開いていた。かすかに、中から蒼い灯りが洩れてくることに気づき、一驚した。

ガンスリングガーに最も不必要なものは想像力である。起こりうる現実的な可能性を最小限に予測する以外、これを使ってはならない。撃つ相手の立場を一瞬でも想像すれば、こちらが撃たれる。そうしてよくこの仕事を続けてこられたものだと我ながら感心するくらい、おれの想像力は過剰だ。

おれはカノウさん夫婦の亡靈を想像した。それこそプラズマの亡靈のように蒼く光りながら、日常生活を営んでいるところを。死んだことにすら気づいておらず、おれが入って行けば、血まみれの笑顔で出迎えてくれるのであるまいか……

首をふった。こここの淀んだ空氣の中には、妄想の種子がうよづくしている。

ドアの後ろに張りついて、中を覗きこんだ。タイル貼りのダイニング。楕円形のテーブルを、空の椅子が三つ囲んでいる。テーブルの上には、ティーカップとポットが、今にもお茶を始められるように整然と並んでいる。よく磨かれた磁器の光沢がおれの目を射る。工具と異なり、明らかにごく最近、何者かによって磨かれたものだ。部屋の眺めはむかしと変わらぬまま、掃除がゆきとどき、整頓されている。カノウ夫人の飾らない几帳面さが、隅々まであらわれた恰好である。が、しかしランボー氏の話では、家の中はめちゃくちゃに破壊されていたのではなかつたか。そのうえ血の海だつたというではないか。

蒼い光は隣室から、磨りガラスを通して洩れてくる様子。ドアの隙間からダイニングに入ると、覚えず身震いするほどの寒気につまわれた。ここうなしか、血のにおいがした。隣室からもの音は全く聞こえず、ガラスに映る者の影もない。三つ数えてから、おれはガラス戸を引き明け、膝について銃を構えた。

ハスペースほどの、部屋の中は無人だった。

(やれやれ)

銃をポケットに仕舞い、立ち上がりて眺めた。色あせた壁紙。旧式のテレビジョンに円卓。染みだらけの天井からぶら下がった電

灯はともつておらず、光源は隅のスチールデスクの上に置かれた、ダイオードのランタンである。これはイオン電池式なので、家の電気そのものは止まっているのか、あるいは故意に使用していないのだろう。

スチールデスクに近寄り、片手をついた。ここにも埃は積もつていなかつた。大人が座るにはやや小ぶりなのは、娘のマキが幼い頃から勉強用に使つていたものだから。机の本棚には、童話から幾何学の本まで、無秩序に並んでいた。母親と異なる、マキの性格をあらわす光景で、七年前とまったく変わっていなかつた。

おれは身震いした。ランボー氏が嘘をつく理由はない。また茨城麗子が指名したほどのガイドが、誤情報をもたらしたとも思えない。惨劇はここで確かに行われたのだ。夫婦が惨殺され、死体は消えた。かれらがまだ生きて、ここで生活しているなんてことは、まず絶対にあり得ない。

犯人はついにわからなかつたという。無法者たちの集団はある意味、一般人よりも秩序を重んじる。自分たちのテリトリーのど真中で、愛すべき夫婦がこれほど派手に殺されたとあっては、周囲が黙つてはいられない。けれど、血眼の搜査にもかかわらず、犯人はおろか、死体さえ発見されなかつた。

必然的に、イーズラック人の犯行ということで周囲の意見は一致した。動機がまったく不明であるにかかわらず、かれら以外に考えようがなかつた。善良な夫婦が個人的な恨みを買う筈はなかつたが、職業上、何らかのトラブルに巻きこまれたのであろうと予想された。犯行にはワームが使われたという噂である。あくまで噂だが、かれらが第二種以上のワームを「飼い慣らしている」のだと、まことしやかに囁かれていた。想像するだにおぞましい話だが、ゆえに死体が見つからなかつたというのだ。なるほどここは、イーズラック人とワームの巣窟である、東の閉鎖ブロックにほど近い。

娘のマキはショックのあまり氣を失い、医者のもとへ運ばれた。しばらくは命も危ぶまれるほど、精神が錯乱していたという。どう

にかベッドを離れられるようになる頃、忽然と消えた。今も彼女の行方は杳として知れないのだ。

記憶の底から、マキの姿を引っ張り出そうといひゆみる。真つ赤に染めたセミロング。肌がきめ細かで色が白く、それだけにそばかすが痛々しかったが、本人はまったく気にしない様子。スカートを穿いたところなど見たことがなく、いつもざつくりとジーンズを着こなしていた。

ピアス狂で、鼻梁その他、意想外なところにくつつけては、おれを驚かせた。瞳に入れようといつ計画は、さすがに友達に阻止されたと言つて笑つた。もし生きているならば、現在は二十四か五だ。話を聞いた限り、その可能性は少なそうだ。

(ピアスはセックスの象徴なんだって。香川先生が言つてたけど、でもぜつたい別モノだとわたしは思うよ。だつて直接触られるより、ピアスをちょっと舐められたほうが感じるんだもの。だからわたしは、セックスよりもキスが好きだし、キスよりピアスを舐められるのほうが好き)

机の引き出しに手をかけた。写真でも入つていいかと考えて。一番上の引き出しは、けれど指の力に抗して開かなかつた。鍵がかかつているのだろうか。いや、おれの知つていてるマキならばかけないと考へ直し、一度下へスライドさせてから引いてみた。抵抗がなくなり、引き出しはすんなりと開いた。ずいぶん軽く感じられた。(ねえ記者さん、じうじうの、変態つていうのかな)

そこには一冊の日記帳が、ぽつんとおさまっていた。市販されている少女趣味的なもので、クマのぬいぐるみのイラストが、ピンクの表紙に描かれていた。少なくとも、おれがいた頃は、彼女が日記をつけている姿など見たことがない。もつともじうじうものは、おっぴらに入前では開かないのだろうけれど。

手にしてみると、意外に厚手で、重かつた。多少の罪悪感を覚えながらも、当てずっぽうに項を開いてみた。下の文字がまったく読

めないほど、紙が血に染まっていた。眉をひそめ、さらにめくつたが、どの頃も同じように血染めだつた。かなり時間がたっているらしく、茶色に変色し、すっかり乾ききついていた。けれど部分的には、鮮血の赤さを生々しく保つていた。

背後に恐ろしい気配を感じた。

気配とは電流のようなものだ。受信した直後に動かなければ、まづやられていく。おれは振り向きさま、閉じた日記帳を盾にした。痺れるような衝撃が指に伝わり、止んだ。幸運だつた。日記帳の表紙には、刃渡り二十センチはありそうなナイフが、垂直に突き立つていた。

第二波が来る様子はなかつた。ポケットのM36に指を添えたまま、ダイニングに通じる入り口を注視した。ほつそりとした人影が、くぐもつた、けれど魅力的な声を発した。

「抜かないの？」

「おれは強盗じゃないんでね」

軽い溜め息が聞こえた。薄闇の中で、ほう、とうつろに斜をかえした。

「あんたよそ者だね。イーズラックでもなさそうだけど。船の人間なら、まずこの家の敷居はまたげない。連中は案外、迷信深いからね」

船とはもちろん「幽霊船」を指す。イーズラックと叫うときだけ、吐き捨てるような語調になつた。薄手のコートにジーンズ。フルフレイスのヘルメットのようなものをかぶり、豊かな髪が、そこから背中にあふれている。

「幽霊が出るというのかい。氣の毒な夫婦の」

「あんた、何者？」

闇を震わせて、驚きが伝わる。暗がりから、一步、彼女は歩み出た。ダイオードのランタンにその頭部が照らされたとき、おれは覚えず息を呑んだ。それはヘルメットというより、ジュラルミン製の仮面だつた。中世の西洋兜をいやでも想起する形状で、無数のリベ

ツトが打たれていた。

田の前に立つ女がマキであること、わかりきっていた。たしかに声はぐっとハスキーになり、かつ落ち着いているし、引きしまった体の線からも、当時の少女らしさは失われていて。異様な仮面の効果もありまつて、全身からかもされる雰囲気は、あくまで厳しい。が、それでも七年前のお転婆娘の面影は、ぬぐいようがなかつた。おれは黙つていた。彼女が思い出せないのなら、それでもいい。むしろそのほうがいい気がした。思い出すことで七年前の、おそらく彼女が最も幸福だった頃の記憶を呼び覚ませば、彼女は傷つくだろう。優しい記憶はたちまち氷のナイフと化して、心臓を貫くだろう……けれども彼女は気づいたらしい。

「記者さん？」

異様な仮面から、思いがけず、あどけない声が洩れた。

初めから嘘だと気づいていたと思うが、一家はおれの滞在中、記者ということにしてくれていた。素性に関しては何も訊かれなかつた。利発なマキは、おれが傭兵だつたことを何となく見抜いていたようだ。それでも記者さんと呼んでは、いたずらっぽく微笑んだりした。

「今はしがない何でも屋だよ。もっとも、記事なんて一度も書いたことはないけどね」

道化のように両手をあげてみせた。彼女の肩から力が抜けるのがわかつた。ひさしぶりだね、マキ。そう口にしようとしたとき、彼女の全身に殺氣がみなぎり、腰を落として身構えた。指の部分だけ切り抜かれた革の手袋。そこに握られたナイフが、まがまがしい光をおびた。

「出て行つて。今もそつ名のつているかどうか知らないけど、エイジ。ここはあなたが来てはいけないとこや」

おれは両手を上げたまま、奇怪な鉄仮面を覗きこんだ。視線は痛いほど感じるものの、当然、表情はまったく読みとれない。もしかしたら、今にも泣きそうな顔をしているのではないかと、ちょっとと考えた。

彼女がなぜ鉄仮面をかぶつているのかといふ、単純な疑問が今さらながらわいた。ただ顔を隠すには大きすぎるし、秘密裏に行動する上でも、何かと邪魔だろう。では、顔をいちじるしく傷つけているのか。だからどうしても見られたくないのか。おそらく、それが最も妥当な理由だろうから、がさつなおれといえども、触れるのは憚られた。

「なぜそう思うんだ？」

ナイフによる威嚇を無視して、そう訊いた。

プロのガンスリングガーに太刀打ちできると考へるほど、マキばかりではない。それでも意思表示するように、ナイフの先端を向けたまま、仮面の中で小さな溜め息をもらした。

「エイジ、あなたは人類刷新会議に雇われている」

「いい嗅覚だ。犬のにおいがしたんだな」

「わたしが言う必要もないでしようけど、刷新の密偵が船の中で次々と消されているわ」

言葉づかいが、以前より柔らかくなっている。少女の頃にはなかつた艶が含まれている。彼女の声は、この場にそぐわない官能をも引き起こすかのようだ。

「おれも消されるとと思うか？」

「よそ者は、ここでは裸で歩いているようなものよ。どんなに巧みに潜入したつもりになつても、同じことだわ。たちまち、やつらに嗅ぎつけられるでしょう」

「その『やつら』について知りたいんだがね。イーズラック人なの

か

「わたしより、むしろあなたのほうが詳しいんじゃない？ 船で生まれ育ったわたしでさえ、いまだにわけがわからないんだから。あいまわしい、寄生型ワームのようなやつら。いつの間にか船に棲みついて、疫病のように蝕んでゆく、白い眼をしたやつら……」

ナイフが放たれた。冷たい風がおれの頬をかすめ、背後で壁に突き立つ音が聞こえた。マキはその場にしゃがみこみ、仮面を両手で覆つた。揺れる髪。震える肩。指の間をつたう涙は、けれど確認できなかつた。

「教えてよ、エイジ。やつらはいつたい何者なの？」

彼女に歩み寄り、肩に手をかけた。コートの粗い生地の下で、痛々しいほど細い肩が、囚われた小鳥のようにおののいていた。

「それを知るために？」

「ええ。誰一人、仲間も作らなかつた。誰も信用できないと思つた。生粋の船中人で、やつらを忌み嫌つていた者でさえ、いつやつらの仲間に取り込まれるかわからないものね」

「賢いマキのことだ。それでも何か突き止めたんだろう。親父さんたちの死因について」

顔が持ち上がる。勢いで、おれの手は払いのけられた。冷たい鉄仮面と、間近で見つめあつ恰好だが、無理もない。ナイフを突きつけられなかつただけでも、僥倖とすべきだろう。

「おれを信用してほしい。なんて、間の抜けたことは言わないよ。先にひとつ訊きたいんだが、きみが刷新をも忌み嫌うのは、この『幽霊船』を取り壊そうとしているからなのか」

仮面が左右に振られた。

「違う。それもあるかもしだれだけど、人類刷新会議が、表立つかかげているイメージほど、クリーンではないと感じるからよ」「クリーンではない？」

「政治家なんてみんな似たり寄つたりだ、といったレベルの愚痴ではない。こんな船の中に閉じ籠もつて、何がわかるのかと思うか

もしれないけれど。暗がりから覗いてこそ、よく見える世界だつてあるわ。それにここは、裏情報の吹き溜まりみたいな場所だから。エイジ、そもそもどうして『人類刷新会議』なんていう、大げさな名前がついていると思う?」

次はおれが首を振る番だつた。正直、考えたこともなかつた。仰々しく名のつたほうが、何かとお得なのだろう、くらいにしか。彼女は語を継いだ。

「神様がいるのかどうか、わたしにはわからないけど。でも、人類を『刷新』する資格があるのは、神様くらいじゃないかしら。どう思う? カれらがもしも本氣で、その名を名のつていいのだとしたら

ら

「当局の理念は、極めてツアラトウストラ教に近くなる、か」

自身、口にしながら戦慄を禁じ得なかつた。思い当たるフシがあ

つたのだ。身を乗り出して、マキはささやく。

「もちろん、当局の首脳がツアラトウストラ教徒だと疑つているわけじゃない。むしろかれらを排除しようとしているように見えるわ。二つは相容れない水と油のようなもの。だけど、根幹の部分では繋がつていると感じるの。ツアラトウストラ教の過激派が、イミテーションボディを飼い慣らそうとしているように」

マキの肩が、びくりと上下した。同時に、すさまじい殺気が、おれのこめかみを貫いた。戸の外に、何かが潜んでいる。

耳を澄ませた。カタリという、正体のわからない音を残して、気配はふつつりと消えた。鉄仮面の、耳とおぼしきあたりに口を寄せ、おれは囁いた。

「裏口はまだ生きているか

「ええ。逃げ込むまで、こっちが生きていらねたらの話だけだ」

上等だ。とおれはつぶやいた。減らず口が叩けるうちには、人はそう簡単に死にはしない。とはい、

「おれが巻き込んじまつた恰好かな。まさかこんなに早く追っ手がかかるとは」

マキはこたえず、軽く首を振った。鉄仮面から延びた髪が揺れて、甘い香りが漂う。風呂に入るときは仮面をとるのだろうか、と、この場にそぐわぬ考えがよぎったが、修羅場ではよくあること。神経が極度の緊張に達すると、逃げ場を求め始めるのだ。

耳をつんざくほどの、破裂音が戸口で響いた。身を伏せた頭上を、ダイニングへ通じる扉がすっ飛んでいった。ぎちぎちと、巨大な蟻が歯ぎしりするような音が聞こえた。いやでもE-Bを連想させる音だが、それはあり得ない。あり得ないのだと自分に言い聞かせ、這いつぶばつた姿勢のまま、パイソンを抜いた。

煙の向こうに、武装警官の盾をおもわせる金属板が、二つ並んでいた。覗き窓の上に、センサーらしい赤いランプが点灯していた。だとすると、これは盾ではない。

「掃討車か……！」

前後に二つずつ連ねた盾は、甲殻類の脚に似た、四本の移動装置

を覆うカバーだ。間に三角形を成す本体が隠れている筈で、むろんそこには弾薬をしこたま装填した機銃が乗っかっているだろう。

掃討車は旧首長連合が開発した、無人の対人用殺戮兵器である。四本の「脚」を使ってどこまでも入り込み、目標を蜂の巣にするまで止まることがない。とくに小型の暗殺用は精巧で、顔写真一枚あれば、目標がインプットされる。あとは赤いボタンを一つ押すだけ。すさまじい嗅覚で目標の足取りをたどり、追いつめて蜂の巣にしてくれるスグレモノだ。

新政権はこれを禁じ、徹底的に廃棄したが、成果はこの有様。敵はじっと動かない。赤いセンサーが、まがまがしく明滅し、ぎちぎちという音が、盾の間から断続的に洩れた。息をひそめたまま、おれは待っていた。機会は一瞬。やつが機銃を撃つために盾を開いたとき、動物でいえば首筋にあたる、配線が集中している部分を狙えばいい。うまく命中すれば、やつの動きは一発で止まる。

それにしても、不可解なのは、あのみょうな音だ。掃討車は何度も目にしているが、こんな、いわば生物的な音は聞いたことがない。掃討車に限らず、機械がたてる音とは思えない。不安との協奏曲を奏でつつ、奇異の念が膨らみ、ついに破裂する一歩手前で、胴震いするように掃討車が揺れた。

モーター音とともに、四本の脚部が広がると、必然的に盾の間から本体が覗いた。

眼玉だ。

地面すれすれに突き出した、いわば顔に相当する部分には、闘牛のそれの十倍はありそうな、巨大な眼玉が嵌めこまれ、きろきろと蠢いていた。そして眼玉の下には、蜘蛛とそっくりな顎があり、上下するたびに、ぎちぎちという、例の音が洩れてくるのだった。何よりもおぞましいのは、顎いちめん、天鷲絨のような毛で覆われていたことだ。

おれは叫んだ。叫ばなければ、狂気に呑まれそうだったから。叫びながらパインソングを連射した。

こんな体験は初めてではない。IBを相手にしていれば、しづちゅう起ることだし、実際に精神のバランスを崩した仲間を、何人も見てきた。かくいうおれも、処理班を辞めるきっかけになった戦闘の後、しばらくは廃人同様だった。妻を亡くした事実もひつくるめて、IBという存在そのものに、いわば汚染されたのだろう。

が、しかし、目の前のこいつはIBではない。IBであるわけがない。弾は確実に命中し、電球を割るように、巨大な眼玉が弾け飛んだ。顎が大きく開かれ、獣じみた、あまりにも生物的な叫び声がほとばしった。口の中から腐った血のような、どす黒い液体があふれた。

サソリの毒針をおもわせて、後方から弓なりに突き出された機銃が火を吹いた。けれど、すでにメインセンサーを潰されているので、闇雲に部屋を破壊するばかり。おれはマキの手をとり、後ろの壁に突進した。そこに取り付けられている、みょうに大きなダストシュートに飛び込んだ。

彼女が言ったとおり、「裏口」は健在だった。当時も話に聞いていたばかりで、飛び込むのは初めてなのだが。筒状のトンネルは、二人が体をくつつけて滑り降りる、いや、滑り落ちるのがやつとの広さ。壁面は油を塗ったブリキで覆われているらしい。

おれの頬には冷たい仮面が押しつけられ、反対に、かたく抱きあっている体のほうは、猫科の肉食獣をおもわせる、しなやかさな肉の存在と、温かい体温を感じとつていた。

「」の抜け穴がどこに通じてゐるのか、おれは知らない。よほどの緊急事態でない限り、使用すべきでないようなことを、カノウ氏が言つていたかと記憶する。おれがマキにそうしたように、おそらく襲撃を受けたとき、カノウ氏は夫人の手を引いて、ここに飛び込みたかったのだろう。

だが、「襲撃者」はそれを許さなかつた。

落下する速度は、みょうに緩慢に感じられた。ときおり、マキの鉄仮面が壁に擦れて、緑色の火花を放つた。すでにまつたくの闇に包まれて、自分が目を開けているかどうかさえ、心もとない。トンネルが微妙に曲がりくねつてゐるせいいで、速度は一定に保たれてゐるが、これほど長い間落ちて行つた先に何があるのか、考える気はとつくに失せていた。

ロング・アンド・ワインディング・ロードを、たつぱり一曲ぶん聴き終える頃、不意に中空へ放り出された。

マキの体をしつかり抱いたまま、背中から落下した。もし真下で剥き出しの鉄骨が穂先を揃えていたら、串刺し人間の奇怪なオブジエができあがるだらう。けれど、悪運の強さは相変わらずで、落下したのは細かく粉碎された瓦礫の山だった。

「きやつ！」

意外に娘らしい悲鳴を聞くと同時に、彼女の全体重があれを圧した。おそらく薄笑いを浮かべたまま、意識がぐんと遠のいた。

「エイジ……エイジ」

闇の向こうから、だれかが呼んでいた。少しハスキーナ、耳をくすぐるような声。からからに乾いた、こひらはおそらくあれ自身の声が、間抜けな返事をしていた。

「ああ」

「生きてくるなんならいいけど。痛む？」

「骨がばらばらになつたみたいだ。だが、それこそ生きているアカシだからなあ」

薄日を開けた。にぶい光を放つ、鉄仮面が覗きこんでいた。硬い床に直接敷いたマットの上に、寝かされているらしい。徽のにおいのする、薄っぺらな毛布がかけられていた。

「撃たれては、いないみたいだけど」

「あたりまえだ。目をつぶつてマシンガンをぶつ放したって、そうそう当たるもんじゃない。マキは？」

「だいじょうぶ」

ぶーん、という重低音に混じつて、かすかな震動が背に伝わる。どこからか、しきりに水の滴る音が聞こえる。

ゆっくりと半身を起こすと、全身の関節がきりきりと軋んだ。唸りつつ、辺りを見まわす。赤錆びた鉄板に囲まれた、箱のような部屋だ。無数の、得体の知れない配管が、壁をうねうねと這い、天井から電灯がひとつ、ぶら下がっている。ブリキの傘の下から、弱いオレンジ色の光を投げかけているのは、ダイオードではなく、白熱球らしい。

「ここは？」

答える前に、マキに水差しを手渡された。急に渴きを覚えて、むさぼるように飲んだ。鉄の味がしたが、不純物もなく、充分飲めるレベル。もちろん、水筒を持参する余裕はなかつたので、ここで調達したものだろう。彼女は言う。

「見てのとおりよ。お父さんが用意してくれていたの。わたしも実際に来るのは初めてだけど。ダストシートに飛び込んだ時は、ここに隠れるよう、教えていたから」

「地球を突き抜けちまうくらい、落下した気がするが

「幽霊船の墓部にあるわ。人間が生きていろいろ、ぎつぎつのうインかしら」

「これ以上潜ると、どうなる？」

「レッドゾーンの汚染地帯に匹敵する環境に突入する。あと一メー

トル、コンクリートに穴を開ければ、そこは地獄よ」

ポケットをまさぐり、すっかり潰れた煙草の箱を取り出した。火をつけていいか、目顔で尋ねると、マキはうなずいた。電灯がついているくらいだから、問題ないとは思うが、変なガスが充満していっては、ミもフタもない。おれは煙を吐いた。例えここが地獄でも、こいつさえあれば、何とかやっていけそうな気がした。

「幽霊船」の最下部は、巨大な動力室になっていると聞いた覚えがある。ここが要塞だった頃の名残で、むろん今では機能しておらず、地下水に浸されているとか。水の中には未確認のIBが、うようよと泳いでいるとか。そんな環境が、おれが横たわっている、ほんの百センチ下に茫茫と広がっているのだ。

そう考えると、さすがに体が震えた。

「寒い？」

「いや、汗をかくほどだよ。まあ、地獄の窯の上にあるんだから、蒸されるのは当然か」

マキは肩をすくめた。おれはつぶやいた。

「なあ、マキ。気を失っている間に、なぜおれを始末しなかった？」

しばらく思案しているさまが、仮面の下にうかがえた。身動きしないまま、視線がすっと外されたのがわかつた。沈黙を数えてから、おれは語を継いだ。

「おれがここで嗅ぎまわっている限り、マキに累が及ぶのは確実だ。一緒にいるところを掃討車に見られちまつたからな。本体を破壊したところで、データはとっくに送られている。かくなる上は、おれの寝首を掻いて、いかにも監視カメラに映りそうな所に置いてくれば、少なくとも仲間だという誤解は解けるだろ?」

視線が戻され、溜め息まじりの笑い声が、鉄の仮面からこぼれた。「兵法の初步的な引っかけ問題みたい。わたし、そこまでばかじゃないわよ。かくなる上は、あなたを生かしておいて、利用したほうが有利に決まっている。首を置いてくるなんて、自殺行為もいいところだわ」

「よれよれのガンスリンガーに、利用価値なんてあるかな」「エイジが追つていい連中は、わたしが探している者たちと、少なぐとも、とても近い可能性がある。それに」

髪を搔き上げた。それが緋色ではなく、現在は明るい金色に染められていることを、今さら認識した。甘い香りが漂い、彼女の人さし指が、鼻先に突きつけられた。

「寝顔があまりにも間抜けだったから。殺すに忍びなかつたの」口の端を歪めつつ、毛布の上にあぐらをかいだ。部屋の広さは十スペースほどか。ほぼ立方体で、家具らしいものは何もない。奥にキッキンがあり、形ばかりのシャワールームまで確認したときは、奇跡を見る思いがした。

「水が出るのか」

「何はなくとも、水だけは確保しておるのが基本でしょう。籠城にせよ潜伏にせよ」

おれは肩をすくめた。こんな場所を用意していたくらいだ。カノウ氏は考えていた以上に、ヤバイ立場にあつたとおぼしい。そんな

おれの思惑を見抜いたように、マキがつぶやく。

「お父さんね、きっと見てはいけないものを見たんだと思う「見てはいけないもの？」

オウム返しに尋ねると、マキはうなずいた。真剣な表情が想像された。そういうば、最初、おれに向かって彼女はこう言つた。ここはあなたが来てはいけないとこらだと。

「つまり、合成麻薬の製造工場を突き止めたといふことか」

電気工事の技師は、配線を伝つて、迷路のような「幽霊船」の至る所に入り込む。裏口や抜け穴や、忘れ去られた通路を知つてゐる。人類刷新会議のエージェントたちが、どうしても発見できなかつた証拠を。禁じられた合成麻薬の工場を、偶然発見する可能性はありますぎるほどだらう。

が、おれの言葉にマキは首を振つた。仮面の縁からあふれる金色の髪が、さらさらと揺れた。

「襲撃される、ちょうど一週間前よ。いつもより遅く仕事から帰つたあと、お父さんの様子が変だつたの。食事にほとんど手をつけないし、大好きなお酒も、ほんのひと口飲んだだけ。ぼんやりしていふかと思えば、何でもない音に驚いて飛び上がつたり。わたしたちが理由を尋ねても、口をつぐむばかり。今思えば、何があつても話すわけにはいかなかつたのね」

次の日から、カノウ氏は病氣と称して仕事を全て断つた。けれど、一時もじつとしておらず、行き先を告げずに出かけては、戻ることを繰り返した。この「最後の隠れ家」にも、たびたび出入りしていることをマキは察知した。通路や隠れ家を修理・補強して、食料や武器を運びこんでいるらしいのだ。

氏が「幽霊船」からしばらく出ることを提案した次の日に、カノウ夫妻は大量の血を残して消滅した。つらければ答えなくともいいが、と断つた上で、おれは尋ねた。

「カノウ氏は、その『見てはいけないもの』に関して、何か手がかりになるようなことを言ったのか」

「積極的には、何も。ただ、夜ごとひどくうなされてね。うわ言の中に、一定の単語が混じることに気づいたの」

「何と？」

彼女は少し上を向いて、球根。と、つぶやいた。おれは思わず叫んだ。

「まさか……！」

「わかるのね。エイジ、わたしはその意味を調べるために、ずいぶん回り道をしたわ。球根。これだけでは、あまりにも曖昧で、それこそ雲をつかむようだつたから。だいいち、一介の電気技師の娘なんかに、そう簡単にわかる筈もなかつた。これが、イミテーションボディに関わる重大な単語だなんて」

球根……すなわち、「バルブ」だ。

しかしそんなことはあり得ない。この「幽霊船」の中にイミテーションボディの原型が……バルブが持ち込まれているなんて、考えるだけでナンセンスだ。狂氣の沙汰だ。そもそもバルブの存在そのものが、伝説と未分化なものではなかつたか。狂つた夢の象徴に過ぎないのではないか。

カノウ氏がバルブをあえて「球根」と呼んだのはなぜか。かれは電気技師であり、バルブは「弁」のほかに「電球」をも意味する。ゆえに氏にとって最も馴染みの薄い、球根の呼称が用いられたのだろう。そう考えるのが自然なのだろう。けれど、おれにはそこに、もっとおぞましい意味が籠められているような気がして仕方がなかつた。

球根。

まるで根のように、無数のコードやシールドが、うねうねと張りめぐらされ、奇形の球体がその上で息づいている。眼球をおもわせるコア。心臓のように、そいつは脈動している……マキはささやく。「わたしもちよつとはお勉強したから、エイジの言いたいことはよくわかる。お父さんが見たものが、バルブそのものだつたとは、さすがにわたしにも考えられない。ただ」

「ただ?」

「どんなに奇怪な伝説に彩られていても、所詮、バルブは人間が作り出したものでしよう。IBが、純粹な神様の創造物でないと同じように」

そうだ。IBは「純粹な」生命体ではない。たしかにかれらは遺伝子を有し、みずから増殖する能力さえ持つている。便宜上、機械生命体と呼ばれてはいるが、はつきり「生命」と断定することは、躊躇せざるを得ない。マキの言つとおり、かれらは明らかに、神ならぬ人の手によって生み出されたのだから。

「つまり、バルブのコピーを……」

「わからないわ。考えたくないというのが、正直な気持ちかしら。そもそもそんな仮説が成り立つかどうかさえ、だれにもわからないんでしょ?」

もしここに相崎博士がいれば、興味深い話が聞けたかもしない。

いかにもマッドサイエンティスト然とした、かれの顔を思い出すと、なぜかわざかに気持ちが安らいだ。田頃、ぜつたいに顔を合わせたくない男なのに、みょうな心理である。

「やめましょう、こんな話。お茶を淹れるわね」

衣擦れの音を鳴らして、マキは立ち上がった。男にとつてひとつ幸運とは、女が茶を淹ってくれる状況だろう。こんな地獄の入り口で、それが望めるとは思ひもよらなかつたが。

部屋の隅に置かれた頭陀袋の一つから、マキはコーヒーの缶を取り出し、キッチンへ向かつた。コンロの燃料は圧縮泥炭とおぼしい。産業廃棄物の燃える独特な臭気が、やがてコーヒーの香りと入れ替わつた。

鉄仮面の上から、マキはどうやって飲むのだろつかと興味があつたが、運ばれてきたのは、おれのぶんだけ。

「外はどうなつているんだ？」

金属製のカップを傾けながら、おれは尋ねた。

「ひと息ついたら、散歩してみましょつか。防護服を着なくとも、出歩けないほどじやないから。とてもピクーツクする気にはなれないでしきうけど」

「だいたい想像できるよ。要するに、ワームの巣みたいなもんだ」「イースラックがいないだけ、まだましよ」

吐き捨てるように、彼女は言つた。おれは話題を変えるため、自分の近況を問わず語りに話した。

七年前にここを出て、いろいろあつて、処理班にいたことは意図的に飛ばし、現在の何でも屋稼業のことを、自嘲的に。喜劇的などたばたのあげく、ここへ来ることになつた経緯には、彼女も驚いた様子。ずっとおれを刷新の諜報部員と思いこんでいたようだ。

話し終える頃には、カップは空になつていた。ここ十年ほど、西の砂漠地帯の政変が続いており、コーヒー豆の価格が高騰していた。それも、よほどの金持ちでない限り口にできず、一般人の手に入るものは、密輸された粗悪品ばかり。ゆえに、これほど質の悪い豆から、

「これほど血にコーヒーを淹れる彼女の手並みは、魔術に等しかった。  
「お腹空いてない？ 簡単なものなら作れるけど」

「ありがたいね」

彼女は小首をかしげた。鈍い光沢が仮面を撫でた。おそらく微笑んだのだろう。おれが当局とは無関係だと知つて、少しほは氣を許したのかかもしれない。依然、おれが厄介な存在であることに、変わりはないだろうけれど。生かしておいたほうが有利なのだと彼女は言つた。追つてている対象が非常に近いのだと。

空のカップをもつて彼女が奥へ去ると、無精にも、おれはもう一度横になつた。床の上に、古いカストリ雑誌が転がっていることに気づいた。おれが目を回している間、マキが読んでいたのだろうか。振り返ると、彼女はすでにキツチンに向かい、材料を洗つている。おれは毛布をかぶり、その雑誌を引き寄せた。

雑誌は閉じられていたが、粗悪な紙の折れ具合から、マキが直前まで読んでいたページは、だいたい見当がついた。そこを開くと、載つているのはIBに関する記事だった。この手の雑誌が書き散らす、いわゆる「IBネタ」は、ほとんど怪談の類いである。ここでもじよ多分に洩れず、眉をひそめたくなるような見出しが、けばけばしく刷られていた。

いわく、

『イミテーションボディと人間の混血児は実在した！？』

ふだんなら一笑に付すところだが、マキが読んでいたことを考へると、なぜか見過せない気がして、おれは記事を読み始めた。

それにしても、ひどい印刷物だ。紙質の純度は極めて低く、インクのにおいは腐臭に等しい。

IBが人間の男女を、「殺害以外の」目的で拉致するといつ。このての与太話なら、いやというほど耳にしてきた。当てずっぽうにカストリ雑誌を三、四冊買つてくれば、かならず一誌には特集が組まれているであろう、ありふれた怪異譚である。

そう、これはただの怪談話。

昔話や伝説に出てくる鬼だと山男・山姥だとを、そつくりIBに置き換えたに過ぎない。ただ、大昔から繰り返し語られてきたパターンというものは、人の心の奥深い部分に訴える、なんらかのパワーがあるのだろう。だからこんな荒唐無稽な与太話を貪り読む者が、あとを絶たないのだろう。

こんな記事を、マキが一生懸命読んでいるところを想像すると、苦笑を禁じ得ない。

昔の彼女はリアリストだつたし、その部分は現在も変わっていないと感じる。くだらない雑誌を読む暇があれば、ナイフの手入れをしているような娘だ。が、しかし……

おれはキッチンスペースを盗み見た。すでによい香りが漂い、甲斐甲斐しく料理する彼女の腰で、エプロンのリボン結びが揺れていった。ジーンズの粗い生地に包まれていながら、彼女の臀部が、少女時代よりずっと充実していることに、あらためて気づいた。

早い話が、いい尻をしていた。

おれは尻から視線を剥がし、けばけばしい雑誌の挿絵に目を落とした。アナクローズム全開の絵柄。いかにも兇悪な姿形のIBらしきものに半裸の女が拘束され、髪を振り乱し、目を見開いて身悶え

ていた。そのまま親孝行横丁の映画館のポスターに混じつていっても、何の違和感もないだろう。記事の内容も挿絵そのままだ。

おれは男なので、女性の感覚は想像もつかない。性欲がどんなふうに訪ね、どんなふうに去つてゆくのか、さっぱりわからない。わからぬなりに、性欲がちゃんと存在していることは知っているし、クールなマキといえども例外ではないだろう。現に、少女時代の彼女はピアシングという行為に性的な興奮を覚えると告白した。

(ピアス、か)

鉄仮面の下に、彼女は今もピアスをつけているのだろうか。あるいは、まさかとは思うが、あの仮面がピアスと同じ意味をもつのだろうか。そしてIBに犯されるというおぞましくも扇情的な言話が、彼女のなんらかの琴線に触れたというのか。

後半はIBと人間の混血児に関する記事で、よくもまあここまで不気味な想像ができたものだと感心するくらい、怪物趣味にあふれていた。ページのよれ具合から、明らかにマキは前半を繰り返し読んでいたが、おれはむしろ後半に惹かれた。昆虫人間や全身からダクトが突き出た人間などに混じつて、可憐な少女が描かれていたからだ。

挿絵画家は、少女のヌードが描きたかつただけかもしれない。おそらくそうだろう。百鬼夜行のような怪物ばかり描いていると、飽き飽きしてくるのも当然だ。だからこれは単なる画家の思いつきであつて、現実的な根拠などあろう筈がない。そういながら、おれはどうしてもその絵を凝視せずにはいられなかつた。

少女は十一、三だらうか。この年代特有の、憂いを含んだような目もと。幼さと艶めかしさが共存し、せめぎあう四肢。いかにも画家の理想と情念をぶつけたような、均整のとれた真っ白な裸身。その左手首から先だけが、おぞましい鎌状の爪を無数に植えこんだ殺戮機械と化していた。

マキが悲鳴を張り上げたのは、そのときだ。  
もう追つ手がかかったのか。それとも多脚ワームか。いざれにせ

よ、ただ事では済みそうにない悲鳴だった。こんな場所にいながら、おれは油断しすぎたようだ。後悔が引き起こさうとするパニックを懸命におさえつけ、飛び起きた。同時にパインソングを手に取り、キッチンへ向けて身構えた。

「マキ！」

彼女はこちらを向いて立っていた。頭から足の先まで血まみれだった。だらりと垂らした両手の指先から、鮮血はぽたぽたと床にこぼれた。マキの両親を襲つたという、得体の知れないものの影を懸命に探したが、せまい箱の中に、侵入者の姿はどこにも見当たらなかつた。

「マキ……」

「生きてるわ」

かすれた声が仮面から洩れた。仮面から？ そういうえば、体はともかく、鉄仮面まで血に染まっているのは理屈にあわない。立ちつくしたまま、彼女はつぶやく。

「虫みたいなものを踏んづけちゃったの。船の中には、こんなやついなかつたわ。ハイジ、あなた専門家でしょ？ なによこれ」

「ゴクツブシだ。そうつぶやいて、おれは吹き出した。

「つづかり一匹踏んだだけでも、バケツ一杯ぶどのトマトソースをかぶつたくらいにはなる。まあ、やつの体液は無害だから安心しな」「そんなに笑わなくてもいいでしょ。いくら無害といつたって、こんなひどい臭いのするソースなんか使えない。おかげで料理が台無しよ」

おれが笑い終えるまで、たっぷり一分は必要だった。その間じゅう、マキは撫然と腕を組んでいた。

彼女は言つ。

「しばらく席を外してくれない？ シャワー浴びたいんだけど」

「外は危険とワームがいっぱいなんだろう？」

「三十秒以内に出て行かないと、ゴクツブシのチリソースを作るわよ」

「それだけは勘弁してくれ」

肩をすくめて、きびすを返した。

倉庫の入り口をおもわせる、鉗の打たれた鉄扉の前で振り返ると、仮面のレディはまだじつとこちらを見ていた。裸体に対するガードは、アリー・シャよりもはるかに堅い。おれは再び肩を上下させ、扉を押して外に出た。

真つ暗かと思いきや、意外にも黄昏時くらいの明るさ。腕時計を見れば、ちょうど日が暮れる時刻だが、これが自然光であるわけがない。一帯は不気味な赤い光に覆われ、しかも緩い呼吸のリズムで明滅していた。

辺りは一面、瓦礫の原である。広大なゴミ捨て場と呼んでもいい。建造物の残骸にさえぎられて、遠くはどうなつているかわからない。巨大な天井まで二十メートルはあるだろうか。腐ったような、穴だらけのコンクリートから、鉄骨やパイプやコードや、その他、正体の知れない廃棄物がはみ出していた。あの辺りにも、愉快なワームたちが大勢棲みついているに違いない。

我らが隠れ家は、黒ずんだ鉄の箱にほかならなかつた。おそらく、大昔の軍用コンテナであろう。腐食が進み、瓦礫に埋もれかけたまま、ワームの巣窟にしか見えない。まさか今頃、いい尻をした仮面のレディがシャワーを浴びているとは、誰も思つまい。いや、さすがに入浴中は、彼女もそれを外すだろう。重い鉄の塊を持ち上げるとき、豊かな髪があふれるだろう。緋色だった七年前と変わ

つて、薄い金色に染められた髪。その毛先がなめらかな背中を撫で下ろし、充実した臀部の上で揺れるだろ。

(ガンスリングガーに最も不必要的もの。それは想像力だ)  
自身を戒めつつ、再び周囲に気をくばつた。

よからぬ妄想を愉しんでいる間に、異様なもの音が生じていることに気づいた。ここへ来たときからずっと鳴り続いている、「ぶうー」という重低音とは明らかに異なる。がりがりと瓦礫を引っ搔くような音。しかもその音は、明らかにこちらへ接近していた。

(巨大なワームか。それとも……)

最悪の可能性を胸の内で揉み消しつつ、小動物のように耳を済ませた。異音はもはや疑う余地もないほど、高らかに瓦礫を引っ搔いていた。時速二十キロくらいは出ているようだ。けれど、瓦礫にさえぎられて、その姿をなかなか確認できない。やがて三十メートルほど先に土煙が立ち、ひどい油の臭いがした。となると、

機械だ。

おれはパインソングを抜いた。

接近物に対して、板状のコンクリート塊を盾に身構えた。耳障りな音が響き、視線の先で瓦礫が弾けた。破片が盾に次々とぶつかり、砂埃が視界を圧した。ほんの数メートル先でアイドリングしているらしい、エンジン音と油の臭い。

砂埃にまみれて、おれは舌打ちした。こんなことなら、一葉に「コーグル」を借りてくるべきだった。目をしばたかせながら、盾の間から覗きこむと、そこには鉄のモグラがいた。

(なんだこいつは?)

戦闘用でないことは一目でわかつた。かといって、乗用にしては奇怪すぎる。建機に近い氣もするが、こんな用途不明な車両は見たことがない。そもそもこいつは車両と呼べるのか。なにしろ、うんと突き出したフエンダーの左右の、本来前輪のあるべきところには、太い鉄の爪が三本ずつ、にゅっと伸びていてるのだから。

あたかも、モグラの前脚のように。

運転席は剥き出しで、一人の小男が座っていた。工事用のヘルメットを後ろ向きに被り、ゴーグルのような眼鏡をかけ、鼻の下に白いヒゲをたくわえていた。この変な爺さんが着ているのは、旧首長連合傭兵部隊の軍服である。闇市場に流れたものだろうが、おれは眉をひそめた。

爺さんが適当にレバーを動かすと、爪がうねうねと蠢き、ボンネットの上で、一つの赤い光が明滅した。ライトではない。投光機なら、運転席の横にくくり付けられているではないか。カバーの中で、縦に並んだ円い光源からは、一種の「視線」が発せられているようと思えて仕方がなかつた。

おれたちを襲つた掃討車の「眼玉」のようだ。

爺さんの頭を撃ち抜くのは簡単だ。距離は近いし、障害物はない。しかしだからといって、今のところは、ぶつ放す理由もないのである。

おれはパインソングをホルスターにおさめて、コンクリートの陰から姿をあらわした。モグラの赤い眼が、警戒を示すように、ちかちかと瞬いた。爺さんは運転席から身を乗り出して、ぶ厚い眼鏡の縁に手をかけ、こちらを凝視した。おれは片手を上げた。

「景気はどうだい」

「はん、退化猿人ではなさそうだな」

「猿人だと？」

むつとした。なんでこんな地の底で、こんな古いぼれにまで、ピルトダウン人呼ばわりされなくてはならないのか。

「知らんのか。スローミューントとも呼ばれる、赤い眼をした緑色のサルだよ。もつとも、本当にサルの一種なら、まだ可愛げがあったのだが」

爺さんの金切り声はよく通る。怒鳴っているわけでもないのに、よどんだ空氣をつんざくようだ。誰かに口調が似ている気がするが、誰なんか思い出せない。とりあえず、おれがサル呼ばわりされたわけではないらしく、またさしあたつては、爺さんに害意はないとおぼしい。

おれはモグラに歩み寄り、その奇態なボディをあらためて眺めた。見れば見るほど、変てこなクルマだ。

爪の後ろ、腕の付け根にあるカバーの下には、太い車輪が仕込まれている。後輪の代わりにキャタピラがついている。運転席の後ろに積載スペースがあり、荷を覆うシートが膨らんでいる。テールに折りたたまれているのは、ジャッキをおもわせる一本のアームである。

視線に気づいて目を向けると、ボンネットの上で、一つの赤い光がすうーっと消えた。ちょうど視線を逸らすような具合だ。

「いい車に乗ってるね」

「自信作だよ」

「あんたが作ったのか？」

呆れ果てたリアクションを、感嘆していると解釈したのか。爺さんは運転席の上でふんぞり返り、まんざらでもなさそうにヒゲをひねつた。

「ここには材料には事欠かない。都市のジャンク屋どもが涎を垂らしそうな宝の山や。もつとも、退化猿人どもどこ対面する気になればの話だがね」

爺さんが一帯に住みついでいるのは明らかだろう。モグラがネグラというわけだ。マキの口ぶりでは、頑丈な隠れ家に籠もるならともかく、身軽に野宿できる環境ではなさそうだつたが。しかもワームのみならず、爺さんの言う退化猿人とやらが跋扈しているとすれば、なおさらのこと。

そもそも、どうやって食い物を得ているのか。確かにレアなガラクタには事欠かないだろうが、雑草ひとつ見当たらぬ不毛の荒野だ。追い剥ぎでもしない限り、生きるすべはないのではないか。（追い剥ぎ、ね）

なるほど、とぼけた外見に騙されがちだが、その可能性はおおいにある。「幽霊船」は「わけあり」人間の集まりだとされているが、案外、内部での結束は固く、排他的である。外部から逃げこんできた「わけあり」人間は、よそ者とみなされ、たちまち居場所に窮してしまう。こんな地の果てまでも、落ちてくる者は案外多いかもしれないのだ。

もはや後戻りはできない、かれらの行き着く先は、封鎖された壁の中か、もしくは、「地獄」しかない。いや他人事ではなく、ここに典型的な見本がいるではないか。

となると、モグラには人の臭いを嗅ぎつける、ある種のセンサー

があるのかもしない。偶然をよそおつて獲物に近づき、とぼけたキャラクターで油断させ、寝込みを襲う……黙りこんでいるおれの頭上から、爺さんの声が降ってきた。

「はん、お前さんが考えている」とくらいい、だいたいわかるわい。お察しのとおり、お前さんの姿は、とつてこの子の鼻が捕捉しておつた

爺さんはモグラを「この子」と呼んだ。愛しそうに、灰色のボーテイを軽く叩いた。

「ただ奇妙なのは、お前さんの影が、まるで降つてわいたよう、元のとあらわれた点だよ。サイキックの中には、よく稀に、瞬間移動能力を持つ者がいるようだが、お前さんの顔を眺めてみると、どうしてもそんなふうには見えんのだ」

おれは苦笑した。そんな便利な力があれば、今じろ地の底を這いずり回つてなんかいない。

爺さんは軍服の胸ポケットをまじぐり、皺くずりになつた煙草の箱を取り出した。瞬時、視力が十倍になつたように、箱の絵柄が目に飛び込んできた。そこでは巨大な蛸の化け物が、海の底から蝕腕を伸ばし、帆船をからめとつていた。

クラーケン！

たちまち蒼ざめたおれを尻目に、爺さんは悠々と一本取り出し、力ちりと火をつけた。皿せうに煙を吸いこみ、長々と吐き出した。声が震えた。

「ちょっと待て」

じろりと、ぶ厚い眼鏡の後ろで、視線が移るのがわかつた。いつたい、「変化」はいつ、あらわれるだろうか。万人が凶暴化するわけではないと、カラリは言っていたが……おれはいつでも爺さんの心臓を撃ち抜けるよう、ポケットに手をかけた。実際に「変化」がおどぞれてからでは、遅すぎるのだけれど。

恐るべき煙草を口の端にくわえたまま、かさかさの唇が一ヤリとゆがんだ。

「ほお、こいつに反応しあつたか」

「なに?」

「残念ながら、こいつはダメーだよ。何かが売れれば、必ず贋物や、まがい物を作るヤカラが出てくる。市場原理の基本じゃないかね」「あんたも含めて、かい?」

「話が早くて何よりだよ、お若いの」

半分だけ警戒を解いた。

「一本試させてくれないか」

「煙草をたかるのが上手いの?、お若いの」

マキのナイフ投げに匹敵する正確さで、煙草が一本だけ飛んできただ。さすがに点火するのがためらわれたが、冷ややかな視線を感じて、バンジージャンプする思いでマツチを擦つた。吸い慣れた、合成煙草の味しかしなかった。

こいつが単なる地底の浮浪者ではなく、闇煙草、というか贋麻薬作りも兼ねているのなら、追い剥ぎなどしなくとも、食つていけるのは道理だ。むろん、ブローカーが一枚噛んでいるのは間違いない。

爺さんは仲介者から原料を受け取り、加工して手渡す。そのための機械くらい、簡単に自作できるだろ？

が、しかし、

「なあ、爺さん。そいつはずいぶん危険な商売じゃないのかい。古めかしい経済用語を使えば、リスクがでかすぎるつてもんだ」

当然そんなことをすれば、船内の自治団はあるか、麻薬密売組織側からも睨まれる。いずれ地底まで追手がたどり着くのは、時間の問題だろ？なのに命を懸けるほど、金になる商売とはとても思えない。

「なんでこんな、ややこしい真似をするんだ」

「愉快だからさ」

片方だけ、眉が吊り上がるのがわかつた。こいつならやりかねないと思う反面、どうも誑かされているような気がして仕方がない。たちまち舌を出してトンボ返りすれば、爺さんはキツネに、モグラは岩にドロソと変わるのでないか。

そういううちに、周囲がだいぶ暗くなっていることに気づいた。モグラは影法師と化しつつあり、赤い「眼」だけが輝きを増すようだ。間違いなく人工光であるのに、暮れてゆくのはどういうわけだ？ おれの戸惑いを察したように、爺さんはカラカラと笑った。

「地獄にも昼夜はあるよ。」この明かりは要塞だった頃の残留太陽電池に因つてあるのだが、いかんせん供給量が少なくての。日が暮れると、自動的にほとんどカットされてしまうのさ。時にお若いのモノは相談なのだが、ワガハイをお前さんの家に、一晩泊めてもらえんだろうか」

黙秘権を使っていると、爺さんはさらにまくし立てた。

「なに、忽然とレーダーに影が現れたのだから。お前さんがサイキックでなければ、あとは、よほど気の効いた隠れ家から出てきた可能性しか残されておらん。ワガハイ、今の暮らしにこれといつて不足は感じぬが、人間の習性といつやつでな。たまには、屋根のある所で寝たくなる」

「屋根なら、頭の上に最初から、ばかでかいやつがついているだろ  
う。雨が降るわけでもあるまい」

「雨ならたまに降つてくるわい。排水とオイル混じりのやつがな。  
排気口の向き次第では風も吹く。夏は熱風、冬は寒風が二日三晩吹  
き止まない。さすがにそんなときは、汚染地帯で野宿したほうがマ  
シだと嘆きたくなるよ。それに……」

レンズの奥で、爺さんの目がキラリと光つた気がした。急に箱ご  
と投げて寄こした煙草は、数本を畳にばらまきながら、弧を描いて  
おれの手に収まった。蝕腕を伸ばした蛸の化け物は、薄闇の中で息  
づいているようだった。

「ワガハイと懇意になつたほうが、お前さんにどつても、何かとお  
得なんじゃなかろうか。詳しい事情はわからんが、こいつの出所を  
追つているんだろう」

「マキ、おれだ。風呂は済んだか?」

ノックしつつ声をかけた。おれの隣では、よれよれの大きな鞄を一つ提げて、爺さんがもの珍しそうに、鏑の浮いた鉄扉を眺めていた。背後には、太古の怪物のように、モグラが黒々と横たわっている。

「ほほお、氣の効いた隠れ家だわい。まつたく、遺棄されたコンテナが転がっているようにしか見えんて」

しきりに感心する小男の隣で、おれは溜め息をついた。じつに爺さんは、頭二つぶんくらいは小さい。こんな不得体の知れない小怪物を、中に入れてしまってよいものか、まだ心の隅で迷っていた。マキの意向次第では、追い返さうと思案するつむじ、中から声が応えた。

「済んでるわ。せつあきょっと部屋が揺れたけど。だいじょうぶなの?」

「まあな。といひで、お密やんを連れて來たんだが」「は?」

彼女は絶句した様子。爺さんとの経緯を説明すると、少し考えてから、「直接話させて」と言つ。目顔で合図したといひ、爺さんは親指を立てた。ドア越しに、マキが尋ねた。

「あなたの名前は?」

「久しく呼ばれておらんから、思い出すのに苦労するわい。たしかトリベノといったかの。ファーストネームは忘れた」

やはりどこかで聞いた覚えがあるが、思い出せないまま。

「船の人間?」

「例えるなら、船倉に忍びこんだ密航者といったところだよ」

「わかりやすい例えね」

「しかも幽霊船の船倉だからね。化け物の宝庫であり、どこへ行き着くアテもなし」

マキは少し笑つたようだ。この爺さん、見かけによらず、女の子の機嫌をとるのが巧みだ。そう考えながら田を向けると、またしても親指を立てやがつた。マキは言ひ。

「オーケー。エイジ、入つてもらつて」

おおいに不満ではあつたが、ロックが外される音を確認して扉を開けた。マキは何事もなかつたように仮面を被り、同じ服を身につけていた。洗つたあと、速乾粉をまぶして絞つたのだろう。多少、香水がきついのは、「ゴクツブシの体液の臭いまで、消せなかつたものとおぼしい。

トリベノは彼女の姿をみとめると、オペラ歌手のようなお辞儀をした。レードルを片手に、マキはくすぐつたそこに肩をすくめた。「ちょうどビタ食を作りすぎたところ。三人前はあるけど、よかつたらう」「一緒にいかが?」

「願つてもない。セーヨリータの手料理なら、例え「ゴクツブシのチリソースでも、喜んで」

苦虫を噛み潰しているおれの隣で、爺さんはまた貴族的に腰をかがめた。一十分後には組み立て式の食卓を三人で囲んでいた。トリベノの白髪には、ヘルメットの跡がべつたりとついていた。ぶ厚い眼鏡はかけたまま、よほど腹が減つていたのか、旨い旨いと騒ぐかたわら、道化芝居のように料理を詰めこむ。

ちなみにマキは、仮面の可動部分をわずかに持ち上げ、食べ物をスプーンで器用に口へ運んでいる。あまりにも自然な光景なので、おれは瞬時、それが仮面であることを忘れかけた。そういうばつトリベノも、最初から彼女の仮面など存在しないように振る舞つていた。おれは尋ねた。

「あなたの見立てじや、この隠れ家はどれくらい安全なのだろう」「いや、実際、驚いたわい。カモフラージュは完璧。強度もちょう

としたショルターに匹敵する。お前さんをえ、のこに出て来なければ、きっとワガハイもあの子も、見過ししておつたるうて」

あの子？と首をかしげるマキに、モグラだよとおれは答えた。膨張パンを頬張ったまま、爺さんは真っ赤になつて青筋を立てた。「あの子をモグラ呼ばわりせんでほしい。ジユリエットという立派な名前がついてある。まあ、お嬢さんには、夜が明けてから紹介しようつかの」

食卓が整うのを待つ間、爺さんはもう一度外に出て、モグラ……いや、ジユリエットを瓦礫の間に隠し、シートをかぶせたのだ。どこも操作しないのに、赤い「眼」が薄くともり、ゆっくりと消えるのをおれは見た。まるで眠くて仕方がないといつたふう。

「一晩、無事に明かせねばの話だが」

「おいおい、縁起でもないことを言つた。さつきあんた自身が、太鼓判を捺したばかりじゃないか」

「やりと笑つた口の端に、爺さんは煙草を挿しこんだ。かさかさの手の中で、パッケージの毒々しい絵柄が映えた。今にも蝕碗を蠹かせそうな怪物を眺めながら、無意識に眉をひそめた。やはり、こいつを中に入れたのは間違いだつたのだろうか。

煙を吐き出して、トリベノはつぶやく。

「お嬢さん、退化猿人をご存知かな」

「名前だけなら」

「ほお、どこで耳にされた?」

「父が言つていたわ。死ぬ前の父は、脈略のないことを口走るようになつていただけど。なんでも、そいつが急に殖えはじめたせいでの地下でなく、船外へ脱出することにしたとか……」

無言でうなずいて、トリベノは煙草を揉み消した。かたわらの鞄を引き寄せる、右腕を突っ込んで、搔き回しはじめた。みょうなものが出したら、ぶつ放す氣でいると、やがて帆布の切れ端に包まれたかたまりをサルベージした。

テーブルにスペースを作り、油の染みた帆布を載せた。果実の皮を剥くように包みが解かれると、オレンジ大の、白くかわいたものがあらわれた。

「サルの頭蓋か?」

にゅっと突き出た一本の犬歯が、まず目をひいた。下顎は欠いている。眼窩が大きくてぐられ、頭は後方にひしやげている。人間の頭蓋の面影を留めてはいるが、ずっと野性的かつ攻撃的な印象。頭蓋そのものが、ひとつの大鋭利な兇器をおもわせた。

しかしいつたい、この骨から発せられる、異様にまがまがしいインパクトは何なのだろう。古来、原始人類の化石を追う学者に変死者が多いと聞く。もしこいつがただのサルではなく、人類に繋がる進化の枝に属するものならば、それもわかる気がする。見てはいけ

ないもの、あつてはならないものを、田の当たりにしているようなのだ。

牙を剥いた頭蓋は、あまりにも背徳的な人類誕生の秘密を、今にも語りはじめそうである。存在のまがまがしさにおいては、IBをはるかにしのぐ「人類」がなぜ生み出されたのか……

「あまり凝視するのは危険だよ。骨になつてもなお、こいつは見る者を悪夢へ引きずり込むよ」

ハツとして顔を上げた。おれと田を合わせて、トリベノはまた二ヤリと笑い、白い骨の上に手をかざした。手品師のようにもつたいをつけたあと、くるりと骨を裏返した。マキが小さな叫び声を上げ、おれも咽の奥でうなつた。サルの頭蓋の裏側は、顎はおろか、頭骨の裏側にいたるまで、尖った歯でびっしりと覆われていた。

「とても尋常な生物とは思えない」

「厳密に生物と呼べるかどうか、ワガハイにも心もとない。いかんせん、専門外なのでな」

「生物でなければ何だというんだ。現に頭蓋骨を遺しているじやないか。機械生命体なら、外骨格の筈だろう。内部骨格をもつIBなんて、聞いたことがない」

「そう。アマリリスト除いては……」

「誰もIBだとは言つておらん。なるほど、現実と悪夢に片足ずつかけて、またがつてているようなところは、IBと似てゐるかもわからん。實際こいつを手に入れた当初、こいまで多くの歯は生えておらんかった。どうやらこいつは、骨になつてもなお、現実を浸蝕する能力を有するらしい」

「いつたいこれは？」

「退化猿人だよ」

部屋の温度が一気に下がつた気がした。トリベノは怪物の頭蓋を、再び帆布で覆つた。帆布が発するひどい油の臭いが、怪物の封印に役立つてゐるのかもしれない。鞄に仕舞われると、ホツとせずにはいられなかつた。トリベノはまた煙草に火をつけた。

「なぜこんなものが出現したのか。北方の都市では、人型のワームがあらわれたと聞くが、どうもワームやIBとは、発生の系列が異なっているようだ。ワームが人工生生命体の退化した存在だと仮定すれば、こいつは文字どおり、退化した人間だよ」

そんなばかな話があるだろうか。遺伝子の流動性が高い機械生命体と違って、人間の「進化」は気の遠くなるような時間を経たものだ。そうそう短い間に、遡行できるものではないだろう。たしかにクロツク鳥のような、短期間で大増殖した突然変異体はよく見かけるが、かれらは決して「退化」したわけではない。

うわ言のように、それらの疑問を口にすると、爺さんにしては珍しく、気難しそうにうなずいた。

「生物ならばな、そういう理屈も当て嵌まるかもしけんが。少なくとも退化猿人に関しては、古典的な進化論は通用しない。ダーウィンを飛び越えて、コングの領域に足を突っ込んでいるのだよ。その点もIBと似ておるかの。いずれにせよ……」

「物理的な障壁がどれほど役にたつか、保障の限りではない」

マキが言葉を受けて、そうつぶやいた。隠れ家の鉄壁も、アテにならないというわけだ。トリベノはまたうなずき、天井へ向けて煙を吐いた。蘆麻薬の煙の中で、電灯の光がにじんだ。

もの音を聞いたのは真夜中頃だろうか。

夜氣に浸されて、電灯の明かりが心なしか暗くなつたように感じた。

マキとトリベノは、毛布にくるまり、思い思ひに横たわつていた。仮面の中に、マキの寝顔は確認できないが、軽い寝息が夢の中にあることを示していた。爺さんのほうは、折れ釘のように腰を折り曲げ、周期的にイビキをかいては、静まることを繰り返した。さつきイビキが止んで数分後に、例のもの音が響いたのだ。

カリカリと、入り口のドアを、外から爪で引っ搔くような音である。

おれは壁に寄りかかつたまま、本から顔を上げた。虫食いだらけのこの本は、『電気技術の歴史』という、カノウ氏が無聊をなぐさめる目的で持ち込んだものとおぼしい。専門書かと思いきや、なかなか楽しい読みもので、とくに天才的変態科学者、ニコラ・テスラに割かれた章は、そのへんの三文小説よりもはるかに面白かった。

音は続いていた。

ともすると、常に響いている重低音に搔き消されるほど、かすかな音だ。けれど確実に、ドアの下から四十センチほどの部分を、恨みがましく、執拗に引っ搔いていた。

う、ん、とマキがうなつて、寝返りをうつた。おれは肩にかけた毛布の下で、脇のホルスターに手をしのばせた。パインソングリップは児器特有の冷たさを維持しており、不安を静めるのに役立つた。十五分ほどして、音はぱたりと止んだ。かわりに、ククツ、とう、含み笑いするような、氣味の悪い声が聞こえた。しかも爪の音と異なり、明らかに部屋の中から聞こえたのだから……

(やれやれ)

おれは右手の位置をずらし、ジーンズのポケットからM36を抜いた。

本を片手で支えた体勢のまま、室内に視線を走らせた。マキがまた苦しげな声を上げた。反射的にそちらへ目をやつたとき、叫び声をおし殺すのに、すさまじい労力を要した。なかば毛布をはだけて、うんと仰け反つた彼女の胸の上に、得体の知れない怪物が鎮座していたのだ。

大きさは人間の赤ん坊くらい。尖った耳。落ちくぼんだ眼窩。陰々と、赤く光る目。剥き出しの鼻孔。その下で、ものすごい笑みを浮べる口からは、白い一本の歯がにゅっと飛び出していた。ミイラ化した両棲類のような皮膚は、ぬめぬめと粘液に覆われた緑色だ。いちいちトリベノの挙げた特徴と一致する。退化猿人に間違いない。膝を抱えるような姿勢でうずくまつたまま、化け物は再び、ククツと鳴いた。いや、笑つたというべきか。こんなにも「黒い」笑みが存在するのかと思うほど、化け物の声は暗く、歯を剥いた顔はあまりにも陰惨である。

撃つべきか撃たざるべきか。

むろんこの距離からなら、M36でも、抜き撃ちに頭を吹き飛ばす自信はある。一刻も早く殺すべき相手だということは、本能が理解している。ただし、こいつのスキルがわからない。スキルという語は不適切かもしれないが、新種のワームや未確認IBは突然変異によって、次々と新たな身体機能を身につけてゆく。まるでスキルアップするように。

つまり頭を吹き飛ばしたところで、それがいわゆる本当に「頭」なのかどうか、経験によるデータがない以上、わからないということだ。事実、頭部がまるごと別個の寄生虫というワームが存在する。寄生虫は感覚機能を請け負うかわりに、本体から栄養をもらっている。もしも頭部、すなわち寄生虫が損なわれても、別の虫とすげ替えればよいわけで、余裕があれば、二つ、三つと「予備」を飼う

ことだつてできる。ほとんど悪夢に等しい生態だが、ワットの言いぐさを借用すれば、何が起きても不思議ではないのが、現代世界だ。もしも何らかの理由で、やつが頭部を撃ち抜かれても死ななければ、次の瞬間、マキの心臓がえぐられる恐れがある。現に、彼女の乳房をつかんでいる化け物の指先には、太く鋭い爪が見え隠れしている。どうやら伸縮自在らしく、伸ばせば一本一本が軍用ナイフなみの兇器と化すだろ。」

「やはり来あつたか」

「なに？」

「あの娘が、そこまで大きな闇を抱えておつたとはな。なに、いかにも夢見の悪そうな、お前さんが寝ずの番についたもんでな。やり過ごせるかとも考えたが、やはり人間が三人も集まつておればなあ。静かに寝かせてはくれなんだ」

見れば爺さんは依然として被皮ワーム、通称モンタムシのように毛布にくるまつたまま、もじもじと口だけを動かしている。けれど、寝言にして筋が通りすぎている、というより、寝言だと考えるほうがナンセンスである。おれは唇だけわずかに動かし、小声で尋ねた。

「どうすればいい？」

モンタムシはこたえた。

「簡単だよ。頭を吹き飛ばせばいい」

「しかし……」

「いいか、お若いの。お前さんは、弾が効かなかつた場合のことを恐れておるようだが、プロのガンスリンガーにあるまじき妄想だわい。なるほど、例えばリビングデッド化した人間であれば、何発弾を撃ちこんでも倒れんだろう。が、人間と退化猿人とでは、ウエイドが桁外れだろうに」

絶句した。

トリベノの言つとおり、我ながらプロにあるまじき固定観念に囚われていた。いくらマキを盾にとられて取り乱していたとはいえ、これほどの判断ミスはかつてなかつた。堰を切つて押し寄せる根本的な疑惑に答えるように、トリベノは語を継いだ。

「つまりそれがやつの力の一部なのだよ。不安や恐怖心を経由して、人の心をハッキングするのさ。だから何も考へるな。そうして、目を狙うことだ」

これ以上、躊躇する暇を自身に与えないために、迷わず銃口を前に突き出し、引きがねをひいた。あやまたず、目を撃ち抜く手ごたえを感じた。予期したとおり、緑色の怪物はマキの胸の上から吹き飛ばされ、扉の上部の合板に叩きつけられた。断末魔の両棲類をおもわせる、不気味きわまりない悲鳴を張り上げながら。

悪夢から急に覚めた動作そのままに、マキがびくりと跳ね起きた。と、爺さんが意外な素早さで横つ飛びに跳んで、彼女の腕をつかみ、激しく揺さぶった。

「どうしたというの！？」

「退化猿人に侵入されたわい。なるべく扉から離れなされ」

もはや彼女は寝ぼけてはいかなかつた。素早く状況を理解すると、

爺さんとともにジユードーの受け身の要領で転がって、壁まで後退した。銃を構えたまま一歩進んで、おれは一人を背中にかばう恰好。見れば、化け物は逆さまに扉の上に張り付いたまま、血まみれの顔におぞましい笑みを浮べていた。

ククツ、ククツという痙攣的な笑い声が、蠢く咽から発せられた。  
「くそつ。まだ、生きているのか」

うしろから、銀の光がまっすぐ飛んで、扉の上で、どすんと音をたてた。マキの投げたナイフで腹部を串刺しにされて、退化猿人は四肢をばたつかせ、また狂氣じみた悲鳴を上げた。続けておれが残り四発を撃ちこむと、腐ったズクロアの実のように頭部が弾けた。長い腕がだらりと垂れ下がり、血をしたたらせながら、ぶらぶら揺れた。

最初、頭部をえぐられた跡から、内臓が垂れ下がってきたのかと思われた。けれど、腸のように見えた一本一本が、幼体ワームをもわせて蠕動をはじめ、ナイフに絡みつくと、自身の体ごと、合板から引き抜こうともがき始めた。そのままは、頭足類の蝕碗にほかならなかつた。

蝕碗のうちの一一本は先端が異様に膨れていた。やがて膿みただれたように裂けて、中から赤い眼球があらわれた。背中でマキの短い悲鳴を聞いた。

「何なの、こいつ」

「さて、こうなると厄介だわい」

もう一本投げつけようとした彼女を、トリベノが制するのが、気配でわかつた。怪物の蝕碗は蠢き続けている。その動きは、壁の染みを凝視するうちに、生き物じみてくるさまと、どこか共通するようだ。こちらの頭は、はつきりしているつもりでも、幻覚を見ているような感じが抜けないのだ。

怪物は頭部を失いながら、またしても、ククツと笑い声を発した。まるで呼応するように、別の一角から、ケケツ、と鳴く声が聞こえた。

視線を移すと同時に、新たに弾を装填し終えたM36の銃口を向けた。天井に近い壁際に赤い目が一つ、不吉な星のように、陰々と並んでいた。次の瞬間、影のかたまりが飛翔した。太古に滅んだ大蛙のような声を張り上げて、ムササビかコウモリをおもわせる、手と足の間の皮膜を広げて。

意想外な行動であつたため、トリガーをひくタイミングを逃した一匹めの退化猿人は電灯に激突し、唯一の照明を叩き壊した。まずい！ おれは爺さんとマキの体を引き寄せ、ともにぶつ倒れるように、床に伏せた。頭上すれすれを、おぞましい叫びとともに、カミソリのような翼が通過した。鋭い足の爪がマキの鉄仮面をかすめ、火花を散らした。

「痛いわね、こん畜……！」

彼女は絶句したようだ。見上げると、闇と化した室内の至る所に、赤い光点が浮いていた。背筋を冷たいものが何度も走った。少なく見積もつても三十匹はいるだろう。

「なあ爺さん、ここでおれたちが惨殺されたら、密室殺人の成立だな。死体を発見する者がいればの話だが」

「この期に及んで、笑えないパーティージョークだわい。ワガハイも気づかなんだが、どうやら最初からこの隠れ家は『汚染』されておつたようだ。やつらにとつては、通り道も同然の」

「ゴタクはいいから、解決策があれば教えてくれ」

「とりあえず、二人とも下手に動いてはならぬ。武器は厳禁。とにかく、ちょっと待つておれ」

とても対策とは呼びがたい意見だが、従うほかに、どうしようもなかつた。

退化猿人どもの眼光は熱をもつのか、闇がねつとりと、肌に纏いつくようだ。何かがぞろぞろと蠢く、おぞましい気配が大気を満たし、奇怪な含み笑いや、わけのわからない話し声がそれに混じつた。この中でじつとしているのは、なかなか至難の技である。

マキの細い肩が、かすかに震えているのがわかる。常人ならヒステリックに叫びだしているところ、仮面の下で唇を噛んでいるのか、懸命に沈黙を守っている。そのことが、彼女がこれまで耐えてきたプレッシャーのすさまじさを想起させた。

（）で忘れずに明記しておかねばならないのは、トリベノが何らかの装置を操作した形跡が全くなかつたことだ。むろん、大昔の二ンジャ小説のように、呪文を唱えたり、印を結んだりもしなかつた。ただ小声で「伏せろ」と言つたばかりである。

轟音と頭上をすつ飛んで行くドアは、掃討車による襲撃の再現といえた。怪物どもはかん高い警戒音を張り上げ、翼を広げて飛び回つた。しかしつたいあの頑丈な鉄扉を、何者がスツ飛ばしたのか。顔を上げて見れば、土煙にかすんで、上下に二つ並んだシグナル状の赤い光が、闇の向こうから覗いていた。

モグラだ。

「ジュリエットだと言つに」

何も言つていないおれの頭を、トリベノはポカリと殴つた。それを合図に、おれはマキの手を引いて駆け出した。このあたりも昨日の体験そのままだが、今回は走る方向が反対だ。信じがたい素早さで、爺さんはとっくに先頭を駆けていた。ヘルメットの上から怪物

に蹴られて、痛てつ、などと間の抜けた声を上げる。おれは頭上に毛布をかざし、彼女」と包む恰好。

「こじこじだ、と言わんばかりに、モグラは赤い「眼」を明滅させた。まつ先に飛び出した爺さんは、巨大な爪を足がかりにボンネットを踏み越え、運転席に転がりこんだ。この爪が、扉をぶち壊したのに違いない。おれたちも跡に続くと、すでにレバーを握ったトリベノが、顎で後ろを指した。運転席と荷棚の間に隙間があり、二人くらいはなんとか納まりそうである。

「しつかりつかまつておれ！」

いつたい何につかまればいいのかと突っ込む間もなく、トリベノはレバーを、めいっぱい後ろに引いた。ぎゅるぎゅると、キャタピラが空転する恐るべき音が響いた。さすがにマキが悲鳴を上げた。振り落とされなかつたのは奇跡である。背後で瓦礫を粉碎しながら、モグラは猛然と後進した。

星が見えたような気がする。けれどもそれは、おれの目から飛び出た星だったのかもしれない。

「エイジ、撃つて！」

マキの声で我に返つた。いつの間にかモグラは頭を前にして、すさまじい土煙を生み出しながら進んでいた。土煙の中に赤い星が揺らめいた。こんなに赤く輝く人工衛星は見たことがない。ぼんやりとそう考えたとたん、憎悪をぎゅっと凝縮したような顔が面前で牙を剥いた。

ギィイイイー———。

額を撃ち抜いた。トリベノの頭にとまつた一匹を、マキがナイフで両断した。血や臓物が飛び散り、蛾とも鞘翅類ともつかない昆虫と化して逃げ去つた。M36を撃ちぬくし、バイソンを抜こうとした手をマキが留めた。周囲から、不吉な星々はすでに消えていた。やがて熱病じみた光が、徐々に闇を溶かはじめた。地底における

る夜明け。ようやく発電機が息を吹き返したらしく、少なくとも、闇を棲みかとする化け物どもの襲撃からは、一旦逃れられたことを意味する。壁だけ残った建物の脇でモグラが止まり、トリベノの中が大きく伸びをした。

「ケガはないかね？」

「安全運転のおかげでね。盛大にたんごぶをこしらえた程度さ」

「お前さんの脳細胞は、ちょっと刺激を『えたほうがよいかもしけんよ。一服するかね』

肩越しに投げてよこした箱を、あやうくキャッチした。どうやら爺さん、隠れ家に持ち込んだ頭陀袋を、しつかりつかんで逃げたらしい。しかめ面を浮べて、贋麻薬の封を切つた。火を探してポケットをまわぐつていると、隣からマキがマツチを差し出した。彼女もまた、リュックを持ち出すことを忘れなかつたようだ。

おれはといふと、毛布一枚、引っつかむのがやつとの有様。しかもそいつは、怪物どもの空襲にさらされて、見るも無残に裂かれていった。煙を吐きながら苦笑いを浮かべ、毛布を外に放り出した。その下から、例の『電気技術の歴史』があらわれたときは、我ながら呆れた。

こんな役にもたたない古本を、後生大事に抱えて逃げたらしい。

モグラはゆっくりと走っていた。時速五キロも出でいないだろう。マキは荷物の上に座り、おれの肩の辺りで、足をぶらぶらさせている。トリベノは頭の後ろで指を組んで、呑気そうに煙草をふかしている。アクセルを踏んでいるのは確かだが、あとは手放し運転。たまに瓦礫を避けてカーブするとき、どうやっているのか、さっぱりわからない。

「そもそも正午くらいだろうか。

相変わらず、瓦礫の荒野が続いていた。永遠の黄昏をおもわせる、赤い光に照らされた世界は、文明の滅びた未知の惑星といったところか。

「おい爺さん、行くアテでもあるのかい」

田の前で、傷だらけのヘルメットが横に振られた。今さらながら、おれは呆れた。

「アテもなく走っていたのか。あんたにだって、一応、仕事があるだろ？」「

「働くのは趣味じゃないんですね。よほど食うにこまらん限り、こうしてぶらぶらしてあるよ。まあ、定住するよりは、常に動いていたほうが安全という面もある。そのことは、お前さんたちもタバ思い知つたばかりだろ？」「

「ね、トリベノさん。あなたは何を探しているの？」

マキの声に反応したように、モグラが前進を止めた。ひとつ、ひとつ、しゃくり上げるようなエンジンの音。真っ黒な排ガスのにおいては、明らかにガソリンとは異なる。燃えるものなら何でも燃料にしてしまう、八幡ブランザースの車を連想させた。短くなつた煙草を、トリベノは、 puff と吹いて捨てた。

前を向いたまま、かれが乾いた声でつぶやくまで、十一秒ほど要した。

「探しても仕方のないものを、だよ」

「わたしの父も探していたわ。とこりより、偶然、探し当ててしまつたと言つべきかしら。決してそこにあつてはならないものを」トリベノの肩が、痙攣的に震えるのがわかつた。次に振り返り、肩越しに彼女を見上げたが、ぶ厚いレンズのせいで、目の表情は読み取れない。沈黙のあと、かれは溜め息をついた。

「飯にしよう。ワガハイの腹時計が、正午の時報を鳴らしておる」エンジンが切られ、震動が止まつた。マキはけれど、それ以上追及しようとした。

車から降りると、細かい瓦礫が、防酸靴の下で、ぱりぱりと踏み潰された。周囲にはとくに障害物はなく、見晴らしがいい。昼飯を食うには比較的安全な場所といえるだろう。マキは持参したリュックの中から、缶詰をいくつか取り出した。トリベノが荷台にもぐりこみ、加熱器やら食器やらを引っ張り出してきた。

おれはやることがないので、コンクリート塊にもたれて、『電気技術の歴史』を開いた。泥炭の燃えるにおいを嗅いでいるつむぎとうとして本を取り落とした。

「少し眠つたら？ 昨夜は一睡もしてないんでしょう？」

彼女の声には笑いが混じつていた。目から星を出している間に、一睡くらいはしたかもしれないが。苦笑しながら本を取り上げ、何気なく眺めて首をかしげた。乱丁本らしく、中ほどのページが白紙になつている。一枚めくると、そこも白紙。さらり一枚めくつたところで、思わず咽の奥から唸り声が洩れた。

急いで顔を上げると、一人は食事の準備に夢中で、じゅうじゅうはない様子。本に鼻をくつづけるようにして、もう一度目を落とした。両側の白いページには、同じものを描いたらしい、いくつかのスケッチが描きこまれていた。お世辞にも上手いとは言えず、急いで描いたような、簡単なスケッチだったものの、おれの心臓を瞬時

に凍りつかせるには充分だつた。

(こいつは……)

中心に「眼」が嵌めこまれたタマネギ型の機械。根にあたる部分には、無数のケーブルが接続され、八方に分岐している。芽の部分は上部で水平にカットされているが、省略した表現なのか、それとも本来こうなつていたのか、わからない。

とにかくこの簡単なスケッチの全体から醸されるおぞましさは、言い表しようがない。まるで狂氣のビジョンを、そのまま描き写したものである。ひとつの大なる「眼」をもつことから、オディロン・ルドンの悪夢的な版画を連想させるが、背徳的なまがまがしさは比べものにならない。

震える指でページをめくつた。これ以上見ていたくないという思いに駆られて。そこにも鉛筆で描いたらしい、略図がかき込まれていた。一種の立体的な地図といつべきか。これこそカノウ氏が見た「ここにあつてはならないもの」の位置を示した地図に違いない。

さりに一枚めくつた。これまで文字は確認されなかつたが、そこには一ページに一文字ずつ、二文字が見開きいっぱいに書きなぐられていた。

球根！

カノウ氏の書き込みはそこで終わっていた。本を閉じて、無意識に膝の上に押しつけた。おそらくまつ蒼になつているだろう、顔を上げると、やはり二人ともこちらを見てはない。マキはともかく、とくにトリベノにこのことを告げてよいものか。もしも彼女が睨んだとおり、かれが球根を……いや、バルブを追い求めているのだとしたら。

「エイジ、まだ寝ぼけてる？」

びくりと肩が上下した。首筋を伝う、冷たい汗の感触。強いて微笑んでみたが、笑顔に見えたかどうか心もとない。極力さりげなく本を上着の中に押し込み、かれらに近づいた。

加熱器の上に鍋がかけられ、缶詰の青菜と肉が煮えていた。大きなスプーンで、マキが食器に取り分けているところ。

飯を食つ氣分ではなかつたが、胃は温かい食事を喜んでいるようだ。あらためて、自身の貪欲なまでの生命力には呆れてしまう。狂乱の果てに朽ち果てようとしている、この世界を目の当たりにしながら、なおもおれの体は食い物を求め、生きようと欲している。呆れるほど図太い神経に支えられて。

とある学者の統計によれば、現代人はおよそ五百年前の人間と比べて、放射能への耐性が二十倍以上高いのだとか。五百年前といえば、限定的民主主義の時代か。もしもかれらをタイムマシンにむりやり乗せて、この世界に連れて来れば、一週間を待たずに死を迎えるだろうとその学者は述べていた。

「ここ」でほかに人を見たことがある？ もちろん、煙草屋とわたしたちを除いて」

金属のカップにあやしげな紅茶を注ぎながら、マキが尋ねていた。爺さんは口の端に煙草を挿しこんだ。

「人、という定義にもよるがの。ヒトのカタチをしたものなら、案

外よく見かけるよ」

「みょうな言いまわしだな」

おのずと眉をひそめた。ヒトのカタチをしたヒトでないものといえば、どうしても「擬人」を思い浮かべてしまう。あるいはヒトの成れの果てであるという、退化猿人をも。

おれはついに、カノウ氏の書き込みについて話さなかつた。本はさりげなく丸めて、ホルスターの脇に突っ込んでおいた。さいわい、マキも爺さんも本の行方には無関心で、追及する気は全くないようだ。トリベノは言う。

「生粹の船の人間で、ここへ落ちて来る者は極めて少ない。その点は、お嬢さんも心当たりがあるだろ?」

マキはうなずいた。カノウ氏がここに隠れ家を作つたのも、おそらくは船の人間の目から逃れるためだった。

「逆に幽霊船の船底といえば、ある意志をもつた外部の者たちの間では、けつこうな名所でな」

「ある意志とは?」

「みずから命を絶つための、さ」

「いわゆる、象の墓場か」

「なかなかの詩人だね、お若いの。たしかに、象の墓場というのは、人の願望が生み出した詩なのかもしれない。なぜ絶望した多くの人間が、こんな所に死に場所を求めてやつて來るのか、なぜ社会に背を向けたあと、世界の果てを目指すのか。ひとつの文化人類学的謎としか言いようがない。中でもこの場所は、生と死の境界が限りなく曖昧な所での」

眉間にシワを寄せて、トリベノは煙を吐いた。永遠の黄昏を背景に、煙は奇態な頭足類のように身をくねらせた。かれは続けた。

「例えば、瓦礫がちょっと小高くなつた辺りに人影が見えたとする。五人以上が一列になつて歩いていたとする。お揃いの白っぽい服を着ているのかと思って、近づいてみれば、皆、三メートルを超える背丈で、全身がぼうつと光つておるのだよ。顔の特徴もわからない

のつぺらぼつでな。瓦礫の丘を越えたといひで追いついてみると、跡形もなく消えておるのだよ」

「とんだ怪談話だな」

「さよう、じのての話には事欠かんよ。水溜りの中へ、何だかわからぬものがいるのを見たこともある。深さ五メートルばかり溜まつた汚染水の中を、そいつは這つておるものか。やはり白っぽい全身がのつべりしておつて、太い尻尾のよつなものが、生えかけておつたな」

マキに田を遣ると、仮面の口もとを手で覆つていた。話題の方向性を変える必要がありそうだ。

「もしかすると、あんたの煙草には少しばかりホンモノが混ざつているんじゃないか。おれたちが知りたいのは、そんな幽霊の類ではなく、より素性のはつきりした連中についてだ。例えば……」

「イーズラックのような」

言葉を継いだマキへ、トリベノは鋭い視線を向けた。これまで見たことのない眼光が宿つていた。かれが何か言おうとしたとき、かたわらで猫が鳴いた。

猫が？

泥炭のほの暗い炎が、異物のように屈座っていた。

繰り返しになるが、現在、デイタンという単語は本来の意味をとつに失つており、可燃性の汚染物質くらいのニコアンスで用いられる。むろん、多少なりとも放射性物質を含んでいると考えられるが、気にする者はあまりいない。気にしていては、この断末魔のような世界では生きていけない。

地上が日没を迎えると同時に電気の供給がカットされ、地底は再び闇につつまれた。おれとマキは、ここへ来て二度めの夜を迎えた。歓迎する気などさうもなくとも、この黒マントの影法師は必ずやつて来る。ほとんどが夜行性であるワームどもや、あのおぞましい退化猿人を引き連れて。

もとは何の施設だつたかわからない、ドーム状の壁の内側に、おれたちは身をひそめていた。壁の割れめからモグラを引き込んで、半分ほど余るスペース。トーチ力に似ており、現に、銃眼をおもわせる小さな窓がいくつか開いていた。

缶詰を温めた夕飯のあと、おれたちは泥炭のまわりにうずくまり、ぼんやりと赤黒い炎を見つめていた。長い間、口をきく者はだれもいなかつた。

当面、懸念されるのは、退化猿人の再襲来である。怪物どもは明らかに知能らしきものを有している。行動の根底には、まるで I.B のような人間への憎悪がつかがえる。復讐にあらわれないと考えるほうが不自然だろう。

とはいものの、おれの頭は、何度も膝の上からすべり落ちそうになつた。ごく短い夢が断続的に、あらわれては消えた。要するに、こくりこくりと、なかば居眠りしている状態。いつ化け物が襲つて

きても不思議ではない状況にありながら、あまりにも甘美な睡魔の誘惑に屈しかけていた。

泥炭の向こうで、爺さんはあぐらをかいて座り、しきりに猫の背を撫でていた。漆黒の、つややかな毛並みの上を、骨ばった手がすべると、静電気のか何なのか、細かな緑色の火花がこぼれた。黒猫は糸のように耳を細くし、ときおり咽の奥から、ごりごろと声を洩らした。

トリベノの視線は、けれど、猫の赤い首輪の上に、じつと注がれていた。注視するだけで触れようとしなかつたが、少なくともジヤンク屋の一彦が言つたことと、同じ事実に気づいてゐるのは確實だろう。

モグラはシルエットと化したまま、沈黙を守つていた。「眼」の光も消えて、爪を揃えてうずくまつた姿は、眠れる異獸そのものだつた。マキはナイフの手入れに余念がなかつた。ずいぶん減りもし、退化猿人の血で汚れたりしたナイフたちを磨き、帆布の上に一本ずつ並べてゆく。おれはまだ、例の絵地図のことを切り出せずにいた。引き潮のように、また意識が遠退いてゆくのがわかつた。

声のしたほうを振り返ると、瓦礫の間の暗がりで、ちかちかと瞬く緑色の星が一つ見えた。もう一度可愛らしい声がして、それが生きた猫の耳にほかならないことを確信させた。

ある意味、IBと出くわすより驚きは大きかつた。こんな場所に、小型の哺乳類が単独で棲息できるイワレはない。なんらかの理由で「落ちて」きたのだとしても、五秒を待たずにワームの餌食になつているだらう。武装した人間ならともかくも、ここで生きた猫にばつたり出会いの確率は限りなくゼロに近い。

マキがむしろ周囲に耳を配つたのは、おれと同じ考え方を抱いたからだらう。必ず近くに「飼い主」がいなければならぬと踏んだのだ。こいつがチエシャー州出身の猫でない限り。

けれど少なくとも半径百メートル以内は、ブルドーザーで慣らさ

れたような瓦礫の原で、猫ならともかく、人が隠れるスペースなどまったくない。ならばやはり奇跡的に生きのびた幸運な猫だと考へるよりほかにない……と、トリベノがあれたちを追い抜き、緑の星の前にしゃがんで、チツチツチと奇妙な音を鳴らした。

今どき、それではクロツク鳥もおびき寄せられまい。そう考えた矢先に、緑の星はゆっくりと瓦礫の下から這い出してきた。すらりと均整のとれた肢体。夜の闇そのものを身に纏つているような、つややかな毛並み。ぴんと尻尾を立てたまま、この小動物は後ろからトリベノの足もとに回りこみ、胴をすりつけた。

すりつけるとき、緑色の火花が散った。首に巻かれた赤い、不可思議な金属の輪。そこに浮き彫りにされた、古代装飾めいた模様は、見違えようがなかつた。

ブルートウ！

驚愕に目を見開いたおれを無邪気に見上げて、猫はまた可愛らしく鳴いた。

「夢でも見たのかね」

「いや、現実は夢よりも奇なり、ってね。夢の演出家がどれほど奇想を凝らしても、たちまち現實に追い抜かれちまう。商売上がつたりというわけで、路頭に迷つたかれらは、売れないと場末の酒場でクダを巻いているのさ」

「きみこそ詩人だねえ、エイジくんとやら。時に、ワガハイに何か言いたいことがあるんじゃなかろうか」

「察しがいいね。しばらく彼女と一人きりにさせてくれないか」

銀色の刃の上から、マキが視線をこちらへ移すのがわかつた。

トリベノは何も言わず猫を膝からおろした。おれが差し出したM36を、片手を上げて断り、代わりにマキのナイフを一本押借して、口笛を吹きながらトーチカの外に出た。

「奇麗な猫ね。まるで純血種みたい」

寄ってきた猫の背に手を触れて、彼女は言う。軽く撫でると、やはり指先から緑色の星が、ちかちかとこぼれた。彼女は何気なく「純血種」と口にしたが、じつに逆説的な単語である。遺伝子操作によって愛玩用に改造された小動物は、むしろ人工種と呼ぶべきではあるまいか。

ただし、この猫に限っては、必ずしも愛玩用に改造されたわけではなくさうだが。

「プルートゥという名だ」

「冥府の王、か。トリベノさんじゃないけど、エイジは詩人ね」

「おれがつけたわけじゃない」

猫を撫でる手が止まる。うつむき加減のまま、マキはつぶやく。「いつたい何が起きているのかしら。わたしが詩、みたいなことをつぶやいても似合わないけど。あなたが現れてからというもの、世界は魔法にかけられたようだわ」

「どんな魔術にもトリックはある。たとえ神の手によるものだとしても。タネが見えるか見えないかの違いに過ぎない」

「トリベノさんに席を外させたのは、わたしにタネ明かしをしてくれるため?」

マキの印象がいつもより柔らかく感じられた。相変わらず硬い仮面に隠されているが、むしろそれゆえに、秘められたたおやかさが引き立つようだ。少々ぞざきながら、おれは上着に手を突っ込んだ。次の瞬間、差し出された『電気技術の歴史』を、彼女はためらいがちに受け取った。

「これは？」

「端が折れているページを開いてみてくれ」

立つたまま、カノウ氏の書き込みに彼女が目を通し終わるまで、煙草をゆっくりと一本吸つた。眞いものではなかつた。靴で火を揉み消しながら、彼女の溜め息を聞いた。

「やれやれという感じね。タネ明かしどころか、余計に混乱が増すばかり」

泣きだすかと身構えていたところ、意想外な声の明るさに、ずいぶん救われた気がした。たとえ好意を寄せている相手であれ、愁嘆場はごめんこうむりたいという、おれは冷酷非情な人間だ。新しい煙草に火をつけ、同情の力ケラもない質問をするくらいしか能がないのだ。

「絵地図に示されている場所がわかるか？」

「ええ。このての地図を、父は多くファイリングしていたわ。いわば、『幽霊船』の裏技リストってとこかしら。ただ眺めているだけでも楽しくて、子供の頃からよく覗いていたの」

「そいつはステキだ。ならばこの地図の断片も……」

「当然わたしの頭の中の絵地図に、嵌めこむことができる」

唸りながら、彼女の隣に立ち、開かれたままのページを覗きこんだ。悪夢的な線の集積から、一つ目の球根があれを睨み返した。

ピルトダウン人みなみの頭をどんなにひねつたところで、こんな所に忽然とバルブが出現した理由など、わかるわけがない。またこの化け物が合成麻薬「クラーケン」とどう関わっているのか、知るよしもない。あるいは全く無関係なのかもしれない。が、何か引っかかる。鋤びついた思考力の底で、何者かが叫んでいる。

おれは煙草を捨てて、彼女を抱き寄せた。

「エイジ……？」

瞬時、彼女の細い体に、肉食獣めいた緊張がみなぎつた。だがすぐくに真意を察したらしく、すっと力が抜けるのがわかつた。腕の中には、ただしなやかな肉体だけが残つた。唇が、仮面の耳もとにひ

んやりと触れた。

「あの爺さんをどこまで信用していいかわからないが、必要な情報を握っているのは確かだろう。なんとか地図が示す場所まで、やつを引っ張って行きたいんだ」

「わかった。でも、わたしも詳しいわけじゃないんだけど、バルブを収納するためには、少なくとも原子炉なみの設備が必要なんですよ。こんな『ミニ溜めみたいな場所に、ぽんと放り込んでおけるようなシロモノではない筈よ』

「実際、そのてのミッシングリンクだらけさ。だからこそ、欠けたパズルのピースを埋めるためにも、あの男が必要な気がする」咳払いが聞こえた。振り返ると、モグラに片手でもたれて、トリベノが立っていた。もう片方の手に引っ提げたナイフには、多脚ワームの幼生が一匹、貫かれていた。なおも蠢く脚を眺めて、おれは眉をひそめた。

「こんなチビ助でも、襲われればたちまち骨にされてしまうからのう。そもそもお邪魔させていただくよ、ドン・ジュアン君」

「ドン・キホーテの間違いだろう」

トリベノは口の端を吊り上げた。その後ろで、モグラの赤い眼が、すーっと光を消した。

ものの三分で交渉は終わった。

「プランは最良の安定剤だからのう。少なくともそいつが進行している間は、ひたすら闇雲な人生と向き合わなくてすむ」

トリベノはみょうな皮肉を言つばかりで、具体的な「プラン」への質問はいつさい寄こさず、そこが不気味といえば不気味だが、やえに話は早かつたのだ。何を考えているのかわからない点を除けば、かれは協力的といえた。自作とおぼしい「船底」の図面を広げて、彼女との打ち合わせに余念がなかつた。

横目で一人を眺めながら、夜明け前に少し眠つた。マキと踊る夢を見た。

ブリューゲルだか誰だかの絵に、中世期の農民たちのダンスを描いたものがあった。絵の中で、女と組んで踊る農夫たちは、コドピースと呼ばれる股袋をつけ、勃起した男根を、これ見よがしに誇示していた。

数年前、酔狂な業者がこのコドピースを復活させて売り出したところ、旧政権時代のデカダンス趣味と合致してか、大いに流行した。乳房と異なり、千年にわたつて抑圧を余儀なくされてきた男根は、ここにおいて、復権したかに見えた。流行が一年で終息し、再び公けの場における居場所を失うまで。

夢の中で、おれはそのコドピースを装着していた。猫の仮面をつけた楽師が、ポンコツのヴァイオリンでジーヴを搔き鳴らしていた。農夫の恰好をしたおれと異なり、彼女は鉄仮面の下に、バロック期の貴婦人のようなドレスを身につけていた。

くるくると回るたび、スタッキングに包まれた脚が、腿の付け根まで露わになつた。

音楽のテンポが落とされると、おれたちは体をぴったりとくつろつて踊っていた。「ドピースがコルセットに食い入った。彼女が身をすべらせる動作も、舞踏の続のように自然でなめらか。おれの腰を抱くたちにひざまづき、力チリと音をさせて仮面の底を少し持ち上げた。唇が、『ドピースを呑みこんだ。

舌がからめられた。

「顔を洗いたいんだが」

「汚染水でよければ、ほれ、いくらでも溜まつておるわ」

「わかったよ。ちゃんと飲むから、水を一杯くれ」

モグラの荷台の後部には給水タンクが設置されていて、少なくとも五十リットルは入るようだ。隠れ家でも補給していたので、まだ満タンに近い筈だが、こと水に関する限り、爺さんはものすごくケチになる。きっと渴きで死にかけた経験があるのであらう。

朝飯を食う間、なかなかマキを正視できなかつた。やわらかな唇の感触が、まだ股間にまとわりついてた。彼女は相変わらず鉄仮面の底を少し持ち上げ、長めのスプーンを起用に動かしていた。その先にある見えない唇が、かえつてリアルに思い起こされるようで、おれはまた目をそらした。

「もともと猫はあまり好きじゃないんだけど」

昨夜以来、ブルートウはすっかり彼女になついた様子で、缶詰の分け前を一瞬で平らげたあと、彼女の膝の上で目を細くしていた。爪楊枝を使いながら、トリベノが尋ねた。

「犬のほうがお好きかの？」

「飼つたことはないけど、たぶんね。かれらの行動は単純明快だし、狩りや護身に役立つ。でも猫は……」

「甘えるだけの愛玩物に過ぎない、か」

そう言つておれは疑問混じりの煙を吐いた。なるほど、犬を好む性格はいかにも彼女らしい。合理的なシンプルさを好み、不合理な暗い情念を切り捨てようとする。そうすることで、狂氣じみた世界

の混沌から身を守っているようにも見える。だが果たして本当に猫は、ただの愛玩物として取り入れられたのか。

「何を考えているの？」

「太古の魔法使いについてさ。そいつはきっと女で、一匹の黒猫を連れている」

午後から「雨」が降り始めた。降るさまは地上の雨と変わらないが、赤い色をしていた。鮮血の赤ではなく、錆びた鉄の色。

おれは荷台の上に防水シートを広げ、猫を抱いたマキとともに、元の下に潜りこんだ。トリベノは悠然と運転席で煙草をふかしながら、かたわらにくくりつけてある「ウモリ傘を開いた。

「はん、この程度では雨のうちに入らんよ」

それでも高濃度の汚染水を浴び続けるのは、気分のいいものではない。雨の中を一時間ほど走つただろうか。シートの隙間から覗いていると、前方に建造物の黒々とした影があらわれた。古城をおもわせる真っ黒な塔で、先端はしきりに水を滴らせていく「天井」まで達していた。

「何だあれは」「なにしろ歩いたほうがましな速度で走つてゐるついで、雨に煙つているため実体がつかみ難い。強いて例えるならば、気の触れた芸術家が溶鉱炉をお伽話のお城に仕立てたような建造物、とでもいおうか。もし純粹にマテリアルな産物だとしたら、悪意が売りものの芸術家たちは、あまねく首をくくらねばなるまい。

「支柱でしょうね、おそらく」

マキがつぶやいた。カノウ氏の書き残した地点、バルブの所在地まで行くために、まず「支柱」の内部を通して「船底」を脱出する計画なら聞いていた。が、

「ただの支柱にしては、ものすごく趣味が良すぎないか」

「様々な装置の複合体でもあるのでしよう。せっかく上部と連結しているんだから、ついでに多くの回路をバイパスさせることを、わたくしだって考える」

技師の娘らしい意見である。

塔をめざして、もどかしい速度でモグラは接近した。とっくに機能が停止しているのかと思えば、内部からオレンジ色の灯りが、かすかに洩れているのがわかつた。雨の中で、てらてらと光沢を帶びた鉄の肌。銃眼のような小窓から光がこぼれるさまは、鬼の棲む城にほかならない。副塔の円錐屋根に似た部分は、ゆっくりと回転していた。

あつ、とマキが声を洩らした。彼女の視線を追つて天井を見上げ、おれもまた唸つた。塔の先端は「天井」に嵌めこまれた巨大な顔の口へ呑みこまれていたのだ。いにしえのロックバンド、キングクリムゾンの有名なジャケットのような顔に。

「まったく、いい趣味じゃないか。顔みたいに見えるのは偶然なんだろうが。」丁寧に、ちょうど両目と口の部分が光つてやがる

もとからこのよつた意匠だったのではなく、破損と風化が生み出した光景なのだろうが。現実は、ますます悪夢と見分け難くなつてく。奇怪なアニメズムの世界へと退行してゆく。

胃に響く、重低音と震動。

中は意外にがらんどうで、オレンジ色の薄明かりに照らされたさまは、ツアラトウストラ教の礼拝堂を、数十倍拡大したような印象。完全に吹き抜きになつているとおぼしい塔の先端は、けれど中途から闇に包まれて、覗くことができない。

爺さんはモグラの荷台からガラクタをいくつか引きずり出すと、地面にあぐらをかいて、何やら組み立て始めた。ハンドキャノンに似ているが、ぽつかり穴が開いているだけで、弾丸を込める仕掛けと場所が見当たらない。首をかしげている間に、みょうにサマになる手つきでそいつを構えてみせた。

「風砲だよ」

例の「人食い私道」で一葉が使つた武器ではないか。ブラザースの話では、空気を撃ち出す装置としては、一葉が用いたサイズが限界だと言つていたが、爺さんは優に三倍はある。さらにかれは、筒の先にアダプターのようなものを取り付け、そのままモグラのテールに潜りこんだ。顔に油をくつつけて出てきたとき、ようやく意図が読めた。

テールのボタンを操作すると、ジャッキに似たアームが、ピンと持ち上がつた。モグラが尻尾を立てた恰好である。その下にワインチがあり、トリベノはワイヤーを手で引き伸ばすと、先端の鉤を風砲のアダプターにセットした。

ほん、と腹に響く音がして、ワインチがガラガラと空転した。ワイヤーの尾を引きながら、フックははるか頭上の闇の中へ消え、鉄の壁に食い入る音をたてた。力を込めてワイヤーを引き、鉤が外れないことを確認すると、端にくわえた煙草ごと、爺さんは満足げな笑みを浮べた。

「ちょっと待て。まさかとは思つが……」

「そのままかだよ」

ワインチは、けれど安全帯に過ぎなかつたよつだ。鉄の円筒の内部を、モグラがクライミングする姿は、おれの想像をはるかに絶していた。

トリベノは運転席の前部に後ろ向きに腰かけ、レバーを握つていた。当然、モグラもまたテールを前にした恰好。ジャッキ状のアームの先端を壁に突き立てつつ、ずり落ちないよう、六本の爪でしがみつきながら、垂直方向に登攀して行くのだ。最も生きた心地がしなかつたのは、荷台にしがみついている、おれとマキであることは言つまでもない。

「おじ爺さん、壁を這うモグラなんて聞いたことがないぞ。ヤモリか蛙にモデルチェンジしたほうがいいんじゃないか」

「ジュリエットをモグラやヤモリと一緒にするでない。汎用性は掃討車の比ではないわい」

掃討車、という単語に胸を突かれた気がした。考えてみれば、おれたちがここへ「落ちて」くるきっかけを作つたのが、掃討車にほかならない。しかもそいつは、これまで見たことがないような「眼」を有していた。

今のところ、モグラの武装は確認されていないが、トリベノの言うとおり、それなりの装備を加えれば、掃討車を軽く上まわる兵器ができるあがるのではないか。刷新にとつても旧勢力にとつても、トリベノの技術は、どんな犠牲を払つても確保するに足るものではあるまい。

「爺さん、あんた……」

「減らず口を叩いている暇があつたら、援護射撃くらいしてほしいものだわい」

言われて目を凝らすと、頭上の闇の中に浮かぶ、いくつもの赤い光点に気づいた。火の粉にしてはじつと動かない。かといって、星が見えるわけがない。もとから、あの辺りだけべつたりと闇に包まれているのが不思議だつたが、まがまがしい光点を見て、たちまち疑問は氷解した。

「冗談じゃない。退化猿人の巣を突破する気か?」

「ほかにルートがないからのう。それに今は昼だ。サルどものパワーも半分くらい衰えておる」

半分もあれば腹いっぱいである。氣休めにもならない氣休めを聞き流しつつ、荷台を盾に、パイソンを抜いた。

トリベノやマキと違い、生活力に乏しいおれは、掃討車に襲われたとき、まんまと頭陀袋を置き忘れたが、銃弾だけは肌身離さず身につけていた。タマがなければ、ガンスリングガーはゴクシップシの抜け殻より役に立たない。

モグラはじつにのんびりした速度で、地獄の生き物たちの巣窟へ近づいて行く。聞き覚えのある、惡意に満ち満ちた含み笑いが降ってくる。まったく、昨夜は奇跡的にこいつらの襲撃を避けられたというのに、ホッとしたのも束の間、みずから災厄の中へ飛び込んで行くなんて……

フォックス教といつても様々な流派があるらしいが、顔見知りの巫女の婆さんが言つには、災厄は繰り返すものだとか。例えば多脚ワームに襲われて、命からがら助かった者は、もう一度、同じワームとばつたり出くわす可能性が高いのだとか。カルマ、とかなんと婆さんは呼んでいたが、そいつは片方の燃える車輪のようなもの

であるらしい。

繰り返し繰り返し、巡つてくる性質があるらしい。

(うんざりだぜ)

闇はモグラの悠長さにしひれを切らしたのか、それ自体が巨大な漆黒の軟體動物と化したように、円筒形の壁をぬらぬらと這い降りてきた。その言語道断なおぞましさ。今すぐぶつ放したい気持ちを懸命におさえつつ、わざとゆっくりとハンマーを起こした。カチリという音を聞いて、いくらか落ち着く思いがした。

「マキはなるべく伏せている。もしあれの体に直接食いつくやつがいたら、そいつだけ斬つてくれればいい。あと、ブルートウを……」  
しつかり抱いていてくれ。そう言おうとした矢先に、敏捷な黒猫はひょいと彼女の腕をすり抜け、荷物の上に上半身を乗り出していくおれの隣に、トンとしがみついた。足の裏に磁石でもついているのかと疑うほど、平然と立つているのだ。

ミヤア、と呑気な声で鳴く。猫にだけ聞こえるよつ、おれは囁いた。

「おまえがどんな超兵器でも、『主人様がいなけりやただの猫だろう。ネズミじゃないんだから、退化猿人なんか食つたつて、きっと不味いだけだぞ』

それとも、イースラックの占い師、アリーシャは近くまで来ているのだろうか。これまでもそうだったように。ブルートウは彼女の影のように行動しているのだろうか。

(わたしが、あなたの未来を変えてさしあげます)

彼女の面影を、目をしばたかせて払いのけた。今はなるべく、余計なことは考えないほうがいい。頭の中のビジョンを、夢を食つ、退化猿人につけ込まれてはかなわない。ブルートウには好きにさせておくとして、フロントサイトの向こうへ視線をこらした。粘液質の闇が、無数の凶星を浮べたまま、覆いかぶさるよつにせまつていった。

全身汗みずくになり、しかも体は芯まで冷えきっていた。それで

もトリガーに指を添えたまま、じつと待つた。

闇に完全に呑まれるのを見極めて、おれはすかさずぶつ放した。

そのまま息もつかせぬ撃つて撃つて撃ちまくり、弾がなくなると、ほつかほつかのシリンドラーをスライドさせると、薬莢を落とし、銃ごとマキに手わたした。彼女がパイソンに弾を込める間、M36が火を吹いていたことは言つまでもない。

轟音と叫喚。化石油の闇の中、飛び散る血の色ばかりが、いやに鮮やかに映えた。地獄にほかならない光景に溺れそうになりながら、火薬のにおいを氣つけ薬代わりに、手わたされたパイソンのグリップにしがみついた。

それは血ではなかつた。

闇の奥で揺らめくのは、血の色をしているが、凝り固まつた炎のようだつた。

撃つことも忘れて、魅されたように炎を凝視した。めらめらと揺らめきながら、真の闇を背景に、炎はひとつ生き物じみた形へと変化した。茸をおもわせる、すんぐりとした胴体のわりに、いやにひょろ長い手足が生えている。首がない代わりに、腹がぱっくりと裂けて、櫛の歯のような数限りない牙があらわれた。焰はタテガミと化してぞわぞわと揺れた。

そうして化け物の胴といわば肘といわば爪先といわば、無数の、きらきらと蠢く「眼」が埋め込まれているのだった。

自身が絶叫していることにさえ気づかなかつた。

漆黒の塔を登りきつたといふ、クリムゾンキングの顔の中は、要塞時代の動力室の一部であつたようだ。

「当然、閉鎖ブロックなんだろうね」

「しかも、開かずの間と言われている場所よ」

「聞いたことがあるな。どこからも入り込めないブロックが、船の中には何箇所があると」

尻もちをついたまま、辺りを見わたした。十三、四メートル四方の部屋の壁には、機械やパイプ類がぎっしりと詰めこまれている。ぶううーーんという重低音と微震なら、相変わらず続いているが、さつきまでの狂氣じみた喧騒と比べれば、小川のせせらぎのよう心地よい。

壁の計器類などから光が洩れて、夕暮れ時程度の明るさはある。モグラの爪にもたれたまま、マキが無言で水筒を差し出した。咽を鳴らして飲み終えたとき、やっと生きた心地がした。ほほ間違いなく、ここはワームの巣窟だろうが、あいつらと比べれば可愛いものだとさえ思う。袖で口もとをぬぐうおれを、猫がじっと見上げていた。

「咽が渴いたのか」

「ミヤア」

掌に水をためて、鼻先に差し出した。かれは目を細め、赤い舌を出して水を舐めた。まるで灼熱する鉄を浸したように、じゅっと音をたてて、蒸気が上がった。

「熱つ！」

覚えず手を引くと、水がこぼれた。すっかり湯と化した水たまりと、おれの顔を交互に見比べ、猫は不思議そうに首をかしげた。爺

さんの笑い声が降つてきた。見上げると、運転席に半ば潜りこんだ姿勢のまま、トリベノはアクロバットな体勢でこすらを見下ろしきりにヒゲを揺すつていた。

「わっはっは。やはり規格外では多少、無理があつたようだわい。よく持ちこたえてくれたよ」

舌打ちをひとつ返して、猫の背に、そつと指を這わせてみた。たちまち静電気が弾けたような音をたてて、緑色の火花が散つたが、指は少しも痛まなかつた。かれはくすぐつたそこに、ミヤアと鳴いた。

トリベノは再びシートの先に顔を突つ込んで、かちやかちやと工具を鳴らしている。おれは尋ねた。

「あんなものを、いつの間にこしらえたんだ」

「理論的なベースなら、ずっと前から頭の中にでき上がつていたからなのう。あとは『現物』を見ながら、ちょいちょいと修正するだけでよかつた。もっとも、ぶつつけ本番で使うことになるとは思いもよらなかつたがのう」

また脳天気な笑い声が響き、おれは苦虫を噛みつぶした。トリベノは続けた。

「もちろん、システムを一から築くとなれば、気の遠くなるような時間と費用を要するだろう。ワガハイが一生をかけても、果たして完成したものかどうか心もとない。しかし今回は、システムの九十八パーセントは田の前にぶら下がつておつたわけで。ワガハイの仕事は鍵を偽造するだけだったからのう。ハッキングならお手のものだよ」

猫がもの欲しげな顔で、おれを見上げていた。念のために今度は水筒のキャップに水を移した。けれど、赤い舌が触れても湯気はたたず、軽く音を鳴らして猫は水を舐めた。それから、前脚を揃えて背伸びをするが、緑の眼が電気的に明滅し、背中で火花がぱちぱちと弾けた。

トリベノの言つとおり、プルートウの体に、かなり負担がかかっ

たことを物語るよつだつた。

「お若いの、これを使え！」

爺さんがん高い声に射られたよつて、おれは何割かの正氣を取り戻した。

振り返ると、ボンネット上にへばりついたまま、かれはちょうど何かを投げつけたといひ。くるくると回転しながら飛んできたそれを、面前でかるうじてキャッチした。見れば、携帯用の辞書くらいの鉄の箱で、一面だけ電子回路が露出し、複雑怪奇な模様を描いていた。

いつたい何のつもりか、尋ねる前に、トリベノが叫んでいた。

「若い頃はカード遊びに熱中したものでな。まだまだ指さばきも衰えちゃおらんが、いかんせん技術が足りなかつた。そいつをペラッペラに薄くするには、この先何十年かかるか知れたものではないわい」

「カードって、おい。まさか爺さん。これは……」

「その、まさかさ」

瞬時、洒落にならない状況を忘れて、電子回路を見つめた。陸棲の貝が無数に這い回ったような模様の中に、時おり緑色の光が走り、そのパターンは、明らかにブルートウの首輪と共に鳴るものがあった。

嵐の夜にも似た咆哮が前方から聞こえてきた。

赤い化け物は胴体が裂けた口から無数の舌を出し、退化した爬虫類のように蠢かせた。存在しない首の辺りでざわめく毛髪の中にも、いくつもの眼球が出現した。あのぶよぶよと揺れ動く退化猿人の群体の中へ、何の土産もなく突っ込む気にはとてもなれそうになかった。

トリベノは何を思ったか、モグラの速度をフルに上げたようだ。あらゆる関節が悲鳴を上げ、怒号するエンジンが真っ黒い煙を吐いた。いつまでも迷っている暇はなさそうだ。見れば黒猫は相変わらず目の前にあり、置物のような姿勢で前を向いていた。

「ブルートウ、ご主人に無断で力を借りるぞ」

振り返らずに猫はミヤアと鳴き、おれは勝手にイエスと解釈した。金属の箱をつき出したが、なにせぶ厚いので、アリーシャの華麗なポーズとは程遠い。首輪となるべく水平になるよう氣をつけながら、カード詐欺師の心境で箱を滑らせると、覚えず腕を引っ込めかけたほど、ぶううーーんという、強い電気的な震動が伝わった。

スパークしたかと思うと、ぽん、と音をたてて金属の箱が破裂した。さいわい、回路側が弾けたので、手首ごと吹き飛ばされずにすんだ。煙を吐く箱を放り出しながら、猫の首輪が真紅の光を放つのを見た。認証されたのだ。テレビジョンの電波が乱れるように猫の体が揺れたあと、むくむくと黒い影と化して、見る間に膨張をはじめた。

「うわああああっ！？」

おれの叫びは、多分に疑問符を含んでいた。

もちろん「偽造カード」はアリーシャの「純正の」カードとは、わけが違う。何も描かれてないのだから、プルートゥが何に変化するのか、鬼が出るかヤブから蛇が出てくるか、まったく予測不可能である。ただ叫びながら、呆然と影法師が何らかの形を描くまで、見守っているしかなかつた。

固体の影は三次元的な幅を保ちつつ、前方へぐんぐん細長く伸びた。やはり純正品でなかつたためか、アリーシャの時より時間がかかる。造型に苦しんでいるように見える。それでも影が懸命に描こうとしているのは、まったく未知の物体ではない。むしろおれにとって、馴染みの深い形に思えてくる。

「機関銃？　いや、違う……」

ガトリング砲ではないか！

それも博物館でさえお目にかかれりような、最高に古いタイプだ。レトロ銃器愛好家のおれでさえ、呆れて二の句が告げないほどに……前面が蓮の実を描く複数の砲身から成るのは、ガトリング砲だからまあ当然だ。問題は背面だ。そこにはルナパークのピエロが搔き鳴らす手回しオルガンについているような、ハンドルが取りつけられていた。

(猫のしつぽが化けたのかな)

この期に及んでそんなことを考へつつ、機関砲の脚がモグラのボディーにしつかり食い入つてることを確認して、おれはハンドルをつかんだ。それはひんやりと、金属的な冷たさを保つていた。もやは前は見なかつた。咆哮と腐臭。それ以上に圧倒的な、まがまがしい気配の塊が間近にせまつっていた。

ハンドルを回した。

轟音と火花。そして薬莢があとからあとから弾け飛んだ。あれも猫の体の一部かと思えば、少々心配になるが、とっくに質量保存の法則など超越している。耳を覆いたくなるような化け物どもの叫喚の中、飛び散る臓物をさらに粉碎しながら、確かな手ごたえを感じ

た……

「ガトリング砲になることは、最初からわかつっていたのか」  
煙草に火をつけて、おれは尋ねた。運転席から盛大にリベットを  
まき散らしながら、トリベノは言つ。

「いいや。鬼が出るかヤブからツチノコが出てくるかは、まったく  
未知数だつたよ」

「何の脈略もなく、ガトリング砲に変化したというのか。ちょっと  
不条理すぎないか」

「お前さんも理屈が好きだのう。ミヤクラクならあるよ  
」  
そう言つてトリベノは顔を持ち上げ、異様に柄の長い複合ドライ  
バーの先をこすりあへ向けた。

「え？」

「さよう。偽造カードをお前さんが用いれば、何らかの銃器になる  
だろうとは思つておつた。もしお嬢さんが用いていれば、おそらく  
刀剣と化したようにな」

煙にむせてみると、マキと田が合ひつ。仮面にして、驚愕の色がう  
かがえるようだ。おれはうなつた。

「ガンスリンガーとしての……いわばあれは、おれの夢が具象化さ  
れた姿だったのか」

鉄の通路を行く。生き残っている非常灯や、露出した機械からスパークする火花などで、そこそこの明かりはある。

マキとトリベノは、時おり立ち止まつては、絵地図を広げて、何事か囁きあう。少し遅れて行くおれは、M36を片手に、いかにもワームが潜んでいそうな隅々に目を光らせていく。

洞窟をおもわせる、こういう場所で最も注意しなければならないのは、吸血ワームNB309、アオゴウヤだ。ぶよぶよとしたゼリ一状のヒョウタン型で、天井から何十匹も垂れ下がつては身体に貼りつき、服の中に潜りこまれたら最後。浸透圧を変化させて皮膚に癒着し、あくまで血を食らう。

じつと湿度が高く、少し歩くだけで汗ばむほど。微妙な明るさといい、いかにもやつらが好みそうな環境であるが、実際は、第五、六種の、取るに足らないワームがコンクリートに齧りついているばかり。おれは首をかしげた。

「まるでA-L-3を使つたみたいだな」

「えつ」

マキが振り向いた。重たげな仮面をかぶつているわりに、彼女はじつに耳ざとい。さすがに暑いのか、上着を腰に巻いており、薄手のシャツが描く体のラインがなまめかしい。

アル・スリーとは強力な殺虫剤で、大量の白煙を吹き上げて広範囲のワームを殲滅する。ひところ盛んに閉鎖ブロックに投げ込まれていたが、隣接する居住区で深刻な集団中毒を招いたため、とっくに御禁制になつていい。もっとも、闇市には出回つてゐるし、モグリの同業者は遠慮なく使つてゐるが。

「とても閉鎖ブロックとは思えないってことさ。かれこれ一時間近

く歩いているが、まだ一発もぶつ放していいないんだぜ。むしろ下手な居住区より住みやすそうじゃないか」

言いながらトリベノに目を据えていたが、ちょっと口の端を歪めただけで、知らん顔して歩き始めた。

爺さんは頭陀袋とは別に、博物館行きの無線機のようなものを背負っていた。モグラの運転席の底から大汗をかいて取り外したもので、いつたいこんなガラクタが何の役にたつか、さっぱりわからぬ。というより、あれほど愛着をもつて接していたモグラを、かれがあつさりと乗り捨てたのが驚きだった。

トリベノの背中で、得体の知れない機械は、しきりに計器の針を蠢かせ、無数のランプを明滅させていた。そのさまは人工臓器を連想させ、またモグラが発していたと同様の「視線」が感じられるのだった。おれは何度も機械に目をやつては、また逸らすことを繰り返した。

ブルートゥはおれと並んで歩いていた。ピンと尻尾を立て、バレーナのように無駄のない足どりで。

やがて通路の先に光があらわれた。やはり人工的な明かりに違いないが、地底よりもかなり強い。そこから、カタツ、カタツ、一定の間隔で響く機械の音は、プリミティブな太鼓をおもわせた。人食い族が打ち鳴らす太鼓を。

トンネルの向こうは「街」だった。

街には音楽が流れていた。

低く、単調な旋律で、機械の太鼓と奇妙なセッションを奏でる、ワルツの三拍子。それはルナパークや博覧会のBGMをおもわせて、そういうえば、この風変わりな光景もまた、街というより古風な博覧会のテーマパークに似ているかもしれない。

街のたたずまいは、写真でしか知らない、第一次百年戦争前の商店街に似ているかもしれない。狭い通りの両脇に二階家が並び、それぞれの看板と飾り窓で、道行く者の気を惹こうとしていた。どの店にも、入り口が存在しないことを除けば。

(入り口がない?)

今さらのように驚いて、一軒の帽子店の前で足を止めた。ショウウインドウ越しに、灯りをともした店の中を覗いた。婦人用、紳士用、子供用、と、およそ人間の想像力が及ぶ限りの、様々な形をした帽子に囲まれて、値札のついたシルクハットを被った男が一人、飾り窓の外へ向かって、しきりにお辞儀をしていた。

「人形だよ」

「えつ」

「ここに並んでおるのは『店』ではないよ。実体のない広告なんだな。中身はそっくり立体映像さ」

喋っているのは、シルクハットの男ではなかつた。ヒゲをひねつているトリベノを、目をしばたかせて眺めた。ワームの巣窟だとばかり思つていたところ、あまりにもかけ離れた光景に幻惑されて、瞬時、かれらと歩いていたことさえ忘れかけていた。

隣の「店」はペットショップだった。ショウウインドウはお伽の国の子供部屋のように飾りたてられ、服を着た三匹の仔犬が閉じ籠められていた。犬たちは最初、お互いにじやれあつてたが、おれの姿をみとめると、ころころと尻尾を振りながらガラスに近寄り、鼻の頭をくつつけたり、立ち上がって前脚で引っ搔いたりした。店の奥には無数の檻が並び、様々な毛の色をした小動物たちが入れられていた。白衣の女が一人、毛の塊のような仔犬にブラシをかけながら、時々こちらへ顔を向けては、魅力的な微笑を振りまいていた。

「これも映像なのか」

「あまり長いこと見つめないほうがよい。光学的催眠術が仕掛けられておるからの。ものの五分も見ておれば、お前さんは仔犬が欲しくてたまなくなるだろう」

慌てて視線をショウウインドウから引き剥がした。

「そのての技術はロストテクノロジーに属するつて、学校で習つたぜ」

「学校では存在すら教えておらんよ」

「なんでそんなものが、こんな所に……？」

「ワガハイに訊かれてもな。ひとつだけはつきりしておるのは、こいつが対侵入者用の、手の込んだトラップだつてことさ。カタギの人間なら、二、三軒覗いただけで気が触れておる」

げんなりする思いで、「商店街」を見わたした。

天井が一階家のすぐ上までせまつている。あれでは屋上で洗濯物も干せないし、視界もさえぎられる。そもそも、どの一階にも窓がない、コンクリートで塗りつぶされた上に、巨大な看板をかかげているのだ。一階の脇から、人が潜れるくらいの巨大なパイプが突き出して、隣の一階と連結されている。

あるいは、あの中に入むスペースはなく、機械がぎっしり詰まっているのではあるまいか。ゼンマイ仕掛けの自動人形の台座のように。

おれたちとブルートウを除けば、通りには猫の子一匹歩いておらず、神経質な自動清掃車に掃き清められたように、紙くずひとつ落ちていない。どの「店」も真新しくはないが、看板といいガラスといい、執拗なまでに磨きこまれている。少なくとも、ここを管理している何者かがいることは、明らかである。

ただひとつだけ、辺りの秩序を崩している存在に気づいた。普通、

どの居住区でも、壁はおろか電柱やパイプから窓に至るまで、貼り紙やポスターの類いに埋め尽くされているものだ。今となつては懐かしくさえある、アルチュール・ランボー氏に案内された「幽霊船」の中といえど例外ではなかつた。

ところが、この「街」にはそれがない。金属とコンクリートが半々に入り混じつた壁は全て露出しており、ごく最近、磨かれた形跡さえある。にもかかわらず、目の前の店の壁には、ショウウインドウにはみ出すほどべつたりと、真新しい真紅のポスターが貼られていた。

顔を近づけた。めまいを覚えるほど、真新しいインクのにおい。けれど、おれが呆然と立ちつくしたのは、においのせいではない。半紙サイズの、光沢のある、チャイニーズレッドのコート紙には、書きなぐつたような黒いインクで、逆さ△の紋章が刷られていたからだ。

ツアラトウストラ教！

紋章のほかには、文字も数字も刷られていない。ポスターはその店に一枚、次の店に一枚、向かい側に一枚、と、無造作に、無差別に貼りつけたようである。それはどこか、奇怪な音楽と相まって、超小型偵察機ソフトボールの目を盗んで、ロックコンサートのビラを貼つてまわる、街の悪ガキどもの足どりをおもわせた。

「エイジ、あれ」

囁き声とともに、軽く肩をたたかれた。マキが顔を向けた行く手へ、おれも視線を走らせた。路地にぽつんと、一人の少年がこちらを向いて立つていた。小脇にぶ厚い紙の束を抱えて、しなやかな草食獣のように、じつとおれたちを凝視しながら。

(……ワット?)

とつさになぜそう感じたのだろう。

少年は竹本ワットよりも明らかに年かせで、十一、三歳くらい。背はずつと高いし、髪も普通に短い。白いシャツに、ぶかぶかの黒い吊りズボン。左腕には赤い腕章を嵌めており、この距離からでは

確認できぬいが、おそらく逆さAの紋章が、黒々と染め抜かれているに違いない。

無言の睨みあいが続いた。十五メートル近く離れているだろうか。それでも少年の顔が、非人間的なまでに整っているのがわかる。白い肌、切れ長の目、美しい鼻筋。少女のような唇は妖しげに赤く、どうやらかれは薄化粧をほどこしているらしい。そうして少年の瞳の色は、白金色に輝いて見えた。マキがナイフを抜く気配を感じた。

「よせ、子供だぞ」

彼女の前に肩を割り入れたとき、少年は踵を返して駆け出した。

「おい、待てよ！ 聞きたいことがあるだけだ」

白い背中は、たちまち先の角を左に曲がって消えた。振り返ると、彼女は鉄仮面を軽く左右に振つて、ナイフをベルトの鞘におさめた。もう一帯の筈もなかつたが、少年の足どりを追いかけておれたちも角を曲がつた。トリベノとブルートウは、黙つて後からついてきた。

同じ規模の店が並ぶ、同じような路地が続いていた。ここは一種の迷路であるまい。トリベノはトラップだと言つたが、侵入者を延々とさまよわせねば効果は倍だらう。赤いポスターはこの通りにも貼りつけてあるが、途中の楽器店を最後に、ふつりと途絶えていた。

あまり見たくはなかつたが、その店の飾り窓を覗かずにはいられなかつた。

意外にありふれた眺めで、いかにも宝物然としたピカピカの楽器に囲まれて、店員が背の高い痩せた男に三重ネックのエレキギターを売り込んでいた。客は外国人のようだ。うなずいてギターを受け取り、ストラップを肩にかけると、何気ない調子で試し弾きを始めた。左手の指が見えないほどの超絶テク。

ガラスに鼻をこすりつけんばかり、目を凝らした。見違えようがない。その外人は、おれが涎を垂らして新作を待ちわびているメタルスター、ジギー・バンデル・ルーデンではないか。あり得ない。あり得ないと呪文のようにつぶやきながら顔をそむけた。トリベノのイヤミな笑い顔がそこにあつた。

「何が見えたかわからんが、お若いの。よほどそいつのファンなんだな」

「冗談じゃない。こここの立体映像は、見る者の精神をハッキングして作り出されるのか」

「潜在的無意識を実体化させてしまう、スローミュータントと比べたら可愛いものだろう。まあやつらのような化け物があらわれたのも、戦争の遺物に引き寄せられてのことだろうが」

もう一度窓の中を横目で覗いた。店内はひどく暗くなつており、ジギーも店員も、跡かたもなく消失していた。代わりにそこに立っていたのは、ポスターの束を小脇にかかえた、吊りズボンの美少年だつた。おれは溜め息をついた。

「あいつもおれの夢なのかい。それとも、チョスの王様の夢なのかい？」

童話の女の子のセリフをもじつて、似合わないジョークを吐いても、トリベノは笑わなかつた。少年の整つた顔に、表情らしいもの

は何も浮かんでいなかつた。プラチナの眼差しで、じつと窓の外を見つめていた。自身が凝視されているようでもあり、どこも見ていよいよもある。かれの赤い唇が、花のようにほころんだ。

(挑発してやがる?)

無言で銃を抜き、真っ直ぐ腕を伸ばした。ガラスの向こうで、少年は平然と突つ立つたまま、愛玩動物のように小首をかしげた。ハンマーを起こし、トリガーを引いた。すべてのガラスが、なだれをうつて崩れた。

店の中は、まつ黒い箱のようで、天井から垂れ下がる複数の映写機が、突然夢を覚まされてうろたえるのか、きょろきょろとレンズをさまよわせていた。

「映像じゃなかつた……？」

マキがつぶやき、おれもうなずいた。奥の壁には、真新しい一枚のポスターが貼りつけられていた。

真紅の地に、まつ黒い逆さAの紋章。べつとりと刷られたインクのにおいが鼻をつく。壁と同じ色だからわかりにくいが、ポスターが貼られていく周囲には長方形の切れ目があり、ドアであることが知れた。M36ではガラスを壊すのがやつとなので、少年は傷ひとつ負わず、ここから逃げたに違いない。

ドアは難なく開いた。いかにも舞台裏という感じの路地に出た。両側にせまる壁は黒ずみ、錆びつき、無数のパイプが露出していた。その上にまた一枚。先へ目をやると、さらに一枚、もう一枚と、真紅のポスターが列を成していた。まるでおれたちをいやなうかのようだ。

トリベノはぼろぼろの絵地図を広げ、ゴーグル眼鏡の上で眉根を寄せた。うーんと唸つていて、かれが次に何を言い出すか、聞く前からわかる気がした。

「あやつ、『丁寧』にも、我々をバルブの存在する地点まで、案内しているようだわい」

もともとそこへ向かっていたのだから、追いかけることに異存はない。

ない。美少年はお世辞にも友好的とは言えないが。けつきょくのところ、物事はなるようにしかならない。おれはミッションを遂行するために。マキは両親の死の原因を突き止めるために。トリベノが何を目的としているのかわからないが、ほかに選択肢がないことだけは確かだ。

路地を抜けると、視界が開けた。そこには立体映像ではない、本物の街が広がっていた。店頭には商品があふれ、実際に手で触れることができる。路地を覗けば、洗濯物が所せましと干してある。人づ子一人いなことを除けば、どこの都市地区にもありふれた街並である。

いや、奇妙な点はそればかりではない。さっきの「商店街」と同様、こここの建物も全て二階建てで、上階に窓がなく、太いパイプで隣家と繋がれているのも同じだった。もしも俯瞰すれば、蜘蛛の巣状に繋がっている様子が見られるのではないか。

フカンすれば？

見上げると天井ははるかに高く、湾曲しており、まるでばかでかいカプセルに封じこまれているような印象を与えた。ゆえに天井にはばまれることなく、街の中心にそびえ立つ建造物の存在を許していた。赤銅色の巨大なドーム。それは否が応でも、ツアラトウストラ教の礼拝堂を連想させた。爺さんがつぶやいた。

「あそこが蜘蛛の巣の中心というわけだな。さてさて、中にはどんな蜘蛛が住んでるのやら」

かれもまた、この街を蜘蛛の巣に例えていたようだ。

街路には相変わらず人影がない。ほとんどの商店が開いており、ぐつぐつとスープが茹だっている店先もあるというのに、住人ばかりが、まるで伝説の中性子爆弾を用いたように、奇麗さっぱり消えているのだ。何者かに襲撃された形跡など、まったく見られないままに。

蜘蛛の巣の街、という歌があった。

おれが敬愛する、ジギー・バンデル・ルーデンの名曲である。もちろん詞も、かれ自身の手になる。が、まあ、かれが書く、たいていの詞は意味がわからないし、その曲も例に洩れず、歌詞だけ追えば、何がなんだかわからない。

火星には蜘蛛の巣の街があり、現在は廃墟と化して、赤い土に埋もれている。一人の歌手が街にたたずみ、ぼろぼろのギターをつま弾きながら、独りで歌い続けている。風化した骨や、凍りついた機械たちだけが、もの言わぬ聴衆である。

地球には「核の冬」がおとずれて、大半の人類が死滅した後である。厚いスマッグで大気は歪み、昼間でも太陽はあらわれず、ただ火星の赤い光だけが、異様に輝いて見える。

汚れた街角。殺人ロボットのスクラップの上で、ぼろを纏つた一人の少年が、じっと耳を傾けている。かれにだけは、蜘蛛の巣の街で歌う、男の歌声が聞こえるのだ……といった内容で、やつぱり意味がわからないが、この歌詞をジギーがアコースティックギター一本で、切々と歌うのを聞けば、込み上げてくる悲哀を抑えることができない。

おれはこのバラードを何千回も再生し、何千回涙を流したか知れない。今もメロディを思い出すだけで、泣きそうになる。

「おまえさんが感傷にひたるのは、勝手だがの」

見れば、トリベノが皮肉らしくヒゲをひねっていた。それから、中心にそびえる赤銅色のドームに向かつて、街路をに指を突きつけた。

「あれを見れば、もう後には引けんことが、わかるだらうて」

点々と続く真紅の光沢が目に入った。例のポスターは、明らかにドームへ向かつて続いているとおぼしい。

わかっているのだ。急におどされた感傷も、煮え切らないおれの心が、逃げ場を求めている証拠に過ぎない。おれは先へ進むのが怖いのだ。夕映えのような過去の感傷に、逃げこみたかっただけなのだ。取り返しのつかない破局を恐れて……

コシン、と足首に硬いものがぶつかり、見ればプルートウが、目を細めて見上げていた。おれは口の端を歪めて笑い、歩を進めた。追いつきながら、マキが言う。

「ね、エイジ。思い出したんだけど、本の挿絵で見た覚えがあるのよ

ポスターを貼つて回つている美少年の服装に、見覚えがあるという。

おれも、どこか引っかかるものを感じていたが、彼女に指摘されて、ようやく気づいた。白シャツに、ぶかぶかの吊りズボン。逆さまの紋章が入った赤い腕章。そのうえ薄化粧をほどこしたところも含めて、ソアラトウストラ教の聖歌隊の制服に違ひなさそうだ。

「……って、ことは。いや、そんなはずは……」

「ジークムント旅団かの」

言下に指摘され、おれは覚えず唸つた。ソアラトウストラ教の過激派、ジークムント旅団は、少年兵を用いることで有名である。

かれらは、産まれ落ちるとすぐ組織に引き取られ、ひたすら兵士としての教育を受ける。かれらは戦場でも聖歌隊の服装に身をつみ、ヘルメットその他の防具をつけない。死をまったく恐れず、撃たれても撃たれても、恍惚とした表情で前進する。少年たちには、特殊な麻薬が用いられているのだと噂された。

(麻薬が……まさか?)

目を見張つた。

少年がこれ見よがしに貼りつけるポスターが、逆さまの紋章であること。明らかな生活の痕跡だけを残して、街から人が消えている

こと。それらを思い合わせれば、ツアラトウストラ教の過激派あたりに急襲されたものと考えるのが、妥当かと思われた。が、果たしてそうだろうか。

「クラーケンは、ここで合成されていた」

おれはつぶやいた。爺さんが鼻を鳴らすのを背中で聞いた。

「はん。やつと気づいたようだの、お若いの」

「しかも、麻薬の製造にたずさわっていたのは、イーズラック人じやない。おそらくは、ジークムント旅団だ」

まるで応答するように、足もとで猫が鳴いた。そうだ。ここでイズラウンの禁断の技術が用いられた。人類刷新会議の拘置所を、袁れなサイキックの双子に襲わせたのも、この街の住人であった、かれら、ジークムント旅団に違いない。しかしそうすると、必然的に、さらに大きな疑問にぶつかることになる。すなわち、かれらをこの街から追つたのは、いったい何者か？

ポスターを追つて歩く間も、街路には相変わらず人影がなかつた。マキの両親は、大量の血を残して消えたというが、ここに住人は涙一滴こぼさず、消滅したのであるまいか。

けれど、街並自体は、こんな地の底にありながら、むしろ美しいのだった。背の低い二階家が整然と並び、「ゴミや落書きは全く見当たらない。さすがに街路樹はないけれど、道の脇には水路が流れ、透明な水をたたえていた。もっとも、透明だからといって、毒でないとは限らないが。いずれにしても、麻薬の密造・密売といったイメージからは、程遠いのである。

「エイジは、かれらがイーグラックではないと考えるのね。じゃあどうして、かれらの瞳は、色が違つたのかしら」

驚くほど思いつめたような声で、マキが尋ねた。無理もない。ずっとイーグラック人を親の仇とみなし、追い続けてきたのだから。

「イーグラック人の瞳の色がなぜ変わるのか、科学的には解明されていないんだよ。おれがあえて言うまでもないことだけど。ジーダムント旅団の場合、麻薬の副作用とも考えられる」

「洗脳されていたというのね。微量のクラーケンを与えて、麻薬の製造に従事させていた、と。エイジは、クラーケンに侵された人を見たんでしょう」

「ああ。でも、リビングデッド化した者たちの瞳がどうなつていたか、ちょっとと思い出せないな。瞳孔が開いて、腐敗も始まっていたから、やはり色素が飛んで、どろりと濁つて……」

電気的な信号に、こめかみを貫かれ、覚えず足を止めた。振り返ると、同様にマキも立ち止まり、通り過ぎたばかりの建物を、かえりみていた。爺さんがニヤニヤ笑いながら、腰に手をあてた。

「プルートウのほうが、コンマ五秒早かつたわい」

ひとつずつ建物のガラス張りの入り口が、三分の一ほど開いたまま

になっていた。ミラーグラスになつているのか、風景を反射するばかりで、中の様子は覗けない。また開いている部分は、濃い闇で塗りつぶされていた。

あやうく声を上げかけたのは、そこに人影を見たよつた気がしたからだ。ポスターの少年ではない。その証拠に、貼つたばかりのポスターが、まだ先まで続いている。それにおれが見た人影は、たしかに女だった。腰まで届くほどの、長い髪。そしておそらくは、猫のように光る瞳を見た。

明らかに、マキは戸惑つている様子だ。ナイフを抜いて踏み込むべきか。その点はおれも同じで、もし街の住人が残つているのなら、クラーケンに関する情報を引き出したい思いはある。場合によつては、銃にモノを言わせて……おれはマキの肩に手をおいた。

「引き返すという選択肢もあるだらう。招待に応じてからでも、遅くはないさ」

近づくにつれて、赤銅色のドームは、奇怪なディテールでおれの目を圧倒した。居住区の中心に位置するため、あたかも大聖堂のような印象だが、細部に組みこまれた機械類やパイプによって、こいつがばかでかい一つの装置であることが知れるのだ。

建物群が急に途切れた。目の前に横たわるのは広場ではなく、人々と水をたたえたプールだつた。ここからドームの入り口まで、唯一の、細長い橋がわたされている。

「それで……どの建物も一階の窓がなかつたのか？」

おれがつぶやくのを聞いて、トリベノがまた鼻を鳴らした。ビルトダウン人なみの頭脳が、ようやく追いついたようだな、とでも言いたいのだろう。つまり、この街そのものが、ドームを中心としたひとつの中核装置だつたのだ。今は居住スペースと化している一階部分は、もともと存在せず、支柱が立つていただけなのだらう。

そうしてどの家の二階にも、ぎつしりと機械が詰まつているに違いない。おそらくは、冷却装置が。

橋には欄干も何もない。やつと一人がわたれる幅の金属板は、全

長一十メートルを越えるだろ？ プールは深く、水は異様に青くて、天井から落下したとおぼしい瓦礫が、ごろごろと沈んでいた。瓦礫の間を、太古の甲殻類じみた生きものが、這つよつて泳いでいるが、水棲のワームとおぼしく、IBではなさそうだ。

一応銃を抜いて、そいつを警戒しながら、厭な揺れかたをする橋をわたった。向こう岸も鋸びついた金属板で、無数のリベットで補強されていた。顔を上げると、ドームの表面には、やや唐突な感じで、ドアが嵌めこまれていた。

むろん、童話的な樺の一枚板などではない。ハンドル式の取っ手のついた、ドアというより、ハッチと呼びたくなるシロモノ。その表面には、例の赤いポスターが一枚、べつたりと貼られていた。ハンドルを回すと、金具が外れる手応えを感じた。懸念されたようだ。鍵はかかっていなかつたが、重い扉を開けるのに、猫の手ならぬ、爺さんの力を借りなければならなかつた。鋸と薬品の入り混じつた異臭。覚えず鼻を覆つたとき、また電気的な信号がぴりぴりと脳を突き刺した。

「たぶんいると思ったんだ！」

悪態をつきながら、逆噴射するように扉から離れた。がちやがちやといつ、まがまがしい機械音が、中の暗がりで響いた。やがて這い出してきたものは、けれど、予期していたような掃討車ではなかつた。ぼろぼろに鋸びた救命カプセルを縦にして、昆虫じみた六本の脚で支えたような……軍用チャペックだ。

それもどえらく旧式なやつ。ひょっとすると、第一次百年戦争の遺物かもしれない。そいつが一体、一個の目玉をおもわせるセンサーをぎょろつかせながら、這い出してきたのである。

たしかこのタイプは搭乗型と遠隔操作型の二種があり、外見上の区別はない。両腕にあたる部分が小型のガトリングガンになつており、弾帯をぶら下げた姿は、いかにもおぞましい。

鉢合わせの戦闘に、火力の違いはさほどモノをいわない。何百年前だから知らないが、荒野にガンスリンガーが誕生した時代と同じである。より早く、より的確に、弾を撃ち込んだ者の勝ち。おれは片膝をつき、右側のやつの「眼玉」を、あやまたず撃ち抜いた。

眼窩が火を吹き、斜めに傾いだチャペックは、あつちこつちの継ぎ目から火花を吐き出しながら、ガトリングガンを乱射した。マキはすでに身を伏せ、トリベノはリュックを盾に、うすくまつっていた。抜け目のない爺さんだ。流れ弾を食らって、相棒の片腕が吹き飛んだ。打ち尽くしたところで、前のめりに倒れ、そのまま動かなくなつた。

その頃には、一体めの眼玉が吹き飛んでいた。念のため、おれは同じポイントにもう一発撃ちこんだ。そいつは一発も撃つことなく、文字どおり立ち往生したようだ。ざつとこんなものだと自贊したいところだが、こんな玩具にやられていては、処理班なんか勤まらない。

ウンともスンとも言わないのを確かめてから、おれはチャペックに近づいた。ぐるりと一周してみたが、首をかしげるばかり。

「首を捻挫でもしたかの、お若いの」

「見てのとおりさ。胴体を開く仕掛けも見当たらなければ、アンテナらしきものもない」

搭乗者もおらず、かといって操られている形跡もない。おのずと答えは一つに絞られる。すなわち、こいつはみずからの「意志」で動いていた、という。

意味ありげに笑うばかりで、相変わらず爺さんは何も教えてくれ

ない。が、ピルトダウン人なみの ore の頭脳も、幽霊船に来た当初から付きまとった符合に、さすがに気づいていた。眼玉だ。旧式にせよ、あんな眼玉のついた軍用チャペックなんか、見たことがない。そしてそれは、最初に襲ってきた掃討車と、明らかに同種の仕掛けである。

「問題なれば、先へ進もうかの」

大ありなんだが。あえて黙つていると、トリベノはリュックを背負い、マキも立ち上がり、膝を払つたりしている。口答えしても仕方がなさそうなので、おれはまた先に立ち、ドアを潜つた。

真の闇ではなかつた。中には薄明かりがあり、面前にそびえる、赤く錆びた金属の壁を、ぼうつと浮かび上がらせていた。どうやら壁が二重になつていいようなのだ。ただ、内部の壁には屋根がなく、第一の壁の天井付近で切れいていた。支柱だろうか、円筒形の巨大な棒を囲むように、無数のパイプが絡みつき、天井の中心に潜りこんでいた。

襲撃者があらわれる気配はなく、壁にはドアもハッチもない。そのまま壁に沿つて、反時計回りに歩を進めると、赤いポスターがまたひとつ見つかつた。ただし、これには光沢がなく、薄汚れて、所々、腐食したような穴が開いていた。明らかに、かなり以前に貼つたものとおぼしい。

「エイジ」

マキの目線を追うと、壁の上に金属のステップが打ちこまれていた。一人が登れるくらいの幅で、上方の切れ目まで続いている様子だ。

できれば御免こうむりたかったが、ほかに方法はなさそうだ。おれは火をつけた煙草をくわえて、ステップに手をかけた。乱暴に搖すつてみたが、しつかり壁に食いついて、びくともしない。おれの下にマキが続き、トリベノがシンガリをつとめた。ブルートウは爺さんのリュックに飛び乗り、あぐいをしているから呑氣なものだ。こんなところを背中から狙い撃ちされでは、ジ・エンドである。

眼玉つきチャペックたちに、もつちゅうと知恵があれば。そう考えると、ゾッとしない。しかも、さっきから何やら視線を感じて仕方がないのだ。動きを止めて辺りを見回し、トリベノの皮肉らしい視線とぶつかって、また登り始める。これを何度も繰り返した。

「五、六階建てのビルくらいはあるな」

落ちたらお陀仏だ。と言う代わりに、煙草を吐き捨てた。あやうく唇を焼くほど、すっかり短くなっていた。赤い小さな点が、壁にぶつかって火の粉を散らしながら、はるか下方の闇に消えた。

ようやくステップを登りつめた。もはや下を見る気力もない。ありがたいことにと黙りべきか、壁の上辺は意外に厚く、ちょっととした通路ほどの幅がある。中心の円柱に向かって、四方から橋がかかっている。いや、これも支柱に過ぎないのか、街路からドームへ至る橋と似たような、ただの細長い金属板なのだ。

足元の五メートルほど下まで、壁の内側には、なみなみと水がたたえられていた。こんな薄暗がりの中でも、その異様な青さが目についた。もし水の中に光源がなければ、こうは映らないだろう。現に、いくつかの弱い光点と、ひときわ強いて一つの光が、青い水の中に確認できた。数匹の水棲ワームが、光の上を横ぎつた。

マキは仮面の上から口もとに手をあてていた。まるでほとばしる悲鳴か、もしくは吐き気をこらえるように。トリベノを見れば、四つん這いになつて縁から身を乗り出し、じっと水槽の中を覗きこんでいた。日頃の皮肉屋はどこへ行ったのか、うつと苦悶するような声を洩らした。

「こいつが……バルブなのか」

だれに訊くともなく、おれはつぶやいた。情けないくらい、声が震えていた。

形状は、ほぼカノウ氏が遺したラフスケッチどおり。インクで染めたような青い水の底に沈む、巨大なタマネギ。その最もふくらんだ部分に、船形の「眼」が一つ。内部で何を燃やすのか、そこで緩やかな強弱を繰り返す光が、円筒形のプールをとおして、ドーム全体を照らす主な光源になっていた。

ぶ厚い壁をとおして伝わる振動。禁断の経典「クル・アル・ル・アーン」を読み上げる断食僧のように、震動は低い唸り声と化して、薄闇を呪いの言葉で満たすようだ。

バルブに関するおれの知識は、通り一遍等でしかない。実在する疑われる、IBに関するおびただしい伝説の一つといった認識だつた。だから、タマネギの化け物の中身が、どういった構造なのか。キュクロプスのような一つ眼が何を意味するのか、まったくわからぬ。伝説によると、IBを新たに建造するために、バルブが必要不可欠であるという。

子宮のように、あのタマネギの中で何かが生まれつつあるのか。胎動し、薄く眼を開け、震える腕を差し伸ばそうとしているのか。一部の氣の触れた連中にとって、IBを飼い慣らすことは、最大の宿願である。もはや手の施しようがない荒野のIBどもと異なり、みずからの手で新たに生みだせば、狂気の宿願はより成就されやすくなる。

見てはいけないもの。ここにあつてはいけないもの。

(マスターがそれを望まれるのでしたら、ご命令どおり致します)

呆然と、おれは目を見開いていたに違いない。アマリリスト……

きみもバルブの中で生まれたのか？

「なに、単なるレプリカだよ。オリジナルでもなければ、たいして

珍しいものでもない」

いつの間にかトリベノが立ち上がり、鋸びたパイプにもたれていった。よつやく減らず口を叩ける余裕を取り戻した、といったところか。

「煙草を一本くれぬか」

「闇煙草屋にたかられるとはな。珍しくない、とはどういう意味だ」  
よれた煙草を指で伸ばし、トリベノはライターをともした。炎に浮かぶ顔は蒼白で、十歳も老けたように感じられた。

「不思議だと思わんかね？ なぜ我々は、IBに駆逐されておらん？ 通常兵器をはるかに凌駕し、人間への憎悪に駆られた連中が、荒野にいるしているというのに」

むろん、そのことは、おれも考えないではなかつた。普通考えずにはいられないだろう。都市地区なんて、荒野に浮かぶ離れ小島のようなもの。そして荒野は、かれらの領域である。集団で都市を囲み、一つずつ潰していけば、ひとたまりもあるまい。

けれど、かれらがほとんど集団行動をとらないことは、処理班時代の経験から、知悉していた。群れてもせいぜい、一、三体がいいところ。共闘する知能がないわけではあるまい。プログラムによる抑制など、様々な説が唱えられたが、統率者の不在が、最も有力な説として、これまで信じられてきた。

「ボスがいないせいで、聞いているがね。これも伝説といえばそうなんだが。第二次百年戦争末期に、人類に反逆をくわだてた、そもそもの大もとであるボスが破壊されたとか」

「いわゆる、總統IBというやつだな。そいつに関しては、ワガハイも一家言持つてあるが、ここでは触れない。やつらが骨抜きにされた状態に甘んじておるのは、バルブのせいだという噂があつての。もちろん、オリジナルのバルブは一つしかないが、こういったレプリカが複数建造され、世界各地に散らばっているというのさ」

極秘裏にな。そう付け足して、トリベノはゴーグルの上で眉根を寄せた。おれはぞくりと肩を震わせた。

「何のために？　ＩＢを新造する以外の、どんな使い道があるといふんだ？」

「逆にＩＢへの抑止力になつていいというのだよ。よくある話じやないか。人間といつ、どうしようもなく愚かな生きものは、核兵器をちらつかされるまで、世界戦争をやめなかつた。しかしそいつがマガイ物の平和であったことは、核からＩＢへ至る歴史が証明しておる。核のお次が、バルブだつたのさ」

「あなたの文明批判なんか、聞きたくもないね。世界を引き締めるためのバルブ……弁があるだなんて、まるでお伽話じやないか。弁をことごとく緩めれば、世界はばらばらになつちまうと言いたいのかい。いつたい誰が、いつの間にそんな大掛かりな仕掛けを作つたんだ？」

トリベノは無言で煙を吐き出した。足もとで水の音が聞こえ、あやうく飛び上がりかけた。水面に大きな波紋が広がり、甲殻類じみた黒い影が沈んでゆく。水棲ワームが跳ねたらしい。トリベノは言う。

「少なくとも、今言えることは、ここにバルブのレプリカを発掘して、何事かを仕出かそうとしている連中がいる。もしくは、いたといつことさ。行きますかな」

最後の一言は、マキに向かつて発せられた。彼女は身を起こし、わずかにうなずいた様子。おれの意向を無視して、話が進んでいることは気に入らなかつたが、かといって、ここで茶飲み話に興じている暇はない。

「わかつたよ。行けばいんだろう」

おれはプールの上にわたされた、いかにも危なげな橋に足をかけた。

どうにか橋をわたりきると、鉄板で組まれた足場にたどり着いた。黄色と黒の縞模様のペンキが、剥げかかっていた。見上げると、バルブの中心から垂直に伸びた円柱は、天井のくぼみへ達し、勢いよく伸びた球根の芽のように、さらに上まで貫いていた。

コードやパイプに隠れて見えづらいが、円柱にはステップがついている様子。よく見ると、バルブの表面にもそれは打ちこまれているけれど、追ってゆけばすぐにプールに潜る恰好となる。

「さすがに潛水服は用意してないぜ」

たとえあつたとしても、水棲ワームがうようよいる中に、潜る気になどなれない。トリベノはそっぽを向いて、口笛を吹き始めた。上を向いて歩こう。

「球根の芽を追うのか」

「登るしかあるまい。聖歌隊の少年に歌つてほしければの」

「さつきの曲でも、リクエストする氣かい」

掌を返してみせる爺さんのうしろで、マキは無言のままたたずんでいた。疲れているのかもしないが、ドームに入つてこのかた、めつきり口数が減つてしまつた。カノウ氏を、さらには、彼女の幸福な家庭を破滅させた因縁の場所なのだから、無理もないけれど。冷たい仮面に隔てられ、マキの表情は読めない。

円柱のステップにしがみつき、またしても上を目指す。

天井のくぼみに達すると、極端に暗くなつたが、周囲の壁がタービンのように螺旋を描いているのはわかる。金属製の黒い螺旋は、ゆるやかに回転している。もしもこれがトラップで、いきなり高速回転しながら輪を縮めれば、新鮮なミンチの「馳走」に、水棲ワームどもは舌鼓を打つだろう。

十メートル近く登つただろうか。

行き止まりかと思えば、頭上を覆う鉄板に、人一人ぶんの隙間がある。縁起でもない仕掛けのことを、考えないでもなかつたが、おれは強いて無造作に顔を突つ込み、体を持ち上げた。意外に大きな空間があり、鉄板の上に転がり出た。

そこは、工場に無理やりこしらえた事務室、といった風情。リベットだらけの鉄板にかこまれた、二十スペースほどの密室である。

天井と床を、剥き出しの鉄骨が何本も貫いている。木製の事務机や棚、ボール箱などが、乱雑に置かれている。

「みょうな所に出ちまつたな……」

天井からぶら下がる裸電球が一個。おそらくタンクステンの本物ではなく、再生ダイオードのまがい物だろうが。何の飾り気もないブリキのショードの下で、今にも息絶えそうな光を発していた。そのせいか、全体的にイビツに見える部屋の光景は、ピカソの暗い『ゲルニカ』をおもわせた。

「あれは、エレベーターじゃないかしら」

マキが指さして言つ。

奥の壁に、なるほどスライド式のドアがあり、数字のついたパネルが、上方に嵌めこまれている。何百年も昔から、この装置ばかりは代わり映えがしない。よもや生きているとは思えないが、かといって、ほかに出口らしい出口は見当たらない。場合によつてはドアをこじ開け、ワイヤーをよじ登る羽目になるかもしれない。

ドアに近づき、パネルを眺める。数字はゼロが最上階らしく、B1、B2と下降し、B13まで続いている。ここはB9階であるらしく、B13の文字に光が入っている。パネルが正常に機能しているならば、ゴンドラは最下階で止まっているとおぼしい。故障して落ちていると考えるのが、自然かもしれない。

トリベノは何を思つたか、事務机の引き出しを、手当たりしだい搔き回している。落ちた書類を一枚拾い上げてみたが、ありふれた伝票だった。戦争でネットワークがずたずたに分断され、その後も

内戦続きのため、仮想ストレージの信用は失墜したまま。ビニの事務所も、こういった粗悪な合成紙に埋もれている現状である。

「エイジ……！」

いかにも只事でない、マキの声に振り返った。反射的にバイソンを抜きかけたまま、けれどおれは動きを止めて、パネルの上を凝視した。

たしかにさつきまでは、B13の部分がともつていてるだけだった。その光が点滅を始め、間もなくB12に移動した。しかもB9には光が入っているのだ。

点滅は、B11へ移った。耳に意識を集中すると、のろのろと這い上がってくる、「ンンドラの音が聞こえてくるようだ。

B10が点滅し始めた。

おれはゆっくりと、銃口を扉に向かた。

汗がこめかみを這いおりた。「ゴンドラに乗っているのは何者か、それが疑問だつた。

感覚的に、B13階といえば、幽靈船の最下層。退化猿人どもがうろつく、どん底を連想させた。あそこから、何者がが乗り込んだのか。あるいは、おれが住む雇用促進住宅の幽靈エレベーターのように、機械がいかれちまつているのか。

あるいはまた、例の薄化粧の少年が乗つているとか。パネルの点滅はB9へと移動した。「ことん、と音がして、いやにゅつくりと、扉が開いた。

少年ではなかつた。髪の長い女だ。異国の民族衣装をおもわせる黒い服は、ゆつたりとしていながら、しなやかな体の線を隠さない。褐色に近い肌。瞳の色は、青みがかつた銀色だ。

(わたしが、あなたの未来を変えてさしあげます)

おれは構えていた銃を、呆然と下ろした。ゆるやかに踊るような足どりで、女は……アリー・シャはゴンドラから歩み出た。きめ細かな髪が揺れ、薔薇の薫香がただよつた。

「イーブラック！」

憎悪に満ちた叫び声とともに、飛びかかるマキを留める暇はなかつた。彼女の両手にはすでにダガーが握られ、銀色のヤイバが閃光と化して空気を切り裂いた。

身を低くして、アリー・シャはナイフをかわした。やはり踊るような動作だつた。切断された髪の毛が舞う中、マキはヤイバをひるがえし、切つ先を下に打ち下ろした。ぎん、といつ剣戟の音。アリーシャは広げた腕の先で、ナイフを受け止めた。その指先には、一枚ずつカードが挟まれていた。

「マキ、やめる！ 彼女は船の人間だ」

おれの声など耳に入らぬ様子で、マキは次々とナイフを繰り出し

た。仮面の隙間から、怒りに燃える瞳が覗けるようだつた。アリーシャは身をひるがえし、攻撃を指先のカードで受け止めながら、後退りしてゆく。ナイフとカードが触れ合つときは、剣戟の音とともに、銀色の火花が散つた。

勢いよく打ち込まれた一撃に、アリーシャはよろめいた。見る間に劣勢になり、壁際まで追いつめられた。とどめをさすべく身構えたマキの両手で、くるくるとナイフが回る。黒猫が走り、宙を舞つて主人の前に着地した。右手のカードを、アリーシャはかざした。

「よせ……アリーシャ！」

おれが叫んだ時にはすでに、カードは赤い首輪の上を滑つていた。小動物の体から発せられたとは思えない、金属的な音。灼熱するよう首輪が光を放ち、猫の目が輝いた。

リビングデッド化した者を相手に行われた、いくつかの戦闘がフラッシュバックされた。最初の戦闘で、プルートウは長大な剣と化し、不法ギルドの中毒者を一刀両断にした。親孝行横丁でコック服の中毒者を倒した時、猫はアリーシャの翼となり、聖杯と化した。そしてサイキックの兄弟との戦いにおいては、燃える獅子の姿をあらわした。

ガトリング砲となつて、あの退化猿人どもを粉碎したのは、ほんの数時間前の「とき」とだ。

いずれにせよ、変化したプルートウの前では、敵はひとたまりもなく屠られている。しかもマキはリビングデッド化しているわけではない。多少ナイフを使う以外は、ただの生身の女性に過ぎない。瞬く間に殺されるのがオチではないか。が……

（消えた？）

猫の姿は、すでにどこにもなかつた。

マキの右手からナイフが放たれた。それは壁際にたたずむアリーシャの胸の手前で、硬いものにぶつかるような音を立て、十字形の光を出現させるとともに、弾き飛ばされた。おれの足もとまで飛んできたナイフは、まっ�たつに折れていた。左手が投げたナイフも、

同様の運命をたどった。

### エネルギー・シールドか？

一つあらわれた十字形の光は、彼女の前で消えずに残っていた。マキは髪を揺らし、新たに一本のナイフを抜いて、今度は投げずに突進した。走りながら、手の中でくるりと回し、逆手に持ちかえて、ふりかざした。そのまま首の両側へ突きたてる勢いだったが、またしても音をたてて弾き返された。十字形の光が四つに増えていた。

マキは反動で後退りし、からうじて転倒に耐えた。そこへ片腕をまっすぐに伸ばしたアリーシャの指が突きつけられると、四つの十字形の光が回転しながら、マキの周りを乱舞した。すでに折れていた二つのナイフが跳ね飛ばされ、ぎりぎりと仮面が切り裂かれる音が響いた。

「あああああっ！」

たまらずにマキは床に倒れた。アリーシャは腕をひるがえして、四つの十字形の光を後退させた。光は一つにまとまり、ひときわ強く輝いたかと思うと、いつの間にか一匹の黒猫の姿に戻っていた。

マキは床に座り込んだ姿勢で、両手で顔を覆っていた。泣きじやくるように、震える肩。かたわらには、真つ二つに割られた鉄仮面が転がっているのだった。

「あなたにはもう、必要のないものです。こんなものを被り続けたところで、あなたがつらいだけではありますか」

アリー・シャの静かな声が、沈黙に呑まれた。どうすることもできなまま、おれは呆然と立っていた。トリベノを見れば、散乱した書類の中、机に腰かけて、あらぬ方を向いていた。マキは顔を覆ったままだ。

もし衣服を裂かれたのなら、上着をかけてあげられるのだが、仮面の代わりなど持ち合わせていない。しかもトリベノみたいに顔をそむける機会さえ、逸してしまった。

「『幽霊船』の中にはね、名医が多いのよ」

ぐぐもつた声。依然として顔を両手で隠し、ビーツやらおれに話しかけているらしい。

「ああ、聞いた覚えがあるよ。ロストテクノロジーの一部が解説されたとか何とか、たまに新聞に載っているが、待てど暮らせど実用化されたためしがない。ここがここには、禁断の医療を駆使する凄腕たちが多くいて、密かに船外から訪ねて来る、悩める者たちを診ているとか」

「そんなところね。父が顔が広かつたおかげで、わたしもそういう医師たちを何人か知っている。頭部さえ残つていれば体を再生させられると、豪語する医師もいる。そんなからでさえ、わたしを診たときは匙を投げたのよ」

「……」

「もちろん、色素を注入するなどして、一時的には『まかせはした』でしょう。でもすぐに元に戻つてしまふのは、明らかだつた。かれらは口を揃えてこう言つたのよ。こればかりは、どうにもならない。科学的にまったく原因のわからない。一種の呪いのようなものだつて……」

「呪い？」

掌の下で、マキは自嘲的に微笑んだようだ。

「ええ。科学技術の権化みたいな人たちが、そんな言葉を口にするのだから、滑稽なんだけど。でもわたしにとっては、あまりにもりアルな一言だつた」

顔を覆つたまま、彼女は立ち上がった。おれに背を向けると、金色に染めた髪の結び目を解き、ふつさりと、両手で背中にさばいた。

「エイジ、見て」

彼女はこちらを向いた。髪が揺れて広がり、また肩の上に流れ落ちるまで、おれは息をつめて見まもつていた。

七年前の、あどけない少女の顔が、たちまち重ね合わされた。現在の彼女は、もちろんぐつと大人びて、目つきは凜としている。間違いなく、イイ女の部類に入るだろう。その顔に傷らしい傷はまったく見当たらなかつたが、何を見ても顔色を変えまいと決めていたおれを驚愕させたのは、その瞳の色だった。

アリー・シャと同じだつた。マキの瞳の色は、ほとんど銀色に近い白なのだ。

七年前は、濃い栗色だつた。ハシバミの実のような艶があり、好奇心たっぷりに、くるくるとよく動いた。それが今では、幻の湖水のように冷たく、瞑想的なまでに静まつっていた。そう、アマリリスが組んでいたジグソー・パズルの湖水のように。

「きっとわたしは、わたし自身が許せなかつたんだと思う。両親を助けてあげられなかつた自分が。あるいは、両親とともに逝けなかつたわたしが。気が狂う寸前まで、さんざん自分を責めて責め続けたあと、瞳の色が変わつたときは、だからむしろ納得できたの。わたしの本当の敵は、わたしなんだつて」

おれは相変わらず、ばかみたいに突つ立つっていた。マキは身をかがめ、割れた仮面の片方を拾い上げた。

「これを被るよになつたのは、瞳の色を隠すためじゃない。わたしが敵だということを思い知るためよ。何をしても、どんなに犯人

を追及しても、両親は戻らない。過ぎ去った時は、取り返しがつかない。わたしが本当に許せなかつたのは、きっとそのことなの。ね、アリー・シャ

「はい」

「あなたも、元から白い瞳をしていたわけじゃないでしょう。どうして色が変わつたの？ 何かきっかけがあつたの？ イーズラックとは、いつたい何なの？」

床に落ちる仮面の音が響いた。マキの瞳から、涙がこぼれ落ちるのを見た。あまり多く泣きすぎたため、瞳から色素が抜けてしまつたのではないか。彼女にとつて仮面を被ることは、涙との決別をも意味したのではないか。なすすべもない男は、ぼんやりとそう考えた。

アリー・シャは、かすかに首をふつた。

「わたしにもわかりません。それを呪いと呼ぶのなら、わたしもまた、イーズラックの呪いにかけられていいるのでしょうか。運命という名の呪いを背負つたまま、わたしは生きてゆくのでしょうか。でもマキさん。もしあなたが、あなた自身を責め続けるのだとしたら

「なに？」

「それは間違っています」

エレベーターのドアは、すでに隠された。ボタンを押したが、反応なし。蹴つても叩いても、びくともしない。パネルの光はB9の文字の上なので、「コンドラは一応、この階で止まっているらしいのだが。

アリーシャに、どうやって乗ったのか尋ねたところ、

「わたしは何のボタンにも触れませんでした」

つまり、雇用促進住宅の幽霊エレベーター同様、いかれていると  
いうことか。

「それにして、よくおれたちと合流できたものだな」

「カードが導くままに行動したまでです。マスターとまた巡り会えることは、常にカードに示されていました」

奇術師のように、一枚のカードを指先に現出させ、くるりと表に返した。そこには、バロック期の衣服を身につけた夫婦と子供が描かれていた。夫婦は一人の子の肩を抱いて寄り添い、その子は手にした一輪の薔薇の香りを、うつとりと楽しんでいるようだ。

なぜこのカードが、おれたちの再会を意味するのか。多少はカード占いをやつた妻も、驚くべきイマジネーションとインスピレーションで、絵柄と事象を結びつけて解釈したのだが、これは易しい部類かもしれない。この絵柄を見て、別れや失望と結びつける者は、まずあるまい。もし恋占いの答えとして出たなら、質問者を狂喜させたことだろう。

「待つしかないかの。上へ行くためには、時にはいやになるくらい、待たされる場合がある」

トリベノが呑氣らしく、床の上であぐらをかけて言つ。

「占いといえば、イーチンという古い占いがあつての。そのテキス

トは何千年も昔にできた、神と人間の競作だというが、森羅万象を全て網羅した回答が書かれているという。その中のひとつに、こんな答えが載つてあるよ。飯でも食いながら待つておれ、とな

「要するに、あんた、腹が減ったんだな」

考えてみれば、どん底からここへ来るまで波乱の連続で、飯はおろか、休息らしい休息をとつていなかつた。マキのリュックの中に、缶詰がいくぶん残つてゐるし、見たところ、ワームの類いも貼りついていない様子。ここで少し休むのも、悪くないだろう。

煮炊きはできないものの、マキが金属の皿に缶詰を取り分けて、それらしい見栄えにしてくれた。髪をまたひとつにまとめ、シャツの腕をまくつて、かいがいしく働くさまは、意外にヤマトナデシコ的である。ずっと一緒だったというのに、鉄仮面を脱いだとたん、急に女らしさが意識されるようで、おれはいささか緊張した。

対して、アリーシャは始終ぼんやりしていた。どうやら典型的な、家事をこなせないタイプらしい。酒場に雇われていたものの、あくまで占い師としてであり、厨房の処理は親爺が一人で切り盛りしていたものだ。しかも彼女は、基本的に菜食主義者らしく、一人だけ豆の缶詰に塩を振つて食べていた。

食事の席で、多少の意見交換がなされた。自分の頭を整理するつもりで、おれは言った。

「ドームを中心とした街並。おそらくは、あれがまる」と麻薬密造者の街だった。バルブはクラーケンの合成に必要な装置だったのではないか。イースラック人を装つていた住民の正体は、シーラトウストラ教過激派、ジークムント旅団の一員と考えられる。では、まるで中性子爆弾を用いたように、住民だけが忽然と消えてしまったのはなぜか

「その理由はわからない、かね？」

例のモグラから取り外した装置を手入れしながら、トリベノがイヤミな言いかたをした。一つ眼チャペックに襲われた時は、盾にしだくせに。今度はいやに入念に油をさし、磨きをかけている。おれ

は腹を立てる氣にもならず、「やつこつ」と答えておいた。

ニヤリと笑つて爺さんは言ひ。

「旅団の連中が少量のクラーケンか、それに順ずる麻薬を投与され  
ていたことは、お前さんも考えたことだらう。何のために? 言  
うまでもなく、アイデンティティーを消すためさ。リビングテッド  
のよつな力こそ持たないが、右を向けと命令されれば右を向き、前  
進を命じられれば、ひたすら前へ進む。例え行く手が多脚ワームの  
巣であろうと、決して止まらずに」

「まさか……」

「そういうことだよ、お若いの。かれらが死体はおろか、髪の毛一  
本残さずに消えた理由が、それなのさ。コントローラーを何者かに  
奪われてしまつたんだな。では、奪つたのはいつたい誰か?」

もつたいぶつて言葉を切ると、爺さんは煙草に火をつけた。挑発  
的な笑みを浮べた口の端にそれをくわえ、おれたちを順ぐりに眺め  
た。

「ま、そいつを確かめるために、こうして気まぐれなエレベーター  
が開くを待つておるのだから。果報は寝て待つことにしようでは  
ないか、お若いの。お美しいお嬢さんがたも」

血そうに煙を吐いて、片目を閉じるのだ。

どれくらい眠つたろうか。星も太陽も見えない『幽霊船』で三日も暮らせば、昼夜の感覚が完全に狂つてしまつ。

身を起こしてみれば、マキとトリベノが書類を枕に、ぐつすりと眠つていた。やはり疲れたのか。屋外で野宿するのと異なり、帆布ひとつ身に纏えば汗ばむほど、温かいことだけが身上である。

アリー・シャとブルートウの姿は、どこにも見当たらなかつた。覚えずエレベーターのほうに手をやつしたが、眠る前と、とくに変わつた様子はない。ゴンドラが開くときは、かなり音が響くから、さすがに起きられる自信があつた。つまりアリー・シャと黒猫は、エレベーターに乗つて消えたわけではないことになる。

ならば、煙のようになに消えたのか？

「アリー・シャ」

はい。という返事がすぐに帰つてきた。この風変わりな事務室の隅。エレベーターとは反対側の柱の陰から。ブルートウが顔を出し、こちらを向いて小さく鳴いた。おれは苦笑しつつ、帆布を押しのけて立ち上がる。

「眠つておかなくていいのか」

不思議な匂いに気づいた。それは彼女がいつも漂わせていく薔薇の薫香に似ているが、それよりもずっと強く、湿つた香りだつた。歩み寄り、柱の陰を覗いたまま、おれは石化した。蛇髪の妖女に見つめられたのではない。アリー・シャは片膝を立て、もう一方の脚をまっすぐ投げ出していた。何も身につけていなかつた。

田を逸らそとも、石化してしまつたのだから、見つめ続ける以外にない。彼女は立てた膝から腿の両側へ、なめらかに両の掌をすべらせていた。ゆるやかに踊るように。掌が行き来した跡には、引

き締まつた褐色の肌が、なまめかしい光沢をおびた。

彼女のかたわらには、平たい缶が開かれていた。中に詰まつた油脂を、塗りこんでいるらしい。香油、という単語が脳裏をよぎる。魔女が空を飛ぶ前に、それを全身に塗りこむという秘薬……おれに凝視されながら、彼女は手の動きを止めなければ、裸身を隠そつともしない。

そうして彼女の全身には、無数の赤い筋が浮き上がっていた。「体が火照るのです」

「えつ」

「ブルートウを使ったあとは、どうしても、今回は弱いカードでしたから、油を塗るだけで事足りるのですが。強いカードを用いたことは、ひと晩じゅう、のたうちまわることもあります」

赤い筋からは、不思議と、醜さもおぞましさも感じられなかつた。うすらと、みずから発光する模様のように見えた。古代の異郷の戦士たちが、神々の加護を得るために、肌に刻んだ模様のように。「どうしても背中に手が届きません。塗つていただけますか、マスター？」

アリーシャの声は魔術的な音楽と化して、おれの脳裏で共鳴した。頭の奥が、じんと痺れた。幻惑されたように、おれは彼女の背後にひざまずいた。全身を薔薇の香油に浸された気がした。

体が火照ると彼女は言つたが、指をすべらせると、背中はひんやりしていた。硬質な中に、みずみずしい弾力があり、内側から掌を押し返されるようだ。彼女は立てた両膝に、乳房を押しあてた。ぐつたりと傾いた背中に、時おり痙攣的な震えが走つた。

「好い気持ちです」

おれは彼女の肩の上で手を休め、上腕に添つて上下させた。背にもたれるようにして、細い首筋に軽く唇をあてた。

「こんなに苦しんでまで、カードを使う必要があるのか。アリーシヤ」

「わたしの意志では、どうにもならないのです」

「きみは、カードに囚われているんじゃないだらうか。マキがみずから意志で、仮面の中に囚われたように。きみのカードがよく未来を予言することば、おれも田の当たりにしたけれど。予言された未来は、過去と同じではないのか」

「あるいは、そうかもしません」

彼女の手が、おれの手の上に重ねられた。ためらいがちに、そのまま乳房へと導いてゆくのだった。

「ですが、マスター。過去と未来の間には、今があることを、わたしは知つているつもりです。今だけは、今のわたしだけは、過去にも未来にも囚われず、自由にふるまえます。それが瞬きをするよりも早く過ぎてゆくのだとしても。マスター、わたしは自由です。今のがわたしは、とても自由です」

エレベーターが開いたのは、それからおよそ一時間後。四人も乗  
りこめば、すし詰めに近い。トリベノが一番上のゼロ階のボタンを  
押すと、ドアが閉まり、ゴンドラは上昇を開始した。

「ゼロ階には何がある？　おたちは、だれに会いに行こうとして  
いるんだ？」

「もしかして……」

おれの質問を継いだのは、マキだ。小柄な爺さんの肩が、ひこひ  
こと揺れるのがわかつた。笑っているらしい。

「そのとおりだよ、お嬢さん。こいつは地獄から天国までの直通便  
だ」

天国といえば、考えられる場所はひとつしかない。「幽霊船」の  
最高階に位置する街。夢のように美しいが、人っ子一人いないとい  
う……

シャングリ・ラだ。

「そこに麻薬密売組織の首領が隠れている、と？」

「いかにも」

「しかし、あそこは『幽霊船』の聖域であり、アイデンティティー  
そのものだろう。無人のまま美しく保つておくことで、こう言つち  
やマキに申し訳ないが、ならず者の集まりであるこの場所を丸く治  
めている。いわばシャングリ・ラは、船に住む者たちの共通の夢だ」  
ゆえに船の住人の誇りをかけて、聖域は厳重に管理されている。

最下層に身を潜めるのとは、わけが違う。無数の監視カメラが目を  
光らせているし、不埒な侵入者を蜂の巣にする仕掛けには事欠かな  
い。そのうえ掃除と称して、幕の代わりに銃をかついた集団による、  
定期的な巡察まで行われているのだから。

トリベノは鼻を鳴らした。

「はん。ワガハイとて、伊達にどん底を這い回つておつたわけではないわい」

闇煙草を売りながら、情報収集に努めていたことは知っている。闇のブローカーたちは、スパイ業者を兼ねていたに違いない。かれは語を継いだ。

「じわじわと輪を絞りこんでいった先が、あそこだったのさ。地獄の主人が天国に住んでいるというのは、なかなか気の利いたブラックユーモアじやないかね。だが、どうしても入り口が見つからなかつた」

「シャングリ・ラからは入れないのか？」

「そりや入れるさ。蜂の巣になつても生きておられたら」

返す言葉もなかつた。迎撃システムを逆手にとつて、潜り込んでいたわけだ。入り口が地下にしかないことも、それならうなずける。殻つきワームが這うように、コンドラの上昇速度はきわめて遅い。この狂つたエレベーターを、首領が使っていたのだろうか。あるいは地下の街を放てきする際に壊すつもりが、不完全なまま生かしてしまつたのかもしれない。トリベノは言つ。

「むろんその入り口は、麻薬密造の拠点と繋がつていなければならない。必然的に、バルブを追う恰好となつたのぞ」

「単純な疑問だが、クラーケンを合成するのに、なぜバルブが必要なんだ？　IBを生み出すための装置ではなかつたのか」

「それで合つておるよ。クラーケンは、いわば副産物だわい。火を燃やせば、一酸化炭素が生じるようなものだ。逆に言えば、IBの根本的な秘密に触れるひとつの中が、クラーケンに隠されておるのだろうて。金儲けばかりが、連中の目的ではないよ」

「目的、か……」

そうつぶやいた口の中に、厭な味が広がる気がした。トリベノに訊くまでもなく、自身の中である程度の答えは出ていた。それは「人食い私道事件」にも繋がる答えた。あの多脚ワームの化け物に刻

印されていた、逆さ△の紋章と。

おれはけれど、その答えを意識に上らせたくなかつた。はつきり意識したとたん、正氣を失いそうな気がした。ゴンドラはゆっくりと、けれど確実に上昇してゆく。そこに待ち受けている者が、ただの金に目が眩んだ麻薬屋でないことば、いやになるほどわかりきつていた。

やはりゴンドラの外で待ち受けている運命のカードは、「死」なかもしない。大鎌を持つた骸骨。刈りとられる無数の首。妻が所有していたカードには、たしかそんな恐ろしい絵が描かれていた……と、アリーシャの指が、おれの手の甲に触れるのがわかつた。「死は、決して恐ろしいカードではありません。物事の終わりは、もうひとつ物事の始まり。それは再生を意味します」

ゼロ階に着いた。ゼロに賭けると言つた昔の文豪は誰だつけるか。ドアが開くまでに少し間があつた。マキがナイフを抜くのを感じながら、おれはホルスターから銃を浮かせた。

前方は闇である。

おれはトリベノを押しのけて、銃を抜かずの一歩踏み出した。奈落ではなく、硬い床が体重を受け止めた。手を突き出しても、触れるものはない。数歩歩いたところで、背後で「ゴンドラの閉まる音」聞いた。そしてまた、沈黙。

闇よりも、静かすぎることが、おれの神経を参らせた。考えてみれば、地下では常に響いている重低音をはじめ、何かしら機械の音が鳴っていた。それにこの芳香。機械油や、朽ちた金属のにおいに慣れきった鼻には、むしろおぞましいものに感じられた。

闇と静けさと芳香。そこから連想されるのは、死以外の何ものでもない。

かちりと小さな音がして、赤い光に闇が溶かされた。トリベノが一インチほどの小型ライトをかざしていた。周囲を照らすのを目で追えば、ここは十二ースペースほどの小部屋であるらしい。多少の家具があり、壁に絵がかかり、鏡があり、床はシユールレアリスムの画家が好んで描くような、市松模様である。

猫脚のサイドテーブルの上に大きな青磁の花瓶が置かれ、薔薇の花がたっぷりと生けられていた。芳香の正体はこれだった。

いたつて無粋なおれだが、薔薇が高級品であることくらい知っている。切り花一本ぶんでも、デートに締めて行けそうなネクタイが買える。しかるに、この部屋はたしかに調度も贅沢だが、すべてにおいて小ぢんまりとしており、いかにも「控えの間」といった風情。何万サークルもする薔薇を飾るに相応しい場所とは思えない。

「まるで、おれたちのために用意された楽屋みたいだな」

そうつぶやいたとたん、灯りがともった。天井の模造燭台が投げかける、やわらかな光。壁紙が薄いグリーンであることを、初めて知った。というより、無数の色彩が存在することを、忘れていた

た。

振り返ると、エレベーターが存在した痕跡はまったくなく、どんなカラクリなのか、そこも奇麗に壁紙で覆われていた。中世ふうにデザインされたヒナギク模様。継ぎ田はどこにも見当たらず、「丁寧に、庭園を描いた八号ほどの油絵までかけられていた。現在はどこにも存在しない、縁あふれる幸福な庭。

「開かないみたい」

マキが言う。向かい側にドアがあり、彼女はノブに手をかけて、皮肉らしく小首をかしげていた。古い木材の軋む音をたてて、トリベノが椅子に座った。

「舞台の用意が調つまで、しばらく待つておれ、ということではないかの」

「舞台だと？」

尋ね返したおれを、爺さんは口の端をゆがめて受け流した。そこにはもう、火のついた煙草がくわえられているのだった。アリーシヤもブルートゥを抱いて、ほかの椅子に腰をおろした。部屋に点々と据えられている椅子は、偶然なのか何なのか、ちょうど人数ぶんである。おれは肩をすくめた。

「そのうち、メイドが茶でも運んで来るんじゃないかな」

そう言つたとたん、がたんと音がして、部屋が少し揺れた。見れば側面の壁に四角い穴が開き、いかにも旧式のチャペックが入つてくるところだった。家事用とおぼしく、無骨な体にエプロンを巻きつけ、両手にさげた盆の上では、白磁のカツプが四つ。甘い香りのする湯気をたてていた。カラクリが多すぎるこの部屋は、あまり心臓に宜しくない。

一瞬後にはチャペックの背後の穴が閉ざされ、まつ毛らな壁に戻つていた。ぎこちない二足歩行でチャペックは四歩進み、足を止めたところで小腰を屈めた。礼をしたらしい。それでも盆だけは水平に保たれ、紅茶は一滴もこぼれていらない様子。喜々として近寄ろうとしたトリベノを、おれは手で制した。

「うかつだぞ。刺客だつたりどつする」

軍用を家事用に偽装するのは、使い古された手だが、充分有効だ。あるいはリミッターを外せば、家事用でも銃くらい撃てる。近頃では技術が向上して、ハ幡兄弟ほどの腕がなければ、外せなくなっているが、旧式ならば事は簡単。

それにこいつのセンサーは、おれたちを襲つた掃討車や軍用チャペック同様、眼玉をおもわせる形状ではないか。爺さんはけれど、鼻を鳴らしたばかりで、

「シカクもサンカクもあるものか。茶の一杯ぐらい、飲めなくてどうする」

意味のわからないことを言いつつ、カップを受け取つた。首の付け根から細い隠し腕があらわれたときは、ぎょっとしたが、マニピュレーターの先にあるのは、灰皿だった。トリベノがそれで煙草を揉み消すと、チャペックはまた礼をし、おれの横を素通りして、マキの前で止まつた。レディーフーストというわけだ。

最後におれに歩み寄り、カップを取りやすいよう、小腰をかがめた。至近距離で眼玉と見つめ合つのは、あまり気持ちのいいものではない。

「質問に答えられるか?」

「ロボット三原則、一、ノットツテ。タダシ、限定的、二」

喋りながら眼球がうごめき、いくつかの小ランプが点滅した。無機質な声といい、いかにも大昔のSF映画に出てきそうな「ロボット」である。

限定的に、ね。

「まあいいだろ? ロボット三原則にのつとつて、おまえの名前を知りたい」

「型番ハ、BSS63b。通称ハ、タウロス一号、デス」

おそらくミノタウロスからとったのだろ? なるほど、天地に連なる迷宮のような、こんな場所で行き逢うには相応しい氣もするが、家事用チャペックとしては、物騒な名だと思わざるを得ない。おれはカップを受け取り、タウロスは両手をおろした。ソーサーに、スプーンと二つの角砂糖がのつていた。

何も加えず、ひと口飲んだ。いたつて無料なおれだが、代用茶葉がいつさい使われていないのはわかる。

「旨いね。おれの名はエイジだ。コードネームだけだ。限定的で構わないから、ここがどこなのか教えてくれないか」

近くで爺さんが鼻を鳴らすのが聞こえた。言いたいことはわかっている。

例え女がいる酒場に入つても、おれは給仕のチャペックを相手に呑んでいる場合が多い。女嫌いでないことは、ご承知のとおりだが、なぜか機械を相手にしているほうが、ずっとくつろいだ気分になれた。女たちに変態呼ばわりされながら。

機械に優しくしたところで、無意味なのは承知の上だが。それでも処理班時代の相棒、サンポッドは、自身を盾にしておれを助けてくれた。そんなプログラムは一切されていないにもかかわらず、だ。タウロスは答えた。

「シャングリ・ラ」

「なるほどな。おまえは……」いつ言つちゃアレだが、ここを不法に占拠している主人に従つているのか。それとも、この家の備品なんか

「以前、ノ、マスター、ハ、船、ノ、管理組合、デシタ。アタラシイ、マスター、ニヨツテ、改造強化、サレタノ、デス」  
「よくわかるよ。当然、リミッターは外されているのだろう」

「ハイ」

「現在のおまえの主人の名は？」

「守秘義務、ヲ、遂行シ、マス」

やはり、そうきたか。もとから期待していなかつたので、おれはちょっと肩をすくめて、質問を変えた。

「何のために、おれたちはここへ招待された。もし招かれていればの話だが」

「タシカ、ニ、『招待、イタ、シ、マシタ。マスター、ノ、リョウシン、ニ、ヨツテ』」

リョウシンとは、両親ではなく良心に違いない。文脈としてはどちらもアリだが、良心だと直感した。それもどうやら、おれたちにとって、あまりありがたくない良心のように思われる。時に良心は、悪意の何十倍も恐ろしい悲劇を生む。純真な心で遂行される暴力ほど、恐ろしいものはない。

不意にタウロスのランプが一斉に点滅し、小さくブザーが鳴った。なぜか叱責されている印象を受けた。そそくさとタウロスは小腰を屈め、空のカップを集め始めた。盆を小テーブルに置いて、大型の洋服箪笥に歩み寄ると、扉を左右に開いた。

「皆様ニハ、コレニ着替エテ、イタダキタク、ゾンジマス」  
襞をたっぷりとつた布地の塊が吊るされていた。どうやら一着のイブニングドレスとおぼしく、ついでに一着のタキシードが、ぶら下がっているのを見た。

興味をそられたのか、マキが箪笥に近づき、一着を胸の前にかざした。黒いドレスは、襞が多いわりにシャープな印象。大きく開いた襟ぐりの胸の部分に、黒薔薇のコサージュが縫いつけられていた。

「これはアリー・シャに合いそう

もう一着はワインレッドで、スカートがふわりと広がっていた。

至る所につけられたリボンからして、いかにも少女趣味である。が、マキの様子から、意外にも気に入つたらしいことがうかがえた。

「可愛いわ……」

「ゴ婦人ガタ、二八、コチラ、デ、着替工テ、イタダケ、マス、ヨウ。簡便、デハ、ゴザイ、マス、ガ、シャワー、モ、ゴ用意、イタシテ、オリ、マス」

すでにタウロスは、数枚の衝立を部屋の隅に立て回し、ちょっとしたプライベートルームをこしらえていた。どこから引き出したのか、シャワーのノズルが、壁にかかっているのが見えた。マキとアリーシャは顔を見合させ、それぞれのドレスを手に、衝立の後ろに隠れた。

ブルートゥは牡猫としての自覚があるのか、我々とともに残った。

仕切りがあるとはいって、ご婦人がたの肩から上は何となく見えている。彼女たちは、脱いだ服を衝立の上に引っかけ、順番にシャワーを浴びている。

「着替えんのかね」

見れば、爺さんはすでにタキシード姿で、指で蝶ネクタイをぴんと張つていた。みょうに似合つてはいるが、一旦演奏が始まれば、狂つたようにタクトを振り回す老指揮者といった風情。おれは片手をあげた。

「遠慮しておく。死に化粧みたいで気に食わない」

トリベノは皮肉のひとつでも返そうとしたようだが、鼻を鳴らしてばかり。この男、上流階級の集まりに、場慣れしているのではないか。

首長連合の時代、議会よりも幅を利かせていたのが、社交界である。首長たちのサロンには、着飾つた魑魅魍魎のごときヤカラが集い、目配せや指の合図ひとつで、大金や法令や人事が、右から左へと動いた。サロンで首長の気を引いた者が成功者となり、寵を失うこととは、すべてをなくすことを意味した。

明らかに、トリベノは旧政権のサロンに出入りしてたフシがある。着替えを終えてあらわれた女性一人には、目を見張らずにいられなかつた。マキはお伽話の妖精のようで、アリーシャは神話の精靈をおもわせた。もともと神秘的なアリーシャはともかく、マキの変貌ぶりには驚かされた。昨日まで鉄仮面をかぶり、ジーンズ姿でナイフを振り回していた娘とは、とても思えない。

「エイジは着替えないの？」

「ああ。ピエロの衣装でもあれば、着たいんだがね」  
肩をすくめているマキの横を、ぎちぎちと音を鳴らして、タウロス一号が通り過ぎた。小ランプを明滅させながら言つ。

「ソレデ、ハ、『案内、イタシ、マス』

大仰な浮き彫りのあるドアの取つ手に手をかけた。いかにももつたいぶつた、蝶つがいの軋む音。あふれる光。開かれたドアの後ろには、もう一体のチャペックが立っていた。

タウロス一号と瓜二つだが、エプロンはつけておらず、代わりに胸に描かれた逆さAの紋章が、逆光の中になりながら、鮮明におれの目を射た。おそらくあれが、タウロス一号に違いない。

一号は、これも一号と瓜二つの、ぎこちない会釈をすると、片手の指をそろえて、ドアの向こう側を指示示した。

「オマタセ、イタシ、マシタ。ドウゾ、オ入り、クダサイ。マスター、ガ、オマチシ、テ、オリ、マス」

ドアをくぐるとき、あまりの眩さに、覚えず目を細めた。そこは舞踏会が開けそうなほど広い部屋で、実際に、十九世紀末ヴィーンあたりの邸宅のレプリカかもしれない。床は控え室同様、磨きこまれた市松模様で、無数の模造燭台の灯りを、ぎらぎらと反射させていた。

所々に小テーブルが置かれ、古い静物画のように、様々な果実が盛られているテーブルもあれば、別のテーブルには、血で染めたような薔薇の花が、たっぷりと生けられていた。

部屋の奥には、玉座をおもわせる、大仰な肘掛け椅子がひとつ。ほとんど寝そべるような恰好で、一人の男が座っていた。この男が、主人なのだろう。

まるまると肥えた肥満体は、一人はゆうに寝そべれそうな椅子さえも、窮屈に見せていた。いかにも上質なタキシードの布地。その上からマントを羽織り、赤い裏地を覗かせながら、波紋をおもわせる襞を床になびかせている。男の髪は黒々として、髪油に輝き、肩に届くほど伸ばされている。

おれたちは、部屋の中ほどまで進んだ。

主人とおぼしい男は寝そべった姿勢のまま、指一本動かさなかつた。その蒼白な顔を見て、覚えず足を止めたのだ。ひつ、とマキが

息を呑む声が聞こえた。主人の顔は、眼の部分だけがくり抜かれた、のつぺりとした仮面なのである。尖った鼻の下に白いヒゲをたくわえ、薄笑いを浮かべていた。

けれど、おれをゾッとさせたのは、不気味な仮面よりも、その二つの穴から覗く眼のほうだ。大きく見開かれたまま、瞬き一つせず、おれたちを凝視している。灰色の瞳は、ほとんど白に近いほど、色素が失われていた。

玉座のかたわらには、一人の少年が仕えるように立っていた。ポスターの束こそ持つておらぬが、バルブのあるドームへおれたちを導いた、あの少年に違ひなかつた。冷たい無表情が、調つた顔立ちを、いつそう仮面じみて見せた。

玉座の背後には、部屋を横断するかたちで、巨大な幕が張られていた。亜麻色の幕の中央に、シンボリックに描かれているのは、羽と脚を大きく左右に広げた、猛禽類らしい鳥である。そうして鳥の絵の上には、逆さAの紋章が重ねて染め抜かれていた。震える声でおれはつぶやいた。

「この星は……」

逆さAに対して、猛禽が広げた羽と脚の線が重なることと、一つの巨大な星が浮き彫りにされているのだ。正三角形と逆三角形を重ね合わせた、魔術的なシンボル……

ダビデの星だった。

この星は古代宗教のシンボルとして有名だが、民間の呪術者たちは、ソロモンの星と並び、これを封印として広く用いていた。

そう……これは封印に違いない。あの幕の後ろに、何かが封印されている。

呪われた、何かが。

仮面の主人は依然として微動だにしない。美食と怠惰に浸されて、骨の髓まで腐ってしまったのか。肘掛けにもたれた左手には、ワイングラスを持つており、どす黒い血をおもわせる液体が、三分の一ほど減っているのがわかった。

タウロス一号と二号は、おれたちを両側から挟みこむ恰好で立っていた。給仕しているように見えるが、監視しているともとれる。少年が身をかがめ、主人の耳に何事か囁いた。次にかれは椅子のそばを離れ、やはり小テーブルに載せられた木製の箱に近づいた。箱からは、奇態なコリ科の花のような、真鍮の筒が突き出しており、その下に黒い円盤が載っていた。

箱の側面に取り付けられたハンドルを回せば、円盤が回転を始めた。かたわらのアームを円盤の上に移動させ、先端を落とすと、真鍮の筒から、夜想曲とおぼし音楽が流れ始めた。その音は、磨き抜かれた市松模様の床に反響し、部屋じゅうに響きわたるのだ。あたかも部屋ぜんたいが、共鳴板と化したように。

再び少年は主人のかたわらに戻ると、今度は自身が、耳を蒼白な仮面の前に近寄せた。もちろん、声はあるが、唇が動いたかどうかさえわからない。次に、我々に向かつて少年は言つのだ。

「シャングリ・ラへようこそ。今宵はささやかな宴を用意しておりますので、どうかお楽しみくださいますよ」

まず驚かされたのは、少年の声である。声変わりさえ疑わしい外見とは裏腹な、太く響くバリトン。そもそも聖歌隊に属する以上は、ボーカリストでなければならないはずだ。しかも喋る時のかれの動作は、これまでの小動物的な敏捷さをすっかり失って、のろのろと重々しかつた。まるで、脂肪の檻の中でもがいでいるようだ。

少年の変貌ぶりは、有無をいわざず、フォックス教の巫女を連想させた。死人のタマシイを呼び出し、おのれの肉体に乗り移らせることで、あたかも死んだ人物のように振る舞う。その人物と巫女が未知の間柄でも、死人の親族が見れば、まさにその人物を目の当たりにしているようだといつ。

ならばこの男は、もはや生きてはいないのか。目を見開き、うなだれることなく、ワイングラスを手にしたまま、こと切れているのか。そうして男のタマシイが少年に乗り移り、かれの意志を伝えているというのか。

それとも仮面の男は生きており、肥満によつて動けなくなつた自身の代役を、少年に一任しているのか。たぶんそうだろう。タマシイがどうのこうのと考へるより、そのほうが百倍合理的ではないか。「相変わらず、もつたいぶつた演出がお好きなようだの。その点は、案外、あんたの兄貴とそつくりなのかもしれない」

トリベノがそう言つた。少年は痙攣的に頬をゆがめ、調つた顔を皺だらけにして微笑した。

「お久しぶりですね、ドクター」

「ワガハイだけではない。ジュリエットにも挨拶してほしいものだな」

少年の顔に、瞬時、驚きが宿るのをおれは見逃さなかつた。ジュリエットとは、爺さんがモグラ型マシンにつけていた愛称だ。かれはモグラの心臓部を取り外し、リュックに詰めて、今もタキシードの上から背負つている。そいつがなぜ少年を、いや、少年の体を借りていておぼしい、仮面の主人を驚かすのか。

「急いでしらえの宴なもので、何かと不行届きで。どうかご容赦願い

たい。タウロス、お客様におもてなしを

ぎりぎりと足音が近づいてきた。タウロス一号の手した盆には、四つのワイングラスが載っていた。どれも執拗なまでに磨き上げられ、中に燭光を浮べていた。四人とも、受けとることを拒まなかつた。次に一号が、ワインの瓶を持つて歩み寄つた。グラスに注がれたのは、仮面の男が手にしているのと同じ、どす黒いほど濃い赤だ。いつの間にか少年の手にも、同様のグラスが握られていた。仰々しい動作でかかるときは、かれの年若さを忘れるほど、貴祿に満ちていた。

「諸君の未来を祝福して」

「はん。過去の間違いではないのかね」

そう言いながら、トリベノはひと息にグラスの中身をあおつた。半ば毒ではないかと疑つていたおれは、少なからず慌てた。けれどかれの体に異変が生じる様子はなく、また注ぎ足されたワインを飲みながら、平気で果実をつまんで食つている。

「こんな時にこそ、栄養をとつておいたほうがいいぞ、お若いの。なに、余興が始まるまで、やつらは我々を殺したりはせんよ。余興まではな」

余興、といつ言葉から、おれは剣闘士の試合を連想した。古代ローマの宴席における血みどろの余興。どちらかが死ぬまでそれは続けれられ、宴席の床を薔薇色に染めた。そういえば、仮面の主人の風貌は、どこか暴君ネロをおもわせる。

この妄想があながち遠くなかったことを、あとで思い知らされたのだが。

果然とグラスを手にしたまま、再びおれの目は、猛禽と逆さ△の紋章が描く、巨大な星に吸い寄せられていた。この感じ……骨の髓まで凍りつくようで、それでいて額に脂汗が浮くといった、この感じには、いやになるほど覚えがあつた。

星の裏側に封印されているのは、あいつなのか？

だが、もしそうだとしても、いつたいあれを押し籠めておく、どんな方法があるのだろう。アンチ・シェルターを築くならともかく、あんな狭い空間に、余興とやらが始まるまで、ずっと閉じ籠めておくなど、果たして可能だろうか。並大抵の拘束具など、ものの役にたたない。意図的に眠らせる方法もない。いや……

あれを用いたのか？

眠らせるための……だから、大量に……

夜想曲がいつの間にか途切れ、代わりに少年の哄笑が響きわたつていた。笑うときだけは、ボーアソプラノに戻るのである。

「食事はお気に召しませんか」

かれと目が合ひづ。ついで、銀や透明な器に盛りつけられた果実へ視線を移した。遺伝子操作のまがい物ではない。葡萄の一粒一粒が、薔薇の花一輪に匹敵する超高級品である。それは認めるが、なぜかセザンヌの絵を眺めているように、食欲がわかない。次々と口へ放りこみ、噛み潰しているのはトリベノだけだ。

おれはちょっと肩をすくめて、グラスをテーブルに戻した。この

ワインにしても、瓶一本でビルが建つほどの値打ちものだらう。胸の前に右手を添えて、少年は言つ。

「不行き届きな宴席となつたことを、心よりお詫び申し上げます。仮面舞踏会としてお招きしたかったのですが。仮面はおろか、樂師さえご用意できませんでした。本来はタウロスが四重奏団として演奏いたしますところ、あいにく一體壊れていますので、それも叶いません」

旧政権時代、首長や金持ちたちは、必ずといってよいほど、自前の四重奏団を持つていた。才能ある音樂家をスカウトする場合もあれば、チャペックを仕込んで用いる者もいた。あるいは生身の人間の音感を改造強化するという、非倫理的なことも平氣で行われていたようだ。

もともとシャングリ・ラの備品だったタウロスたちは、掃除や調理から演奏まで、オールマイティーにこなすのだろう。そしてリミッターを外された現在は、刺客の技をも。

「代わりに、とは申しませんが。珍しいレコードを手に入れましたので」

再び少年は、真鍮の筒のある箱に近づいた。写真でしか見たことがないが、蓄音機というのではなかつたか。かれは箱の上の円盤を外し、別のもとの取り替えた。おそらくあれが、レコードというのだろう。音波が刻みつけられた、最も原始的な記憶媒体。

さつきと同様な操作でアームが下ろされ、ワルツとおぼしい、音樂が鳴りはじめた。ベルリオーズの『幻想交響曲』第一樂章のワルツだ。おれが知っているくらいだから、とくに珍しい曲ではない。演奏家の顔ぶれが変わっているのか、演奏そのものが珍奇なのか、どちらかだらう。

なるほど、蓄音機が奏でるワルツは、記憶チップが再生するのと異なり、まるで別の曲に聽こえる。狂おしくも明るい曲だったのが、うつろな反響のせいか、狂おしさばかりが倍増し、限りなく陰惨に響く。まさに、サバトの席上で鳴り響くにふさわしく。

仮面の主人に目を遣れば、相変わらず椅子に寝そべつたまま。手にしたワインは少しも減つていなかつた。見開かれた目は、依然としてこちらに注がれ、あたかもこの宴席が、かれの凝視する一幕の夢であるかのように錯覚させた。見ればアリーシャがおれの前に立ち、こころもち微笑んでいた。

「踊りましょう。マスター」

酔つているのではない。彼女はワイングラスに、一度も口をつけではない。断ろうとして思いなおしたのは、何か意図があるかもしないと考へたからだ。とくに心得もないが、適当にやるしかない。おれは「シ（はい）」とこたえ、架空の帽子を脱いでひざまずく恰好。彼女は足首を交叉させ、両手でスカートをちょっと持ち上げた。

今さら氣づいたのだが、彼女の足首は、よくこれで体重が支えられる感心するほど、細いのだった。

おれたちは手を取り合つた。床にいくつも円を描きながら、見れば、トリベノは片手で小テーブルにもたれ、鼻の頭を赤くして、自棄になつたようにワインを飲み続けていた。マキはわき目もふらずに、仮面の男と少年がひかえる、奥へ向かつて歩いていた。

（え……？）

玉座の前で立ち止まると、彼女はスカートをつまんで身をかがめた。

「踊つていただけるかしら？」

マキがそう言つてゐるのが聞こえた。アリー・シャと顔を合わせた、おれの目は不安に満ちていただろう。彼女は小さく首を振つた。介入するな、と言いたいらしい。

仮面の男はやはり指一本動かさない。バルブを発見したカノウ氏を「消した」張本人が、あの男であることは間違いない。今にもナイフが抜かれるのではないか。憎悪に我を忘れて、襲いかかるのではないか。そう考へると氣が氣ではなかつた。

男のそばには、例の少年がいる。二体のタウロスも控えている。かれらが武装してゐることは間違いないし、いずれにせよ、感情的な行動にうつたえた瞬間、彼女の命は消し飛ぶに違いない。

主人の代わりに、少年が礼を返した。

「わたくしでよろしければ」

二人は踊り始めた。危機的な状況をしばし忘れるほど、それはおれの目を見張らせた。

ダンスは旧政権のサロンに入りするための必須科目で、有象無象のダンス教師たちがはびこる温床となつた。ある者は、ルイ十五世時代の秘伝のステップなどと称して、サロンにへばりつき、他の者は流行を売りものにして、シンデレラに憧れる少女たちから、小遣いを巻き上げた。

むろん、マキが旧政権の社交界に憧れていたとは思えないが、サロンを追われて「幽霊船」まで落ちてきたダンスの名人は少なくなかつたろう。しかもかれらは、巷のあやしげな教師たちとは格の違う、本物の「社交ダンス」を伝授したことだらう。

マキの踊りが奇麗なのは、肉体を感じさせないからだ。アリーシャのプリミティブな踊りとは好対照である。アリー・シャの場合、ダンスが白熱するにつれて、裸体が強調される。どんな重いドレスを

身についていても、肉体の存在感に圧倒される。

対してマキのダンスは、衣装がいかに美しく映えるかが計算し尽くされた、いわば貴族的な洗練の極みだ。踊りの激しさが増すほど、衣装そのものがふわふわと舞っているようさえ見える。そして、舞い踊るワインレッドのドレスから、剥き出しの背中や、しなやかな脚が稻妻のように仄見えるとき、常に新鮮で強烈な印象を与えるのだった。

「マスターは、何だと思われますか」

アリー・シャの声で視線を戻した。彼女は仮面の主人を睨んでいた。いや、主人の背後に描かれた巨大な猛禽を。

「封印だな。あくまでカンに過ぎないが、あの裏にこそ、宴の本当の主人が居座つているのだろう」

「わたしもそう感じます」

「正直言つて、どうやらおれは怖氣づいているようだ。頭の中で、答えはとっくに出でているはずなんだが、考えたくない。意識の上にのぼらせる」ことを拒否する何かが、自分の中にある」

マキと少年は、いつの間にかホールの中央に至り、おれたちのすぐ近くで踊った。二人の会話が、耳に飛びこんできた。

「わたしの父をご存知?」

「いいえ。どのようなお方ですか」

「しがない電気工事屋よ。偶然バルブを発見し、母ともども殺された。あなたたちのしわざよね」

「お気の毒なことをしました」

「教えて。あなたを殺せば、わたしの復讐は果たせるのかしら」

仮面の男ではなく、なぜマキは少年を問いつめるのだろう。今やかれの声は少女のような美声に変わり、動作も少年らしい機敏を取り戻していた。挑発的な笑みを洩らして、かれは言つ。

「おそらくそはならないでしょう。報復の連鎖は不毛だと、ツアラトウストラの教えにあります。どちらかが勇気をもって連鎖を断ち切らない限り、苦しみの種は決して尽きません」

「奇麗事を。苦しみの種を育て、世界にぱらまくのは、あなたたち狂信者でしょう」「う

「やうかもしれません」

「今やらそんことを言つても始まらないけど。要するに、最後に倒すべき相手は、あなたではないということね」

ワルツは狂おしさを増し、二人の動きが激しくなつて、声が搔き消された。アリーシャはさわやく。

「わたしはそのためニ、ここへ来ました」

「えつ」

「マスターの恐れを取り除くために。だから仰つてください。あそこには封印されている、呪われたものの名を……」

不意に、音楽が止んだ。

時が凍りつき、すべての動きが止まつた。

アリー・シャと手を取りあつたまま、おれの視線は、まずトリベノをとらえた。かれは白髪を振り乱して、ほとんど倒れそうな姿勢でテーブルによりかかつていた。

だらしなくくつろげた襟元。はみ出したシャツの裾。ラッパ飲みしていたであろうボトルを片手に提げ、ダビデの星を見つめる顔は、これほど酔っているにもかかわらず、蒼白だった。紫色の唇が、虫のようにわなわなと震えた。

「余興が……始まる」

ひどくかすれた声。これまでの、気丈で皮肉屋だった爺さんは、どこへ行つたのか。おそらく精神が崩壊するぎりぎりのところで、正氣を保つてゐるのだろう。その気持ちは、けれど痛いほどわかるのだ。

おれがそつたから。

マキと少年は、バロック絵画のような、劇的にねじれたポーズで静止していた。今にも離れようとする彼女の指先を、少年の指がからうじて繋ぎとめていた。少年の顔に酷薄な笑みが浮かび、マキは目を見開いた。残酷に指が振りほどかれても、彼女は一個の人形と化したように、片足で立ち尽くしました。

少年は彼女に背を向けて、部屋の奥へ歩み寄つた。玉座の横を素通りしても、まだ振り返らなかつた。仮面の男は、最初に目にした時点から、少しも姿勢を変えていない。ただ、手にしたままのワイングラスが、ぐらりと傾いたかと思うと、スローモーションで床に落ちて碎けた。

その音は、まるで世界の崩壊を告げるかのように、異様に大きな

「だまを返した。

肩越しに、少年が振り向いた。薄く貼りついたままの笑みは、仮面よりも無機質に感じられた。

「何かと至らない宴でありましたことを、『容赦願えますよ』。これより余興に移りたいと思います。どうぞ、心ゆくまでお愉しみください」

いきなり片手でつかまれた幕には、急に年老いたような無数の皺が刻まれた。巨大な星をかたどる猛禽の姿が、グロテスクにゆがんだ。力を籠めて、少年は右手を引き下ろした。上部の金具が次々と悲鳴を上げて、文字通り、それは切って落とされた。

ぶ厚い布地が宙に踊り、床に横たわるまでの時間が、とても長く感じられた。幕の裏側は五メートルほど奥まで奥まつており、剥き出しのコンクリートの壁が覗いた。

大小無数の配管。途中で切断され、垂れ下がったコード。得体の知らないメーカーなど、どこの都市地区でもありふれた壁だが、古典型的な部屋とのコントラストが異様で、美しいお伽劇の舞台がいきなり崩壊したような、おぞましさに打たれた。

壁の前に、そいつはいた。

闇を捏ねた呪いの人形……たしかにそいつは、ネオ・ヴードウーの司祭たちがこしらえる、呪いの人形をおもわせた。

身の丈は大柄の男くらい。頭部に相当する部分が存在せず、太い肩から矮小な手にかけて、逆H字型に、だらりと垂れ下がっている。極端な猫背で、ごつごつとした肋を浮かせて腹部はくぼみ、短い脚は両棲類をおもわせる。ここにもち開いた股の間から、先細りの尻尾らしいものが覗き、背後の壁に繋がっていた。

逆H字型の中心、頭部があるべきところには、大きなひとつ目の眼が据えられていた。

掃討車やタワロスたちと同じ、人工の眼玉だが、異様に大きく、

すさまじい視線が発せられていた。見つめる者をたちまち破滅させるという邪眼……エビル・アイのように。

怪物はしきりに眼玉を蠢かせ、矮小な腕の先にある三本の爪をわななかせた。間違いない……

目の当たりにすることでのれはかたくなに拒否し続けていたそいつの名を、さまざまと意識せずにはいられなかつた。

イミテーションボディ！

むろん、こんな人型タイプは見たことがない。IBの形状のほとんどは昆虫をおもわせ、変り種がいても、せいぜい魚類か爬虫類に近かつた。IBから発生したといわれるワームが、そうであるように。

ただし、遺伝子改造などによつて、人工的に生み出されたものだとすれば、人型もあり得るかもしれない。もともと人の手によつて造りだされたIBなのだから、人工的というもののナンセンスかもしれないが。イズラウンのテクノロジーはどうに失われ、IBは独自の進化を遂げて、もはや人の手に余る存在と化しているのだから。

「もうじばらくは動かんよ」

いつの間にか、トリベノがかたわらに立っていた。鼻の頭を赤くして、上体がふらふらと揺れていた。

「だが、こちらから下手に仕掛ければ、やつの思う壺だ。やつらは何よりも、憎悪や攻撃欲が大好物だからな。しつかり取り込まれて、自己のエネルギーに変換される。ま、もと専門家のお前さんに注意をうながすのも、おこがましいがの」

「やはり、やつはE·Bなのか？」

「カンでそれがわかつたのなら、お前さんもたいしたものだ。ちょっと失礼するよ」

後の一句は、玉座のほうを向いて発せられた。見れば、主人はやはり姿勢を変えておらず、かたわらに少年が控えるさまも、最初に目とした構図のまま。

頭の鈍いおれだが、いい加減、仮面の男の生存を疑い始めていた。床で碎けたワイングラスはあるか、背後で目をきょろつかせている化け物すら、一顧だにせず、同じ姿勢を保ち続けているのだから。ただ、微動だにしないかれの体からは、いまだに生氣を感じるのだ。殺氣に近いほど、すさまじい念のようなものを。

トリベノはリュックから、例のモグラの心臓を取り出し、眼玉の部分を部屋の奥へ向けた。ロックを外すと、機械の背面は蓋状になつており、モニターとキーボードらしきものがあらわれた。

「ふん、情報がまだ洩れだわい。鍵をかけるよう、あれほど進言しておいたのにな」

モニターを覗きこむと、ポリゴンから成る怪物の全身が映し出され、その横に様々なグラフや数値が表示された。波状を描くひとつつのグラフが、オレンジから濃い赤へと変化している。処理班時代に、これと似たセンサーをおれも持たされていた。ワームなら緑。グラ

フが赤へ偏つたら、対象がIBである証拠だ。

ジギー・バンデル・ルーデンの超絶テクなみのハヤワザで、トリベノはキーボードを叩き始めた。これほど速く叩ける人間は、変態博士の助手、黒木しか覚えがない。数値がすさまじく変化し、グラフがブレークダンスを踊り、怪物のポリゴンがスキャンされてゆく。トリベノの額に汗が浮いた。

「五分だ」

「なに？」

「やつが仕掛けたら、まつ先に尻尾を切れ。それから五分で、やつの駆動能力の限界がくる。バルブと繋がつていなければ、まだまだ長時間の活動はできぬと見える。もつとも、IBを五分も操れたら、都市地区の一つくらい、軽く制圧できるがね」

「つまり、拳銃二丁で五分持ちこたえろと？」

爺さんは何も答えず、ニヤリと口の端をゆがめた。

処理班の場合、およそ十人前後のパーティーを組む。さらに一人に一体ずつ、軍用チャペックの相棒がつく。対IB用に特化されたスグレモノで、おれのサンポッドをはじめ、むしろかれらが主力といえる。このチームで、一体か、せいぜい二体のIBを狩るわけだが、それでも毎回、とんでもなく苦労するし、必ずと言ってよいほど犠牲者が出た。

サンポッドや、おれの妻のような……

考えてみれば、おれはあの悪夢の戦闘以来、一度もIBと戦つたことはなかつた。ワームの駆除屋になり下がり、台所に住みついたゴクツブシやカンザシムシを、せつせと殺しては、エプロン姿の奥さんには礼を言われ、どうにか食えるだけの金にありついた。夢も希望もないかわりに、廃人同様の自分には相応しい暮らしだった。

それなのに、なんで今さら、IBなんかと戦わなければならない？ しかもこいつは、これまでに一度も見たことのないタイプだ。

擬人とも違う。IBそのものが一本足で立っている姿ほど、おぞましいものがほかにあるだろうか。

「あいつが……お父さんを？」

マキの声で振り向いた。蒼ざめた顔。色素の薄い目を見開き、唇を震わせていた。ぐらりと揺れた彼女の体を、おれはからうじて抱きとめた。百万本の花束を抱いたような気がした。

「おそらくな。なに、五分でケリをつけてやる」

親指を立て、せいぜい不敵に笑ってみせた。もし、ばかの世界選手権があれば、上位入賞間違いなしだ。かすかな微笑が返ってくるのをみとめ、花束をトリベノにあずけた。立ち上がりと、アリーシャの肩が、すっと寄り添う。彼女の足もとに、尻尾をぴんと立ったブルートウがひかえていた。

「おれが陽動する。やつの尻尾を切れるか」

「やつてみます」

アリーシャがカード一枚抜いた。背後でトリベノの声を聞いた。「そろそろ動くぞ、お若いの。向かって左へ、およそ四五度。高速だから気をつけろ」

おれはパイソンを抜き、だらりと脇に垂らしたまま、闇の塊に目をこらした。飛び出してくるからには、何らかのアクションがあるだろう。人のカタチをしているのだから、膝を曲げるとか身をかがめるとか、何かするだろう。そう考えたのが間違いのもとで、そいつは眼玉をぐるりと動かしたばかり。

まるで背中に見えないジェットでもつけているような、謎の推進力で、そいつは飛び出してきた。暗黒の彗星のように尾を引きながら、トリベノの予告どおり、四十五度の方向へ。テーブルを粉碎し、潰れた果実を臓物のようにばら撒いた床の上に、両棲類をおもわせる厭な姿勢で、へばりついた。

おそらくおれの度肝を抜いたあと、そこからさらに飛びかかるつもりだったのだろう。事実、トリベノの予告がなければ、数秒後には無残に屠られていたろう。けれど、おれはすでに銃口を向け、正確にやつの眼玉を狙つて弾を放つことができた。

弾は命中したが、掃討車やチャペックとは、わけがちがう。まさかこの程度で仕留められるとは考えていないし、あらぬ方角へ弾丸は弾かれたけれど、多少は相手を驚かせたようだ。退化猿人の悲鳴にも似た、粘液質の奇声を上げながら、IBは両手を存在しない顔の前で振り回した。

「GOだ！」

促すまでもなく、彼女は駆け出していた。同時にジャンプしたブルートウの首輪にコードをすべらせた。速い！ 宙に身を躍らせ、すでに彼女は長大な銀色の剣を振りかざしていた。不法ギルドの中毒者を倒した、蛇の剣だ。

黒い尾が、ざくりと切断された。緑色の溶液がほとばしり、神経のようにコードが踊り、蒼い火花がスパークした。怪物は床をごろごろと転げ回り、さらにいくつかの小テープルを、めちゃくちゃに

した。

あと五分。

ただし、彼女の「武器」が、IBにどれほどの効力を發揮するのかは、未知数である。リビングテッドには通用しても、果たして対IB用の武器となり得るのか。しかもこの怪物が、どんな能力を持つのか、まったく得体が知れない。インセクトタイプ以外との交戦は、おれも初めてなのだから。

剣の切つ先を向けて、アリーシャが突つ込んだ。おれは片膝をついて援護射撃を行う。パインソングに動きを止められた怪物の肩に、蛇の剣が食い入った。噴出する溶液と、おぞましい悲鳴。時には慈悲をかなぐり捨てて闘う女神のように、彼女は剣を引き抜き、高々とふりかざした。

切り飛ばされた怪物の上腕が、蒼い火花を吐き出しながら床の上を滑走して視界から消えた。チャンスだ。けれど彼女はそれ以上踏み込まず、後ろに飛び退いて猫のように身を低くした。どこから吐き出したのか、一瞬前まで彼女のいた場所には、いくつもの黒い爪状の塊が、深々と床をえぐっていた。

「おい、『冗談だらう』

怪物の右腕が見る間に再生するのを、おれは見た。しかもその部分は、灰色の礫を敷き並べたような装甲に覆われ、まがまがしくも長大な三本の爪を有していた。それは否応なく、IB化したアマリストの左手を思い起こさせた。まだあと四分以上残っている。

爪を振りかざして、IBはアリーシャに突進した。おれは新たに装填した弾を側面から放つたが、思つたとおり、急所に当たなければ弾き返されるばかり。彼女は剣で防御しながら、瞬く間に追い込まれてゆく。剣戟の音が響き、火花が散る。彼女の背が、どんどん壁にぶつかる。すかさず咆哮を発しながら、怪物が踏み込んだ。

瀟洒な壁紙がえぐられ、大きなコンクリート塊と化して砕けた。倒れ込みながら、アリーシャはかるうじて横へ逃れ、床を転がって、テーブルの脚にぶつかった。血しぶきのように、赤い花びらが舞う。

「アリー・シャ！」

怪物はゆうらりと向きを変え、倒れている彼女に歩み寄った。なぶり殺しにする悦びを、舌なめずりしながら味わっているように見えた。打ちどころが悪かったのか、横転したまま彼女は動かない。おれは怪物の正面に回りこみ、シリンドラーが空になるまでパイソンを撃つた。

すべて眼玉に命中した。にもかかわらず、それは数センチ手前で、閃光とともに弾かれるのだった。エナジー・シールド？ 一種の保護膜を形成させ、急所を守っているのだ。おれは新たに弾を籠めるのも忘れて、呆然と立ち尽くした。冗談じゃない。

（こいつは……進化するというのか……）

機械生命体イミテーションボディの遺伝子は、もともと不安定なため、突然変異を起こしやすい。進化が突然変異の異名であるのなら、IBは自身の特性にのつとつて進化してきた。わずか百年の間に、様々な変種を発生させたことは驚異的であった。けれど、ものの一分足らずで、固体において進化するIBなど見たことも聞いたこともない。

反射的にトリベノに手をやると、白髪を振り乱し、氣の触れたピーストのようにキー・ボードを叩きまくっていた。いや比喩ではなく、あれは本当に気が触れてしまつていうようにしか見えない。怪物の笑い声を聞いたのは、そのとき。

ブルートウが猫の姿に戻り、赤い小さな舌でアリーシャの頬を舐めていた。

おれは身をかがめ、トリベノに近づいた。かたわらには、投げ出された花束のように、マキが横たわっていた。ドレスの裾に手を忍ばせると、思つたとおり、太腿の辺りで硬いものに触れた。そこからナイフを一本拝借して、両手に持ち、怪物に突進した。

むろん肉弾戦は得意ではないが、傭兵をやつていた頃から、ひととおりの訓練は受けている。案の定、ばかの一つ覚えで、怪物は爪のある右手を繰り出してきた。こいつをどうにかかわし、一本めのナイフを投げつけると、眼玉に当たる直前で、エナジー・シールドに跳ね返された。が、これも計算どおり。

おれは一本めのナイフを両手で逆さに持ち換えると、渾身の力で怪物の眼玉に突き立てた。

「南無八幡大菩薩っ！」

エナジー・シールドは発生せず、確かに、けれどもおぞましい手応えを感じた。幸いなことに、おれを跳ね飛ばしたのは、進化していないほうの手だった。床にしこたま背中を打ちつけながら、見ればナイフの切つ先は、意外にもしっかりと怪物の眼玉に突き立つていた。手を振り回しながら、怪物は一度と聞きたくないような叫び声を上げた。

自身の力とは到底思えない。妻から教わった呪文が効いたのか、それとも、ナイフにマキの想いが宿っていたのか……

「恩に着ます、マスター」

アリーシャはすでに身を起こし、新たなカードを手にしていた。ブルートウの首輪の上を滑らせると、猫とともに彼女自身の体も光

に包まれた。翼の音がホールに反響し、彼女は黄金の聖杯を手にする、黒い天使と化した。血染めのコックを倒した時に用いたカード、「カラスの聖杯」だ。

彼女の体が浮遊した。

漆黒の翼が大きく羽ばたくと、十枚足らずの羽根がこぼれ落ち、大型の鞘翅類と化したように、宙を飛び交い始めた。血染めのコック戦では、この技は見なかつた。アリーシャは右手の人さし指を伸ばし、高々とかかげると、次にそれを怪物に向けて振り下ろした。燐光を発しながら、羽根は怪物に八方から襲いかかつた。一枚一枚が鋭いナイフと化して、IBの肉をえぐるのだ。

IBの皮膚や筋肉は、タンパク質に非情に近い、未知の高分子化合物から成る。複雑怪奇に折りたたまれているため、現代の技術では、最新のコンピューターを駆使しても、立体的に解析できないといわれる。「ムの柔軟性と金属の硬度を兼ねそろえ、驚異的な再生能力を有する。

ゆえにあらゆる方向から、羽根のナイフで絶え間なく切り裂くという攻撃は、相手の再生能力を封じる上で、最も合理的な方法といえるだろう。アリーシャはこれを頭で考えるかわりに、いわばカードの意志に委ねたのだ。

全身から溶液を噴出させながら、怪物は空をつかんでもがいた。地の底から響くような、ぐぐもつた呻き声。眼玉に突き刺さったままのナイフが、蒼い炎を吹いた。アリーシャは、さらに高く舞い上がり、金色の聖杯をかざした。秘薬を作る儀式のような、静謐な動作でその口を逆さまに返した。

杯の中身は三日月の形を描き、青く輝く大鎌となつて、真っ向から怪物に突進した。とっさに振り上げられた爪とつぶかり、金属が切り裂かれる、ぎん、という音を響かせた。怪物の右手が、長大な爪ごと、ぐしゃりと潰れた。次の瞬間、青い大鎌は、眼玉を真っ二つにする恰好で、肩と肩の間に深々と食いついていた。

悲鳴。怪物はよろめき、数歩後退りすると、空をつかんだ姿勢で

動きを止めた。

青い光が消えて、大鎌が見えなくなつた。あとには、せんりとえぐられた亀裂が残つた。溶液がどくどくと溢れ、見る間に床に溜まる。傷口から覗く切断された筋肉や、血管、神経のようなものが、虫のようにぴくぴくと蠢いた。

「処理したのか……？」

見上げると、彼女が墮天使のように落下してくるところだつた。翼の抵抗力があるとはいへ、とても腕では受け止められない。おれは身を伏せて、彼女をどうにか背の上で弾ませた。床に転がると同時に、翼がまた粒子に解体され、収束して、黒猫の姿に戻つた。

ドレスはぼろぼろになり、髪は乱れ、眉間に苦悶の皺が刻まれていた。それでもアリーシャはかろうじて身を起こし、荒い息を吐いた。たて続けにカードを用いたため、ダメージも大きいのだろう。おれはばかみたいに、さつきと同じセリフをつぶやいた。

「いいえ、マスター。まだ死んではいません」

おれはM36を工Bの傷口に向けた。五発放つたが、すべてエナジー・シールドに阻まれた。なるほど、生きてやがる。

拍手の音。薄化粧の少年が笑っていた。

「素晴らしい余興です。ここまで素晴らしい舞踏を披露していただけるとは、失礼ながら、思いもよらませんでした。わたしたちも、待った甲斐があつたというものです」

高く澄んだ声が響く。かれに聖歌を歌つてもらえれば、神様もさぞかし、ご満悦だろう。シララトウストラ教では、神は死んだと教えるらしいが。ならば、かれらは死んでしまった神に代わって、不死の存在を祭り上げようというのか。

人工的な神を。

「いざれにせよ、あと一分だ。その間にこいつが再び動きださなければ、それで終わりだ」

こいつたいおれは、誰に向かって喋っているのだろう。アリーシャか、少年か、それとも、神様にすがりつきたいのだろうか。

「お若いの、よい知らせと悪い知らせがあるのだが。どちらから聞きたいかの？」

トリベノはキーボードを打つ手を止めていた。すべての指を鉤型に曲げたまま、モニターを睨んでそう言った。

マキや一葉ならよいほうを選ぶだろうが、どんな場合もおれは後者だ。先に最悪の事態を想定し、少しほはマシな抜け道を探る。食い物でも、わざと不味そうなところから口へ運ぶ。その結果、古いものにありつく前に、食欲をなくしているという、絵にかいたような貧乏性。

「よい知らせから聞かせてくれ」

「やつの背中の中心に、もう一つ、赤い眼玉がある。そいつが本来のことをだ

「COEとは？」

「コア・オブ・エナジン。眼玉をかたどった人型IBの中核だよ。もちろん、そこが弱点でもある」

「で、よくないほうは？」

微動だにしないトリベノのゴーグル眼鏡に、モニターの光が映り、ちらちらと踊っていた。やがて口の端が、泣き笑いするようにゆがめられた。

「五分と言つたのは取り消さねばならない。現在のやつの駆動時間は、未知数だ」

「それを早く言え！」

「よい知らせから聞きたがつたのは、お前さんだろう？」

おれは再びパイソンを抜いて床に身を投げ出し、怪物の背後に回りこんだ。赤い眼玉、らしきものは見当たらなかつたが、背中の中心にピラミッド型の突起がある。COEとやらは、おそらくこの下に格納されているのだろう。撃ち放つた弾丸は、けれど閃光とともに粉みじんに碎かれた。さつきよりも、シールドの強度が上がつている？

「どうなつているんだ！」

「喜んでるのだろう。殺戮マシンとしての遺伝子が、戦闘の快樂に酔いしれ、血みどろの寛喜に震えておるのさ。氣をつけなされ、お若いの。メタモルフォーゼが始まる」

メタモルフォーゼ？ 苫虫が蝶に変わるよつな、変態のことか。たしかに、インセクトタイプのIBには、これをやらかすやつが稀にいた。変態する直前は一定期間動きが止まるので、やつらは身を守るため、ドーム型の装甲を形成し、その中に閉じ籠もつた。まさに、サナギと化したように。殻を破つて再び動き出した姿は、思い出しあたくもない、絵にかいた悪夢そのものだつた。

おれは残り五発の弾丸を怪物の様々な箇所に撃ちこんだが、どこでも弾を粉碎するほどのエナジー・シールドが発生した。これでは装甲を形成するかわりに、強力なエナジー・シールドで全身を固め

ているに等しいではないか。いわば、透明なサナギだ。

ほとんど無意識に、後退りしていた。大きく脈打つように、怪物の肩がびくんと震えた。

(血みどろの寛喜に震えておるのぞ)

メタモルフォーゼはC.O.Eの周辺から始まった。ピラミッド型の突起が背中で何倍にも膨れ上がりつつ隆起すると、両手が床に着くほど体が一つに折り畳まれた。ピラミッドが四方に根を張るように、礫状の装甲が広がり、たちまち全身を覆うと、さらに各所で変化を始めた。

両肩には最も幅広い、豆の鞘をおもわせる装甲が形成された。そこからじつじつと角が突き出し、巨大な眼玉の模様がひとつずつ生じた。蝶の翅との類似が、正視に耐えなかつた。長大な爪が再生し、しかも今度は両手に及んだ。吸盤に変わって、足の指にもまた鋏をばらしたような爪を三本ずつ発生させた。

怪物はむくりと身を起こした。

傷口はすっかり塞がっていた。ただ眼玉が胸部の中心に移り、そこにだけ縦の亀裂が残っていた。頭部に相当する部分には舟形の穴が開き、赤く発光する何かが生えようとしていた。

もうひとつ的眼玉か？ それとも、「顔」が出てくるといつのか。赤い何かは、けれど脈動するばかりで、それ以上の変化を示さなかつた。けつきよく頭部を欠いたまま、じつじつと進化した姿はあくまでグロテスクで、そして限りなく不完全な印象を与えた。ともあれ、メタモルフォーゼは完了したらしい。

怪物が一步踏み出すると、爪で床がえぐられた。ぐぐもつた唸り声は、含み笑いしているように聞こえた。左腕を持ち上げたかと思うと、長大な爪が、たちまち前方へ飛び出した。奇怪なゴムのように、腕が際限なく伸びるのだ。

「避ける、アリーシャ！」

小テーブルがばらばらになり、果実の成れの果てが、床にぶちまかれた。軽やかに宙を舞つて避けた彼女が着地する地点を狙つて、もう片方の腕が伸張した。次に爪がとらえたのは、コリント式を模した支柱だつた。力が籠められると、一抱えでは済まない柱をたちまち粉砕した。部屋全体が揺れて、コンクリート片が降り注いだ。からうじて立つていられるほどの揺れが、長く続いた。このままでは天井が落し下し、おれたちは残らず圧し潰されるのではないか。大きな瓦礫が落ちてきて、タウロス一号の肩を直撃した。片腕をもぎ取られ、火花を吹きながらも、一咄はじつと立ち戻りしているのだった。

玉座を見れば、相変わらず仮面の男が寝そべり、無言でこちらへ目を注いでいた。少年もまた搖れをものとせず、玉座のかたわらに姿勢よく控えていた。

やつらは、IBと心中する気なのか？

いくらか揺れがあさまる頃、肩に軽く指が触れた。いつの間にかアリーシャがそばにいて、かすかに微笑んでみせた。おれは驚きに目を見張った。

「よせ。これ以上使つたら、次こそ体がもたない」

「構いません」

一枚のカードをかざしてみせた。天使だろつか。羽根の生えた少女たちは双子とおぼしく、捧げものをするように、大きな花綵をかかげていた。彼女たちの周囲には四本の支柱が立ち、花づながそれに絡まつて、葡萄棚のような屋根を作っていた。

妻が所持していたオーソドックなタロットカードにも、似た図柄があつたかと記憶する。「蛇の剣」や「カラスの聖杯」と異なり、どこか心安らぐカードだ。

上体をひねつて、IBが振り向いた。

爪で床を引っ搔きながら、蛇のようにのたうつ腕を元の長さに縮めた。完全に向き直つたやつの身長は、ゆうに二メートルを越えていた。左右に張り出した両肩の上で、偽りの眼球があれたちを見据えた。赤い頭部が不吉な光をおびた。来る。

とつさに銃を乱射したが、例によつて謎の推進器で突つ込んでくるやつを止めようがない。アリーシャにカードを使わせないための先制攻撃であることは、明白である。瞬く間にせまつてきたIBの前に、そのとき、大きな影が立ちふさがつた。

(タウロス一号?)

金属どうしがぶつかる音が、ホールに響きわたる。踵から火花を散らしながら、一号はIBを抱きとめた恰好で、二メートルほど後ろに押し返された。そのまま締めつけようとしたチャペックの腕から逃れて、IBは飛び退いた。装甲に覆われているが、両棲類的な動きは変わらぬまま。ほとんど四つん這いの姿勢で対峙した。憎悪に満ちた呻き声。

なぜ、タウロス一号は「裏切つた」のだろう。

おれと友達になつたからだなんて、童話的な理由は考えられない。

さつき「コント式の柱を、IBが破壊したからではあるまい。」もともとタウロスたちは、シャングリ・ラの備品だった。命令が上書きされているとはいえ、旧来の使命が完全に消されとはいなかつたのではないか。シャングリ・ラを壊すものは、すなわちかれの敵なのだ。

タウロスが自身のエプロンを引き剥がすと、一号と異なり、そこには四インチはありそうな砲口が埋めこまれていた。グレネードランチャーか。ずん、と腹に響く音のあと、IBの頭部で弾が炸裂した。怪物の足が宙に浮き、煙を吹き上げる肩の間を、ぐしゃりと床にのめり込ませた。

耳をつんざくような音に気づけば、どうこう仕掛けになっていたのか、タウロスの右手が特大サイズの三重チーンソーと化していった。そいつをIBの上に叩きつけるように振り下ろし、左手でがつちりロックしたから、たまたまではない。聞くに堪えない音が響き、怪物の両脚が断末魔の水棲ワームのように、びくびくと跳ね踊った。

吹き上がる火花と溶液を浴びながら、タウロスの一つ眼は表情もなく下方に固定されたまま。昨今の軍用チャペックより、はるかに恐ろしい。兎も家のない武装を、いつたい何者が、この罪のない家事用チャペックに仕込んだのか。

IBの右手の爪が腕を引きずりながら、蜘蛛のように這うのを見た。たちまちそれは、タウロス一号の左足をつかんだ。

IBの爪が灼熱して、タウロス一号の金属を溶かした。異臭がたちこめ、耐え難い熱を孕んだ蒸氣が吹き上げた。足首は、チャペックのどうしようもないウイークポイントである。いや、神の被造物（それとも失敗作か）である人間にしたところで、二足歩行をするために、かなり無理をしている。

タウロスはたちまちバランスを崩し、引き倒された。代わってIBが、やはりどこの筋肉を用いているのかわからない、異様に柔軟な動きで跳ね起きた。

のしかかってきたIBに、タウロスは三重チーンソーを突き立てて対抗した。恐るべき回転を怪物は両手の爪で易々と受け止め、たちまちぐにやりとひん曲げた。チーンがもつれ、モーターが悲鳴を上げた。あとは目を覆いたくなるような、屠殺ばかりが残された。

哀れなチャペックが粉碎されるまで、三十秒とかからなかつたろう。最後に抉り出された眼玉が爪の先で潰される音を聞いて、おれはようやく茫然自失から呼び覚まされた。

立ちはだかる怪物の足もとに、内臓をおもわせる機械がぶちまけられていた。流れ出たオイルは血だまりにしか見えなかつた。情念がくすぶるように、蒼いスパークが這いずり、片手の指が、まだ痙攣的に蠢いていた。

一号は肩から火花を吐きながら、じつとこの光景を見下ろしていく。中枢がいかれたわけではないことは、眼玉を見ればわかつたが、相棒の死に対してココロを動かされはしなかつたようだ。あるいは動かされたとしても、プログラムが作動しなければ行動には移せない。

また部屋が揺れた。いやな地響きの音がした。まるでタウロス一号が、この部屋を支える重要な支柱の一つであつたかのように。

怪物はよたよたと、おれたちの方へ向き直った。また笑っていた。表情をあらわす顔は存在しないのだが、嬉々として体を震わせ、地獄で悪魔が笑つたような不気味な声を発するのだ。

「この子はわたしが倒します。これ以上、苦しませないためにも」

囁くように、アリーシャはそう言つのだ。苦しむ？ どう見ても、殺戮の寛喜を全身にみなぎらせているとしか思えないが。なぜ彼女は、この化け物が苦しんでいると考えるのか。

「下がつてください、マスター」

「どうしても、カードを使うつもりか」

「はい。そのために、わたしは来たのですから」

「オムレツを……」

「え？」

「約束してくれ、アリーシャ。どんなに不味くとも構わないから、このひどい余興が終わつたら、きみの手作りのオムレツを食わせてくれ」

ばかなことを口走つてゐる自覚はあったが、ほかに言葉が見つかなかつた。瞬時、彼女は目をまるくしたが、これまで見たことがないほど、花のようになじをほこりばせた。

「了解しました、マスター」

おれはうなずいて、彼女の言葉に従つた。カードをかざし、片膝を立てて彼女は身をかがめた。足もとに控えていたブルートゥの首輪の上に、それをすべらせた。例の、花綵をもつ双子の天使が描かれたカードだ。

猫の姿が瞬く間に解体されて消えた。床が揺れたかと思うと、四本の柱が出現し、対峙しているアリーシャとエビを七メートル四方の空間に取り囲んだ。次に芽をふくように、一本の柱から太い蔓が伸び、絡み合い、葉を茂らせ、色とりどりの花をつけながら、柱と柱の間を横断した。リングだ。

それは、花づなに囲まれたリングにほかならなかつた。そしてアリーシャはといふと、いつの間にか一人に増えているのだった。

錯覚ではない。ばかみたいに何度も目をこすつたが、花綵のリンクの中に、やはり彼女は二人いる。立ち姿からドレスの破れ具合まで、鏡に映したようで、どちらが本物か見分けがつかない。もっとも、真贋といった概念が通用すればの話だが。

一人のアリーシャは、まったく同じ動きで、苦悶するように背をまるめた。出現した翼は、フラ・アンジェリコの描く天使のように、極彩色を帶びていた。それぞれの右手と左手に、まるで太い鞭のよう、花綵を一本づつ手にしていた。

怪物が吠えた。瞬く間に、例の予断を許さない動きで突進した。二人は素早く左右に分かれ、中空から双方向に腕を伸ばして放たれた爪の一撃をかわした。同時に着地した二人の顔半分が、乱れた髪の毛で覆われていた。一方が右目を、もう一方が左目だけを、髪の間から覗かせているのだ。

一人が花綵をふるい、IBをしたたか鞭打つた。火花が散り、無数の花びらが舞つた。後方に弾き飛ばされたIBは、ロープ代わりの花綵に激突した。たちまち無数の太い蛇のような閃光に絡められ、怪物は苦悶の咆哮を上げながら痙攣した。

(これは……)

電流デスマッチではないか！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0930m/>

---

モダンワールド

2011年10月9日11時21分発行